
異常たる者の未来模様

ウルフガイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異常たる者の未来模様

【Nコード】

N9907M

【作者名】

ウルフガイ

【あらすじ】

自らの異常性と向き合って生きていくことはどれほど大変なのか。しかしそれでも生きていたいと思うのが『人』である。

しかしそれでも人生を楽しみたいと思うのが『人』である。

しかしそれでも愛を知るのが『人』である。

そして彼は『異常』な人間たちのいる学園へとたどりつく。

めだかボックスを読んだ途端にふっと思いついた作品をどうぞ。今更ですがArcadiaにも載せてます。

はじまりの章 第零記憶目

自らの異常性に気付いたのはいつの頃だったか。

物心がついてすぐだったか。

それとも、もっと前からか。

いや、私は全て覚えている。

漠然と、自分が物覚えがいいということは理解していた。子供に
しては精神が大人びているということも。

私がそれをはつきりと自覚したのは私が1歳の時の夏、8月7日の
夜。

とある大学の教授をやっていた父の部屋に私はどうやってか侵入し
て、その部屋にあった全ての本を『記憶』した。

自分の部屋に戻り、そして私は思いだした。

いや、思い出したのではない。今まで意識しなかっただけ、の方が
正しい。

自分が母親の胎内にいた時の事。

出生時、外の光を浴びた時の事。

毎日毎日何を食べてきたか。

毎日毎日何を見てきたのか。

何もかもを覚えている事に気がついた。

そして困惑しながら更に深く意識を沈め、もっと恐ろしい事に気付
いた。

自分が見た事もない事を知っている。

知っていないはずの事を知っている。

『 月 日。私の目の前で誰かが死ぬ』

『 月 日。私は絶望する』

『 x月 日。私は死ぬ』

まず感じたのは恐怖。

そしてその事を必死で忘れようとする。

それでも決して忘れられない恐怖だ。

意識すれば、わかってしまう。

今眺めている窓の外。

あと3秒で小鳥が飛び立つ。

あと5秒で車が通る。

あと8秒で人が通る。

どうしてかわかってしまう。

思えば、幼いながらも私の精神が成長していたのは、そうやって不完全ながらも未来を見通していたからだろう。
きっと、そうだったのだ。

そして私は完全に自分が異常だと気がついた。

あらゆることを完全に記憶し、自分を観測点とする未来を完全に予知する。

そんな、『異常性』を自分が持っている。

第壹記憶目

『知る』に繋がる全ての事が、私にとっては無価値でしかない。

それでも知ることを止められないのが、私にとっての異常なのだろう。

『知る』ということは私にとっては無価値だが、私という存在にとつては『全て』だった。

だがしかし。私、天宮熾音の異常は、私に不幸を与え続けていた。

『全て』を覚えている事を自覚することはただただ不幸でしかないのだ。

こんなことならば気付かなければよかったと私が何度思った事が。正確にはこの一年で1567回思ったんだったか。

そんなこんなで私は退屈な幼稚園生活を過ごし切って小学校に入つた。

親との会話、難解な本の読解、そして元より優れた脳を持って日常を過ごしていた私は、精神と肉体の年齢が乖離し始めている事に気づいていた。

幼稚園になど通うことすらも億劫だった。

しかし、私はそこに行くことにしたのだ。

『もしかしたら』不幸を無くす存在がいるのかもしれないと。

『もしかしたら』という言葉を使うのは、私が未来を見ようとする

のをやめたからだ。

きつと、やろうと思えば明日自分が誰に会うのかもわかるだろう。将来自分が何の仕事をしているかもわかるだろう。

だが、そんな事を知っても不幸にしかない。

だから私は何が起こるともわからない『未来』に希望を持てるのだ。

そう、未来。

本来不確定なものだが、私はその過程を見る事をすっ飛ばして終着点を見る事が出来る。

10秒先に何が起こるかも完全に先読みする事もできる。

それは実につまらない。

だから私は未来を見ることをやめたのだ。

現在小学一年生の私の脳の中には恐ろしい程の知識が収納されている。

小学校で使う教科書から大学で使う教科書まで、近くの図書館に何日も何にと入り浸り、1ページに1秒も掛けずに暗記して全てを知り尽くしていった。

何の意味があるかなど関係ない。

ただ、私の存在が『知る』という事に飢えていた。

それだけのことなのだ。

本来知るべきではないという『未来』を知る事だけは、全力を持って回避する。

それさえも知ってしまえば、私は私の存在の理由である『知る』ということすらも失ってしまうから。

思えば、私が語る全ての事は矛盾している。
だが、それもしかたのないことだ。

全てを知ろうとする異常を持つ私には、初めから全てを知る術が備わっていた。

今から生きる人生のすべてを知れば、私の生きる意味はなくなる。
だがしかし『私』は生きる意味を無くす事の無意味さを知識として知っている。

つまるところ私は、とにかく生きていたいのだった。

だからこそ知ることを求め、だからこそ『未来』を知る事を忌避するのだ。

小学校。

私はただ淡々とそこに通う。

きつと周りにいる子供達とは仲良くなることはないのだろう。

彼らは一様に子供過ぎた。

それが『普通』だ。

私が『異常』なのだ。

私は授業の時間も休み時間も。

私は机に伏せて夢の中に入る。

そこはある意味私にとっての聖域だ。

何にも犯されることのない聖域。

何を想像しても許される世界だ。

頭の中の記憶で形成されるそこは雑多な図書館だ。

私は夢の中の事だって記憶できる。

だからこそ精一杯楽しませてもらう。

テストで満点さえ取っていれば誰も文句を言うことはない。

私は一人、誰にも関わられずに自由だった。

私はその時、それで満足していたのだろうか。

第貳記憶目

それは小学三年生の時だった。

私は予知を再び使い始めるようになった。

私は面倒だったのだ。

小学生というものは、子供というものは残酷だ。

人の事を考えずに平気でひどい事をする事がある。

つまるところはいじめである。

その対象に、孤立していた私が選ばれることは当然だった。

それ以前に、私の態度が原因だろう。

授業も真面目に受けず、学校に来てもずっと寝ているだけ。
目をつけられるのも当然の事だ。

二度目になるが、私は面倒くさかったのだ。

そして、私に陰湿な攻撃をしかける周りの者は殊更に鬱陶しかった。
だから私は奴らの行動のことごとく先を読んだ。

細かい事を一々抑制するのも面倒になっていたのだろう。

足を引つ掛けようとも通じない。

靴を隠す事など予防していれば問題も無し。

ハブられようとも私は何も感じはしない。

集団リンチもどこで待ち伏せされてるかわかっていれば問題なし。

ならば奴らはどういった行動を取るのか。

「自然、正面から挑むしかなくなるわけだ」

「何言つてやがる！」

「中学生が小学生を相手にするとは大人げなくはないのだろうか。実際に見てみるとこうも馬鹿らしいとは」

余程私の事が気に入らぬのか。

私を嫌うグループのリーダー格が兄を呼んできたのだ。

呼ぶ弟も阿呆だが呼ばれる兄も阿呆なのだ。

戦闘という手段を取っている時点で『私に勝利する』という目的は達成できんだろくに。

私は全てを記憶できる。

重ねて言えば、記憶したとおりに行動する事もできる。

この体のスペックは脳のみに比重を置いているわけではなく、身体能力も優れているからだ。

子供ではありえない程に動く自分の体を見れば簡単に気付けるものだ。

正直言えば少し年上の中学生程度、予知なんぞ無くても楽に勝てる。多岐にわたる私の知識の中には戦闘技術も入っているのだから。そして私の身体スペックは中学生程度のモノをとうに上回っているのだから。

結果、私を呼び出した者達全員は地面に這いつくばる事になった。

そしてその年の終わりに殊更大きな出来事があった。

「あの子は異常だ。絶対におかしい」

「昨日も、私が何も言っていないのに」

「俺達のやる事をやることなす事全部先読みして」

「病院に、いやどこかの研究施設にでも連れて」

自室から出てみれば聞こえてくる親の会話。ことごとく予知したことが裏目に出たか。

それともこの『結果』を予知していれば変えられたのか。

いや、どうでもいい。

昔から、私が言葉を発した瞬間から私を疎んでいた奴らだ。
ここが潮時という奴だろう。

ここを離れれば『私の望む機会』があると予知できた。
一体どんなモノが待っているかは分からないが、この町を離れると
しよう。

金も戸籍も簡単だ。

それくらいの入手や偽造の知識くらい持っている。

年が明けた時、私はその街を去っていた。

第貳記憶目（後書き）

序章終了

第参記憶目 幕間

あらゆる物事を記憶できる私にとって、『創造性』とは最も好きなものの一つである。

世界中にある本の全てを記憶し。

国のデータバンクに侵入して過去の遺物を記憶し。

今日起きた世界中の事件を記憶し。

気付けば、私の持つ知識の量は右肩上がりが増えていた。

街の仲をふらふら歩いている私。

未だ子供の体である私に目を向ける者はあまりいない。

きまぐれに本屋へと入った私は、気まぐれに一冊の本を手にとった。

人それぞれが持つ『創造性』

それを形に現した物が本である。

どれだけ人間がいようと、全く同じ内容の本を書く者はいないだろう。

私がいくら記憶しても、きっと『異なる本』が生まれてくる。

ならばそう、私は生きる意味を失うことはないだろう。

そう思えるような気がしたから、私は本が、人の持つ『創造性』が好きなのだ。

本だけではない。

論文も、哲学も、思考の一つ一つも、全てがそれぞれ違う。それを知ることができれば、それはきつと楽しいのではないだろうか。

自分に欠けた一つ一つのパズルのピースを集めていくような感じで。

一人で生きるようになって数ヶ月。

私はとある家に住んでいた。

自分用の巨大なパソコンを設置し、世界中のありとあらゆる本を収集した家だ。

パソコンには世界中の様々な情報が自動で収集されるし、本は自分が読んだ端から地下図書館（倉庫の事だ）に溜まっていく。

戸籍も一応入手はできた。

だが、名前を変えることはない。

変えたとしても絶対に忘れることはできないからだ。

ならば、そのままでもいい。全く問題はない。

天宮熾音は……天宮シオンとなっただけだ。

裏でも名の通る様になった情報屋のシオンと。

このまま生きていれば、あるいは私は『人間らしさ』を失ったままであっただろう。

その時の私の生き方は、例えるなら情報を集めるだけの機械であつた。

『未来』を知ることのできる私にとって『運命』とは理解しがたい

言葉だ。

しかしだ。私は『運命』という言葉は嫌いだがあえて言おう。

ああ、中学一年生のその時。

気まぐれに通おうと思った中学校で。

私は運命の女に出会ったのだと。

第参記憶目 幕間（後書き）

ヒロイン当てた奴は褒めてやる。

出会いの章 第肆記憶（前書き）

さて、ヒロインですが……
正解はその後！

出会いの章 第肆記憶

さて、私は中学一年生として春を迎えることになった。

その時はまだ私は私以外の異常を見つけることはなかった。

別にこちらが見つけようとせずとも、時はいずれ来るものだ。

だから私はいつもどおりに無気力でやる気のない人間を演じた。

……まあ、なんとなく腹が立つのでテストでは満点を取っていたが。

無論、俺がその中学校を選んだ理由はある。

別に何かがあると調べたわけでも予知でわかったわけでもない。

ただ、ランダムに引き当てた中学の名前を選んだだけだ。

『予知』通りに事が進むのなら、私が何もせずとも『私の望む機会』とやらはやってくる。

ならば私はそれを待つだけでいいのだ。

そしてそのまま一ヶ月が過ぎ、二ヶ月が過ぎ、夏休みが終わって二学期になり……私は異常に気付いた。

いや、異常というのは私を囲む環境の事だ。

これだけの時間が経てば、私に対するいじめが多発している頃なの

だが、それが全くない。

そういうこともあるのかもしれないが、それはどうなのだろう。

無駄な事を聞いても仕方ないと思って授業中は意識を全面カットしていたのだが、仕方なく情報を集める事にする。

そんなことを初めて数日経った。

そして初めて私は知った。

どうやら、同じ学年に一人、私以上に『異常』な存在がいて、いじめられているらしい。

……どうなのだろう。

これが『予知』なのだろうか。

結局、私が痺れを切らして見つけたようなことになっているが、これが『予知』した機会なのだろう。

どうやら待つだけとは行かなかったが、『機会』はやってきたのだ。

私はその『異常』がいるというクラスへと向かう。

さて、どのような人物か。

私としては簡単に読めない人物が望ましい。

異常同士仲良くというわけでもないが、同レベルの話相手ができることは素直に嬉しい。

人間としての『異常』が強ければ強い程、楽しい話相手になるのだから。

だから私は足を進め、その『異常』がいるクラスの入り口に立った。

それは廊下にいた他の生徒にはどう見えたのか。

他の生徒に混じり、このクラスの『異常』に対してあまり『異常』に見えなかった私が、そのクラスの入り口に立っている姿は。

その私が、入り口を開いて中の『異常』を目を大きく開いて見つめているのその姿は。

そのような些細な事を全て無視して私はじっくりとその姿を記憶していた。

そこにあつたのは『異常』といえば『異常』な光景だった。

休み時間だからか、教室の生徒は全て外に出ていた。

その『異常』である彼女を除いて。

私が辺りに示さなければその巨大すぎる『異常性』が知れないの
と違い、彼女はその存在そのものが『異常性』を現していた。

そして彼女の目が教室に入ってきた私の目と合った時。

私は一瞬でその存在の虜となった。

出会いの章 第肆記憶（後書き）

名前を出さなくてもわかりますよね。

異常すぎる異常といったら『黒神めだか』以外にこれが妥当かなと。
境遇的にも結構似てません？

……似てないかな？

一番大きな原作との相違点が「いじめられっ子のメインヒロインが
女子校に通っていないこと」って、ある意味珍しい気がする。

第伍記憶目（前書き）

くそう……あの子の性格がいまいち掴めんが、なんとかなるだろう。感想は随時受け付けていますのでどしどし書いてください。

ところで、私思ってますが名瀬天歌（黒神くじら）って、家族愛すらも余分だと感じて家出した割に、普通に友達が大事なんだよね。友情あるし。

禁欲さが記憶と一緒に吹っ飛んだんですかね？ 色々謎が多いキヤラです。

でもそれなら別にあれだ。

恋愛レベルまで徐々に底上げしていつでも問題ないよな。

第伍記憶目

私はその女を見て完全に動きを止めていた。
完全にその女に目を奪われていたのだ。

彼女は汚れていたし、彼女の周りも薄汚かった。

だがしかし、その中で彼女が『異常』であることは一際大きく感じられた。

彼女が据わっているイスと机の周りはゴミで埋め尽くされていたが、意にも介さず彼女は本を読んでいた。

いや、それくらいなら私もするだろう。その場合、面倒だからとつと出ていくだろうが。

ともかく、彼女の顔は袋をかぶっていたから見ることはできなかった。

しかしその目は見る事が出来た。だからと言って、目に惹かれたのかといえそうではない。

『全て』だ。

私は彼女の『全て』に惹かれた。

未だ何も知らない相手を前にして何を、と思うかもしれない。
だが、とにかくそう感じたのだ。

私がそこに立つてから周りで様子をつかがう生徒達を見る。
彼らが彼女に対して感じているのは圧倒的な恐怖だ。

自分より優秀で、それでいて『異常』である彼女への恐怖。

『異常』としての存在感がありすぎる彼女への怯えだ。

私が待ち望んでいた物はこういったものなのだ。

とにかく私は彼女へと話しかけることにした。

まずは名前だ。名前が知りたい。

私は一直線に彼女の机に向かって歩いていった。

それに気付いた彼女が本に向けていた目をこちらに向ける。

何も見ていない目だ。俺に向けてはいるが意識はこちらに向けていない。

それは耐えられないな。私は見てもらいたいというのに。

「こんにちは」

「……………」

ああ、さすがにこんな唐突に挨拶をしてはいけならしい。

『予知』を使ってもいいが、なんとなく使いたくないのはなぜだろう。

「私の名前は天宮シオンだ。名前を覚えてくれ」

「…………いや、つーかいきなりなんなんだよ」

そうだな。それは疑問だろう。

私も話しかけずにまずは情報を集めようと思っていたのだ。名前も調べてからでもよかった。

だが、どうしてもまずは正面から話したくなっただのだから私は正直に言う。

「どうしても話しかけなくなっただ。他に理由はない」

「自分勝手だなーおい」

「自分勝手……ふむ。そうか。確かに私は自分勝手なのかもしれないな」

「勝手に納得してんじゃねーよ。天宮だっけ？」

「そう。天宮シオンだ。君の名前が知りたい」

そう言って彼女の顔で唯一見える部分である目を見つめる。
こちらを探っているような眼だ。

それはそうだろう。確かに私は不審かもしれない。
だが、自身の中から溢れる何かを押さえられなかったのは初めてなの
のだ。

今回は、それに押し流されてしまいたかった。

「俺は名瀬天歌だ。　　アブノーマル　　たたく自分以外の異常がいたとは気付かなかっ
たぜ」

「見ただけで気付いてくれるものなのか。いや、私も名瀬を見てす
ぐにわかったか」

私の『異常性』は知られない限りわからないもので、目立たないと思
っていたのだが。

「お前、どこかで見た年食った坊さんみたいな目をしてるぜ」

「……目か。確かに色々他の子供とは違う人生を送ったな。それ
が目に見れているというわけか。そして君はそれに気づくだけの能
力を持っている人間というわけだ」

「というか喋り方まで年寄り臭いのはどうかと思うんだけどなー」

「善処すると答えさせてもらおう」

そんなつまらない事で話相手が減るというのも困るからな。
ともかく、その、あれだ。

「一つ、頼みがあるのだが」

「だっからさー。お前はいきなり話しかけてきいて今更遠慮する
のかよ」

「そうだな。では言おう。私の話相手になってくれ」

「……はあ？ それだけかよ？」

「うむ。私はお前が一目で気に入った。だからこれからは共にいて
もらいたい」

もしもこの名瀬天歌という女が私に想像できない程に『異常』を抱
えているのならば、私とずっと語り明かしても足りないだろう。
そしてきつと私が見たいモノを見せ続けてくれるに違いない。

ならばそう、共にいればそれはきつと幸福だ。少なくとも不幸では
ないだろう。

「……お前はもう少し勉強しろや」

「？ 私はなにかおかしいことを言ったのか？」

そもそも君も、私には勉強など必要ないということがわかんと思っ

ただが。

それとも勉強とは別の何か他の事を表すニュアンスか？

「別にいいけどーちょっと実験に協力してもらっぜ？」

「私の体などいかようにしてくれても構わんよ。私が私として生きられるならばそれで結構だ」

「正直ってそーいうのには興味ね　けど、取引成立ってやつだな」

「うむ？　取引というものではない。これは友誼を結ぶ、もしくは絆の完成でいいのではないか？」

「お前マジでわかんねー。どんな生活してたんだよ」

そういうことはお互い様だと思うが。

しかしそうだな。そういうことはお互いに知る術があるだろう。とにもかくにも……そうだな。

記憶しつくしたといっても興味のない分野は放っておいたのだ。一度意識して見るのも面白いかもしれない。

私の気持ちはどういったものなのか。

そもそも心など理解できない私には把握しきれるものではないかもしれないが。

試して見るのも悪くないのではないだろうか。

第伍記憶目（後書き）

あとがき

主人公は段々とおかしくなります（性的な意味で）。

幼稚園でも小学校でも『道徳』の授業とかをすっ飛ばしてたので仕方ないですね。

ちなみに、探究心旺盛、好奇心旺盛、知識欲旺盛で繋がってます。

次回、衝撃の展開。

第陸記憶目（前書き）

ウルフガイは感想を食べてSSを書く生き物です。
面白い意見なんかあったらどうぞよろしく。

今回からだんだんぶっ壊れ始めます。

第陸記憶目

恋愛とはなんぞや。

曰く、人間が他人に対して抱く情緒的で親密な関係を希求する感情である。

曰く、その感情に基づいた一連の恋慕に満ちた態度や行動を伴うものである。

曰く、耐えがたく抗い難い感情である。

曰く、抑えきれないものである。

「……はて。私は一体なぜこんなモノを調べようと思ったのか」

なぜ？

無から生まれた故に理由なし。

私はそう記憶している。

ただなんとなく調べようと思っただけである。

名瀬天歌との邂逅は成功だった。

成功というか最高だった。

会えた事を、その機会を予知した自らの異常に初めて感謝した。

そつか、私の感じたモノと関連性のあるモノだからと私は恋について調べたのだ。

だがいまいわからない。

数多の文学作品も読んだつもりだし、一目惚れというものがあると

知つてもいる。

しかし、それは自らに起こりうる事なのか。
私には判断がつかない。

ならば聞いてみればよいのだろう。

そして翌日。

「そついうわけで来たのだが」

「どういうわけだか知らねーけど、俺に聞かなきゃならない事なのかよ」

「うむ。私はお前に一目惚れしたかもしれない。そついった事が私にも起こりうるのだろうか」

「……聞く相手を間違つてるだろ」

そうか？

私にとつては私以外の『異常』であり、私以上にモノを知っている可能性があるのは名瀬くらいだったのだが。

「お前の顔を見ていると動悸が激しくなる。これは恋をしたと思われる現象だ。思えば私はお前を見た瞬間からこの状態だった。これは一目惚れという現象ではないかと思ひ至つたわけだ」

「……………」

「なんだ。そのような馬鹿を見るような眼をして。一応真剣に言っているのだが」

「いやいや、どう考えても馬鹿に見えるぜ」

馬鹿……私は頭が悪いと思われる行動や知識が少ないようなところは見せていないつもりだが……

この判断を名瀬に任せに来てしまった事が馬鹿なのだろうか。確かに人に聞くとということは知識が無いという事を現すのかもしれないが……

「わかった。判断は自分でつける事にする」

「……大丈夫かよ」

翌日

「昨日の判断は一目惚れということで決着した。私はお前に恋をしたらしい」

「頼むからいい加減にしてくれよ」

「何をだ？」

「教室でそんな事言っな」

そうだったのか？

確かに私の記憶にある文学作品の中では周りに人がいたパターンは1
5しかないな。

第陸記憶目（後書き）

あとがき

主人公がおもしろすぎて名瀬の方がまともに見える。
嘘みたいだろ……これ、ツッコミ役の方は袋かぶってるんだぜ？

第？記憶目（前書き）

さらに壊れる主人公。

最終的に、黒神真黒とか江迎怒江レベルの変態にまで育ち？ます。

第？記憶目

私が名瀬天歌とあつて数日後。

私は彼女を自分の家へと招いていた。

彼女との会話は実に楽しい。

彼女はほとんど自分から話そうとはしない。

だが、知的で独創的な彼女との会話をしている時、私は常に幸せだった。

その会話の中で私は彼女の情報を得た。

ついでに、下校する彼女をこっそりと見つめながらその後を尾行した。

どうやら廃墟のような場所に住んでいる。

戸籍や資金は、まあ彼女ほど優秀ならば何の問題もないだろう。

これは会話の中で得た情報だが、彼女は理科生物学に置いて実に優れているようだ。

そういった分野の情報も記憶しつくしている私だから感想だろうが、彼女の話す理論や独自の構想は今まであった既存のモノとは、それこそ規格が違っていた。

彼女の『異常』もおそらくそこに直結するのだろう。

そんな訳で色々と話したいと思って家に招待したわけだ。

「やたらいい家に住んでるじゃねーか」

「そうか？ 情報収集用の端末を集め、本を収納しておくにはこれくらいの家が必要だと判断したのだから……」

「それで親もいないってかー。俺と同じだなー」

宝くじの番号を『確実に』一等がとれるように選ぶ方法が私にはあるからな。

金を得るには簡単な事だったので、出来る限り必要なものに回した後家は家の方に金を回したのだが。

それは間違いだったのだろうか？

なんにしても、親なんていう下らない事でも彼女と境遇が同じなのは実に嬉しい。

「私は家族に見切りをつけて家を出たが、そちらはどうなのだ？」

「何がだよ」

「実際、親がいければ子は生まれないからな。家を出たのか？」

「ああ、ただ自分の心を弄ってそういう記憶を消しただけ」

「ほう。それは興味深いな。まあ、その事によって今の君があるのだとしたら私にとって幸福だが」

つまりは、その事が無ければ私は名瀬天歌という存在に会えなかったのだからな。

そして記憶を失った事によって彼女の人格が形成されたのであれば、その全てがあるからこそ彼女の彼女なのだと受け止めよう。

「それで―実験動物^{サンプル}になってくれるんだろ？」

「うむ。私の身体能力は前も言っただように異常でな。ここところはそれも顕著になってきている。私という標本がいれば、それは君の利益となるだろう。そして私は、君に何をされても自己を失わない限りは許容しよう」

「おいおい。言ってくれるじゃねーか」

「何度も言っただろう？ 私の異常性は脳が、主に私という自己が中心だ。体に何が起きたところで、私が私として思考できるのならそこに何の問題はない。ましてやそれが君の役に立てるのならば当然だ。私は君が大好きだからな」

「……ああもう、んな何度も言わなくてもいいっての。そこまで何度も言われてもお前をぶっ壊そうとは考えてないって」

「そうか、君がそう言うのならば安心だな」

私は地下にある研究室兼手術室に彼女をいざなった。

ここは、私が記憶の中の技術を模倣するために作ったものだ。

結果は『可能』ということと落ち着いたが、特に研究するような事もないし、興味もないので放置していたのだ。

思えば、『いつか役に立つ』とはこのことか。良かった良かった。

「さあ！ 私の体を隅々まで弄ってくれ！」

「お前……いや、面白いからいいか」

こうなる事は本望さ！

私は衣服を着替えて手術台の上に登る。

ありとあらゆる設備は整っている。さあ、思う存分研究してくれ！

第？記憶目（後書き）

あとがき

彼女の心情としてはこんな感じです。

名瀬天歌 記憶がぶっ飛んだところに現れた謎過ぎる男に戸惑う。

名瀬天歌 ストレートすぎるのかアホ過ぎるのかわからない告白を
何度も受ける。

名瀬天歌 まあ面白いから付き合ってやるかと思う。

第捌記憶目（前書き）

主人公である熾音君の異常性については今回でもう少し出てきます。書いてたらチートすぎないかと思ったけど、『めだかだつて十分チートすぎるからいいや』となった。

第捌記憶目

「つまりだ。記憶が蓄積することに脳と体全体がバージョンアップすると?」

「脳つてのはコンピューターみたいなもんだしな。演算能力の機能上昇と記憶による内容量の増大に合わせて身体ハードの機能が上昇ってとこか」

「まあ普通ならそう言う事自体も起きないんだろうな。だが、私も自分が異常だとは理解している。『そういうもの』なんだろう」

服を着替えて居間に戻って検査の結果を聞いた。

どうやら私はとことん異常であるようだ。

しかし私はそんな事よりもきになることがあった。

「それよりも、私は君の役に立てたのか?」

「生のデータつてのは貴重だからな。随分いいもんが取れたぜ?」

「そうか。ならばいいんだ。ああ、一応後でそのデータを一目見せてくれ。記憶しておく」

「お前のデータなんだから許可取る必要はねーよ」

まあ、そうかもしれないな。

しかしデータを取ったのは名瀬なのだから許可はいるのではなからうか。

でも、彼女がいいと言っているのだからそれでいいか。筋肉がどうか神経がどうか言ってるけど、そんな彼女も素晴らしい。

しかし、未だに彼女の素顔を見れないというのは辛い。

いや、別に見えないからといって嫌いになるわけなど勿論ないのだが、彼女の全てを知りたいと思ってしまうのは仕方ないだろう。

彼女が見せたくないと思っているのならば、私は見る気など全くないからだ。

……見せてもらうために努力と懇願は惜しまないつもりだが。

うむ、彼女の素顔を想像するのもいいかもしれない。

おそらく知性的な素晴らしい顔をしているのだろう。

まあ、彼女の容姿がいかなるものであるかと愛し続ける自信が私にはあるが。

いつか自らの記憶の大部分を彼女で埋め尽くしてしまいたいものだ。

「おい、不気味な笑顔はやめてくれよ」

「ん？ 私はそんな顔をしていたか？」

だとすればそれはまさに愛ゆえに……なぜ不気味？

名瀬に視線を向けるも、既に彼女は手元のデータに目を落としていた。

さっきは話しかけてくれたのに、また熱中してしまっている。

さて、彼女の素顔のことを考えていたのだったか。
彼女の素顔を見せてもらえるようになったら、私は彼女に言わねば
ならない事がある

私の異常である『完全記憶』は既に彼女に教えてある。

しかし『予知』の方はまだ教えていない。
彼女に言わねばならないのはそのことだ。

『未来』を知るということは、他者に恐れられる事だ。
無論、彼女に対してそれを使った事はない。
だが、私は彼女に恐れられる事が恐い。

彼女がその程度の事を気にするような人間ではないと信じてはいる。
だがそれでも恐いのだ。

だから、彼女が顔を見せてくれて、私を信頼するという感情を見せて
くれた時、私の『最大の異常』を彼女に教えようと思う。
それならば、きっと恐がられる事などないのだから。

「やっぱり、私は君に会えてよかったよ」

「……なんだよいきなり」

「いや、なんでもないことだ。私の独り言だからな」

早く、彼女の素顔を見せてもらいたいものだな。

第捌記憶目（後書き）

あとがき

書いていると、熾音君がすぐ暴走しちまうのは何故なのでしょう。

やっぱりあれですかね。愛ですかね。

ちなみに、もしもめだかが『完全』で『記憶能力』を複写した場合、過負荷として『知識欲求』がついてきます。

まあ意志の力が強い彼女なら『知りたがり』レベルで収まるでしょうがね。

第玖記憶目（前書き）

主人公はとんでもない知りたがりなのでストーキングだって大得意です。

第玖記憶目

私は名瀬の事をもっと深く知りたかった。

だから彼女と多くの事を話し、語り合った。

彼女の得意な理科学生物学に置いても、私は十分な知識を持っていたので、彼女の助けとなる事が出来た。

彼女はだんだんとバイオテクノロジーの世界的権威として名を知られはじめた。

無論、それはまだまだ裏の世界での一部の話である。

世間一般で騒がれるような有名人となったわけではない。

彼女のいじめはなくなるわけではないのだ。

正直、私はそれを見ていると腹が立ったのだが、彼女がそれを無視している以上は私が気にしても仕方ないだろう。

どこかそれを肯定している雰囲気さえあったくらいだ。

ただそれでも、私には彼女が一人でいる事が耐えられなかった。だからいつでもどこでも彼女を見れば必ず話しかけるのだ。

「名瀬！ 会いたかったぞ！ 8時間と15分36秒ぶりだな！」

「お前ここが教室だってこと考えろよな！」

「世間一般の常識なぞどうでもいい。私には君が全てなのだ」

「うーわ。駄目だこいつ」

教室であろつが他の生徒が見ていようが私までいじめられようが知つた事ではない。

彼女が私のそばにいるのならそれだけで私は満足だ。

私は彼女の事を多く知るにつれて少し気付いた事がある。

日本屈指の名家である黒神家。

最近ではその企業グループの業績が『異常』に伸び始めているため、日本有数の企業グループから世界有数の企業グループへと変貌を遂げつつある。

まあ企業グループの事についてはおいておこう

問題は、そう言った黒神家の情報のどんな細かい事でも私が記憶として収集しているという事だ。

有名であるということは、それだけ情報の量も膨大であるという事だ。

その長男である黒神真黒は現在私より一つ上の中学2年。

その妹の黒神めだかは私より一つ下で小学六年生。

彼らはその家の生まれである事もあつてか非常に有名だ。

しかし、ほとんど知られていない事ではあるが、黒神家にはもう一人の子供がいるはずなのだ。

黒神くじらという『現在中学一年生』であるはずの長女が。

ほとんど知られていないのは、彼女の情報がほとんど外に出てこない事にある。

しかし、過去の情報を探ればその存在は明らかだ。

黒神家には確かに『黒神くじら』が生まれていることは確かなのだから。

そしてその『黒神くじら』という存在の情報は現在全く聞く事が無い。

さて、そこで私の頭に浮かんだのは名瀬の事だ。

2年前から情報が途切れるようになった『黒神くじら』の情報。

元々情報が少ないモノがぶつとりと途絶える。それが何を示すのか。

そして情報を収集すればわかる黒神家の子供たちの異常性。

何故か素顔を見せようとしない名瀬。

名瀬と『黒神くじら』の年齢の一致。

これらの情報から推測すると、ある可能性が見え隠れする。

だが、考えるだけ無駄な事か。

そもそも私は彼女の事を知りたくて推測をしてみただけだ。

彼女の過去がどういったもので、彼女の正体が誰なのかわかるうがそれには意味が無い。

記憶を失った彼女には関係が無い事だろうし、私は今の彼女に惹かれたのだ。

推測は推測のままでおいておく事にしよう。

第玖記憶目（後書き）

あとがき

今まで記憶してきた事を劣化無しに覚えていられる主人公だからこそその推測です。

彼にとってはそのような事はどうでもいい事だが。

原作見てて思ったが、拳銃一丁とナイフ一本持った宗像先輩が裸になつたらクソ強いんじゃないだろうか。

超スピードで動いて銃撃ってナイフで突けばそれで人なんかそれで殺せると思っただが。

というか、暗器をたくさん持つて逆に戦闘力下がるならそんなもん教えてもしかたなかったんじゃない。

第拾記憶目（前書き）

だんだん仲良くなるわけです。
そして名瀬天歌は確実に『ツンデレ』なわけです。

第拾記憶目

私は名瀬天歌の事が大好きだ。

それはもう大好きで大好きでしかたが無い。

顔を隠してようが皆に嫌われてようが好きなもんは好きである。

ということでは本から得た知識をもとに、私はある計画を実行に移すことにした。

時期は冬。

年の終わりである大晦日。

家に名瀬を呼んで年越し蕎麦を食うのである。

どうしてこんな事を考えたかといえば、彼女と過ごす記憶を作りたかったからである。

ついでに、こう言った事を体験したことが無さそうな名瀬と共に私も年越しそばを初体験というわけだ。

なんとなく素晴らしいような気がする。ならば実行に移すのみである。

「で、俺を呼んだのは『一緒に年越しをしたかった』からだっつーのか？」

「ああそつだ！ 名瀬も体験したこと無いだろう？」

呆れたような眼で炬燵に入ってこつちを見る名瀬。
そんな視線もイイ！ もっと私を見てくれ名瀬！

「ただ単に談笑しながら蕎麦を食べて除夜の鐘を聞くという、一見無価値で無意味な行為だ。しかし、そういう事をやってみるのもたまにはいいんじゃないか？　ちなみに私は名瀬と一緒にいてくれるなら何であらうと無問題だ」

「相変わらずお前もおつかしいよなー。俺なんかのどこがいいんだ？」

「当然『全て』だ！　記憶の中の言葉を使わせてもらうのならば……そう、『好きになるのに理由はいらない！』私は全くその通りだと思うね。いい言葉だと思わないか？」

「知らねーよ。というか興味ないっつーの」

……まあそんな答えは予想してたが、いつしか彼女にも『好きだ』とかなんとか言わせて見たい。

そして私はそれを言われてみたい。

ふふふ。努力、努力だな。

「さて、蕎麦の準備ができたぞ。私の記憶の中の全ての料理知識を総動員して作った一品だ。存分に期待してくれ」

「おーう。便利でいいなー」

「ふふふ。名瀬に喜んでもらえるのなら頑張った甲斐があるというものだ」

私は笑顔を浮かべながら名瀬の正面になるように炬燵に入る。ホントのところは『いただきます』も一緒にやってみたかったが、彼女は既に箸を手にとって食事を始めている。まあそれは今度でい

いか。いきなりたくさんの事を求めるのももつたいないだろう。
……袋を被りながら蕎麦を食う彼女の姿はなんとなく可愛い。

「結構美味いな。こんな特技があるとは驚きだぜ」

「特技というかね。ただ単に失敗しないようにしたら自然とこうなるんだよ。名瀬が褒めてくれて本当に嬉しい」

「……すげー笑顔だな。俺が少し褒めたくらいでそんな顔すんのかよ」

「当然さ！」

私はどんな料理であろうと美味しく作る事が出来る自信がある。
ちなみにこの蕎麦は手打ちだ。

愛情を込めるために一から作ったのだ。

それを美味しいと言われて嬉しくないはずがない！

「ところでだ」

「なんだよ」

「私はいつになったら君に名前でもらえるのだろうか」

「はあ？」

「だって私は名瀬と呼んでいるじゃないか。というか私は名前ではれない！」

「本音はそっちじゃねーか」

どっちだっていいだろう。

私は名瀬に名前を呼んでほしいのだ！

いつまでも『お前』では他人みたいな感じがするので嫌だ！

「駄目だろうか。いや、駄目だというのなら諦めるが……」

「あーもうめんどくせー。そんな顔してんじゃねーよ、いつつも笑ってる癖しやがってよ」

「……そんなにいつも笑っているか？ 私は」

「うざったいくらいに笑顔だなー」

「そうか……」

「……ケツ！ 呼んでやればいいんだろ！ 熾音くん！ これでいかよ」

「愛してるよ名瀬ちゃん！ 大好きだ！」

そんな、ちょっと仲良くなれたような気がする大晦日の夜だった。

第拾記憶目（後書き）

あとがき

最後のあれは主人公の『天然泣き落とし戦法』です。

泣くまではいってなくとも、いつも笑顔の主人公の哀しげな顔にキ
ュンと来たわけですね。

第拾巻記憶目（前書き）

いつになく変態でかつこいい主人公。

収拾がつかなくなってきたな。

第拾巻記憶目

今日の天気は晴れ。

私は鏡を見て身だしなみを整える。

長い黒髪をポニーテールにまとめ、中学校の制服に着替える。

……よし。準備はできた。

「名瀬ちゃん！ 朝ご飯だよ！」

「朝から騒ぐのやめてくれよな！。まだ5時だぜ？」

「そいつはすまなかった！ でも大丈夫だ！ 愛情たっぷりのご飯とみそ汁が君を待っている！」

「眠いって言うてるだろーが」

でも名瀬ちゃん、炬燵で寝ると風邪をひくぞ。

いちいち研究室を利用するのに私の所に来るのが面倒だからって、私の家に泊まってくれるのは嬉しい。

でも、それで名瀬ちゃんが風邪をひいてしまったら本末転倒だ！

無論その場合はつききりで看病するけど。

……むしろ看病はしてみたいけど、それで彼女が風邪をひいてしまつては嫌だからな。

「ほら、できたてだから美味しいぞ！」

「眠いって言うてるのによ……」

「そんな名瀬ちゃんも可愛いさ！」

「自分勝手だなー熾音くん。飯作ってくれるのはありがたいけど」

俺が名瀬ちゃんのために飯を作るのは当然だろ？

というか私はどんなものであるかと君に捧げる覚悟はできているさ。自分勝手なのはまあ、『異常』な人間はどこかしら自分勝手なんだと思うよ？

「いただきます！」

「いただきますーすつと」

そんなめんどくさそうに言わんでもいいだろうに……

だがそれでこそ名瀬ちゃん。気だるげな感じがなんともいいね。ふふふ、朝から名瀬ちゃんの姿を見て一緒にご飯を作れた。今日も最高の一日だな。

「ところでよー」

「なんだ？」

「あれは何だよ？ あれ」

名瀬ちゃんが指差した方向を見ればそこには棚。

……ついでに私の作である名瀬ちゃん人形が3つほど。

「何って……名瀬ちゃん人形だぞ？」

「昨日はなかったじゃねーか」

「昨日の晩に作り始めたらついつい熱中してしまっただけ。一気に三つも作ってしまったんだ」

「裁縫もできたのかよ」

「勿論だ。私の名瀬ちゃんへの愛情があれば記憶の中の技術をマスターするなど簡単な事！」

デフォルメされた名瀬ちゃん人形を3つ作る事など、簡単な事だ！名瀬ちゃんが炬燵に突っ伏して寝ている間、私はそれを見ながらずっと人形を作っていたんだからな。

ついでに下校する名瀬ちゃんを尾行した時の記憶や、初めて会った時の記憶を元にして人形を作っていたんだ。作っているだけで天にも昇る幸福感だった。

ちなみに、棚に置いてある本は全て名瀬ちゃんのアルバムだ。

私は記憶すればそれで終わりなので、本などは一度読めば置いておく必要はない。

しかし、もうすぐ6冊目に入る名瀬ちゃんのアルバムは居間に置いてある。

記憶の中ではなく写真で直接楽しみたいからだ。

最新の超高性能カメラをネットでオーダーメイドしてもらった甲斐があったというものだ。

「ご飯は食べ終わったかい？ それじゃあ一緒に学校に行こう」

「そんなに引く張るんじゃないよ」

「ああ、ごめん。でも名瀬ちゃんと学校に行くのは楽しいからね」

ついつい手を引っ張ってしまったので慌てて離す。

無理矢理に引っ張って嫌われたりしたら大変だ。

「俺も面白いからいいけどさー。ま、熾音くんも他人からの評価は気にしないみたいだしな」

「私は名瀬ちゃんからの評価が良好ならばそれでいい」

「……かつこいーこと言ってくれなせ」

「私はいつだって真面目にかつこい事を言ってみせるさ。ただし名瀬ちゃん限定でね」

さて、それじゃあ学校に行くか名瀬ちゃん。

私は名瀬ちゃんがいつもの調子に持ったのを見計らって、もう一度手を握るのだった。

第拾巻記憶目（後書き）

あとがき

早いところ名瀬ちゃんの素顔を見せてあげたいが……
どうやって納得できる展開にするかな。

熾音君にもしつかり弱点はあります。
そして未だ完成に至れない理由もあります。

ヒントは『たくさんの事を知り過ぎて答えは全てそこから探し出している事』

ちなみに古賀ちゃんの出番もしつかりありますよ。

第拾貳記憶目（前書き）

今回はちよつとした伏線回です。

古賀ちゃんが出てくればもうちよつとわかりやすい日常編ができるのにな。

でもその前に完全なフラグ立てをしておきたい。

『予知』について教えたりとかね。

第拾貳記憶目

「それじゃあちよっとお出かけしてくるね名瀬ちゃん！ ご飯は用意しといたから温めて食べてね！」

「熾音くんは俺のお母さんかよ」

「いや、それを言うならお父さんだろう？ そして名瀬ちゃんはお母さんだ！」

「さっさと行くなら行けよ」

今日亜は私がちよっと遠出するから名瀬ちゃん成分を吸収してから出かけたいのに……

つれないな。名瀬ちゃんは。

「それじゃあ『行つてらっしゃい』くらいは言ってくれないか？ 離れるのは非常にづらいんだ」

「わあつたよ。……いつてらっしゃい」

「ありがとう名瀬ちゃん！ しかたなく言う名瀬ちゃんも可愛いよ！
！ いつてきます！」

さて、時はすでに春半ば過ぎ。

私と名瀬ちゃんは中学二年生となった。

学校全体が名瀬ちゃんを嫌っているのは変わらないが、変わったのは私もそれに含まれるようになったことだろう。

四六時中名瀬ちゃんにひつついて、『愛ゆえになせる行動』を取り過ぎたせいだろう。

あとは名瀬ちゃんといつも一緒にいる事で、見えにくかった私の異常が見えやすくなったからだろう。

まあそんなことはどうでもいい。

一日の半分以上を名瀬ちゃんに費やし、4分の1を知識の収集に費やすタイムスケジュールに変わってかなりの時間が経つ。

それ自体には何の不平不満も問題もないのだが。

そんな情報収集の時間の中で、とある情報に私は目を止めた。

『黒神めだか』の情報だ。

ジユグラ 定理を難なく解いて莫大な報奨金が贈られたとか。

そういった、過去にない新しい物や方法を作り出す才能は私には無いものだ。

名瀬ちゃんだって新しい独自の理論や人体改造の立案もこなしてしまえるが、そういった才能は私にはない。

せいぜい私にできる事は、既存の知識を組み合わせることくらいだろう。

そういった才能があれば私は名瀬ちゃんの役にもっとたつ事が出来

る、そう思うとそういった才能を持つ人間が羨ましくなるな。

さて、『黒神めだか』の話に戻るか。

現在中学一年生であろう彼女の逸話は小学生のころからあるが、これでもた有名になったわけだ。

逸話を知れば知るほどに彼女が『異常』であることが窺える。

一時期、名瀬ちゃんの事でかなり意識していた黒神家の『異常』な子供の一人だ。

私は多少興味がわいたので調査を行うことにした。

本当は名瀬ちゃんの傍から離れてまでやる事ではない。

しかし相手が『異常』であるならば、私は実際に目で見た方がわかりやすいと思っている。

前に名瀬ちゃんも言っていた、『実際に取った生のデータ』の方が優れているわけだ。

……それにもしかしたら、名瀬ちゃんの過去に関係があつて、『未来』で名瀬ちゃんと共に関わる存在となるかもしれない。

そうだとするのなら、その『異常』についてできるだけの事を知っておいた方がいだろう。

私の『予知』とて万能であるわけではないのだから。

そんなわけで少し遠出を試みたわけだ。

まあ、遠くから見ただけなのだがな。

一目でわかるのは確実に『異常』であるということか。

目にこもる力も、溢れる存在感も、常人とはかけ離れている。

無論、名瀬ちゃんほどに私を魅了することはなかったが。

異常である物が普通に過ごしている。

いや、異常を普通として感じながら過ごす事で異常が普通に見えるのか。

とにかくにも、近くの建物から望遠鏡を使って盗撮するのはやめようか。

そろそろ飽きてきたし。

というかなんで私が名瀬ちゃん以外の女をじっくり観察しなきゃいけないんだ。

……自分で来たんだったか。

ともかく、『黒神めだか』は異常だ。

今日も見ているだけで何回も人助けをしている光景を見た。

そして結果的に『異常』であるにもかかわらず皆に好かれている。

私や名瀬ちゃんとは違う……な。

しかし、それもまた『黒神めだか』の生き方なのであろう。

私は私の生き方である名瀬ちゃん至上主義を貫くだけだ。

ま、もしかしたら正面から顔を合わす事があるのかもしれない。

その時の私の態度はお互いの立場によるであろう。

まあ今はさつさと帰って名瀬ちゃんに会いたい。

できればハグしたい。抱きしめたい。

うむ、1日会えなかったという事で許してもらおう。

第拾貳記憶目（後書き）

あとがき

黒神めだかと接触……と見せかけて本当に見てただけ。だって接触したら確実にややこしい事になりますからね。ヘタすれば球磨川に目を付けられますよ。そして主人公の場合、確実に球磨川を殺しにかかりますからね。『名瀬ちゃんに危険が迫る未来を排除する』的な感じで。だから今回は見てただけです。

ある意味伏線です。

……ハグ的な意味で。

雲仙冥利とのバトルでめだかが乱神モードになったのは中学1年の夏休み以来。つまり球磨川とのバトルはその時か、それより前かということになります。

そしてめだかが球磨川とバトル？したらしいときの彼女の髪型はポニーテール。

その後にはほどけてストレートにしています。それでジューグラー定理を解いたのがポニーテールの時。

そして阿久根にボコされてたのはツインタールの時。

時期順としては、ツイン ポニテ ストレートなのでしょう。
だから主人公が訪ねてきた時のめだかは、阿久根が会心した後、球磨川との対立前となります。

若干強引だけどいいんだよ！

深いところまで関わるつもりじゃないイベントなんだからさあ！

そして今回わかった熾音の弱点は『想像力』『発想力』が極端に欠けている事。

モナ・リザをそのままそっくり書くことはできても、新しく何かを書けと言われたらできないのです（風景画とか人の絵とかは既存の技術使って書けますけどね）。

既存のハイパーな技術は使えても、アイディア商品は作れない。そういうわけです。

ちなみに、名瀬ちゃん人形は目の前にいる名瀬ちゃんを見ながら裁縫でアニメ調に作ったらできましたとさ。

まさしく愛の力としか言いようがないね。頭がイッちゃってたから作れたんでしょう。

第拾参記憶目（前書き）

主人公は尽くすタイプです。

第拾参記憶目

「名瀬ちゃああああああああん！」

「いきなり抱きつくんじゃねえよ」

ドスッ

「首に注射器刺さってる！ でも私の血液採取ならいつだってさせてあげるさ！」

「残念だけど睡眠薬だぜ？ しばらく寝てな」

「眠い……でも腕の中の感触が素晴らしい……」

フフ……いい夢が見れそうだ……

名瀬ちゃん曰くめんどくさいから付けないノーブラの胸の感触だっ
て大好きさ！

というわけでおやすみ。

「学校で抱きついたのは悪かったと思ってる。でも後悔はしていない。まさしく夢見心地だった」

「んなことはいいんだけどよ。どこいったんだ？」

「なんだい？ 私がどこに行っていたのかを気にしてくれるのかい？ 嬉しいなあ」

「……ちげーよ。言う気が無いなら言わなくていいっつーの」

「そうかい。ならば言わないでおくよ」

もしかしたら『黒神めだか』の観察に行っていたと知って嫉妬とかしてくれたら嬉しいけど。

いや、そんなことをする名瀬ちゃんは名瀬ちゃんじゃないね。

少なくとももつとラブラブになるまではそういう展開はないだろう。もつとラブラブ……早くになりたいな。

「というわけでお弁当作ってみました！」

「中身はまともなんだろうな？」

「一応、ハートマークは自重しておいた」

「……ま、別に食べればいいけどよ」

食べれば良いと言って前はバランス栄養食品ばかり食ってたじゃないか！

私のお弁当はちゃんと栄養も見た目も味も全てが名瀬ちゃんのために考慮されているぞ。

脳の働きを促進するために噛みごたえのある物もあるし、ビタミンも十分に摂取できるようにな。

名瀬ちゃん健康はこの私が守る！

現在、教室にいるのは私と名瀬ちゃんの二人だけだ。

中学二年になってもこの対応とは嫌われたものである。

無論私は名瀬ちゃんがいればそれでいいが、彼女自身はどう思っているのだろう。

だが、私くらいじゃ彼女の心の底など見極めることはできん。

まあ美味しそうにお弁当を食べてくれているからそれで満足しておう。

「さて、今日の実験はどうするんだい名瀬ちゃん？ 私の体は調べつくしただろう？」

「ああ。熾音くんのおかげで随分とはかどってるからな。動物実験でテストといこうぜ」

「そうか。それじゃあ適当に準備しておくよ。大型肉食獣あたりでいいかな？」

「準備できるのかよ」

「愛の力は偉大なのだよ」

実際は予知で当てた宝くじの資金が元手なんだけどね。

現在はもっぱら株で稼いでるし。

どれが上がるかわかってれば絶対に金が入る方法だよ。
違法輸入の動物でも仕入れればいいだろう。

名瀬ちゃんは最近ではだいたいこうやって動物での実験を行っている。

私の体から得たデータのおかげで、人間の『異常』な肉体スペックのデータが取れたらしいのだ。

人間での実験はまだ行えていないが、現在はそれを動物を使ってテストし続けているわけだ。

もちろん私はその実験台になろうとしたのだが、私の体は元から『異常』であるので、改造しても結果が出ないという事だ。

その時の役立たず宣告には正直落ち込んだ。

まあ、私の体は名瀬ちゃんのデータ取りに大きく貢献している。

筋肉や骨組や神経、果ては内臓器官の至るところまでデータを提供済みだ。

それが名瀬ちゃんの研究に役に立っているのだから感激である。

実験台にはなれないが、データの提供で貢献したという事で落ち着こう。

さて、そんな事を考えていたら授業が終わって放課後だ。

私はすぐさま名瀬ちゃんの元へと向かった。

「名瀬ちゃん！一緒に帰ろう！」

「そんなに急がなくてもわかってるっつーの」

私は彼女の手を握って、私たちの家へと帰る。

帰ったら研究室で彼女の助手役だ。

校舎を出て家へと向かう道すがら、私は興奮を抑えきれずに終始笑顔だった。

第拾参記憶目（後書き）

あとがき

だんだんと口調が人間臭くなってきたる主人公。

しかし、冷静モードでは未だに年寄り臭い口調ですよ。

あれです。名瀬ちゃんが近付くとカリスマブレイクするんです。

ところで、日之影空洞さんが一人で軍隊潰せるそうですね。

それでいて存在感が空気で認識させないようにできるって……

H×Hのメレオロンと、バキのオーガを合わせたようなもんですか？

日之影さんマジパネエっす。

第拾肆記憶目（前書き）

思い出の曰ってやつですな。

第拾肆記憶目

そう、それは未来を知る術のある私にとっても、本当に唐突にやってきた幸せだった。

いくらか不本意な形になってしまったとはいえ、それは確かに幸せな事だ。

思えば、こうも長くの時を名瀬ちゃんと一緒に過ごしていれば、気付かれないという事の方が難しい。

だって名瀬ちゃんも私に負けず劣らずの『異常』であるのだ。いつまでも気付かれないと思う方がどうかしていた。

いや、『予知』の一切を使わなければよかったのかもしれないが、私にとってそれはできない選択だった。

なぜなら私が名瀬ちゃんをサポートするに当たって、『予知』を使わずに、すなわち私の能力を全て出さずに手を抜いてサポートすることなどできないからだ。

私は彼女を助けるためなら常に全力全開だ。

彼女に恐れられる可能性のある『予知』であろうと、彼女をサポートするためならば惜しげもなく使おう。

そんな矛盾した考えも終わりの時が来たのだ。

私が言う前に、彼女が私の『異常』に気付いた。気付いてくれた。

そのような言い回しになるのは、私が彼女に隠し事をし続けるのが辛かったからか。

それとも全てをさらけ出せずにいたままで愛を叫ぶのが辛かったのか。

彼女と『秘密』を語り合う機会を与えてくれたからなのか。
おそらくそれらは全て正解なのだろう。

「熾音くんさー、なんか隠し事してるだろ？」

「っ！……なんのことかな？」

「普段ならそこで笑って返すところじゃねーか」

「そう……だったね」

それは居間でご飯を食べ終わった後の事だった。

珍しくも名瀬ちゃんの方から話しかけてきたのだ。

そしてそれは、私にとっての一番の問題となっていたところだった。
なぜなら私にとって、彼女に隠している事などたった一つしかないのだから。

「それで、私が何を隠していると思ったのかな？」

「普段から俺に隠し事しないーっつってる熾音くんだしな。という

か、細かい動作の一つ一つ見てればわかるんだよな」

「すると?」

「たま〜に先読みしてるよな。熾音くん?」

先読み。そこまでなら問題ないが。

心を読むとでも思われたら余計に嫌だな。

というか、未来がわかるのと同じくらい恐怖されないだろうか、その場合。

「俺がビーカー落としたら急に振りかえって受け止めた事もあったろ?」

「……………」

そつえばあったな。そんなこと。

思えば、その時はデータ整理で書類をまとめていて背を向けてたんだから気付けるはずがない。

「まあおんなじよーな事はまだたくさんあるんだけどよ」

「……名瀬ちゃんなら気付かれてもしかたないね。それだけ長く一緒にいたって事だし、名瀬ちゃんはずごいからね」

「そりゃあ一年以上も一緒にいるわけだしな〜」

「まあ、名瀬ちゃんの予想通りだと思うよ」

私がそう言つと名瀬ちゃんの目が細められた。

どんな顔をしているかまではわからないが、それは疑問だろうか。それとも、私が恐れている感情を現しているのか。

「一応聞いとくけどさ。なんで隠してた？ 隠してたって言うより言わなかっただけかもしれね けどさ」

「……いや、隠してたんだよ。できることなら名瀬ちゃんに知られなくなかったけど、もしかしたらその異常も含めた私の全てを知ってもらいたかったのかもしれないね」

「言ってる事おかしくねえか？」

「まあいいじゃないか。私が名瀬ちゃんに隠してた理由だろう？ それは名瀬ちゃんに嫌われるのが怖かったからさ」

「……確かに異常だけど、別に嫌ったりはしねーよ」

「本当かい？」

「そんなもん今更じゃねーか」

私の悩みとは名瀬ちゃんにとっては取るに足りないものであったか。いや、私も初めはそんな気はしていただろう？

『予知』して嫌われる事がないとわかっていればすぐに教えていたはずだ。

それでも『予知』を使わなかったのは、彼女を信じていたからで、それでも恐怖していたからだろう？

とどのつまり、私自身が臆病だっただけなのだろう。

「今更といえは今更だけどね。もっと感動的なセリフを言ってくれ

てもいいじゃないか。名瀬ちゃんには似合わないけど」

「そんなめんどくせーことできるかよ」

「まあ名瀬ちゃんがいつも通りに私の事を想っていてくれる事がわかってよかったよ」

「漢字間違つてねえか？」

「合ってるよ。それじゃあ……私の以上について詳しい説明はいるかい？」

「『予知』みたいなもんだろ？ 直観的なもんかマジな予知かは知らないけどよ」

「どっちでも変わりはないと思うけどね」

それじゃあ勇気が出たところでお願いしてみる事にしよう。
私は名瀬ちゃんの方を向いてその目を見ながら言う。

「一つお願いをしてもいいかな？」

「黙つてろつてことだろ？ わかつてるよ」

「ああ、それはそうなんだけど、名瀬ちゃんの素顔の事だよ」

「唐突だな。いきなりすぎるぜ」

「もう負い目はないからね。これで私も何でも言えるというわけだよ」

だからずっと見たかった名瀬ちゃんの素顔を見てみたいんだよ。
隠すことなんて何もないんだからね。

「名瀬ちゃんがその顔を隠す事にどういった意味があるのかは知らない。でも、私はきつと変わらぬ反応をし続けるよ。私にとって名瀬ちゃんは全てだ。顔を見せてくれたらとても嬉しい。だから私に君の顔を見せてくれ」

「強引だな」熾音くんは」

「たまには強引に頼み込むのもいいと思ったのさ。それに名瀬ちゃんだって私の全てを受け止めてくれたんだから不公平だろう？」

「……はあ。わかったよ。見せればいいんだろ見せれば」

案外あっさり名瀬ちゃんはお願いを聞いてくれた。

それだけ私と名瀬ちゃんの仲が親密になっているということなのだろうか。

そうであるならば嬉しいな。

初めて見た彼女の顔はとても綺麗だった。

思わずほうと息が漏れてしまうくらいに。

そしてもう一度私は心の中で思った。彼女と一緒にいてよかったと。顔の造形が綺麗だからそう思ったのではない。

彼女の全体像を見て、彼女の存在全てを感じて、そう思ったのだ。

「綺麗な顔だよ名瀬ちゃん。顔を見せてくれてありがとう。でもどうして隠してたんだい？」

「……この顔を見た連中、こぞって態度を変えやがるし、女を見る目で見てきやがる。それに、目立って目立って仕方ないんだよ」

「恥ずかしがり屋なんだね名瀬ちゃん」

「うつせえよ」

今日は記念日だ。

私はこの日を決して忘れることはないだろう。

他の数多の記憶の中でも、特に色濃く残るに違いない。

第拾肆記憶目（後書き）

あとがき

シリアス（笑）。

（笑）はいりませんよね。きつと。

こうでもしないとバレることが無いと思いますしね。
というか実際、一年近くもサポートで使ってたら名瀬ちゃんじゃなくとも優秀な人なら気付くと思いますし。

主人公にとっての大きな問題は名瀬ちゃんにとってはそんなに大きな問題ではないわけです。
だいたい、そんなもん知ってどうすんだ的な感じですかね。
主人公が口に出さなければ知らないのと同じなわけですし。

そして名瀬ちゃんの素顔。

隠す理由が微妙なんですよね。

本人は記憶がないわけだから、案外本当に照れ屋さんだったりしてな。

目立つのが嫌だから隠してたらしいし。

皆が名瀬ちゃんを好きになってくれて嬉しい。

だが！ 名瀬ちゃんは私の嫁だ！

第拾伍記憶目（前書き）

まさかの夏祭り。

第拾伍記憶目

「私の異常はそんな『予知』だよ、不完全ではあるが、確実ではある」

「記憶能力からいっても知りたがりってわかってたけどさ、それにしてもすごいぜ」

「でも、未来を知るなんてつまらないからね。厄介事に巻き込まれた時と、名瀬ちゃんのために頑張る時以外は使つてないよ。私は名瀬ちゃんが『今』見せてくれる笑顔が見たいんだ。だから『予知』でそれがわかってたら嫌じゃないか」

「俺のことばっかだな」

「名瀬ちゃん至上主義だからね」

私が名瀬ちゃんに『予知』のできること出来ない事を詳細に語った後。

現在は名瀬ちゃんは袋を顔にかぶっていない。

とりあえず今日だけは外しておいてくれと私が頼んだのだ。

……十分に記憶しておかなければ。写真も撮って、人形も作ろう。

そういえば現在夏休みだけど、近くでお祭りがあつたっけな。その近くで花火大会も同時開催だったな。よし。

「ねえ名瀬ちゃん」

「なんだ？」

「顔を隠せてれば袋じゃなくても問題ないよね？」

「……はあ？」

お祭りでラブラブ大作戦……始動だ！

「祭りなんてきてもしようがねえと思うんだけどな」

「こづいのは誰かと来るのが楽しいんだよ」

私にとってはその誰かは今のところ名瀬ちゃんしかいませんけどね！
名瀬ちゃんだけで十分ですけどね！

そんなこんなで名瀬ちゃんを説得し、やってきました夏祭り。

そしてお祭りならではの、顔を隠しても問題ないという手段が存在する！

それが……これだっ！

「つたく、お面なんかつけさせやがって」

「袋かぶってこんなところきたら注目の的だよ？ それでもいいのかな？ それに私の選んできた浴衣にもそっちの方がズバリ似合っている！」

「は。今日だけだからな」

「わかってるよ！」

段々と顔を隠す面積を少なくさせるのに慣れさせなきゃね。

ふふふ。そうして目立たない恰好になれば彼女と一緒にもっと色々なところに行ける。

淡い紫の生地に鮮やかな黄色い花が咲いている。

そして彼女自身が袋を被らずに狐だか犬だかの中間みたいな感じのお面をかぶっている。

なんて可愛らしい！ もう死んでもいい。

しかし、一緒にいる私はそれにふさわしい姿をしているだろうか。

私は長い黒髪はいつも通りにポニーテールで後ろにまとめ、藍色の浴衣を着ている。

背は中学生男子の一般的な平均身長よりは高いはずだし、私自身の容姿は決して悪い方ではないはずだ。

もし名瀬ちゃんから見て悪いのならば、後で服飾店の店員に報復に行くでしょう。

「ほら、手を繋ごうよ」

「はいはい」

彼女と私はお願いすれば手を繋いでくれるレベルまでには仲がいい。私は名瀬ちゃんの手を引いて、彼女に祭りを楽しんでもらうべくエスコートをするのだった。

彼女の知識は十分に多いが、娯楽というものに関してはそう多いものではない。

それは彼女がそれらをシャットアウトしてきたからなのだろうが、これからはそんなことはないように全力で名瀬ちゃんと付き合っていこうと思う。

「ほら、名瀬ちゃんはわたがしとかりんご飴とか食べたことないだろう？　たくさんあるよ」

「どれが美味しいのかわからないんだけど」

「私も祭りは初めてだから知らないけど、きっと美味しいよ」

「推測なのかよ」

ただ、問題は私自身も祭りなど初めてであるということか。

名瀬ちゃんに会うまではそういうものには興味なかったんだから仕方ない。

でも、事前に知識の収集をしておいたから大丈夫さ！

「とりあえず食べてみようよ。ね？」

「熾音くんは言っても聞かないだろーしな。奢ってくれるんだろ？」

「もちろん！　女の子に奢るのは……いや、名瀬ちゃんに奢るのは私にとっては当然の事さ！」

「じゃありんご飴でも食べるか。熾音くんも一緒にな」

名瀬ちゃんと一緒にって言うてくれるなんて！
すごく報われた気分だ……よし。

「おじさん！ りんご飴二つくださいな！」

「はいよ！」

私は満開の笑顔でりんご飴を注文した。

その注文を受けたおじさんがちよつとたじろいでたのは気にしない
事にしよう。

第拾伍記憶目（後書き）

あとがき

ていうか俺さ。

今頃になって気付いたんだけど……主な登場人物って全員血液型がA B型なんだよな。

ある意味不気味だ。いやまあ、A B型には天才タイプが多いとは聞くけどさ。やりすぎだろ。

学園長から生徒会全員から何から何までA B型だぞ。

おかしいだろ。

まさかA B型の生徒だけを全国から集めたとかないよな？

ところで、次回の更新あたりでその他版に移そうと思います。

次の次あたり、一気に飛んでそろそろ古賀ちゃんの出番ですよ。

第拾陸記憶目（前書き）

お祭り後篇。

第拾陸記憶目

「どうだい名瀬ちゃん。お祭りだって楽しいだろう？　というか美味しいだろう？」

「熾音くんの飯の方が美味しいな」

「それは嬉しい……けど、そこは素直に楽しいって言ってくれよ」

「でも、食ってばっかりじゃねーか」

「いや、名瀬ちゃんが食べたがってたよね？」

祭りに来てしばらく。

名瀬ちゃんは思いのほか楽しんでた。

というか、物珍しさでキョロキョロといろんなモノを見ていたのだ。
が。

そんな、いつもは見せない雰囲気の名瀬ちゃんは本当に可愛かった。

「次は射的でもやろうか。名瀬ちゃんもやる？」

「熾音くん。俺の運動神経が全くないってことわかって言ってるだろ？」

「私だって射的なんて初めてさ。それに、知識や運動神経があっても成功するわけじゃないだろ？」

「……はあ。わかったよ」

後で気付いたんだけど、お面かぶりながら射的ってやりにくくないかな。

でも、普段袋から片目だけ出して生活してる名瀬ちゃんなら慣れるよね？

「結局二人とも全部はずすなんて……私達の射撃のセンスが0だったなんて……」

「俺はこうなるって思ってたけどな」

「私は男としてカッコイイ所を見せられなかったから非常に悲しいんだけどね！」

「……気にしてないから顔を上げろよ」

射的をかなり不満な結果で終わらせた後。

現在は河原で花火大会の見物準備。

片手にかき氷なんかもって土手に座っているわけである。

近くのビルの屋上とかに侵入してもよかったんだけど、時間をかけたらかき氷が解けるしね。

「かき氷美味しい？」

「おう」

「私のはイチゴ味で名瀬ちゃんのはメロン味だ」

「だからなんだよ」

「食べさせっこしよう」

そう言って私は名瀬ちゃんの方へとスプーンを差し出す。

名瀬ちゃんと違う味のかき氷を購入してから、ずっと私はこれを狙っていた。

違う味だからこそできる食べさせ合い。1か月前に読んだ本の登場人物のような失敗を私はしない。

なぜならば、その失敗を完全に記憶して気をつけておくことができるからな。

「はい、あ〜ん」

「……熾音くん、狙ってやってるだろ」

「何の事かわからないよ名瀬ちゃん。さあ、お面を少し上にずらして口を開けるんだ」

私がニコニコと笑顔で言うと、名瀬ちゃんはため息をつきながらお面を少し上にずらした。

ちょうど口が見えるくらいまでずらして、その口を開いた。

「あ〜んっつと」

「むぐ」

お面を上にはずらしているので視界が遮られているようなので、ちゃ

んと声に出して合図をおく手あげた。

それに合わせてしつかりと名瀬ちゃんは口を閉じる。
関節キスか。いいなこれ。何か感激する。

よし、ならば次は私の番だな。

「はい、次は名瀬ちゃんのを食べさせてくれる番だよ」

「……めんどくせー」

「私は名瀬ちゃんに一口あげたよ？」

「そりゃ熾音くんが勝手にやったんだろっ」

「駄目かな……？」

「……ったく。しゃあねーな。口あけるよ」

名瀬ちゃんは案外ジツと見つめると弱い。

それは一年以上も密接な付き合いをしてきた私だからこそわかる事だ。

名瀬ちゃんが大人しくなってスプーンを差し出してきたのでこちらも口を開ける。

「ん」

「あゝんとか言ってくれないのかグボツ!？」

喉に！ 喉にスプーンが突きだされた！ むしろ刺さった！

「自業自得だろ。バーカ」

「ゲッホゲホッ！ 無理言っでごめん名瀬ちゃん。でもやってみたかったんだよ」

「……また今度な」

くっ……今の私にはまだ難易度が高かったのか。
だが来年こそは。来年こそはっ！

ヒュ~~~~~ドーン！

「お？」

「ん？」

花火が打ち上げはじめられたようだ。

直接には初めて見るが、綺麗なもののだな。

美しく空で咲く花火を見ながら、私は名瀬ちゃんへと話しかける。

「なあ名瀬ちゃん」

「なんだよ」

「来年も来よう。絶対」

「……ああ」

私は名瀬ちゃんと一緒にかき氷を食べながら、その花火の打ち上げが終わるまで、その場で空を眺め続けた。

第拾陸記憶目（後書き）

あとがき

熾音くんは名瀬ちゃんのためなら才能の無駄遣いもかなりします。
それは一概に『愛による暴走』なのです。

第拾?記憶目(前書き)

古賀ちゃんじゃん。

第拾？記憶目

迎えた中学三年性の春。

相も変わらず名瀬ちゃんは迫害されていて、相も変わらずそれを気にしようとしなかった。

そして勿論私は、それら全てを無視し続ける彼女のために愛を叫び続けている。

今年もそんな感じで一年が過ぎゆくだろうと、私は『予知』を使わなくともそう確信していた。

そしてそんな確信は簡単に打ち碎かれる。

彼女は突然やってきた。

取るに足りない一般生徒その一であり、それに捕捉で転校生と付けるだけで済むはずの彼女。

『異常』など欠片も見当たらないはずの、『古賀いたみ』という名の彼女。

休み時間、私が名瀬ちゃんの隣の席で、本を読む名瀬ちゃんをじっと見つめている時に彼女は突然やってきた。

私と名瀬ちゃんしかいない教室の入り口。

普段からそこには数人の生徒がいて私達を見ているのだが、今日はそれとは違う状況だった。

本に没頭している名瀬ちゃんは気付いていないが、一人の女子生徒が教室の中に入って、まっすぐにこちらへ向かって歩いてくる。一体何の用なのだろうかと思う。

入口の方ではその女子生徒の友達らしい生徒が止めようと手を伸ばしているが……さて？

その女子生徒はそのまま教室を進んできて、名瀬ちゃんの席の前に立った。

そして名瀬ちゃんの机に手について、名瀬ちゃんも本に向けていた視線をその女子生徒へと移す。

そのまま女子生徒は名瀬ちゃんに言った。

「お願い。私を実験動物にして」
めいけんどうぶつ

その女子生徒が名瀬ちゃんを見て何を感じたのかは分からない。でもきつと、名瀬ちゃんが『異常』だという事はわかったのだろう。だが、それは名瀬ちゃんをいじめている生徒達全員が知っている事だ。その『異常』があるからこそいじめるのだから。

それに、名瀬ちゃんに対して実験動物にしてという発言ができる理由がわからない。

彼女の『異常』が『人体改造』にあることなんて、普通の生徒が知るはずがない。

だとすれば、この女子生徒の発言はまさしく直感というものなのだろう。

だから私はそんな彼女に声をかける事にした。

「実験動物になるって、意味がわかって言っているのか？」

「……えーっと天宮熾音君だね？」

「おや、もしかして私は有名かな？」

「学校一の変た……じゃなくて変人だって噂に聞きました」

名瀬ちゃんと一緒にいるから苛められるんだと思ってたら私にもそんな噂があつたのか。

まあ他人からの評価なんて欠片も気にしちやいないけどね。

「まあいいや、実験動物になるのを希望なんだろう？ 意味を理解して……いや、私としてはそんなことを言った理由が効きたいね。名瀬ちゃんもそう思わないか？」

「……俺はどっちでもいいけどよ」

「だそうだよ。だから理由を頼む」

名瀬ちゃんがいつもと少し調子がおかしいのは戸惑っているからだろう。

私が初めて話しかけた時と同じだ。

彼女に対して敵意を持たずに話しかけられる人間は本当に少ない。

それも、同年代の子供達には私以外いないと言っていいだろう。

そして今この女子生徒が、理由はどうあれ敵意を持たずに話しかけてくるということ。

それは名瀬ちゃんにとっていい事なんだと私は思う。

「じゃあ、言います」

「どうぞ」

「世界には普通の事しか起こらないって思ってた。そんな中に『異

常』な貴方達が現れて、そんな私の普通の世界を壊しちゃった。だから貴方達なら、私を『普通』じゃなくしてくれる気がしたの」

「『普通』よりも『異常』がお好みってやつだね。名瀬ちゃん、お誂え向きじゃないか？」

「そうだなー。そろそろ人間相手にしないと」

「へ？」

女子生徒の言葉を軽く受け流して名瀬ちゃんに声をかける。
どうやら名瀬ちゃんも賛成のようだ。

そしてその女子生徒は呆氣にとられた顔をしている。

「えーっと……？」

「とりあえず名前を覚えてくれないか？」

「あ、古賀、古賀いたみだよ！」

「じゃあ古賀ちゃんか。名瀬ちゃんもいい加減本を置いてあげなよ」

「はいはい。じゃあ古賀ちゃん、これからよろしく」

「あ……うん、よろしく！」

古賀ちゃん……彼女が名瀬ちゃんと友達になれるといいな。

やっぱり、名瀬ちゃんは人とかかわりが少なすぎるからね。

そうすれば自然に顔を出しても大丈夫になってくれるかもしれないし。

私は名瀬ちゃんの恋人で古賀ちゃんは名瀬ちゃんの親友。
うむ、最高の未来予想図だ。

「天宮君はさっきから何で笑ってるの？」

「あ、それは気にしねー方がいいぞ」

「へへ。そうなんだ」

とりあえず今日は家で名瀬ちゃんの研究の補助だな。
これから忙しくなるぞー。

第拾?記憶目(後書き)

あとがき

古賀ちゃん登場!

そしてあつさり流す主人公!

主人公は名瀬ちゃん至上主義だし、名瀬ちゃんは名瀬ちゃんであんまりしゃべらない。

しばらく経たないと古賀ちゃんもこのノリについていけないでしょう。

次回からは改造計画です。

第拾捌記憶目（前書き）

アイディアがわき出てくるけど、そろそろ他のも書かなきゃな。

第拾捌記憶目

「古賀ちゃん改造計画の発足です。被験者の古賀ちゃんは何か意見ある？」

「そーいのはわかんないんだけど……」

「おいおい熾音くん、『普通』な古賀ちゃんに言っても仕方ねえよ」

「……そうだね。まあ名瀬ちゃんに任せておけば安心だよ古賀ちゃん。名瀬ちゃんは本当にすごいんだ。君の『普通』だって『異常』にしてくれるよ」

「うん、お願いね！」

「それじゃーその台にでも座ってくれ」

名瀬ちゃんが指示を出し、古賀ちゃんを手術台の上に腰かけさせる。私はといえば、名瀬ちゃんの後ろで器材の準備中だ。

今日は電気信号の転換ではなく肉体の方の改造から行つらしい。体の『普通』な電気信号を『異常』に換える前に、素体^{ベース}となる肉体の方を改造するのだとか。

いくら知識を持っている私でも、名瀬ちゃんの独自の改造理論は『異常』なので専門外だ。

名瀬ちゃんの言うとおりにサポートに徹しよう。

「じゃあ熾音くん、これ」

「？　なんで目隠し？」

いやまあ予知を使えば名瀬ちゃんが言う前に器具を準備して渡せるし、眼なんか見えなくても器具の場所は記憶してるから名瀬ちゃんに渡すくらいはできるけど。

「古賀ちゃんの服を脱がせるからに決まってるだろーが」

「あ」

「……………」

思えば、制服着たままの古賀ちゃんを連れてここまで来たんだから、そのままの格好で改造手術ができるわけがない。

こんな失敗をするとは……不覚だ。

名瀬ちゃんはいつも通りの雰囲気でごつちを見ているが、古賀ちゃんは何やら涙目でごつち見てるしって私が悪いのか！？

「くっ！　違うぞ名瀬ちゃん！　私がみたいのは古賀ちゃんの裸よりも名瀬ちゃんの裸だ！　もしも古賀ちゃんの裸を見たとしても私の名瀬ちゃんへの愛は絶対に変わらない！」

「なんでもいいから早く目隠ししてよー！」

「熾音くん」

「わかりました！」

こんなところで嫌われるわけにはいかない。

それに、名瀬ちゃんの新しい『友達』兼『実験動物』になるであろう古賀ちゃんとも仲良くしたい。

大人しく目隠ししよう。

うん、どうせ直接的に作業するわけじゃないんだから。

私が大人しく目隠しをしたところで名瀬ちゃんが古賀ちゃんに声をかける。

「これでいいだろ。服を脱いで横になってくれ」

「う、うん。わかった」

何か言われたら嫌だし黙っておこう。

古賀ちゃんが服を脱ぐ衣擦れの音がして、名瀬ちゃんが手元の器具を力チャ力チャと動かす音がする。

どこに何があるかは記憶してあるので、目隠し状態の私の助手役の準備も完了だ。

これより古賀いたみの改造手術を開始する。

先に運動神経などを強化してしまえば、内臓器官の能力が足りずに不全を起こすだろう。

逆に内臓器官を先に強化すれば、パワーが有り余り過ぎるだろう。

そして神経を強化しなければ、体は追いついてこないだろう。

骨格を強化しなければ、過度の運動に耐えられないだろう。

ならば、それらの不全を防ぐためには一度の改造で全てを同時に強化していく必要がある。

一度に強化する割合は少なくなるだろうが、何度も繰り返せばいいだけだ。

そしてその何度も繰り返す間にも、名瀬ちゃんは自らの技術をアップデートして、更なる改造を古賀ちゃんに施すだろう。

私にできる事は本当に補助程度だ。

データバンクや補助、あとはありとあらゆる知識からの情報提供をする事。

直接的に名瀬ちゃんの改造をはかどらせてあげたり、古賀ちゃんを『異常』にしてあげたりすることはできない。

それだけ関わっていれば十分だと思ふべきなのか、もっと関わりたいと欲を出すべきなのか、正直わからないな。

「それで、手術は成功したんだよね？」

「まーな。まだまだ改造し足りないけど」

「時間はいくらでもあるよ、名瀬ちゃん」

「……そうだな」

改造手術が終わった後。

眠りにについている古賀ちゃんをベッドまで運んで（勿論私が）居間に来た私と名瀬ちゃん。

お茶を入れてから名瀬ちゃんに手術の結果を聞いた。

成功したようだけど物足りなさそうだ。

おそらく、試したい事とかやりたい事とか色々あるんだろう。

「私としては名瀬ちゃんに新しい友達ができそうな事が嬉しいけどね」

「どういう意味だよ」

「そのままだよ。女の子同士の友達だって欲しいだろう？」

「……………」

（ああ、シャイな名瀬ちゃんすごく可愛い）

あ、名瀬ちゃんのコップが空になってる。

お茶のお代わりを持ってきてあげよう。

第拾捌記憶目（後書き）

あとがき

良く考えたら、古賀ちゃんの両親（母親は知らんけど父親は）健在なんだよな。

……どうやって説得とかしたんだろう。

古賀ちゃんにとっては『普通』から『異常』にしてくれた名瀬ちゃんの方が大事だったってことなんだろうか。

まあ原作では何とも言っていないから全く分からんけどね。

第拾玖記憶目（前書き）

友達はかけがえないものなのです。

第拾玖記憶目

「何も変わった気がしないんだけど……」

改造手術の翌日。

皆分の朝食を作ってあげた後。

いただきますと言うところで古賀ちゃんがそんな事を言った。

「実感がわかないのか。名瀬ちゃん、まだ電気信号を変えたりしてないからかな？」

「そりゃーあれだな。実験してないからだろ。記憶とかには手を加えてないんだし」

「それなら……はい古賀ちゃん」

私は古賀ちゃんにあるものを手渡した。

後で皮をむいて皆で食べようと思っていた物だ。

「りんご?」

「それを片手で握ってみればわかると思うよ」

「……やってみるね」

たぶん、片手でつかんでちょっと力を入れれば簡単に……

バキヤツ！

「……割れちゃった」

「まあそれくらいは簡単だろーな」

啞然とする古賀ちゃんに、当然だという風に朝ごはんの焼き魚に箸を伸ばす名瀬ちゃん。

たぶん、啞然としているのはほとんど力を入れてないのに簡単に割れちゃったからだろう。

今は力が制御できないから危険かも知れないけど、まだまだ私の方が身体能力は高いし、すぐに名瀬ちゃんの手術で『異常』の電気信号を取りつけるから、その危険も取り払えるだろう。

「それじゃあ古賀ちゃんも『異常』を実感できたことだし、いただきます」

「あ……うん。いただきます」

「もういただいてるぜ」

名瀬ちゃん、言わなくてもわかってるよ。

空気を読まない名瀬ちゃん……それが基本だよな。ふふふ。

その後、コップを持って罫が入った事に古賀ちゃんが慌てたり、古賀ちゃんが箸を持って何度か折ってしまったりもしてたけど、概ね無事に三人での朝食が終了した。

「どうだい？ 料理の腕には自信があるんだけど」

「うん、美味しかったよ。今度お料理教えてくれる？」

「もちろん。古賀ちゃんが名瀬ちゃんとも仲良くしてくれるんならね。まあそこは心配してないけど」

「名瀬ちゃんは私のお願いを聞いてくれた人だもん。当然だよ」

古賀ちゃんはとてもいい人間のように話しやすいし。

良く喋る性格のようなのできつと名瀬ちゃんとも仲良くなれるだろう。

「というわけで名瀬ちゃん」

「なんだよ」

「古賀ちゃんの電気信号関連の改造手術が終わったら、今度みんなで遊びに行こうね」

「……理由を教えるよ」

「そんな理由が必要な事でもないと思うよ。皆で仲良くなりたいじゃないか」

私は笑顔で名瀬ちゃんに言う。

私は古賀ちゃんとも仲良くしたい。古賀ちゃんだってきつと私達と仲良くなりたいと思っているだろう。それが私たちが『異常』だからなのか、理由なく友達になりたいのかは古賀ちゃんしか知らないけど。

そして名瀬ちゃんだつてシャイだから言わないだけで仲良くしたい
と思つてくれているはずだ。

唐突に関わつてきた私や古賀ちゃんという他人を、なんだかんだで
受け入れてくれているのだから。

「そして名瀬ちゃんと私が恋人に。古賀ちゃんとは共通の親友とし
てさらに親密に……」

「古賀ちゃん」

「え、何？」

「熾音くんを思いつきり殴つていいぞ」

「駄目だよ！ さすがに怪我しちゃうと思うよ？」

「それくらいじゃ死なねえよ」

「わ……わかった」

「そうそう。しばらくすればまた夏祭りがあるからその時には皆で
浴衣でも買つて」

「えいつ！」

ドゴッ！ バキッ！

「おぶはっ!？」

「すごい音した……でも、私こんなに強くなっただ……」

私は古賀ちゃんに殴られて思い切り吹き飛んで机にめり込んだ。

人を殴っておいて全く平気な顔をするなんて……古賀ちゃんも『異常』になってきたじゃないか。

ふふふ……駄目だ。気絶しよう。

第拾玖記憶目（後書き）

あとがき

名瀬ちゃんを愛でる会

会長：『天宮熾音（作者）』

副会長：『古賀いたみ』

実際に本編中で作ってしまいそうで怖い。

そして執筆中。

『古賀いたみ』と『弓塚さつき』が被るなあとなんとも思った件について。

作者「怪力キャラ……いや、なんでもない」

なんか陽気な性格のさっちゃんみたいな気がしてしょうがない。
声優さんは同じ人がいいなあ。しまじろうの人だっけ？

とあるをパロって作った名台詞。

名瀬「地獄の底まで付いてきてくれるか？」

天宮「もちろん。地獄だろうがどこだろうが、名瀬ちゃんのいる場所が私の居場所だ」

古賀「名瀬ちゃんも天宮君も私を忘れないでよねー！ 私もどこだ
ってついてくよ！」

もしも名瀬ちゃんがインなんとかさんみたいな台詞を言ったら確実にこうなります。

感想をどうぞ。

第貳拾記憶目（前書き）

改造編終了。次回からは中学三年生の日常編。

第貳拾記憶目

「にははゝすごいすごい！ 体が軽いよー！」

「……人間変われば変わるもんだなあ」

「俺は熾音くんが一番変わったと思うけどな。初めて会った時と比べて」

「そんなことないさ。私はいつだって名瀬ちゃんラブだよ」

「ほらほら見て二人とも」

古賀ちゃんが声をかけてみたのでそちらを見る。

ちょうど古賀ちゃんが16ポンドのボーリングの玉を両手で押しつぶしたところだった。

……私だって頑張ればできるさ。やらなかっただけで。

「とりあえず実験は終了だね。力加減もできるみたいだし」

「そーだな。あとはアップデートを繰り返せばいいか」

「もっと反応してよ」

頬を膨らませて言う古賀ちゃん。

さっきまでぴょんぴょん跳びはねて喜んでただろっに。感情の起伏が激しいね。興奮してるからだろっけど。

今は電気信号の変換のための改造も済んで、古賀ちゃんがそれを確かめるための実験をしていた所だ。
結果は良好。古賀ちゃんも自分の『異常』をコントロールできているようだ。

今も、天井に両手を使ってぶら下がっている。

最終的にはただでぶら下がるようになるって名瀬ちゃんが言っていたけど、どんな原理なんだろうね。さすがの私にも知識がない。あとで改造予定のデータを見せてもらわないと。

……あ、ついでに確認しておくか。

「古賀ちゃん」

「何？ 天宮くん！」

「名瀬ちゃん可愛いよね〜！」

「可愛い名瀬ちゃん最高だよ〜！」

よし。

「熾音くん、古賀ちゃんに何言っただ？」

「いや、特に何も言ってないよ？」

ちよつと名瀬ちゃんがデータまとめる間にお話しただけだよ。
私の溢れる愛を語ってアルバムを見せたただけだよ。
特にお祭りの時の奴を。

「まあいいや。熾音くん、飯の準備してくれ」

「はいはい。今から準備するね。古賀ちゃんも手伝ってくれるかい？」

「やるやる」

それじゃあ今日は中華料理メインで行きましょうか。

恋は情熱。情熱は中華ですよ。本場中国の知識をもって最高級の料理を再現して見せよう。

名瀬ちゃんに美味しい食べ物を用意するのが私の役目なのだ。

古賀ちゃんという助手もいるからどんどん作るぞー！

「あれ、古賀ちゃん。熾音くんの手伝いはどうしたんだ？」

「天宮君は一人で燃えあがってるよ。お料理の腕は完全に負けちゃったな。名瀬ちゃんは何してるの？ ……DVD？」

「熾音くんが持ってきてくれたんだけど、結構面白いなーこれ」

「仮面ライダー？ 私も見たい事あるよ」

私が厨房で料理を終えて出てくると、二人が仲良くテレビを見ていた。

仮面ライダー。昔からある特撮番組で有名だったし、改造人間が出てくるからという理由で全シリーズ揃えてみたんだが、お気に召したようでなによりだ。

古賀ちゃんがやたらと目を輝かせてるのが気になるけど。

「準備できたぞ。古賀ちゃん、お皿用意してくれるかい？」

「はい！」

ソファに名瀬ちゃんと並んで座っていた古賀ちゃんが、ひとつ飛びでこちらまでやってくる。

運動神経やらなにやらアップしたおかげで、本当に軽快な動きをするようになったな。

『普通』から『異常』に変わった高揚感みたいなものもあるんだろうけど。

「はい古賀ちゃん、こぼさないようにね」

「大丈夫だよくん。私に任しといてよ！」

料理をよそった皿を一度に大量に渡しても、両手どころか片足にまで皿を乗せて運んでいく。

さすがのバランス感覚。これからどんどんすごくなるんだろうな。

ところで、名瀬ちゃんと古賀ちゃんの女の子二人と私という男一人しかいないのに大量の料理を作ったのには理由がある。

それは古賀ちゃんの燃費の悪さが原因だ。

元々が『普通』であるためか、全力で『異常性』を発揮できる時間が非常に短いのだ。

まあ、巨大なパワーがある分だけ使うエネルギーも巨大だと言う事だ。

そのエネルギーを得るための薬も名瀬ちゃんが作ってあるのだが、普段からそんな物を利用する必要はない。食事を大量にとる事で代替が可能なのだ。

そのおかげで太る事もないだろうから古賀ちゃんには結構好評であった。

『異常』が制限されるはずなのに、寛容で助かったというところだ。

ちなみに名瀬ちゃんは、私が美味しい食事をとることの良さを教えてあげたおかげか、一般の女の子並には食事をとる。

ただ、未だに食事の時に顔を隠したままなのは悩みどころだ。

もう顔は見せてくれたのだから家の中でくらは袋を取ってほしい。

古賀ちゃんだってきつと大絶賛するだろうにな……

とりあえず、今は皆で食事をとれることの素晴らしさを喜ぼう。

「名瀬ちゃん、準備も終わったからこっちにおいでよ！」

第貳拾記憶目（後書き）

あとがき

古賀ちゃん洗脳される、の巻。
という事はありません。

「13組の13人」についてはしっかり考えてますので大丈夫です。

一話一話が短い事については、原作に入っていないという事でお見逃しを……

オリジナルの話を作らなきゃいけないとなると、こういった短いものを連続で作った方がやりやすいんです。

というか、早いところ原作、『箱庭学園』まで進めたいんです。でも100行以上は書くようにしてますので……

実はこの主人公、誰とからませても面白い結果が望めそうだから困る。

風紀委員相手にも一悶着起こしそうだし。

97代生徒会長さんの存在を「記憶」しておけるし。
その『異常』があるからには、データバンクとして学園長に利用されるだろうし、その過程で不知火とも知り合いになりそう。

一番の山場は真黒お兄さんでしょうけどね。

どちらの愛が大きいのか的な意味で。

第貳拾壹記憶目（前書き）

唐突なシリアス。

シリアスの中に、答えはある。

第貳拾壹記憶目

名瀬ちゃんは『異常』だ。

そんなことはわかりきったことである。

だから私は彼女が『異常』であることも含めてすべてを受け止めるのだ。

「私で実験……か？ もうそれは済んだんじゃないかな？」

「古賀ちゃんの事があったから後回しにしてたんだよ」

そういえば最近はそのつばかりだったしね。調整とか何やらで。まだまだアップデートの余地があるとかで自室にこもりっぱなしだったし。

「それで、何の実験だい？」

「熾音くんの『異常』の根源は脳だろ？ そのデータを取る」

「別に根源ってわけでもないと思うけどね」

「拒否とかはしねーんだな。頭を開くって言うてんのに」

「名瀬ちゃんがする事なら、私は何でも肯定するさ」

だから私の体が研究の役に立つのなら、いくらでも弄ってくれて構わない。

「それじゃあもう一つの方もやってくれるよな」

「なにかな？」

「記憶の制御薬の実験台だ」

名瀬ちゃんはそう言っただけで液体の入った注射器を差し出してくる。

……なるほど。

「つまり、『完全記憶能力』がある私が『記憶制御薬』を飲んだらどうなるかというデータかい？」

「わかってるじゃねえか。ついでに、俺が使った時と同じ薬だ。どれくらい効果があるのか、どうすればもっとヤバい効果の薬を作れるかのデータも取れる」

「ああ、一石何鳥にもなるわけだ」

「その通り。ほら、早くそれを射ってくれよ」

「ああ、もちろんだ」

名瀬ちゃんが促してきたのですぐに腕へと注射器を指して薬を注入する。

……袋から見える名瀬ちゃんの目が初めて話しかけた時のような眼に変わっている。驚き混じりの冷たい目。

思えばおかしい話だ。色々なものを切り捨てた名瀬ちゃんが私を近くに置く理由。

名瀬ちゃんが望むのはデータバンクで、それ以上ではなかった。だ

が、私はそれでは満足できない。

古賀ちゃんは自らを犠牲にして『実験動物』と『親友』の立場を得る権利を得た。

ならば私も犠牲を払わなければならない。

名瀬ちゃんの近くに身を置くのなら、名瀬ちゃんが単純な利益の面でも必要とする立場も得なければならない。そうでなければ、名瀬ちゃんは自分で自分を許さないだろう。

激しい頭痛が私を襲うが、意識を失うほどではない。

薬の効果は……ちよつと記憶が霞むといったところか。虫食いの本を読んでいる気分だ。

だが、おそらくはそのうち思い出すだろう。存在が希薄になったただけで完全には消えていないのだから。

「……私の記憶はほとんど消えていないね。改良が必要なようだよ。名瀬ちゃん」

「あ、ああ……そうかよ」

いつも通りの笑顔で話しかけると、名瀬ちゃんが目に困惑を浮かべている。

名瀬ちゃんがこういった目に見える動揺を見せてくれるのは初めてだ。

「名瀬ちゃんはどう思ってるのかは知らないけどね」

「なんだよいきなり」

「いいから聞いてよ。私はどんなことがあっても名瀬ちゃんを忘れないし、名瀬ちゃんを好きだってことも忘れない。それは忘れない

で記憶してられる『異常』とは関係ない。私が『異常』を失っても、名瀬ちゃんがそこにいてくれるなら、たとえ地獄へだってついていく。それが今の私なんだ」

「だからなんだってんだよ」

「薬なんかで忘れるような甘い覚悟を持ったつもりはないってことだよ。名瀬ちゃんは私をいくら利用してくれてもいい。私を不幸に突き落としてしまってもいい。たとえそれでも、私が名瀬ちゃんを好きだってことは変わらないのさ」

「……………」

私の記憶のうちにある百万言の愛の言葉を費やしても、私の名瀬ちゃんへの思いは表現することはできないだろう。でもそれでも、私が私である限り、変わることなく確かにある思いだ。

だから決して忘れない。どんな事が起ころうとも。

「だから、これからもよろしく」

「…………この手はなんだよ？」

「握手ってやつだよ名瀬ちゃん。今更だけどね」

「さんざん抱きついてきやがったりしてる癖にな」

「これからも抱きつくよ。目に見える愛だって大事だろう？」

「知らねえよ」

そう言つて名瀬ちゃんが手を差し出してくる。

わかつてるさ。シャイな名瀬ちゃんだからね。ここまで本心をさらけ出さないと、手を差し出すくらいのもしてくれないのさ。

「……ま、よろしくな」

「うん。よろしく」

私はその手を優しく握り返した。

第貳拾壹記憶目（後書き）

あとがき

まさかのシリアス。

ここでいきなりシリアスにしたのには理由があるのです。

彼……主人公の天宮熾音の立ち位置を完全なものにしないといけなかったのともうひとつ。

私の観点からすれば、こうまでしないと名瀬ちゃんも完全には心を開かないだろうし、納得できないからだと言う事です。

正直、このタイミングでこのアイディアが出てくるとは思わなかった……

いくら『記憶』を消しても、『異常』を消したわけではないので『記憶』が蘇ったという設定です。

もしも原作のめだかのように『ノーマライズリキッド』で『異常』まで消した場合、一体どうなるのか。

『異常』が消えても、『異常』によって強化された脳と体はそのままなので、超巨大なスポンジみたいなもんですかね。吸収力がヤバイ的な意味で。記憶能力は『普通』にまで下がるだろうけど。

フアハハハアアア！ さあ、次回からは素晴らしき友情or愛情空間のお時間だ！

ときめいて死ね！

ところで、無性に速さにこだわる奴を出しなくなった。

くそ……スクライドで兄貴を見過ぎたせいだ。他の作品でやるかな。この作品でやるとしたら、原作を追い越してオリジナルルートに入ったら出すんでしょうね。

まあ、追い越す前にペースを落とすんでしょうけど。

第貳拾貳記憶目（前書き）

日常編 1・お祭り

第貳拾貳記憶目

記憶制御薬の注射を行ってからしばらく経った。

その間は頭の中の知識に霧がかかったようになっていたのだが、その霧もだんだんと消えてきた頃。

私達は三人で夏祭りに来ていた。

一年前の約束を果たしにきたわけである。

今度は古賀ちゃんも入れて三人なので、きつともっと楽しいだろう。

古賀ちゃんは淡い桃色の浴衣を着用し、名瀬ちゃんは去年に着たものとよく似た浴衣を着用している。

そして名瀬ちゃんは去年のようにお面をかぶっている。

古賀ちゃんはその名瀬ちゃんを見た時、大きな声でこう言った。

「可愛いよ名瀬ちゃん！ 似合ってるよ！」

「ありがとよ」

名瀬ちゃんも古賀ちゃんに褒められてまんざらでもないようだ。

もちろん、私は既に何度も言っただけ抱きついたさ。

「ところで天宮君はなんでそんな恰好してるの？」

「似合うと言われたので買ったのだが……変か？」

「うっん、似合ってるけど（お祭りではどうなんだろう……）」

呉服屋の店員に勧められた、鮮やかなの銀の刺繍が施された藍色の陣羽織。

私はさらにその下には浴衣ではなく着物を着ている。

去年は地味だったかもしれないと思って、名瀬ちゃんに気にいってもらおうと思ったんだが。

古賀ちゃんも似合っていると言っているし、大丈夫だろう。

「どう、名瀬ちゃん。似合ってるかな？」

「おゝ、似合ってるぞ（昨日古賀ちゃんと見た時代劇で見たな）」

三人で並んで、お好み焼きや焼き鳥や焼そばを買い込んでいく。

主に食べるのは古賀ちゃんだ。名瀬ちゃんも、食べた事ないものを興味を持ってたまに食べる。

古賀ちゃんはこのいう夏祭りには何回も来た事があるんだとか。それも当然か。

古賀ちゃんは私達に会う前は普通の日常を送っていたのだから。

「遊ぶんなら金魚すくいとか射的とか。後は美味しいものならたこ焼きとかりんご飴とか。とにかくいろんなお店があるよ」

「古賀ちゃん、ちなみにおすすめは？」

「りんご飴？ 名瀬ちゃんも食べてくれるよね？」

「珍しそうな顔で食べるに違いない」

お祭りの楽しみ方なら、私よりも古賀ちゃんの方が詳しくそうだな。そこは任せるとしよう。

名瀬ちゃんにも楽しんでもらわないといけないしな。

「それじゃあ行こう名瀬ちゃん。古賀ちゃんがおすすめの屋台に案内してくれるってさ」

「ふっふっふ。お祭りならこの私にお任せだよ名瀬ちゃん！」

「あ、ああ。頼むぜ」

いい感じに古賀ちゃんもハイテンションだ。

名瀬ちゃんもまだ古賀ちゃんの初対面の時との変わりっぷりに慣れていないので引いてるけど、そのうち慣れるだろう。

私はもちろん、古賀ちゃんだって名瀬ちゃんの事が大好きなんだから。

……一番名瀬ちゃんを愛しているのは私だ。そこは誰にも譲らない。射的にリベンジでもしてみるかな。

古賀ちゃんが百発百中で景品ゲットしているのを見ていたらやりたくなってきた。

よし。去年の汚名を返上してやる。

「やっぱ射撃にはセンスがなかった。名瀬ちゃん、その部分だけ改造できないか？ 名瀬ちゃんにかっこいい所を見せたかったのだが、さすがにこのままだと……」

「初めから期待してねえよ」

「そんな……」

「いちいち落ち込むなよ。熾音くんは他の事でがんばりゃいいだろーが」

名瀬ちゃんが慰めてくれるなんて珍しい。
それだけでパワーが溢れてくるよ。

「で、古賀ちゃん」

「何？」

「それ全部景品？」

「にやはは〜。ついついやりすぎちゃった」

大きな袋を片手で持っている古賀ちゃん。
祭りを回って景品を取りまくってきたらしい。
その店にとっては不幸なことだろう。古賀ちゃんが笑顔だから私としてはどうでもいいが。

「花火ももうすぐ打ち上げ始めるみたいだよ」

「そうか。じゃあかき氷でも買って河原にでも行くか」

「去年のどこか？」

「そう！ 思い出の場所さ！」

「私もいるんだから二人の世界に入らないですよ！」

「いや、入ったつもりないけどな」

「とにかく行こうよ二人とも」

私は二人の手をひいて、まずかき氷の屋台へと向かって歩き始めた。

私達は無事にかき氷を買って河原へ到着した。

そして三人並んで土手に座る。名瀬ちゃんを古賀ちゃんと私で挟む形だ。

かき氷を食べながら話していると、花火の打ち上げが始まった。

「綺麗だね」

「ああ、綺麗だな」

「……そうだな」

古賀ちゃんが感想を言い、それに私と名瀬ちゃんが続く。

夜空に色とりどりの花火が咲き誇る様は、素直に綺麗と評価するだけはあるだろう。

それも、好きな人と親友が一緒なら当然だ。

と、そこで古賀ちゃんが口を開いた。

「ねえ。名瀬ちゃん、天宮君。私達、これからもずっと一緒だよね？」

「もちろん。私達はこれからもずっと一緒だ。強い絆で結ばれてる友達だ。そうだろ？ 名瀬ちゃん」

「……ああ。俺の友達は、古賀ちゃんと熾音くんだけだからな」

「うん！ 私達親友だもんね！」

「私の事は恋人って言うてくれよ、名瀬ちゃん？」

「……さあな」

やっぱり、夏祭りに来て正解だった。

お互いに知り合って、もっと親しくなれた気がする。名瀬ちゃんが少し感情を表に現してくれた気がする。

これからこんな幸せな関係を続けていられたますように。たまたま見えた流れ星には、そんな事を願うでしょう。

第貳拾貳記憶目（後書き）

あとがき

お祭り編。

一個にまとめてみました。

主人公の格好が変なのは仕様です。気合いを入れると変な方向に行く子なんです。

主人公の普段の格好もなんとか特殊性を持たせたいんですけどね……

古賀ちゃんのエロい格好しかり。

名瀬ちゃんの全身タイツしかり。

主人公は……どうしようかな。いつその事、裸コートとか、お侍さん姿とか、全身真っ黒コートとか、上半身がYシャツ一枚ではだけてるとか。

ご意見をどうかお願いします。

ところで、いい加減バトル入ろうって意見はありますか？

原作がバトルものになってるから違和感を持たれている方がいるかも……どうですか？

第貳拾參記憶目（前書き）

次回はいよいよ箱庭へ

第貳拾參記憶目

「箱庭学園？ 天宮君はわかる？」

「当然だよ古賀ちゃん、そういう知識なら私はごまんと持つてるさ。箱庭学園は創立百年を誇る高校でね。全国から大量の生徒を集めた、いわゆるマンモス校というやつだよ。優れた人間や特別な人間……そして、『異常』な人間が集まるところさ」

「へー。それで名瀬ちゃん、それがどうかしたの？」

「俺達はそこへ行くぞ」

おやおや、唐突に箱庭学園の名前を出したかと思えばいきなりだなあ名瀬ちゃんは。

まあそれでも、私と古賀ちゃんの答えは決まり切っているだろうけどね。

「私は名瀬ちゃんが行きたいところにならどこへでも行くな」

「当然！ 私もだよー！」

私達がそう言うと、名瀬ちゃんは軽く首を頷かせる。

古賀ちゃんとも知り合ってもう半年以上だからね。

もう最近では私達が当然することには軽い返事しか返さなくなった。信頼されてるのがわかるけど、名瀬ちゃんの声が聞けないのは辛いな。

「それで、名瀬ちゃん？」

「なんだ？」

「箱庭学園に入る理由は、他の『異常』を持つ者が目的だろう？」

「まあな」

「うう……名瀬ちゃんが他の男に興味持ったらどうしよう」

「大丈夫だよ天宮君！ 私も応援してるから！」

「ありがとう古賀ちゃん！」

すこしシヨック状態だったけど古賀ちゃんのおかげで立ち直った。
さすが我が親友だ。そのまま応援してくれ。

「あとは『異常』じゃなくて、『特別』^{スペシャル}の方も見ときたいんだよ」

「それって『普通』に毛が生えたくらいじゃないの？」

「違うよ古賀ちゃん、『特別』っていうのは大抵が努力をしてそこ
まで上がったものなんだ。それ故に、その過程で身に付く技術も多い。
箱庭学園には全国の『特別』な生徒が集まるんだ。その体育
科の生徒のデータでも集めれば、古賀ちゃんのアップデートにもつ
ながるはずだよ」

「熾音くんの言うとおりだな。古賀ちゃんの『異常』ももさらに上
がる見込みがあるぜ」

「本当？ わく、すごい楽しみ！」

そう言つて古賀ちゃんが鼻歌を歌い始める。

まあ、入学してすぐにデータを集め終わるわけがないから、相当先の事になるんだろうけど。

古賀ちゃんが楽しそうだから言わないでおう。

「私の役目は名瀬ちゃんのデータバンクで恋人だからね。あつちにいったら名瀬ちゃんのために箱庭学園の研究資料を全部記憶できるように努めるよ」

「……………」

「おや、否定しないってことは恋人認定かい？」

「誰もそんな事言つてねえよ」

「それは残念だ」

まあ、愛を囁いても簡単に首を縦に振つてくれないのが名瀬ちゃんだし、それも魅力だ。

箱庭学園に行ったら私も頑張らなきゃいけないな。名瀬ちゃんから褒めてもらうためにも。

箱庭学園はその創立100年にも昇る歴史と、『特別』や『異常』の数多く集まる場所であるがために、かなりのデータが保存されている。実際に生徒になってしまえば、そこにある蔵書を記憶しつくる事も、一般生徒には公開されていないデータの記憶も可能のはずだ。

その資料はきつと名瀬ちゃんの役に立つ。

私のやるべきことはまずそれだろう。

「まあ、これでこの居心地の悪い中学校ともお別れだね。思えば色々と思い出があった……」

「そうなの？ 天宮君」

「そりゃそうさ。名瀬ちゃんと会ったのもここでだし、古賀ちゃんともここで会えただろう？ 私は名瀬ちゃんという運命の女コトメに会う事が出来たし、古賀ちゃんのおかげで中学三年になってからは皆で色々と遊べただろう？」

「ま、俺も熾音くんや古賀ちゃんと会えたのは大きかったしな」

「にはは。どういたしまして」

「古賀ちゃんだって『普通』から『異常』へ変わることができたのはこの学校に来たからだろ？」

「そうだね」

「そういう意味では、本当に色々な思い出があるってことさ」

私にとっては、欠けていた人間性ってやつを二人が与えてくれたようなものだしね。

今思えば、それまでの私は本当につまらない生活を送っていたと思う。

既に遠い昔の事だが。

「あ、それと一つ言っておく事があるんだけどな」

「何？」

「なんだい？」

「俺はお前らと違うクラスになるぞ」

……なんだと！？

「それどーいことなの名瀬ちゃん！」

「どういことだ名瀬ちゃん！ 理由があるんだろう！？」

「いや、落ち着けよ二人とも」

名瀬ちゃんが抑えるようにと言い、しかたなく声を出すのをやめる。そつだ。名瀬ちゃんが何の意味もなくそんな決断をするわけないよな。

「俺は箱庭学園の11組……特別体育科に入るんだよ。データ集めのためにな」

「……それはまあ予想してたが、私達がそこに入れない理由は？」

「わかってんだろ熾音くん？ さすがに古賀ちゃんや熾音くんの身体能力がヤバ過ぎて目立ちまくりだってのがよ」

「うう……確かに『普通』な奴らなんかとは比べ物にならないけど」

「ま、一年の間だけだから我慢してくれよ」

「……仕方ない、か」

私達は名瀬ちゃんの指示には従うからな。

おそらく私と古賀ちゃんは箱庭学園の13組に入るのだろう。

あそこは13組生にはかなりの自由が与えられて、登校する義務すらも免除されていたはずだ（私はデータ集めもやらなきゃいけないから登校するつもりがだが）。名瀬ちゃんも1年生の間は11組にいるだろうが、2年生になったら確実に時間がたくさんとれる13組へ移るだろう。それまでの我慢だ。

名瀬ちゃんの運動神経は一般人レベルでしかないが、そこは名瀬ちゃんの事だ。上手に交渉して11組に入れるように交渉したのだろうな。

だいたい、名瀬ちゃんも私や古賀ちゃんが一緒にいたら目立ってしまっただけでデータ集めもできないだろう。

……袋かぶったままでも十分目立つと思うけど。

「古賀ちゃん、いいこと思いついたんだけど……ヒソヒソ」

「え？ ……うんうん。高校デビューってやつだね」

それはちょっと違うかもしれないけど。

おおむね間違っではないかな。

「「名瀬ちゃん」」

「なんだよ二人揃って」

「「やっぱり袋を被ったままじゃ、いくら私達がいなくなっても目

立つと思っただ〜」「

「……言いたいことはわかるけどよ」

「もうちょつといいものに代えようね。せめて口を出すようにしなきゃ」

「私も天宮君も一緒に恰好を代えるから！」

「おい、離せよ」

古賀ちゃんと私とで腕を掴んで奥の部屋へとひっぱて行く。

いつか名瀬ちゃんがオーブンになる様に古賀ちゃんと話し合って、千差万別な服を買ってため込んでおいたのさ。

さすがに顔を見る隙を与えてくれなかったが、もつと顔を見せるよう、せめて口を出すようにきつく言ってから着替えさせ……
そして決定。

「名瀬ちゃん、口を出すようになったからってなんで全身タイツなの？」

「悪いのかよ」

「そんなことないよ！ 似合ってるよ名瀬ちゃん！」

全身黒タイツの上から制服を着て、腕を組んだ名瀬ちゃん。
顔を包帯でぐるぐる巻きにして隠して、何故かナイフで止めている。
腕をノーブラの胸の下で組んでなにやら不満そうな顔だ。

「おら、俺が代えたんだからお前らも代えろよ」

「わかってるよ〜ん」

古賀ちゃんはニット帽にホットパンツ、ついでに上半身もやたらと露出した格好に着替えて出てきた。

私も下はジーパンに上は裸の上から青のロングコートという格好に着替える。

これは名瀬ちゃんにもっと露出してもらおうかなと思ってした格好だ。

私達のような名瀬ちゃんに親しい者が、名瀬ちゃんと正反対に露出を高めにしてしまえば、名瀬ちゃんだってシャイな性格が少しは治せるだろう。

でも、今の格好の名瀬ちゃんを見る限りじゃまだまだ道は遠いな。箱庭学園は生徒の自主性を重んじる学校だ。この恰好のままで過していることもできるだろうから、少しずつでも名瀬ちゃんの露出を増やしていこう。

第貳拾參記憶目（後書き）

あとがき

そろそろ原作キャラが登場してきます。

箱庭学園に入学しますからね。ハジケますよ。

風紀委員ではあっても委員長ではない雲仙冥利とか、クラスメイトですからね。

前回のあとがきに書いた、熾音の服装。それ次第によって風紀委員に嫌われますからね。

13組に入って2年に移ればフラスコ計画からお呼びがかかるぞ……

早くそこまで行きたいなあ……真黒さんが退学するから1年の途中で

で名瀬ちゃんが入るんだよな……複雑だ。

原作の最後、球磨川が改心して副会長になりそうで怖い。

……さすがに無いよな？

えくすとらな記憶その壱 番外編（前書き）

箱庭学園一年生編の前のおまけ

えくすとらな記憶その壱 番外編

みなさんこんにちは。

今日は不思議な事が起こったので報告したいと思います。

目を覚ますと僕はあたり一面が黒いラクガキで埋め尽くされた部屋の中にいました。

全く持つてわけがわかりません。

僕は確か昨日の夜、『殺すしたら死ぬか確かめなくなったから』人間を殺してから家を出たはずなのに。

その後の記憶はすっかりないけど、どうしてここにいるんだろう。

周りを見る限り、黒いラクガキがある事を除けば普通の病室のようだ。

僕は怪我をしたんだろうか。

そう考えていると、横から人の声がしたのでそちらを振り返ってみます。

「はじめまして。遠野 志貴くん。回復おめでとう」

そこには眼鏡をかけた白衣の医者に、笑顔の看護師の女の人がいた。その二人は親しげに笑顔を浮かべて僕に話しかけてくる。

二人とも体に黒いラクガキがある。

でもどうしてだろう。

僕はそのラクガキが異常に気になった。

ああ、どうしてこんなにも簡単に殺せそうに見えるのだろう。

ああ、なんでこんなにも簡単に死んでしまいそうなか弱くはかない生き物なんだろう。

頭を砕く必要も、首を絞める必要も、胸を刺す必要も、腹を抉る必要もない。

人間なんて、ただその線をなぞっただけで簡単に死んでしまうだろう生き物だ。

なんだこれ？

こんなの、殺さないでいる方がずっと難しいよ。

「君は、道を歩いている時に自動車の交通事故に巻き込まれたんだ。その時に胸にガラスの破片が突き刺さってね。下手をすれば助からないような傷を負ったんだよ」

へえ。そうなのか。

それはよかったね。

一応礼を言っておくよ。

「ありがとうございます」

「いや、気にしないでいいよ。医者それが仕事だからね」

なら礼はいらなかったかな。

そんなことよりも僕の目の前からいなくなってくれと助かるのにな。

さっきからラクガキが見ていると、簡単に死んでしまいそうで、殺したくて殺したくてたまらなくなるんだ。

「一つずつでいいから答えてくれるかい？」

「かまわないですよ」

それで僕の目の前から消えてくれるんならね。

「君の名前は？」

「僕の名前は」

……何だっけ？

問診の結果、僕は記憶喪失だと言う事で落ち着いたのだとか。
たしかに、自分の名前が思い出せない僕は記憶喪失だろう。

無性に人を殺したくて殺してくてしかたないのは元からの僕の性質
なんだろうけど。

名前は遠野 志貴。 9歳の子供なんだそうだ。

最近は病室で過ごす事になって退屈だけど、新しい暇つぶしを見つ
けた。
気付いたら、僕は人だけじゃなくて物だって殺せるようになってい
た。

だから、部屋の中にあるいろいろなものをかたっぱしから殺していく
ことで暇を潰している。

たまに来る看護師の人を見ても殺さずに済むのはそのおかげかもし
れない。

本能としては人を殺したくて仕方ないけど、僕はそこまで人を殺し
たいわけじゃない。

だから部屋の中を見て僕を怖がって避ける人がいるのはとてもいい
ことだ。

ラクガキのことは誰にも言っていない。

今のところ人を殺すための最高の手段であるそれを人に教える利点
はないし、教えても仕方ないとは思っているからだ。

ただそのラクガキを見ていると無性に殺してたくて殺したくて仕方が無くなるので、僕はたまに病院を抜け出してラクガキが見えないところに行くのです。

そこはとある丘でした。

周りにあまり木々は無く、背の低い草が生えているだけの丘。

それでもそこに横たわって空を見ていれば、ラクガキが見える事もない。

「ふう。到着」

子供の体でその場所に来るまでには多少疲れてしまったが、ここでは横たわって休憩するだけだから大丈夫だろう。

僕の体は人を簡単に殺せるけど、同時に僕も簡単に死ぬ体らしい。疲れてしまうのも無理はない。

黒いラクガキが見えない空。

ここにいれば、僕は何も殺さなくて済む。

殺したくて殺したくて仕方ないという程ではなく、我慢できるレベルまでその衝動を抑え込む事が出来る。

それに、綺麗な空を見ながら涼しい風に吹かれるのはどこか気分がいい。

「君、そんな所に寝転がっていると危ないわよ」

不意にそんな声が聞こえてきた。

簡単に死んでしまう人間の声だ。ここなら殺そうという気持ちが強くないと思ったのにな。

周りに誰もいないから、我慢できなくなったら大変だ。

「僕に何か用ですか？」

「用があるわけじゃないわよ。君がただでさえちっこいのに寝転がってるから、危つく蹴り飛ばしちゃうところだったんだから」

寝転がったままそちらを見上げる。

TシャツにGパンというラフな格好の赤い髪の女の人がいた。

……気のせいかな、ラクガキが少ないような気がする。

「まあいつか。君、私の話相手になってくれない？ 何かの縁って事で。私は蒼崎青子っていうんだけど、君の名前は？」

そう言っただけの女は手を差し伸べてくる。

ラクガキが薄いのは簡単に死なないってことだろう。

なら、少しくらいは話相手になっても大丈夫だろう。僕がこの人を殺してしまおうという気持ちがい慢でなくならなければ。

その女の人の話は面白かった。

僕は記憶が無いのでとくに話す事もないし、覚えている事といったら人を殺すことばかりだ。

だからその女の人が話してくれる事は娯楽となった。

僕は病院では恐れられるようになっていたから、僕を恐れない人は新鮮だった。

「ああ、もうこんな時間。悪いわね、志貴。私ちよつと用事があるから、お話はここまでにしましょう。」

女の人は立ち去っていく。

またあの簡単に殺せる人がたくさんいる場所に戻らなうと思つと少し気分が陰つた。

「それじゃ、また明日ここで待っているからね。君も大人しく病室へ帰つて、医者と言いつけを守るんだよ。」

「……わかつた」

女の人はそれが当たり前のように立ち去つていった。

また明日、話ができるようだ。

それがとても嬉しく感じられて、初めて『ヒトゴロシ』ではなく『ニンゲン』らしい感情を手に入れた気分だった。

その博識と、僕が殺せない人間であることから、僕はその女の人を『先生』と呼ぶことにした。

そんな先生と会ってからしばらくが経ち、友達ができたと思った僕は、ラクガキの事を教えることにした。たくさんのかんことを言っている先生ならなんとか出来ると思ったのかもしない。

「ほら、見てよ先生。これのおかげで僕は簡単に何でも殺せるんだ」病院から持ち出した果物ナイフで、草原に生えている樹を根元からラクガキをなぞってあっさりと殺した。

「これは僕にしかできないんだよ。ラクガキが見えて、それをなぞると何でも殺す事が出来るんだ。だから簡単に殺せてしまう人間を見ていると」

「志貴……!!」

ぱん、と頬を叩かれた。

「……先生？」

「……君は今、とても軽率な事をしたわ」

先生はとても真面目な顔で僕を見つめている。

軽率、そうかもしれない。でも、抑えることなんか難しいよ。

どうしたことだろう。意識はしっかりしているのに、視界がぼやけてくる。

「何であろうと、こんなに簡単に死んでしまうんじゃ、殺さずにいる方が大変だよ。先生」

「……いけない事なのはわかってるんでしょ？ それは、志貴が悪いわじゃないわ」

どうなんだろう。

僕は、こんなにも人を殺したくなってしまうのに、悪くないなんてことありえるのかな？

僕が考えていると、先生が僕を抱きしめてくれた。

「志貴、あなたは悪くない。でも、今あなたをしかっておかないと、きっと取り返しのつかない事になる。だから私は謝らないわ。だから志貴、あなたは私を嫌ってもいいわ」

いいえ先生。

僕はあなたを嫌いにはなりません。

いとも簡単に散ってしまう人間の命。自分の事だけを考えて生きるのもつらいのに、僕の話相手になってくれた先生を嫌うはずがありません。

僕から答えを聞いて、先生はラクガキについて詳しく聞いてきた。僕がラクガキについて詳しく話すと、先生はいつそう強く抱き締める腕に力を込めた。

「…志貴、君が見ているモノは、本来見えてはいけないモノなの。モノにはね、壊れやすい部分があるのよ。私達はいつか壊れるから、完全じゃない。君はそう言ったモノの末路。言い換えればモノの未来が見えているのよ。」

「……未来？ だから簡単に死んでしまいそうに見えるの？」

「そうよ。貴方の眼にはモノの壊れる『死』が視えている。……今はそれ以上の事は知る必要はないわ」

「よく、わからないな。僕には」

「ええ、まだわかつちゃダメ。ただ、一つ知っていて欲しいのは、決してその線をいたずらに切っちゃダメよ。君はモノの『命』を軽くしすぎてしまう。」

ただでさえ軽い命が、僕によってもっと簡単に失われるものになってしまうのか。

「…わかった、先生が言うならしないよ。それに、僕もなんだか胸が痛いんだ。」

「…よかった。志貴、今の気持ちを絶対に忘れないで。」

そうして、先生は僕から離れた。

「……どうやら私がここに来た理由が分かったわ。志貴、明日はとっておきのプレゼントを用意してあげるわ。」

次の日。

先生に会って七日目の野原で、先生は大きなトランクを片手にさげやってきた。

「はい。とりあえずこれをかければラクガキは見えなくなるわよ。」

先生はメガネを取り出して、強引に僕にかけさせた。

途端。

僕の視界の中から全てのラクガキが消え去った。

「……すごい。ラクガキが全く見えなくなった」

「あつたりまえよ。わざわざ姉貴の所の魔眼殺しを奪ってまで作った蒼崎青子渾身の逸品なんだから。粗末に扱ったらたじたじやおかないからね」

「……うん。大事にする。まるで魔法みたいだ」

これがあれば、僕はいたずらに殺し尽くすことを、人を殺したくなる衝動を、抑え込む事が出来るかもしれない。

「それも当然。だって私魔法使いだもん」

先生はニンマリと笑って、地面にトランクを置いた。

「でもね、その線は消えたわけじゃないの。ただ見えなくしただけ。こればかりはどうしようもないわ。君はなんとかその目と折り合いをつけて生活しなきゃいけないの」

「…嫌だ。こんな目はいらない。また線が見えたら先生との約束を破って僕はきつと……」

「ああ、約束つて二度としないっていうやつか。あんなの簡単に破っちゃってもいいわよ」

「…でも、あれはやってはいけない事なんですよ？」

「ええ、いけない事よ。でもそれは君の力なの。その力を君がどんな風に使っても、君以外の誰も君を責める事はできないわ。君は個人が保有する能力の中でも、ひどく特別な能力を保有してしまったけど、その力が君に有るという事は、未来の君になにかしら必要な意味があると思うの。神様は何の意味もなく力を分けない。君の未

来にその力が必要な時が来るから、君に直死の魔眼があるとも言える。だから、志貴の全てを否定する訳にはいかないわ。」

先生はしゃがんで僕に目をあわせてそう言った。

このような眼が僕にあっても、ただ人を殺すのに役立つだけじゃないか。

最高の武器を手に入れて嬉しい？ そうかもしれないけど違う。僕が簡単に人を殺してしまえるようになっただけだ

「でも、忘れないで。君はとってもまっすぐな心をしている。その心がある限り、君の目は決して間違った結果を生まないでしょう。聖人になんて言わないわ。いけないっていう事を素直に受け止められて、ごめんなさいと言える君なら、十年後には素敵な子になっているわ」

先生はそう言って、トランクを持って立ち上がった。

「でも、よっぽどの事がない限り、その目を使っちゃダメだからね。特別な力は特別な力と呼ぶわ。志貴自身が、よく考えてその目を使いなさい。その力自身は決して悪いものじゃない。結果をいいものにするか悪いものにするかは君自身なんだから。あくまで志貴、君の判断次第よ」

先生は何も言わないが、ここでお別れなのだと僕は気付いていた。

「無理だよ先生。僕は人殺しにしかねない。こんな力を手に入れたんなら尚更だよ。こんなメガネがあっても、僕の本質が変わるわけないじゃないか……！」

「志貴、心にもない事は言わない事。自分自身も騙せない嘘は、聞いている方を不快にさせるわ」

先生は眉を八の字に曲げて、ボクの額をピンと指で弾いた。

「わかつてるはずよ。あなたはたしかに『殺す事』に異常になのかもしれない。でも、貴方の本質は違うはずよ。だから、そんなつまらない事を言つて、折角掴んだ自分を手放してはいけないわ」

そう言つて先生はくるりと背を向ける。

「それじゃあお別れね。志貴、人生つていうのは落とし穴だらけなのよ。君は人よりそれをなんとかできる力があるんだからもっとシヤンとしなさい」

先生は行つてしまふ。

とても寂しく感じるけれど、先生は僕の友達だ。だからシヤンとして見送ろう。

「うん。さよなら、先生」

「よし、上出来よ志貴。その意気でいつまでも元気でね。いい？ピンチの時はまず落ち着いて、その後によくものを考えるコト。大丈夫、君なら一人でもちゃんとやっていけるわ」

先生は嬉しそうに笑う。

ざあ、と風が吹いた。

草むらが一斉に揺らいだ後先生の姿はもうなかった。

もうあの人には会えないんだろう、とは思っ。

だが、それでも問題ないだろう。

僕は殺したがりではあるが、楔となる物を打ち込んでもらった気がする。

だから大丈夫だ。

僕の退院はそれからすぐだった。

退院したあと、僕は遠野という肉親のもとではなく、親戚の家に預けられることになった。

けど、大丈夫。

僕は、ちゃんとやっていける。

新しい生活を、新しい家族と過ごす。

決して、全てを殺してなかった事になどしない。

衝動を我慢してでも、まともな日常をすごすのだ。

僕の九歳の不思議な夏はこうしておわりました。

僕はこの時、本当の意味で変わったのだと思う。

続くと思っているのか？

えくすとらな記憶その壱 番外編（後書き）

あとがき

短編集として執筆した者の一つをご紹介します。

誰が中に入ったのかは言わずもがなですね。

『めだかボックス』の作品の中におまけとして出す時点で限られますもんね。

インストールしたのは子供時代のあの人ですけど。

あの人なら本能で『眼』の使い道を理解しそうですからこうなりました。

宗像（志貴）の狂気レベルが低いのは子供だからです。あとは先生補正です。

続きが読みたい方は感想の方に意見をどうぞ。

第貳拾肆記憶目（前書き）

オリ展開ですが許して。

第貳拾肆記憶目

四月。春真つ盛り。

私達三人は無事に箱庭学園へ入学を果たしていた。

正直言つて名瀬ちゃんと同じクラスじゃないなら学校に来たくないし、十三組である以上は登校する義務もない。

古賀ちゃんもたぶんそこらへんをぶらぶらしてるんだろう。『暇だから学校見物して回ってるよ』と言っていたな。私もついていけばよかった。

学校の見取り図は記憶したから迷うことはないだろうが、やっぱり実際に見ておく事も必要だろう。

それに、親友と一緒に過ごす時間の方がずっと楽しいだろう。

それでも私が学校に来ているのは、この学校にある知識の全てを吸収しつくすためだ。

それが、私の大好きな名瀬ちゃんのためになるのである。

そんなわけで、私は箱庭学園の図書室へ来ていた。

表現するならば、そこは魔窟だった。ありとあらゆる本が詰まった大きな本棚が無数に立ち並ぶ魔窟。

とりあえず図書室を一通り見て回る。

本棚にある本のタイトルには見た事のないものが相当数ある。

本当ならここ以外にあるはずの書庫の方も見てみたかったのだが、そちらは見れないそう。

十三組として強行突破してやってもいいんだが、正直面倒だ。

生徒会や風紀委員会は情報以上に厄介な組織らしい。面倒を起こすのは得策ではないだろう。

他の新入生同士の会話をさりげなく聞いていると、そう言った情報も入ってくるものだ。

『生徒会長選挙はつい最近の出来事のはずなのに、誰が生徒会長なのか誰も覚えていない事』

『一年十三組の中でも、飛び級で入ってきた小さい奴が風紀委員会に入って暴れ始めた事』

こういった情報がどんどん入ってくるのだ。

さて、私達が所属する十三組には登校する義務はないが、別に登校する分には何の問題もない。

だから普通に委員会にも入れるわけだ。

私の記憶する限り、今年の生徒会長は『日之影空洞』という名前の十三組生だった気がするが……曖昧なのはなんでだろうな。こんなことは今まで一度もなかったのに……。

とにかく、十三組の新入生でも風紀委員として学校に来ている者がいるのだ。

ならば私も、その委員会から得られる利益を得るために委員会に入ろうと思う。

勿論、図書委員会である。

どうせ、図書室にずっといなければならぬのだ。

授業も免除されているのだから、それこそ入り浸っていていいのだし。

ついでに閉鎖されている書庫の方も正当な理由で入り放題だ。十三組という事で文句を言ってくる奴もいないしで万々歳である。

「まあ、名瀬ちゃんに会えないのは本当に本当につらいけど、一応充実はしているよ。好きなだけ色々な本を読めるからね」

「天宮君、今度遊びに行くね」

「古賀ちゃんならいつだって歓迎するよ」

「……つてか熾音くん、もう委員会を掌握したのかよ」

家から箱庭学園へと登校する途中、私が委員会の事を話すと、名瀬ちゃんが若干驚いた風に聞いてくる。

私は名瀬ちゃんのパートナーだからね。それくらい掌握できるくらいの能力はないとさ。

だからとりあえず私の愛の告白に答えてくれると嬉しいんだけどもなあ。

「当然だね。元々が数人の『普通』^{ノーマル}だけで構成されてたんだ。私にだつて人を従えるだけの能力はあるんだよ？」

「どこがだよ」

「物知りなところとか？ 内容はただだけど、どの本がどこにあるかを全部記憶したら委員長に推薦されたよ。結局、私くらいしかそんな事できる奴はいないわけだからね」

「天宮君すごい！」

「熾音くん、やりすぎだぜ？ あんまり目立たないでくれって」

名瀬ちゃん、心配する必要は全くないよ。

図書委員なんてもの、ほとんど無きに等しいんだからさ。

あれだけの書籍があると、それを管理できる人間も限られてくるからね。

面倒な仕事だし、別にクラスごとに何人が決まってやらなきゃならないわけでも無し。

委員というか、自主的な集まりに近いからいつもは教員が管理していたようだったし。

まあ、今は私がいるからという理由で教員は追い出したけど。

「まあまあ名瀬ちゃん、図書室だって私って言う存在がいて万々歳だと思うよ？」

「ま、そうなった方が熾音くんもやりやすいのはわかるけどな。あんまりやり過ぎないようにしろよ」

「わかってるって」

名瀬ちゃんが直接関わらない限りは『無理』はしないよ。

私の『日常』で過ごし切るのみさ。

「ところで、名瀬ちゃんの方はどうなんだい？」

「何がだ？」

「過ごしやすい環境なのかい？ 私達がいなくて孤立してるんだろ

うとは思っけど」

「ま、熾音くんの予想通り。目立っちまってしかたないぜ」

……まあ、包帯で顔を隠していれば目立つだろうけど。

それ以上に、名瀬ちゃんの身体能力が並以下なのが目立つんだろうなあ……

最初からわかってはいたけど、やっぱり名瀬ちゃんを一人にさせるべきじゃなかったかもしれない。

「名瀬ちゃん、大丈夫？　なんか変なことされてないよね？」

「そんな心配することねーよ古賀ちゃん。こっちはすぐ傍からデーターを取れて満足してるくらいだぜ」

「……ま、名瀬ちゃんがそう言うなら大丈夫だよな」

「熾音くん、何か言ったか？」

「いいや、何も」

私の心配は大抵が杞憂に終わるからね。

今回もそうだったから安心したところだよ。

「ま、とりあえず今日は書庫で生物学関連を優先して漁る事にするよ。この学校なら在校生が残した研究書くらいあってもおかしくないからね」

「ま、その辺は熾音くに任せるぜ。俺は十一組の観察で忙しいからな」

「しつかり任されたよ名瀬ちゃん。そっちもがんばってね。古賀ちゃん……まあ、心配いらないね」

「地味に酷いよ!？」

だつて古賀ちゃんはもう俺より身体能力は上じゃないか。
今日もがんばって学校見物に励んでくれ。運動部あたり見て回って技術を取り込むといい。
ついでに名瀬ちゃんの護衛あたりしてくれたらもつといい。

「それじゃあまたあとで」

「ん。俺の研究に使えるそうな本があつたら持つてこいよー」

「わかつてるって」

校門あたりで名瀬ちゃん古賀ちゃんと別れてまっすぐ図書室へ。
今日はいいい加減、番号A 1の棚の本を全て記憶しとかないとな。
時間があるからってのんびりし過ぎた。

「しっかし今日はいやに気分が落ち着かないな」

なんか嫌な予感がすると言っかなんというか。

ガチャリと図書室へと続くドアを開け、今日記憶する予定の本を持つていつもどおりにカウンターの内側の椅子に座る。
いつもどおりに本を開いて読み始めるが……やはり落ち着かない。

私の予知は元々コントロールする類のものではなく、自然とわかる類の予知だ。

私はそんな物耐えられないのでコントロールできるようにしたが、それでも本能の部分では自然とわかる物が残っている。

だから『予知』程ではないが、『何かがある』というものをかなり直感的に感じ取る感覚を私は持っている。

明確な『予知』の方は自分からやろうと思わなければならないが……今、こつも嫌な予感がするのはたいていこの後『何か嫌な事が起こる』前触れだ。

「いったいが起こるって……」

ぶつくさ言いながら席から立ち上がり、私は『予知』を発動する。

そして、『だいたい』を理解した。

なんでそんな事が起こるかは知らないが、一応『避けて』おこつ。

ドゴシヤッ！

一呼吸で前に飛び出すと同時に、自分が今までいたところにあつた椅子が潰れた。

「へえ。一年の癖にはやるじゃねーか」

「……あゝ。日之影生徒会長？ 私に何か用かな？」

「見ただけでわかんのか。しかも名前も覚えてるのかよ。面白いじゃねーかこの野郎！」

見上げるほどの巨体が、潰れた椅子の前でこちらを見ながら立っていた。

現在、この学園のほとんどの生徒が覚えていないだろう生徒会長。日之影空洞がそこにいた。

次回 日之影空洞現る、の巻。

第貳拾肆記憶目（後書き）

あとがき（Q：今回は少し描写が崩壊した気がする。A：眠かったんデス）

しゅじんこうは としょいいんに じょぶちえんじした！

「裸の上にそのまま改造制服を着てる図書委員って……」

「黙れえ！ 貴様にはわからないのかあ！」

オリジナル展開が来ましたよ。

魔窟図書館。箱庭学園ならきつとあり得るさ。

全国から生徒を集めているのなら、全国から知識（本）を集めているという事だ。（たぶん）

原作で出たらどうするかって？ 知ったこっちゃねえや。

『図書館の地下には過去全てのデータが眠っている……』とかも、フラスコ計画の実験場が地下にある時点で無くなったしな。

イメージ的には「『ネギま』の図書館島」「『リリなの』の無限書庫」「『東方Project』の紅魔館地下の大図書館」な感じですよ。

オリジナルが許されるかわからないので、感想をお待ちしております。

第貳拾伍記憶目（前書き）

日之影さんは特に争うまでもなく去ります。

第貳拾伍記憶目

とりあえず、私はぺしゃんこになった椅子の前に立っている……いや、今カウンターに座った。

カウンターに座っている日之影生徒会長に話しかけることにした。

「えっと、日之影生徒会長ですよね？ なんの用でしょう？ そんな盛大に椅子なんか破壊しちゃって」

「わかんねーか？ 少しくらいは自覚があるんじゃないのか？」

「いやいや、特にはありませんよ？」

図書委員会とか元から無いも同然だからもらっちゃったただけだし。というか貴方の『異常』の方がよほど気になるんだけどね。

いくらなんでも攻撃の瞬間まで何も悟らせないとか、私に直感と予知が無かったら直撃だったぞ？

椅子を見るに、かなり強い攻撃だったみたいだし。

「一年生の奴が一つの委員会の委員長やってるのはおかしいんだよ。まあ十三組だから少しは大目に見てやってもだ。他の奴らを追い出すってのは駄目だろうが」

「別に、彼らを追い出したつもりとかないんだけども」

「まあ結果的にそうなってるってことだから来てみたわけだ。三年

生の……誰かさんが置き手紙までしてつたからな」

……まあ、大抵そういうのは一年生が偉い立場にいて気に食わない奴ですよ。

でも私が委員会をほぼ独占状態なのは確かだから仕方ないのか。事実ではあるわけだし。

それにしても……

「いきなり攻撃するのはひどくないですか？」

「大抵はあれで気絶させて案件解決してお終いだからな。つっても荒事鎮圧の時だが。お前の場合は十三組だから一応みたいなの？」

「十三組の中にも頭脳労働専門なのはいるんですから気を付けてくださいよ」

「お前は違うみたいだけどな？　そうだろう？　現図書委員長の天宮熾音？」

「名前知ってるんなら『お前』はやめてください」

でも名前を気安く呼ばれるのもアレだな。

まあ、反抗するとヤバそうな人だから我慢しとこう。生徒会長だし。名瀬ちゃんに文句言われちゃうかもしれないし。

「一年の十三組なら風紀委員にも来てるのがいるでしょ？」

「ありやあまだ委員長にはなってねえからな。少々過激派みてーだけれど大丈夫だろ」

過激派の時点で危ない気もするんだが。

過激な風紀委員っていうと、変な格好してたりすると来るんだろうな。変な格好であるとはいえ名瀬ちゃんは一組で大人しくしてるし、その風紀委員も古賀ちゃんには勝てるわけないからほっとこう。

「つーかお前の『異常』はなんなんだ？ 俺は本気で学校の生徒から『認識できない』ようにしてたはずなんだけどな。俺の姿を知ってるってことは選挙の時見たんだろ？ そこんどこ教えてもらおうじゃねーか」

「それはまああれですよ。『記憶しておくのは』少々得意でして」

「はっは。なるほどな」

笑い声を上げて日之影生徒会長が頷き、カウンターから腰を上げる。

「ま、十三組だしな。そういう『異常』があってもおかしくねえだろ。今回はまともな奴だからほっとくけど、俺の事を覚えてられるんならやり過ぎないように注意しろよ？ 一年生の間はな」

「了解しました」

「じゃあな」

そう一声言つと、あの『異常』な生徒会長は消え去っていた。

……消え去るってのはたぶん『認識できないように』ってやつのせいだろうな。

それなら誰も生徒会長の事を覚えてないのも頷ける。

姿を見た事もないってやつも頷ける。

おそらくは姿を消して動いて、姿を現して問題解決したあとに記憶

を認識できなくさせるってとこだろう。

私が記憶できているのも『異常』があるからだろう。
姿を消されて見えなくなるのは、意識できなくされては『記憶』してもしょうがないからだろう。

「まさに台風のような人だった……生徒会長つてのはそういうものなのか？」

というかあの人、何しに来たんだろう。
自分が覚えられてるって事を察知して、どという奴が見に来たんじやないだろうな。

本当に置き手紙があったんなら、何もしてないで帰っちゃったのはいいんだろうか。それともただの素行確認だったのか。

「わかんないなあ……」

何が目的であつたとしても、特に問題はないんだろうけど……

「とりあえず、潰れた椅子を交換してくるかな」

新しい椅子を補充して本の続きを読む事にしよう。
今日読むべき本はまだまだあるんだから。

そんなこんなで放課後。

古賀ちゃんがやってきた。

「天宮く〜ん。遊びに来たよ〜」

「おお古賀ちゃん。名瀬ちゃんは？」

「運動部を見て回るって言ってた」

それは体験入学とかじゃなくて本当にただ見てるだけなんだろうな……
うん。腕を組んで壁に寄りかかりながらただ見てるだけなんだろう。名瀬ちゃん自身にはスポーツやろつか言っ気持ちは欠片もないかな。

「すごい本の量だね〜」

「書庫に行けばもっとたくさんの本があるぞ」

「へ〜」

古賀ちゃんはウロウロと図書室を歩きまわる。

私はそれを後ろで見ながら片手で本を読み進めていく。

「古賀ちゃんは何か読みたい本があるのか？ あるのなら探しておくけど」

「ううん？ 特にはないよ？ たまには本でも読もうかな〜って思っただけだから」

「そうか、それならいいけど」

「……ところで私思っただけど」

なんだ？ 古賀ちゃんにしては珍しい。

一体何を思いついたって言うんだ？

「名瀬ちゃんって普通の文学作品読むのかな？」

「……いや、見たことはないけど読むと思うぞ？ 漫画だって普通に読むことあるし、古賀ちゃん前に仮面ライダーを名瀬ちゃんと一緒に全部見たって言わなかったっけ？」

「あ、そっか。そっだよー」

実を言うと、恋愛物の文学作品なんか読ませて反応を見てみたいと言う願望はあるが。

古賀ちゃんに言ったら絶対にからかわれる気がするのでやめておこう。

案外、面白そうだからやってみようとなるかもしれないが。

「それじゃあそろそろ名瀬ちゃんを迎えにいかない？ 今日柔道部の方にいるって」

「わかった。今日のノルマはこれで終わりだから3分ほど待ってくれ」

私は名瀬ちゃんのところに行くために、急いで本のページをめくり始めた。

次回のヒント、『柔道部』もつ言わない。

第貳拾伍記憶目（後書き）

あとがき

日之影さんの能力はあれです。

ドラえものの『石ころボーシ』みたいなもんだと思ってます。

つまり。

『見る』『意識する／記憶する』『石ころボーシ／日之影パワ
ー』『認識できない』『意識できない／記憶できない』

認識できないけど、眼には見えているわけです。

だから、カメラ越しには残るという設定です。

まあ……原作でカメラにも映らないってなったら覆すけどね。

リアルタイムのビデオカメラなどでは、それを録っている人間が認識できないから、記録に残ったものでしか確認できませんが。

だから主人公の場合、『記憶はしておけるけど、認識できなくなる』
で、見えなくなるわけです。

ただ、『知識』として『記憶』してはおけるわけです。『こんな人
物がいる』という事を。

それが主人公の『異常』である故に。

やつつけだろうつて？ いいでしょう別に。あの人たち『異常』な
んだから！

あ、今うまい事言った。

ところで、『読書ノ本に関する人気サイトやブログ、話題のニュースサイトのランキング』とかいうサイトで、2010年8月8日のランキングに4位で載ってました。

これってすごい事なんでしょうか。まったくわかりません。

第貳拾陸記憶目（前書き）

古賀ちゃんも天宮君よりの思考になってます。ハツチャケぶりとか。

第貳拾陸記憶目

「さて古賀ちゃん、部活を見ている名瀬ちゃんを迎えに行くのはいいけど一つ問題があります。なんだと思う？」

「え？ そんなのあるの？」

「そりゃあるさ。名瀬ちゃんは『今は』十一組なんだ。明らかに十三組な私達が話しかけたら困るでしょ？」

「あ、そうだね。目立つちゃうから観察しずらくなっちゃうもんね」

「ということで変装します」

「なんか楽しそーだね！」

まあ普通科の制服着るだけなんだけどね。

というわけで簡単に着替えてみたんだけど……なんだろう。

なんか涼しくて風通しのいい格好に慣れてるから暑苦しいな。

まあ、名瀬ちゃんに迷惑をかける可能性を考慮すれば、これくらいなんでもないさ。

「古賀ちゃん、普通の制服も似合ってるよ」

「ありがとう！ 天宮君も似合ってるよ！」

「名瀬ちゃんも普通の格好してればさぞやモテるんだろうけどな…」

…」

「確かにそうだね」

「まあ、モテたとしても私がいる限り無駄だろうがな！」

「やっぱり。なんとなく言うと思ったよ」

古賀ちゃんも私の考える事がわかってきたな。

まあいいや。着替えも終わったから名瀬ちゃんのところに行こう。

柔道場に着くと、入口で中を見てる名瀬ちゃんを発見した。

「名瀬ちゃん！」

「熾音さんと古賀ちゃんか。……どうしたんだその恰好」

「天宮君が変装だって」

「へ」

名瀬ちゃんに声をかけ、柔道場の中を覗き込む。

柔道部の連中が、新部員も合わせて稽古をしている。

周りで見ているのはまだ柔道部に入ると決めてない体験入部か見学か。

「で、どうなの？ 名瀬ちゃん」

「何がだよ」

「ほら、この部活の中で一際『特別』に優れている人間はいたのか
いつて聞いているのさ」

「いたぞ。あそこの高貴くんとか」

「……『くん』？ それも名前呼び？」

「天宮君落ち着いて！ ただの観察対象の名前だから！ 天宮君の
心配してるようなことはないから！」

「ハッ！」

古賀ちゃんに肩を揺すられて正気に戻る。

おっと危ない。

いやいや大丈夫だよ古賀ちゃん。いくらなんでも私はそんな事で怒
ったりはしないから。

いや本当に。

「俺と同じクラスで、フルネームは阿久根高貴。柔道の経験はまだ
短いけど、ガンガン実力を身につけてきてるんだと」

「へえ、名瀬ちゃんと同じクラスか。すごい羨ましい」

「うん、そうだね天宮君、でも他にないの？」

「いや、特には無いよ。彼も『特別^{スペシャル}』なんだからこれくらいは当然
じゃないかな？」

まだ技術もそこまでじゃないだろうしね。

ほら、今も新入部員の一年生の中でも一際目立ってはいるけどそれだけだ。

「私は情報が確かならあつちの新しい部長さんの方が注目だね」

「なんで？」

「反則が大得意だそうだよ。まあ、純粋な身体能力が見たい名瀬ちゃんならあつちの阿久根とかいうの方が観察対象にはなるだろうけどね」

「そんなもんまで調べてくれたのか？」

「私は名瀬ちゃんのデータバンクだからね。色々調べていればわかるさ。まあ、言わなくても名瀬ちゃんならわかってたかもしれないけどね」

全国大会に行ったことのある生徒とか、そうでなくても有名な選手なら、情報くらい家のパソコンで十分集まる。

阿久根高貴についてもそうだ。

中学時代はかなりの不良で恐れられていたとあった。

何があつて変わったのかまでは情報が伝わってこなかったが、中学二年の半ばからはすでに不良ではなくなっていたとか。

……まあ、不良のままだったらとくに排除してるんだけどね。危険な人と同じクラスにさせとくわけにもいかんし。

でも、不良のままだったらこの学校に来てるわけないか。

阿久根高貴は元から凶暴で、なにより『強い』不良として知られて

いたようだし、それをスポーツに向ければ『特別』スペシャルにもなれるだろう。

だが、ただ力があるだけならば全く問題ない。古賀ちゃんはそう言ったものを全て無視して圧倒できるだろう。現在は際立った技術が無いから特に。

そういった意味では、奴が私達の敵になったとしても全く問題ない。無論、敵というのは『名瀬ちゃんを害する者』という意味だ。その場合は私と古賀ちゃんが全力で叩き潰す。

敵にするという意味では、身体能力よりも技術で優れた者やフェイントや騙しが得意な者の方が古賀ちゃんにとってはよほど厄介だ。たとえば、今も柔道場の中でふざけた笑顔をしながら部員を叩きつけた部長の鍋島猫美とか。

柔道界での反則王など言われているが、しっかりと実力もあるからこそ有名なのだ。

そういった意味では古賀ちゃんも辛いだろう。

持久戦に持ち込まれるとエネルギー切れになるし。

……何より古賀ちゃん、結構騙されやすいしね。

そういう相手なら私がやれば問題ないのだ。先が読めれば『騙し』は関係なくなるのだから。

ただ、私以上に身体能力が高く、『予知』の弱点を見破る相手なら……私でもきついのもかもしれない。

そうはならないように……もっと強くなりたいものだ。

ま、敵対することなんて考えるだけ無駄なんだろうけど。

「ところで名瀬ちゃん」

「なんだよ」

「私達は名瀬ちゃんを迎えに来たんだよ。だから、一緒に帰ろう?」

「そうそう名瀬ちゃん! この間新しくできた喫茶店見つけたから一緒に行くよ!」

……古賀ちゃん、それ、この前に私が見つけた店じゃなからうな。できればデートとかに……いや、名瀬ちゃんが首を縦に振るわけないな。諦めよう。

「そうだな。十分見たし、今日は帰ってもいいか」。熾音くんもその喫茶店に来るんだろ?」

「え? そりゃあね。もちろんいくさ。甘いものは好きな方だよ。それ以上に名瀬ちゃんと喫茶店に行くなんて機会を見逃すはずないだろう?」

「ふん。ま、そうだよな」

「(さりげなく喫茶店に名瀬ちゃんを誘ってあげたんだから天宮君も感謝してよね!)」

なんか色々と聞こえた気がするけど気にしない。

とりあえず、そのお店とやらによって帰るとしよう。

第貳拾陸記憶目（後書き）

あとがき

第一記憶目から読み返して見ると、主人公の変貌に驚く。
私自身驚いた。作者なのに。

書いた後で考えたら、名瀬ちゃん自身相当目立つんだから主人公達が着替える必要は欠片もないよね。

鍋島さんは二年の初期では部長になったばかり……それはいい。
阿久根くん、君は現在新入生だから……どうなるんだ。

そして微かなデレ。

第貳拾？記憶目（前書き）

さっさと進めたかった。
他意は無い。

第貳拾？記憶目

さて、入学してからもう随分時間が経った。

もう図書室の本も棚を6つ分は読み終えたところか。

まだまだ書庫の本もあるだろうから時間がかかりそうだ。

本を読んで、放課後に古賀ちゃんが来て、一緒に名瀬ちゃんを迎えに行く。

今では日課となっていることだ。

それが今の私にとって一番幸せに感じられる事だ。

そして今日、図書室にとある人間が訪ねてきた。

「えーと、本の貸し出しですかね？」

「いいや、僕がここに来たのは図書室に用があるんじゃないからね」

「それじゃあ何の用があつて？」

「君だよ、君。結構前は情報屋みたいな事をしてたんだよね？」

そりゃあ名瀬ちゃんに会うより前の事だよ。

名瀬ちゃんにあってからは行動理念が一新されたからやめちゃったけどさ。

「とりあえず、興味はないけど話は聞きますよ。黒神真黒さん」

「いやー助かるよ天宮君」

うさんくさい笑顔の男だ。

だが、特徴がわかりやすいので誰であるのかはすぐにわかった。

二年十三組の黒神真黒。

一時期調べていたからだいたい知ってる。

その後も結構有名だったから情報は入っている。

やはりというかなんというか、この人も『異常』だったのでこの学園に入学していたのだ。

そりゃあこの人が中学に入っていくらも経たないうちに会社が成長を始めたら怪しい物である。

「ちょっと探し人をして十三組の生徒を探っていたら君の名前を見つけてね。何か知ってるんじゃないかと思ったんだよ」

「そりゃあ色々知ってますけど、別に誰にだって教えるわけじゃないですよ」

私が快くというよりむしろ自分から教えてあげる相手は……

名瀬ちゃんとか、名瀬ちゃんとか、名瀬ちゃんとか、古賀ちゃんとか。

というかキチンと信用を置いてる人間と好きな人間はあの二人だけだし。

「というかあんたなら私に聞かなくても情報なんていくらでも集まるでしょう」

「あはは。確かにそうだ。でも僕の『異常』は情報を集める事が得意ではあってもそれに特化しているわけじゃあない。でも、君は違うだろう?」

「そうかもしれませんねえ」

「……なんだか機嫌が悪そうだね」

「そうですねえ。悪いですよ。すく」

何故かあんたを見てると無性にいらいらしてくるのだよ。
なんでだろうか。直感的な何かが……

「先輩だから一応聞いて上げますけど、探し入って誰ですか?」

「妹さ」

「そうですか。そういえばいましたね、もう一人行方不明の人が」

「なぜ知ってるかは聞かないよ。色々と知ってるらしいからね」

「そりゃあどうも」

色々知ると大変だけでもね。

それが名瀬ちゃんの利となるのなら私は躊躇わないよ。

やっぱり好きな子の役に立ちたいのは当たり前なわけだし。

この学園が長年やってる事とか。学校に入ると余計に情報が入ってくるようになるし。

名瀬ちゃんはすごく興味持ちそうだから絶対に協力するけどね。

「それでどうかな？ 髪の色とか眼とかそのあたり僕にそっくりでとっても可愛い妹なんだけど」

「言い方がキモい……まあ気にはしないが。私はあんたの希望には答えられそうにないな」

「そうなのかい？ それは残念だ。僕らの事を知っていて情報をいたるところから集めている君なら知っていると思っただけだね」
「そう言つて黒神真黒はすぐに図書室を出ていこうとする。
私は思わず声をかけた。

「随分と諦めるのが早いな」

「元から君に多くの期待をしているわけじゃあないからね。それに『異常』な記憶力をもっているなら、今までに調べた事くらいは自分の脳に入っているんだろう？」

「なんだ。知ってたのか」

「図書室の本と書庫の本。本に割り振られた全部のナンバーを全て暗記して、誰に貸し出したのかまで暗記する。そんな離れ業をして図書委員の業務をパソコン一台も使用せずにこなしていれば噂は広がるよ。あとは僕の『分析』した結果かな」

「そうか。ならばさっさと帰るんだな」

目元に髪の色ね。

……色々と思ひ当たることはあるが、確定したわけじゃあない。
写真でも見せてきそうだったら……いや、何が起ころうと変わるま

い。

初めから私は奴が嫌いだった。それでいいだろう。

本来、私自身もそこまで情報を『集める』事が得意なわけではないし。

あちらが集めた情報を『分析』することなら、こちらは『記憶』することなのだから。

そこもわかっていたのなら、思わせぶりな事を言っただけなのかもしれないし。

そもそもだ。

私の環境と黒神真黒の環境を比べれば天と地ほどに差があるのだ。こちらは金を調達できるとはいえ個人、あちらは大金持ちでいくらでも人を使える。場所だって器材だって良い物を用意できるのだ。そう考えれば、こちらに期待をしないのも当然だろう。

そしていつも通り家に帰る。

……はずだったのだが。

「名瀬ちゃん遅いね」

「……………」

「あの、大丈夫だよ天宮君。絶対なんともないから」

「ああ古賀ちゃん、何にも心配いらないから」

「そ、そう……ならいいんだよ」

校門の外に古賀ちゃんと一緒に立ち、腕組みをして名瀬ちゃんを待つ。

いつまでたつても来ない。とつくに時間は過ぎてるのに……

古賀ちゃんに心配されたのはさっきからずっと指でトントンと腕を叩いてるからだ。

いわゆる貧乏ゆすりというヤツである。

時間を過ぎてさらに30分後。

「よお。遅くなつて悪かったな」

「遅いよ名瀬ちゃん一体何があつたのかと」

「名瀬ちゃん！ 本当に心配したんだよ！ 一体何があつたの！？ 頼むから教えてくれ！ もう不安で不安で！」

古賀ちゃんの話す声に割り込んで名瀬ちゃんに近寄る。
不安で不安で仕方ない。

昼間にした会話が頭に引つ搔かっているから余計にだ。

「話すから落ち着けて。古賀ちゃんもそれでいいだろ？」

「うん。名瀬ちゃんが話してくれるなら……」

「ほら、熾音くんも落ち着けよ。俺を信用してるんだろ？」

「もちろん信じてるさ！ ……そうだね、とりあえず家に帰ろうか。」

「ご飯の支度もあるし」

それから私たちはまっすぐに家に帰ることにした。
帰り道、名瀬ちゃんの雰囲気微妙に楽しそうだったのは気のせいだろうか。

「二人とも、『フラスコ計画』と『十三組の十三人』サーティーン・パーティーって知ってるか？」

「……私は知らないけど、天宮君は？」

名瀬ちゃんが言い、古賀ちゃんが答えられなくて私の方を向く。
十三組で参加していない奴の中にも数人は知っている者がいるが、大抵は二年以上の奴だし、古賀ちゃんはそういう話や噂を聞こうとはしないしな。

「もちろん……知ってるさ。『フラスコ計画』のために選抜されたメンバーが『十三組の十三人』だろう？　そして『フラスコ計画』は人為的に天才を作り出す計画だ。例とするなら……古賀ちゃんみたいなさ」

「わ、私？」

「まあ、確かに古賀ちゃんみたいな『異常』を人為的に作ることはあるかもな」

「私みたいに『普通』を『異常』に……ふん」

まあ、古賀ちゃんは例にするには特殊過ぎるけどな。

本来、元からある肉体を変化させて強くしていくのはかなりのストレスや痛みを伴うのだし。

それらを全部克服した古賀ちゃんはある意味『異常』だ。

初めて会ったときにまっすぐ私達に話しかけてきたところも。

「それで、その『フラスコ計画』と『十三組の十三人』がどうかしたのか？」

「……うん、それがどうしたの？」

「『フラスコ計画』の今期統括をやった黒神真黒つてのが『十三組の十三人』から抜けたんだと」

「……それで？」

「俺が来年から統括しないか、だとき。ついでに抜ける分の『十三組の十三人』の補充で、二人にもお呼びがかかってるぜ」

やっぱり、そう来るのか。

元々、名瀬ちゃんに向いてる仕事だしね。その計画は。

あちらは知ってるかどうか知らないけど、古賀ちゃんという実績もある。

ああ、それに、十一組にわざわざ配置してもらった理由も知られてるんだ。仕方ないか。

「それで？」

「さっきからそればっかだな熾音くん」

「いいじゃないか。それで名瀬ちゃんはどつするんだい？　古賀ちゃんは？」

……答えはわかってるけどね。

「私はやるよ。だって、結局は私が『普通』から『異常』になれたのと同じ事でしょ？」

「そりゃあそうかもしれないけどね」

「それに、私をもっと『^{アブノーマル}異常』になれるでしょ？　だったらやらないきゃ。それに……」

「おっと、そこから先は私が言おう」

私は口を開いて古賀ちゃんの言おうとしていた言葉を遮る。
たぶん、言おうとしていたことは同じだ

「名瀬ちゃんはもちろん参加するんだろう？」

「当たり前だろ？　多くを犠牲にするような面白い計画、参加しねーわけないだろ？」

「ならば答えはそれで十分なのさ。私も、もちろん古賀ちゃんもね」

「どういう意味だよ」

「やれやれ。何度目になるのかな。そう思わないか古賀ちゃん？」

「にやはは。名瀬ちゃんは照れ屋さんだから」

「そうだね、それじゃあ気付いてないフリということにしておう」

「おい」

そんなに睨んでくれるなよ名瀬ちゃん。
ちよっとしたジョークさ。

「私も古賀ちゃんも、名瀬ちゃんがやる事に一々反対なんかしない。
黙って協力する。古賀ちゃんは名瀬ちゃんの親友で、私は名瀬ちゃん
の恋人だろう？」

「……恋人にした覚えはないぞ」

「おやおや、つれないね」

「……でもそこがいい。」

そんな風に小さく呟いて、私は名瀬ちゃんの方を向く。

「それじゃあ二人は『十三組の十三人』に参加だね」

「二人はじゃねーだろ熾音くん」

「いや、それであってるさ」

一度調子を整えて、真面目な顔で私は言う。

「私は名瀬ちゃんの下以外で働く気はないね。だから私は名瀬ちゃん
の助手で十分さ。私みたいに生きたデータバンクになれる存在な
ら学園側も喜ぶだろうし、それで無理矢理通らせてみせるよ」

「熾音くん、あのな……」

「おっと、何も言わないでくれよ。男にはかっこつけたい時があつて、私にとってはこれも一種のプライドなのさ。名瀬ちゃん以外には傳かないということこそがね」

私の価値観で、上にあるのは名瀬ちゃんだけで、平等にあるのは古賀ちゃんだけだ。

それ以外は全部下で事足りる。

なればこそ、名瀬ちゃんではなく学校が私の上につくと言つのは我慢ならない。

たとえ名瀬ちゃんが学校の下にあつたとしても、そんな物は関係ない。

私が従うべきなのは名瀬ちゃんただ一人なのだから。

「まあそういう事で頼むよ」

「天宮君、頑固だね」

「名瀬ちゃん一筋なんだと言ってくれよ」

ともかく、明日からはまた忙しくなるな。

第貳拾？記憶目（後書き）

あとがき

黒神さんが13組を調べているんなら、昔は情報屋モドキな事をやってた主人公に近づいてもおかしくない。

無論、主人公は当たり障りな反応しか返しません。

そして名瀬ちゃん激ラブな熾音と、妹激ラブな真黒では、本能の部分で互いに気に入らない。

後半は微妙にやつつけです。

え？ 人気投票の時、作者がどのキャラに投票したかって？

オイイ？ お前誰にそんな事言っちゃってるわけ？

そんなの……

名瀬ちゃんにきまつてるだろがあああああああああ！

第貳拾捌記憶目（前書き）

だんだん原作に近づくスピードが加速してます。

第貳拾捌記憶目

「ようこそ来てくれましたね、天宮くん」

「いえいえ。『一応』は上司ですからね」

「まあとりあえず、先に伝えてあつたようにこの実験をやってくださいか？」

「いいですよ。サイコロを投げるだけのことだ」

フラスコ計画。

「天才がなぜ天才なのか」を解明し人為的に天才を創り出す計画。それ故に必要な『異常』を持つ生徒たちが学園には集められ、その中でも特に『異常』である『十三組の十三人』が選抜され、フラスコ計画に参加することになる。

始動したのは数百年前、学園がまだ私塾だった頃でその当時は「試験管計画」と呼ばれていた。

数百年もの昔から続く計画であり、不知火を代表とする数十の財団から国家軍部に至るまでが出資者となり、戦時中からバブル最盛期にもその研究は絶え間なく続けられており、現在では箱庭学園の地下に広がる研究施設で続けられている。

最終段階は、「学園生徒全てを実験台として計画を完成させる」というものだ。

正直、何も知らないで犠牲になる生徒達にとってはいい迷惑なのだろう。

だがしかした。

名瀬ちゃんがそれを行うことに躊躇いが無いというのなら、私はそれを肯定するだけだ。

「ふむ、サイコロが角で立つとはね。まさしく『異常』だ」

「まあそんなのはいいんですよ不知火理事長。今日、私は名瀬ちゃんの下にしか付かないってことを言っておくために来たんですからだから名瀬ちゃんの『助手』ってことでお願いしますよ」

「ははは。構いませんよ。それで君が大人しく協力してくれるのならね。だからこそ『フラスコ計画』の概要も教えたのですから」

「まあそれくらいは名瀬ちゃん達が教えてくれたでしょうしね」

「そうですね。きっとそうでしょう」

目の前にいる好々爺然とした不知火理事長と笑いあう。

間に挟んだ机には、八つのサイコロが全て『角』を下にして立っている。

まあ古賀ちゃんと会ったばかりの頃に人生ゲームでサイコロ振った時もそうなたし、予感はしていたが。

「君は素晴らしいを超えた『異常』な記憶力を持っていると聞きますが、確かですか？ この学園の図書室の本を全て記憶したと聞きますが」

「それはデマだな。実質は覚えたのは番号と本の名前だけだ。内容は2割くらいだよ。残りは在学中に覚えるつもりだけどね」

「それを聞いて安心しましたよ。君の記憶力はまさに生きたバックアップとなりえますからね」

「データをくれるなら願ったりかなったりだ。それはいずれ名瀬ちゃんの役に立つからね」

いかに膨大な量のデータであろうと、私の能力なら全て記憶できる。それなら生きたバックアップという立場は実にいい。

「ところで、名瀬ちゃんの詳しい役割は？」

「名瀬さんには前の統括が行っていた『十三組の十三人』の『異常』をさらに完成された形で仕上げる仕事についてもらいますよ」

「名瀬ちゃんにぴったりだ。人を変えるのは名瀬ちゃんの得意技だからな」

「君には先程も言ったバックアップの仕事についてもらうために、これから地下の研究施設に行ってもらいます」

ああ、時計塔にあるという扉はその入り口か。なるほど。合点がいった。

「地下の研究施設に研究データがまとめられているので？ 何百年分のデータが？」

「その最深部である地下十三階にある13万1313台のスパコンで、常に異常者の解析を行うための計算が行われていましてね。君には定期的にそのデータの記憶をお願いしたい」

「それは記憶する意味があるのか？ 計算途中のデータでは……」

「いえいえ、万が一ということもあるでしょう。バックアップを取っておくのは大切なことなのですよ。それも、膨大な量のデータをたった一人の人間が記憶できるということは、秘匿性や安全性も抜群ですからね」

確かに、誰かに盗まれたり絶対に失ってしまわない部分ではそうかもしれないな。

私なら絶対に記憶できるし、私の中に全てのデータが入っているなど誰も思っまい。

「それでは時計塔の入り口から入ってエレベーターに向かってください。エレベーターのパスワードも一度見せれば十分でしょう？」

「当たり前だ」

「それではまた会いましょう。天宮くん。もう部屋を出ても結構ですよ」

「それじゃあ失礼しました」

不知火理事長、思った以上に食えない人のようだ。

さすがに色々と経験がある人はすごいな。私のように知識とばかりの経験で飾っただけのものとは違う。

……ともかく、これでちゃんとした立場も手に入れた。
理事長の部屋を出たところで一人つぶやく。

「……早いとこ名瀬ちゃんに会いたい」

一刻も早く地下施設へと向かう事にする。

「偉大なる俺がお前に質問をしてくれよう。何の用があつてここに来た？」

「そりゃあこのデータのバックアップを取る様に私が任されたからだよ」

エレベーターを通つて13階へ。

直通ならそう言つてくれればいいのに。これじゃあ名瀬ちゃんに会えないじゃないか。

あとで名瀬ちゃんが何階にいるか聞いとかないとな。

そんなことより今は目の前の金髪男だ。

やたら偉そうだけど、こいつも『十三組の十三人』の一員なんだろう。

「ふむ。お前が理事長の言っていた男か。まあよい。それよりもお前はいつまで俺の前で立っているつもりだ？」

「立つてるから……なんだって言うんだ？」

非常に嫌な予感がする。

これは『予知』をして身構えていた方が……

「【跪け】」

「……っ!？」

体が強制的に目の前の男にひざまずく姿勢を……っ!？

ふざけるな。私が会って間もない男などに、というか名瀬ちゃん以外に跪いてたまるか！

「ほう？ 俺の圧政（言葉）にはむかうとは面白い。では少し本気で行くぞ」

「……はあ。まだあるのか」

「それでは言うぞ……【平伏せ】」

「ぬっ……ぐ……」

私には問題ない……問題ないはずなんだ……名瀬ちゃん以外に頭を下げるわけにはいかない。

平伏す事などもつてのほかだ。

自分の体を制御することほど私が得意な物はないだろう？

外部からの制御など受け付けるな。

予知を無理矢理制御した時と同じだ。自分の体を自分の思い通りに動かすだけだ。

「ふはっ！ 面白い。確かに、この計画に参加するだけの能力はあるようだな。光栄に思えよ。王が自ら試験してやったのだからな」

「……そりゃどうも」

「データならそのパソコンで見るがいい。王の邪魔をするなよ？」

「はいはい」

やたらと尊大な男は一台のパソコンを指さして去っていった。

……たぶん、あれが都城王土だろう。

理事長もなんであんなのに試験させたりとかするんだ。これで私が頭を下げる結末になっていたら抜けていた所だぞ。

無理矢理相手の体を動かせるとは『異常』な力だ。

まあ、だから『十三組の十三人』に選抜されたんだろう。危うく名瀬ちゃん以外の人間に頭を下げるところだった。

『自分の体を思い通りに動かす事』について考えていた事があってよかった。

『能力の制御』の実験の時に色々やったからな。そのおかげだろう。

「でも、もう邪魔しないらしいしな。さっそくデータの記憶でも始めよう」

フラッシュでコンマ一秒ずつ画面に映し出していけば一週間以内に終わるだろう。

やれやれ、名瀬ちゃんにお弁当でも作ってもらわないと割に合わないいな。

「ま、がんばりますか」

私は一度背を伸ばしてから、パソコンの前の椅子に腰かけた。

第貳拾捌記憶目（後書き）

あとがき

王土君のあれを防げた理由の裏設定として記憶Ⅱ 電気信号×膨大な量というのがあったり……
まあ気にしない方向で。

ずばりいうなら『愛の力』ですから。

誰か熾音くんの絵を描いてくれる人がいないか切実に募集中。
……俺に絵心があればな。今までの自分の作品全部の主人公の姿絵を描いてやるのに。
マジ半端無く落ち込みます。

験体名も一応募集。

考えてはあったりするけど微妙なので。

それではみなさんがこの作品で『名瀬ちゃんを愛する会』に入会する事を願って！

ちなみに会長は私だがね！

第貳拾玖記憶目（前書き）

ネタ切れによって次回から原作です。
私にも限界がある。

第貳拾玖記憶目

さて、名瀬ちゃんと古賀ちゃんが『十三組の十三人』に入り、私がその助手になったと言っても、私が図書室で本を読み続けている事は変わっていない。

名瀬ちゃんは基本的に自分一人で全部やるし、構想部分では私の及ぶところではないからだ。

私が名瀬ちゃんを手伝う時は、彼女が私を呼んで知識面での補助を頼む時だけでいい。

あとは実際の『改造手術』をする際の助手だろうか。

地下三階には今まで改造してきた動物達を集めてあるケージもまとめてあるし、これからもたぶん定期的に行うだろう。

だから私は、名瀬ちゃんからのお呼びがかかるまでは放課後まで図書室で本を記憶し続けるのだ。

そんなこんなでもうすぐ学園の一年目も終わる。

まあ、名瀬ちゃん達が『十三組の十三人』に入ってからはまだ半年くらいしか経ってはいないんだが。

今日で図書室の本も7割読み終えたので、古賀ちゃんと一緒に地下四階にある名瀬ちゃんの研究室を訪れていた。

「一休みしたらどうだい名瀬ちゃん」

「キリのいいところまでやらせろよ。どうせ時間はあるんだ」

「まあそう言うなら止めないけどね」

コンピューターで私にも理解できない事をやってる名瀬ちゃんにそう答える。

そのまま横のベッドに寝っ転がってる古賀ちゃんに視線を移す。

「どうだろう古賀ちゃん」

「え、何が？」

「この一年、ちつとも進展が無かったんだけど、名瀬ちゃんがデレる日は来るんだろうか」

「そんなの私に聞かれてもね〜」

「……そうだな」

でも結構真面目に聞いたんだから漫画を読みながら答えないでくれよな。

……うむ。暇だから私も寝よう。ベッドはたくさんあるし。

「名瀬ちゃん、私を起こす時は感動的な起こし方で頼む」

「……………」

無視か。集中してるんだろう。

仕方ないよな。

寝よう。

起きるとそこは真つ暗な部屋でした。

「おい！？　さすがに酷くない名瀬ちゃん！？」

まさかあの時起こしてっていったのが聞こえなかったとか！？
それとも無視したのか！？

感動的な起こし方を頼んだのが悪かったのか！？（たぶんこれ）

ま、まあ問題はない。

前にもあつた事だ。これくらいで動揺はしないぞ。

……動揺なんかしてないったら。

ともかく家に……あれ？

横にベッドが連結されて、誰かが寝てる？

この感覚は……名瀬ちゃんか！

あれ？　古賀ちゃんは何でいないんだ？

名瀬ちゃんを置いて帰るわけが無いはずだが……そうか。

今日は古賀ちゃんが食事当番だったな。

食材も切れてたはずだから買い物するために先に帰ったんだろう。

気がきいてるじゃないか。ふはは。

ここで名瀬ちゃんが包帯をしてなかったらじっくり寝顔が見れるん

だけどな。

いや、包帯をしても問題ないな。名瀬ちゃんが寝てる姿は十分可愛い。

『フラスコ計画』に参加し、『十三組の十三人』に入って半年。今まで以上に過酷なスケジュールだ。疲れもたまっているだろう。

ただでさえ女の子なのだ。

いくら頭がよくて、素晴らしい才能を持っていて、『異常』な存在であったとしても。

名瀬ちゃんが女の子である事に変わりはない。

こうやって『普通』に寝顔を見せている名瀬ちゃんも十分魅力的だ。

とりあえず名瀬ちゃんを起こして……いや。

ここはあれだ。やっぱり起こさないように運んであげるのが男じゃないだろうか。

ただでさえあまり眠ろうとしない名瀬ちゃんだ。

健康のためにも、そうしてあげるべきだろう。

よし。決めた。

「ん……熾音くん？」

「あ、おはよう名瀬ちゃん」

「おはよう。つーかなんで熾音くんが俺をおぶってるんだ？」

「気持ち良さそうに寝てたから、起こすのも忍びないと思ったんだ」

耳元にかかる寝息とかがじつにラブリーだったよ。
機会があればこれからもお願いしたいくらいだ。

「もういいよ熾音くん、降ろしてくれ」

「ここまで来たんだからこのままでもいいだろう？ 胸の当たる感触もすごい幸福な感触だし、それくらい役得じゃないかな？」

「おい」

「あつはつは。まあ、私は名瀬ちゃん一筋だからってことで見逃してくれないか？」

「……はあ、別にいいっての、それくらい」

「『くらい』ってモノじゃないよ。僕にとってはこれまでの人生でもトップレベルのシチュエーションだよ」

「たまに熾音くんってわけわかんねー事言うつよな」

そりゃあ色々な本を読んだり、毎日ネットで情報収集してるからね。たまに名瀬ちゃんが知らないような事も言うかもしれない。

「今日は古賀ちゃんが先に帰って料理を作ってるからね。名瀬ちゃんも楽しみでしょ？」

「ま、古賀ちゃんの飯は美味いからな」

「だから名瀬ちゃんは家に帰るまで寝てていいよ。そしたら起こしてあげるからさ」

「でもな……」

「最近は眼の下にクマができて始めてるからね。健康管理は大事だよ」
包帯巻いてようがなんだろうが名瀬ちゃんの事ならだいたいわかるからね。

好物から毎日履く下着の色、高校に入ってからドンドン大きくなって現在私の背中で圧倒的な存在感を持つ胸のサイズとか。
名瀬ちゃんが体調を崩しかけてるのなんかすぐにわかるさ。

「わかったから、とつと家に向かってくれよ」

「了解」

あんまり古賀ちゃんを待たせても悪いからね。
ちよつと足を速めるとしましょうか。

第貳拾玖記憶目（後書き）

あとがき

Q：この話、アホなネタ詰めただけじゃね？

A：あ、バレた？

あのさ、30話もオリジナルで引っ張るだけ俺は頑張ったと思うんだ。

単行本5巻までしか出てないんだぜ？ ぶっちゃけネタが出てこない。

もう、ゴール（原作入り）してもいいよね？

自動書庫 オートバンク

知識の匣 パンドラ

記憶書庫 メモリーズ

万能司書 ライブラリー

やっぱり、験体名ってんだから名瀬ちゃんの名前入れたりするのはまずいよね。

結果、色々考えて絞ったらこうなった。

……笑いたければ笑え。俺のネーミングセンスの無さにな。全部図書館とか関係なのはアレだ。それっばいからだよ！

それぞれに意見がもらえたらものすごく嬉しいです。

第参拾記憶目（前書き）

キリのいい30までやることにしました。

第参拾記憶目

約三か月前、

大晦日とお正月での出来事。

「年越し蕎麦一丁上がり！」

「待ってました〜」

「ん、できたか」

去年と同じく二人に蕎麦を二人のために用意する。

前に名瀬ちゃんのために用意したものに比べて味も上がっているだろう。

古賀ちゃんと交代で毎日料理してるおかげで、料理の腕はドンドンあがっているからね。

今度、名瀬ちゃんの料理も食べてみたいもんだ。

……え？ 名瀬ちゃんが料理できないなんてはずがないだろう？
そのうちお弁当とか作ってもらおう。

「明日はみんなで初詣行こうね〜」

「さすがは古賀ちゃん、いい案だ。もちろん二人とも着物だろう？」

「熾音くん、そんなもんいつ用意するんだよ」

「そつだよ〜さすがに今からじゃ間に合わないでしょ？」

甘いな古賀ちゃん。

私を誰だと思ってるんだ。

名瀬ちゃんの恋人（予定）で最高の助手だぞ？

「もちろん二人の着物は用意してある！」

「……ねえ熾音君、サイズとかどうしたの？」

「もちろん二人とも把握済みだともって熱い！？ 熱いよ二人とも！」

お茶の入った湯呑みを投げつけないで！
私は何も悪いことしたつもりはないぞ！

むしろ着物を事前に用意しておいたんだから喜ばれるはずでは！？

「……熾音くん、たまには自重しろよな」

「熾音君、なんでサイズ知ってるのかすごく気になるけど、着物用意してくれたのは嬉しいから許してあげる」

「ああ。うん。どういたしまして？」

「……言っとくけど褒めたわけじゃねーぞ？」

何っ！？ そうなのか！？

「はあ、じゃあ熾音君」

「なんだい古賀ちゃん」

「その着物、あとで着てみるから用意しておいてね」

「了解」

明日のために試着するんだね。

ちゃんと用意しておくから心配いらないよ。

……よし。私も明日のために用意しておくか。祭りの時に来た着物でいいな。

「とっても似合ってるよ二人とも！」

「えへへ。似合ってるって、名瀬ちゃん」

「おう……ありがとう」

ああ、素敵だ名瀬ちゃん。

古賀ちゃんもよく似合ってる。

私の選んだ着物はズバリ間違っていなかったな。

二人とも祭りの時の浴衣に似たデザインだから似合うのも当たり前か。

「私は神様なんか信じないけど、やっぱり目標みたいなものは決めたいしね」

「俺もだ。神様なんか信じちゃいねーよ。……二人が言われなきゃ来なかったし」

「私はどっちでもいいかな。二人と一緒にいられればそれでいいしね」

賽銭箱に100円玉を投げ込みながらそんな会話をする。

ちよっと入れ過ぎかもしれないが、まあいいだろう。

神様なんか信じちゃいないが、願った事を実行するための暗示みたいなものだと思えばいいだろう。

今年こそ。

名瀬ちゃんを振り向かせてみせよう。

横では着物姿の二人も目をつぶって何かを願っているようだが、一体何を願っているのだろう。

……まあ、願うと言っても神ではなく自分自身とかそういうものに對してなんだろうが。

しかし、それを知ろうとするのは野暮というものだろう。

今年、『フラスコ計画』も他の『十三組の十三人』のメンバーのおかげで佳境を迎える。

このまま『フラスコ計画』が終わればいいが、もし……

もし、このまますんなりと終わってくれないとしたら。

そして、私の大事な二人に危険が降りかかるとしたら。

命を賭けてでも守りきってみせよう。

横にいる二人をみて、私は改めてそう誓った。

運命が、残酷な結末を用意していても、その未来を知っていたとしても、覆してみせよう。

いつか私に訪れる死が、私と名瀬ちゃんを別つまでは、どんなことが会っても愛し続けるだけだ。

運命が私の道を、未来を決めるのではない。私が歩むと決めた道が、私の未来を作るのだ。

第参拾記憶目（後書き）

あとがき

非常にわかりにくいですが、未来予知を教えるのは名瀬ちゃんと古賀ちゃんの二人だけという設定です。

学園長には教えてませんからね。それに、学園長も記憶力の事しか把握していなかったでしょう？

ということで、験体名は記憶力に関する事になります。もちろん、統括者の名瀬ちゃんが知ってるからそちらの意味も若干含められますが……

ということで、験体名は『知識の匣 パンドラ』で決定しました。

まあ、『初恋^{ラブ}』とかあるしさ。いいじゃないか。

第参拾巻記憶目 取引成立（前書き）

どうやって絡ませようか考えたらこうなった。

良く考えたら、理事長が分身とか水の上に立つとか、テレビ中継が誰かに報告させたかでないと知るはずないという。
だからここでこうしました。

第参拾巻記憶目 取引成立

箱庭学園二年目、四月。

私は不知火理事長に呼び出されていた。

正直、私は非常に不機嫌だ。

これから名瀬ちゃんとラブラ……もとい、研究室にでも向かおうと思つてたのに。

イライラしながら理事長室に入つて、ソファに座つて向かい合う。

「それで？」

「そんなに怒らないでくださいよ、天宮くん」

「用件だけをさつさと言つてくれ。妙なこと言つたら怒るぞ」

「いえいえ、簡単な事ですよ」

理事長みたいな胡散くさそうな爺が簡単な事を言つはずが無い。

とういか去年も頼みごとをされてるんだからもうわかりきつてるんだが。

「……はあ、もういい。わかった。その代わり、廃棄された実験資料や閲覧禁止の過去資料も見せてくれ」

「いいですよ。許可しましょう」

100年以上も蓄積されたデータを記憶したが、そのデータを得るための実験に使用されたはずの資料。

それらは廃棄扱いで地下の廃棄部屋に置いてあり、閲覧禁止になっていると聞いた。

前に理事長にデータについて聞いたところ、そう言った答えが返ってきたのだ。

理事長だって初めからそのカードを使うつもりだったろうから自分から出したただけだ。問題はない。

「それで、内容は？ 簡単な事じゃないと引き受けないぞ」

「簡単ですよ。『黒神めだか』さんを知っていますか？」

「……前の統括の黒神真黒の妹だろう」

「そうですね。その通りです」

なんか猛烈に嫌な予感がしてきたが、まだ大丈夫だ。

またあの女を見張れとか言われたらどうしよう。中学の頃に一度見たけど、私は名瀬ちゃんにしか興味はないぞ！

「彼女を調べて欲しいんですよ」

「自分でやってくれ。それくらい」

「あなたなら黒神さんに関する過去の情報も持っているでしょう？
そういった過去の情報を持っている君がすることに意味があるんですよ」

「……はあ、続けてくれ」

一応、最後まで聞いてみよう。

データ（資料）の提供を断るにはまだ早い。

「黒神さんは明らかに『異常』です。こちらが知りうる限りでもね」

「そりゃそうでしょう」

「この『普通』から『異常』まで、多彩な人間が集まっている箱庭学園で彼女がする事を記録してもらいたいんですよ」

「だから、それくらい自分で」

「一定以上能力がある人間で、黒神さんと同じく『異常』で、こうしてしっかりと取引すれば話を聞いてくれる生徒、君しくないんですよ」

「……まあ、確かに」

王様野郎にその従者、殺したがりになりすぎ風紀委員長、ついでに言々と私の愛する名瀬ちゃんの研究熱心だし、古賀ちゃんの場合は真面目に取り組むはずが無い。

私の場合、理事長から情報を入手し終えるまでは取引という形で言う事聞くし。

理事長がそう考えるのもしかたないか。

「一定以上能力がある人間っというのは？」

「そのままですよ。情報収集能力も、いざという時の対応力も。あった事を全て記憶できる能力も。全てです」

「それに私が当てはまったと？」

「ええ、そうですよ」

理事長なんかに認められても嬉しくない。

名瀬ちゃんに認めてもらいたい。いや、もう認められてるはずだけ
ど。

顔だつて見せてもらった事あるし。……キスとかはまだだが。

「私はまだ書庫の本も読み終わってない。取引が成立したのなら地
下の本も読まなきゃいけない」

「そちらは続けてくださつて結構ですよ。放課後に少し働いてもら
えれば」

「放課後全部とか言つたら拒否するが」

「いえいえ、そこまでやらなくてもよろしいです」

……なら、別にいいか？

これで資料を読む事が出来るのなら、楽な仕事だろう。

黒神めだかを観察し、なにか『異常』なことをやらかしたらそれを
そのまま名瀬ちゃんに教えて研究の促進になるかもしれない。

「あと一つあります」

「まだあるのか……」

「そう大した事でもありません。定期的に報告が欲しい事と、黒神

さんが今後何かイベントを起こす時は私から連絡しますので、それを観察してほしい事です」

「……なんでイベントを起こすってわかるんだ？」

「いえいえ、例えですよ」

怪し過ぎる。

怪し過ぎるが……情報は惜しい。

名瀬ちゃんのためだ。耐えるべきか。

しかし、名瀬ちゃんとの時間が削られるのは痛いな。

さて、どうするべきか……悩みどころだ。

データを入手するためには理事長の協力があるだろう。

なら、ここはやはり取引に応じるほかないな。

名瀬ちゃんのためだ。我慢しよう。

「わかった、引き受ける」

「おお、そうですか。ありがたい」

「でもな、言われた事以外はやらないぞ。私はあんたを上司としているわけじゃないからな」

「それで結構ですよ」

なんかこの爺の顔を見ていると腹が立つな。

やはり断るべきだったのかも。だが、データのためだ。私は理事長室から出るためにソファから立ち上がった。

「それではまた会いましょう。天宮くん」

翌日、私は黒神めだかが生徒会長選挙に出ていた事を知る。

「ハメられた、か？」

まあ、放課後働くだけなら問題ないだろ。

当選確実らしいが、生徒会長か。そういえばあの日之影ってのはどうしたのかな。

やれやれ。まあいい。地下の本は後で書庫の方まで引っ張り出してもらうか。

そうすれば上で読めるからな。

なんだかんだで図書室とは読むのに適した場所だし。

さて、名瀬ちゃんに会って爺のせいで痛んだ心を癒してもらおう。

第参拾巻記憶目 取引成立（後書き）

あとがき

ご都合主義？

別にいいだろ？ 物語ってのはご都合主義の連続さ！

これで、熾音くんにフラグが立ったな。色々なフラグが。

てか、熾音くんが風紀委員に襲われそんな気がする。服装的な意味で。

どっちかというと、原作に入ってからの方がアレになりますね。

『オリジナルの展開』ではなく、『オリジナルの設定』が多くなるかもしれません。

無論、結果として『オリジナルの展開』が多くなるかもしれませんが。

他の『十三組の十三人』は、順次出していきます。

過去編で出さなかったのは、熾音くんが他の奴らに関わる気も何もなくあったからです。

ただ、面識があります。

原作で、名瀬ちゃんが『現在の十三組の十三人』を仕上げた、とありますので。

そう言う時は常に目を光らせてます。

たぶん、そんなシーンもいずれ出ます。

第参拾貳記憶目（前書き）

あひゃひゃ　な子が登場。

第参拾貳記憶目

4月のある日、私はのんびりと図書室で本を読んでいた。何度も何度もため息をつきながら。

というのも、アレだ。

黒神めだかがさっそくやらかしたのである。

私は生徒会長の選挙になど興味がないから図書室にいた。

もちろん、外で生徒会長選挙がなんだかんだと生徒達が言っている間もだ。

そしたらあの理事長、黒神めだかが生徒会長に就任した時の、演説を行つてる映像を送りつけてきたのだ。

「全く、理事長がイベントとか監視とか言っていたのはこういうわけか」

98%の支持率で生徒会長に就任するとか冗談じゃない。

さすがに理事長があんな取引を持ちかけてくるだけの事はある。

前に私は黒神めだかが『異常』の中でも抜きんでている事は確認していたが、ここまでとは思わなかった。

……いくら支持率を集めるような行動をしていたとしても、98%などという賛成票が集まることなど『普通』ではあり得ないのだ。まあ、生徒会長に着任早々で何かをすることはないだろう。

事務も忙しいはずだ。目安箱を設置したとも聞いたが……知ったこっちゃない。

名瀬ちゃんも地下にこもってるし、関わろうともしないから大丈夫

だろう。

……ところで。

「図書室はモノを食う場所ではないぞ。一応図書委員だから注意させてもらおう」

「あひゃひゃ　そんな細かいこと気にしないでくださいって図書委員長」

「細かい事か。そうだな。だが、なんでいつまでもここにいる？」

「え？　そんな人がいないからにきまつてるじゃん」

私を勘定に入れないつもりか？

本を読んでいる私の前で、図書室の机に菓子詰まった袋を置いてそれを食べまくる生徒。理事長の孫で不知火半袖という名前の一年生……どう見ても子供にしか見えない。

理事長から映像入りのディスクを私へと持ってきてから、ここに居続けている。

あの風紀委員長もそうだが、なぜこんなチビが高校生なんだ。あつちは真正正銘『異常』な十歳の子供だが、こちらは……ただの生徒相手のデータなんかないから何とも言えないか。

変わった雰囲気を持っているのは確かだが……まああの理事長の孫だ、怪しい事に変わりはない。

「私がいるだろう」

「図書委員長は数に加えてないもん」

「……好きにしろ。ゴミは片付けろよ」

「あひゃ　モチロンですよ」

まあ、私に迷惑をかけないのなら放っておいても問題ないだろう。そう思つて書庫から引つ張り出した本に目を通していると、今度は不知火の方から話しかけてきた。

「ところで」

「なんだ」

「おじいちゃんから聞いたんだけど」

「だからなんだと聞いている」

「図書委員長、あのお嬢様の事を調べてるんだってね」

お嬢様というのは……私が理事長に言われて調べている黒神めだかのことなんだろうな。あの理事長、自分の孫に少し甘いんじゃないだろうか。

それともこいつが伝言係だから教えただけなのか。どっちでもいいか。

「黒神めだかと知り合いか。なら私が調べている事を教えたりするのか？」

「そんなことしないよーん　だってあたし、あのお嬢様のことキライだもん」

「……ならなんでその話を私に振ってきた。情報収集の手伝いでもしてくれるというのか？」

「あひゃひゃ　そんなめんどくさい事したくないけど、アドバイスならしてあげてもいいですよ？」

「……言ってみろ」

実際に対面した事がある者なら、そういうこともできるだろう。無論、こんなチビっ子に期待はしていないが。

「直接話してみるんですね」

「アドバイスになってないぞ」

「あ、バレました？」

バレるもなにも無いと思うが。

古賀ちゃんならもっと面白いボケ方をするぞ。……たぶん。

名瀬ちゃんならスルーだな。絶対に。

「図書委員長も目安箱に投書すればいいんだよ。適当な問題をでっちあげてさ」

「……それ、理事長から言われたとかじゃあないだろうな」

「違う違う。あたしが考えたんだって」

「……話してどうなるものではないと思うがな」

私が魅了されるのは名瀬ちゃんだけだし、友情を感じるのは古賀ちゃんだけだ。

え？ 名瀬ちゃん？ 名瀬ちゃんは愛情だよ勿論。友情より上ですから。

その私が黒神めだかと話したからといって、何かしらの良評価を得られるわけじゃあない。

むしろ、評価が下がる事ならいくらでもありそうだが。

「あ、無くなっちゃった」

「さっきまで大量にあったものを……もう食いつくしたのか!？」

やっぱりこいつは『異常』だ。

エネルギー枯渇寸前の古賀ちゃんを大食いチャレンジの店に連れて行った時よりも食糧が消えるのが早いぞ。

「無くなったら補充しないとね」 それじゃあね図書委員長。おじいちゃんの仕事も真面目にやらないと怒られちゃうかもよ」

「……あれは、やっぱり忠告に来たのか？」

黒神めだかを調べると言われても特に何もしなかったのが問題だろうか。

調べている立場なのに、黒神めだかが生徒会長になってすぐの演説を聞かなかったのがまずかったのか？

なかなか刺激的な内容を言っていたな。『悩み事があれば迷わず目安箱に』とか『誰からの相談も受け付ける』とか。

これは実際の経験ではなく私の持つ知識からの結論だが、『普通』

の人間はそういう相談をすることこそを、難しいと感じると思うのだ。

そもそも、人間そうなんでも他人に相談できたら戦争など起きないだろう。

例えば私が持つ名瀬ちゃんへの愛情を相談するでしょう。

はつきり言って理解できまい。

これは私が持つ私だけの愛情だ。

『天宮熾音が名瀬天歌を愛している』という感情は、それを抱いた私にしか理解できない。

これは他の『普通』な人間にとっても同じ事だ。

物理的な問題ならいざ知らず、精神面での問題は難しい。

何かを超えたいという思い。何かを得たいという思い。

その思いはその個人だからこそ持ち得るものだ。

それも恋愛という個人個人の感情の交差は、その個人にしか理解できない事だ。

……ふむ。黒神めだか、か。

ほんの少しだけ興味がわいてきたぞ。無論、悪い方向にだが。

大言を吐いたその存在がいかほどのモノか、記憶し尽くして名瀬ちゃんのためのデータとなってもらおう。

第参拾貳記憶目（後書き）

あとがき

不知火半袖の喋り方、これでいいんでしょうか。

正直不安ですが……許してくれよ？

半袖、出番が多いのか少ないのかわからんというか、喋り方をどう区切ればいいのかとか、考える事が多すぎる。

ともかく、熾音くんは今のところめだかに良い感情は持ってません。
ただ、生徒会の図書館訪問というフラグは立てておきます。

もしかしたらな記憶 その巻（前書き）

これはもし、彼が家出をするよりずっと前に。
両親が二人とも彼の異常に早く気付いて。
とある病院に連れて行った事により始まる物語。

もしかしたらな記憶 その壱

私が3歳になった時の事。

今日はいつもと変わっていた。

両親が、父の本を読んでいる私を連れ出して車に乗せたのだ。

この車に乗るのは15日前に両親が私を連れ出して以来だ。あの時は父の大学に連れて行かれたんだっけ。色々な人と話をしたのを覚えてる。

どれも、つまらない人間だった。

どこに行くのかは言わなかったが、私にはわかってしまった。

私は『病院へ連れて行かれる』ようだ。

何のためかはわからない。

でもきつと私の『異常』のことだろう。

本に書いてあった通り、普通の人間でない物を隔離しようとしても言うのかな？。

それとも実験動物としての扱いかな？

でも、私の事を検査しても、異常を理解できるとはとも思えない。未来がわかってしまう私にさえ、それはわからないのだから。

だけどそこに着いた時、私は少しでも考えを変えた。

不確定な未来を知る僕は、様々な『異常』な子供達を見てわかったことがあったのだ。

どの子供も、『異常な未来』が待っていて、『異常な成果』を成し遂げて、『異常な人生』を過ごそうとしている人ばかり。

それらを知って私が感じた事は、耐えがたいほどの愉悦だったのだ。その頃は理解していなかったけど、それが私の『知りたがり』というものの発露だったんだろう。

様々な『異常』な子供達。

それらが辿るであろう未来はきつと素晴らしいものだろう。

私はそれらを知りたくて知りたくて仕方が無いと思ったのだ。

きつと『異常でアリエナイ結果』や『とびきり異常な人間の結末』を知りたいのだ。

様々な子供が行きつく結果は知る事が出来ても、その道筋を知ることは私にはできないのだ。

しかしそれでも十分それは異常な事で……私は他の子供達を観察し続けた。

もしかしたらとびきりに面白い人間がいるかもしれないと思いながら。

そんな中で私は二人の男女を見つけた。

片方は私より年上の男。片方は私より年下の女。

名札に書いてある名前は「くまがわみそぎ」と「くろかみめだか」

私が探していた『とびきり異常な人生』の持ち主たち。

そんな二人がちょうど並んで座っていた。

私は少し離れたところで彼らの未来を見ようとした。

出来ない事はわかっていても、知りたいと思ってしまったのだ。

わかるのは結末だけ。そこまでの長い過程を知ることが私にはでき

ない。

そこへ二人の会話が聞こえてきた。

「『まったく』『なんのためだなんて』『みんな大人のくせに』『
的外れだよねえ』」

突如として『くまがわみそぎ』の方が喋り出した。

その言葉は私も先程聞いた大人への言葉か。

私達の『異常性』が何のためにあるかを検査するための場所だと言
った男。

……そんな意味など知らない。私はただ知りたいだけなのに。

「『人間は無意味に生まれて』『無関係に生きて』『無価値に死ぬ
に決まってるのにさ』」

生きることに意味は無し。

私はただ『知りたい』だけだ。その意見には共感できる。

「『きみもそう思うだろう?』『えーと』『めだかちゃん?』」

「……………」

「『そこに立って話を聞いている』『君はどうだい?』『しおんちゃ
ん?』」

いつのまにか近付いていた私に『くまがわみそぎ』は言った。
その問いに私は答えることにした。

「私が生まれたことに意味などない。必要ない。私にあるのは『知

る』ということだけだ。人の幸福も不幸も破壊も創造も善も悪もありとあらゆる全てを知りたい。だから私を含む人間の生に意味などいらない。私はどこまでもいつまでも際限無しに知りたいだけだ」

「『ふん』 『ほんの少しだけど』 『僕ときみは似ているね』」

「球磨川くん、五番検査室に入ってくれるー？」

少し離れた場所で看護婦が言った。

それに応じて『くまがわみそぎ』は立ち上がった。

「『きみたちもきつといっぱい人を終わらせてここに来たんだよね』
『いいんだよそれで』 『僕たちはなにをしてもいいんだ』」

人を終わらせる。

それは、私と話した後で屈辱に顔をゆがめた大学の男たちの事が。そこにいた数多の教授たちのことか。

その者達を絶望させたという事でなら、終わらせたという意味にもなるか。

「『だって世界には目標なんてなくて』 『人生には目的なんかないんだから』」

……そうだ。この世界には到達するべきものなんてない。

人生にもそんなものは存在しない。

何を指標にするのかなんて定まらない。

そして、私の欲望には限りなどない。

ならば私の欲求のために、無意味な世界に、無意味な人生に、何をしてもかまわないということにつながるだろうか？

私はそこに残った少女に話しかけることにした。

「『くろかみめだか』という名前なのか」

「そう書いてあるだろう。『あまみやしおん』」

先程までじつと黙っていた女の子はそう言ってこちらを見る。
面白そうな人生が待っている未来が見える。でも……

「君が絶対に知らない事を教えてあげよう」

「……言ってみるがよい。お前が知っている事で、私が知らない物があるとは思えないがな」

なるほど確かに私は彼女と一つしか違わない。
ほとんど同年代の体格だ。
そう思うのも無理はないのかもしれない。

「君はきつと近いうち、『人生の転機』にめぐり合う」

「……………」

「君が危機に陥ってもその『人生の転機』が近くにある限りは救われるだろう」

「……………」
「……どういことだ」

「私はオモシロイ結末が知りたいけど、『くまがわみそぎ』のほうがいい興味がある。興味が失せた方の知識の欠片を教えてあげているだけだからさ」

「……………」

「天宮熾音くん、三番検査室に入ってくれるー？」

話しをほとんど終えたところで私もまた呼ばれた。

「また会う日までだ『くろかみめだか』。きつと未来で会う君は全く違う君だろうけど、確定事項だから言っておくよ」

それでは…………とても面白くない『黒神めだか』と会う日までさようなら。

「それで、君の名前を覚えてもらえるかな？」

「知っている事を二度も聞く必要性はわからないが、そう言わなければ進まないのだから答えるよ。天宮熾音ですよ人吉先生」

検査室に入ってカウンセリングを行う。

相手は人吉瞳先生。

背は低いが正真正銘大人であるらしい。面白い。珍しい人間だ。

会うことを知っていたとしても知ってみると余計に面白い。

「君は……」

「言う必要はありません。言おうとするだけで結構です。そうすれば私は知ることができますから」

「……あんた」

「だから言う必要はありませんと言っているでしょう」

「……」

「そうだな。うん。私は私のためにしか私の異常は使わないよ。あとは私がやりたい事のためとか。私はやりたい事をやるだけだから。実に人間らしいでしょう。そうでしょう?」

「……」

「だから私は異常なところなんてない普通の子供ですよ。ちょっと人の行動を先読みするのが得意なだけの子供です」

「そ「だから口を開く必要はありません」……」

「私がこれが終わり次第平然と家に帰るのはわかってるんですよ。だからさっさと終わらせましょう。人吉先生、あなたは言おうとするだけでいい」

今はただ知りたくて知りたくてたまらない。
こんな病院にいる意味なんかない。

……もちろんあんな家にも。

その日、私はたった一度の診察を終えて家に帰った。

ちよつとやりこめたただ、別に異常なわけじゃない。大人びているだけだ。

実際に対峙している人間以外も異常と思っても、母は家に帰す気であった。

もちろんわかつていたからこそ演技もしなくてよかったのだが。

そして確定事項通り、10才の時に私は家を出た。

この家も後3年も経てば……いや、私を追うものが無くなるだけありがたい。

私にとって邪魔なものなんてこの世界からなくなった方がいいだろう。

うん、『くまがわみそぎ』に見えた『何も見えない未来』の方がずっと興味深い。

そんな私が親の元を離れて数年後。
私が入学したとある中学校にて。

「『やあ』『久しぶりだね』『熾音ちゃん』」

「こちらこそ久しぶり。実に10年8ヶ月24日ぶりだ。相変わら

ずで安心したよ球磨川さん」

「『おいおい』『さん付けなんてしなくていいよ』『僕と君の仲だろっ？』『』」

「ほとんど面識はないけど確かにそうだ。あの時の事はくつきりはつきり覚えているよ。相変わらず意味のない言葉も言うもんだね」

「『心外だなあ』『お互い様でしょ』『熾音ちゃんだって』『』」

「はは。違うない」

私は対面にいる球磨川楔と同時に椅子へと座る。

タイミングもぴったりだ。

実に気が合う。

「楔くんがこんな中学にいるのはあれかい？ やっぱり終わらせるためかい？ 人生に意味なんてあると思って頑張ってるエリート君を」

「『もちろん』『エリートなんて嫌いだからね』『いないほうがせいせいするよ』『』」

「全く持つて同意見。楔くんと話していると新しい発見があつて面白いね」

「『君が来た理由は』『やっぱり知りたかったからかい？』『前に言つてた君の欲求を』『』」

「そうだね。楔くんがいろと色々と新しい結果を知る事ができそうだからね。利害の一致だ」

「『うんうん』それは頼もしい』『さすがは僕の友達だ』」

まあ、とりあえずこの学校での最初の友達は、球磨川楔だということだ。

もちろん友達というのはただの言葉にすぎない。

ほんの少しだけど似た者同士という奴だし。

とにかく仲がいい以上はオトモダチというわけだ。

さて、楔くんがこの学校で何をするのかを見せてもらおう。

もしかしたらな記憶 その巻（後書き）

あとがき

分かれ道。そこで選んだ答えによつては……全てが変わる道もある。
予知が過負荷^{マイナス}となつて備わる事もまた可能性。
制御をしようと思わずに膨張し続けてとにかく知りたがりな、知の
欲求のために何をも犠牲にすることゝみたいな。

ところで。

『裏の六人』の上峰書子さん。

あの人が図書室に出てきても全く違和感ないから何とかしたいけど
どうしようもない。

黒神真黒がいた頃は『十三組の十三人』に加入してないってことは、
名瀬ちゃんが統括になつてからだろ？

十三組には一年の頃からいるはずだから、『十三組の十三人』にな
つてから登校するようになった。

くそつ、もっとタイミングをはかれれば登場させられたのに。

今からでも遅くないと思う方はご意見を。

雲仙冥加の数字言語を解読しようとし、一日悩んでダメだった。
その息抜きで生まれたこの作品。

だって、数字言語を解読しないと冥加ちゃん出しにくいもんね。

しかたがないので独自に数字言語を生み出す事にしました。
解読はそこまで難しくないです。

それではみなさんさようなら

8 6 1 8 2 5 9 6 7 5 8 9 2 5 8 9 8 5 4 7 0 0 8

おまけ

数字言語の考察

? 一つの言葉が一桁からおそらく三桁までのランダムな数字であら
わされるのでは?

4 お

4 1 3 6 お前

4 1 3 6 5 2 お前は

? 細かいニュアンスの違いを気にしない、単語を組み合わせた暫定
的な意味での言葉?

2 1 4 8 7 2 1 4 もう一発だ。

もう一発食らっておけ!

一定の数の数字で「単語」を現し、英文法のように取り扱う方法。

? 数字の順番と実際の意味の順番は関係なく、数字の流れ全体が意
味を持つ?

9 9 7 7 8 9 3 7 6 9 4 2 7 こんなものか

4 3 5 6 7 4 8 5 7 悪く思っなよ

私の結論 考えるだけ無駄。

だから仕方なくオリジナルで数字言語作ったよ。

私の作品では？でいきます。

たぶん本当は全部混ぜてるんだろうな。

もしかしたらな記憶 その式（前書き）

次回からは本編に戻ります。

雲仙姉の数字言語、オリジナルで作ると頭が痛い。

もしかしたらな記憶 その式

「阿久根高貴？」

「『そうその高貴ちゃん』 僕の言う事を何でも聞いてくれてね』
『とつても聞きわけのいい後輩さ』」

「……ああ、なるほど。わかったよ。あつても意味のない物を楔くんの代わりに軽々と破壊してくれる破壊臣だったっけ」

「『うん』 『どんな物や人だつて壊してくれる』 『熾音ちゃんもなかよくしてあげてね？』」

「わかった。今まで頑張ってくれてたんだから挨拶の一つもしないとね」

楔くんと話して生徒会室を出る。

気付けば私も中学二年生となり、楔くんと私に新しい『お仲間』ができていた。

生徒会室が私と楔くんに占拠されているのは、楔くんが生徒会長になつてしまったからだ。

……支持率0%で当選するという、実に興味深い事を成し遂げてくれた。

ある意味100パーセントよりもすばらしい快挙だろう。

まあその破壊臣こと阿久根くんのことだが、正直そんなに興味はなかったので接触しなかったのだ。

アレは確かに特別かもしれないが……そのうち離れていくモノに、つまらなくなるものに期待をしても仕方ない。ある意味では面白くなるかもしれないが……まあ、私の興味をひくほどではないのだ。

「あんた……球磨川さんの……」

「そう、楔くんのお友達のお天宮熾音だよ。阿久根高貴くん」

いつもどおりに破壊活動を行っていた彼に声をかける。

今日も楔くんに何かを頼まれていたんだろう。

彼の足もとには頭から血を流した生徒が倒れていた。

そのような瑣末な事には目もくれず、私は阿久根くんの方に顔を向ける。

「いつも楔くんの言う事を聞いてくれて助かるよ。そうすれば楔くんの未来はどんどん近付いてくるんだからね」

「そりゃあ、どうも……天宮さん」

「別に同年代なんだからさん付けとか気にしなくてもいいんだけどね……君の呼び方に任せるよ」

「……………」

私が平然と『楔くん』とよんでるからかな？

それとも、彼には及ぶべきもない異常な人間だと理解したからかな？
さすがに、口に出す事のない人の心の中までは知る事が出来ないからね……いつかはそれを知ってみたいものだ。

「今日は君とも挨拶しておこうと思ったただだからね。それじゃあ、破壊活動を頑張ってくれたまえ」

「っ……！」

私は彼に別れのあいさつを言ってその場を離れたが、離れ際に彼の肩を叩いたのがまずかったかな。

少々力を入れて叩きすぎたかもしれない。

まあ、違いというものを理解してくれるかもしれないからそれでもいいか。

うんうん。

もうすぐ別れる阿久根くんも、私がつきとした『楔くんのお友達』だって知った方がいいと思うし。

楔くんが阿久根くんに指示を出したらチェックポイントだ。

新入生の中には随分ツマラナクなった『あの子』も見つけたし、そろそろだな。

私のチカラ、現在付近と結末付近はわかるのに中間地点がわからないのが面倒だなあ……ま、それも楽しみが増えるという事だからいいつか。不確定事項が多い方が面白いもんね。

楔くんにあの子の事でも話しに行ってみるかな。

「楔くんは私と初めて会った時の事を覚えてるかい？」

「『ああ』『病院の時の事かい？』『もちろん覚えているよ』『それがどうかしたの？』」

「じゃあその場にもう一人いた子の事は？」

「『んー』『そういえばいたね』『とっても面白そうな子だったね』『めだかちゃんだっけ？』」

「そうそう。その黒神めだかだよ」

覚えていてくれて何より。

楔くんの事だからどうでもいいやと忘れちゃったんじゃないかと思っただよ。

まあ、口ではそう言っても本当はすっかり覚えているんだろうけどね。

「この学校の新入生にいるんだよ。その『めだかちゃん』が」

「『へへえ』『熾音ちゃんのいうことなら本当なんだろうね』『あの時みたいに僕に似ていると思ったかい？』」

「いやいや……実にツマラナクなっていたよ。人助けとやらが大好きだそうでね、私が見た限りじゃ普通に登校して普通にクラスの人たちとお話してたよ。楽しそうにね」

「『困ったなあ』『めだかちゃんなら友達になれると思ったのに』『どうしてそうなっちゃったんだろうね』『熾音ちゃんにはわかるかな?』」

「私にも細かい事はわからないよ。ただ……私と楔くんには想像もつかない事なんだろうさ」

楔くんは手元の知恵の輪をカチャカチャと動かしながら私の言葉を聞いていた。

何を考えているんだろうか。
私にはさっぱり分らない。

「『やれやれ』『それに比べて熾音ちゃんは本当にいい友達だ』『こついうのを以心伝心って言っただよね』」

「ははははは。楔くんがそれを言うところジョークに聞こえるね。それでも嬉しいよ」

「『ひどいなあ』『ところで熾音ちゃん』『休み明けでいいんだけど』『高貴ちゃんを連れてきてもらえるかな?』」

「わかったよ。壊してもらっただね?」

「『うん』『めだかちゃんが昔のままならよかったのに』『困っちゃうなあ』」

楔くんはまったく困って無い風にそう言った。

いつもどおりだね。楔くんは。

休み明けってことは、現在阿久根くんは破壊活動中かな。

楔くんも2日もあれば黒神めだかが何やってるかの実情を知るだろ

うし、ちょうどいいね。

「『ねえ高貴ちゃん』『新入生に黒神めだかつて可愛い女の子がいるんだけど』『知ってる?』」

休み明けの月曜日、校門のところで阿久根くんを捕まえた私は楔くんのところまで連れてきた。

この学校の生徒、私が校門に立ってるだけで恐がるってのはなんなんだろうね。

また今度楔くんと肅清しないといけないね。

「『ああいうおてんばな子は』『僕たちの平和な学園にはふさわしくないんじゃないかなあ』」

「……知りませんが、生徒会長のあんたがそう言うならそうなんでしょうぜ。球磨川さん」

「頼んだよ阿久根くん。いつもどおりに徹底的にね」

「わかってますよ……天宮さん」

阿久根くんはそう言って生徒会室を出ていった。

私は楔くんのほうを向いて口を開く。

「楔くんは、阿久根くんが黒神めだかを壊せると思うかい?」

「『そっだなあ』『僕にはわからないかな』『熾音くんはもうわかってるんだろっ?』」

「そっだね。教えてあげようか?」

「『フライングはよくないからね』『熾音くんはしてるけどさ』『」

それを言われると痛いなあ……

ま、あんまり気にしてないだろうからいいだろう。

さて、私は気になる『過程』を見に行きますか。

もしかしたらな記憶 その貳（後書き）

あとがき

未来の知識も結末だけとはいえ予知を使ってガンガン吸収する「天宮熾音（邪）」は、アップデート機能によってどんどん力をつけてきています。

阿久根くんが驚いたのもそのせいですね。ちょっと強めに叩いただけな感じであり得ないくらいの負荷がかかったんですから。

いい加減、原作でも過去話をやってくれませんかね……
ま、ほどほどに飛ばし飛ばしで行きますけどね。

第参拾参記憶目（前書き）

急激なパワーアップも、事前を知っているとそんなに怖くないものです。

第参拾参記憶目

『十三組の十三人』は本来一年の生徒は選ばれる事はない。

だから名瀬ちゃんや古賀ちゃんにとっては、二年になってやっと正式なメンバーになった事になる。

私は元々名瀬ちゃんの部下という事で協力しているし、理事長もそれで納得している。

ただ、それで納得してくれないのは他の十三組の生徒たち、不穏な動きもあつたのだ。

もちろんそれらの問題は全てねじ伏せてもらったのだが（色々な手段で）。

新しく入ってきた一年で、フラスコ計画を知った人間はそうでもなかったらしい。

つまり、『フラスコ計画』に私が参加しているのが許せないということらしい。

私がフラスコ計画に参加しているということは、『十三組の十三人』ほどに目立たないはずなのだが……

誰かに直接言われたのか、はたまたツイッターで言いふらした奴がいるのか。

どちらでもいいが……傍迷惑な話である。

今日もお昼を回った頃、適当に飯を食って図書室で本を読んでいる

と来客があつた。

6つの鉄球を引きずっている女子生徒だ。
見るからに異常だ。そんなもの引きずってなんになると問いたい。

「4 1 3 6 2 3 2 0 9 3 9 3 8? (お前が天宮熾音だな?)」

「……何?」

その女子生徒は突然に不思議な数字の羅列を喋り出した。

一応私の持つ知識に当てはめてみるが、2進数から16進数までには当てはまらない。

というか全ての知識には当てはまらない。

「十中八九、十三組の生徒なんだろうが……なんのようだ?」

「7 1 3 『1 3 3 2 5 1 3』 1 8 2 5 2 7 5 5 3 5 4 3 5 7 4 2 5
8 9 6 4 5 (なぜ『十三組の十三人』でもないのにフラスコ計画に
参加しているのかは知らないが)」

「……すまないが日本語で頼む」

「5 1 3 7 5 5 3 1 4 2 5 7 5 4 2 3 5 4 3 5 7 4! (私のフラス
コ計画の参加のためにお前を潰す!)」

「ぬっ!」

ドゴン!と。

私が今まで座っていた椅子が机ごと鉄球で潰された。
いきなり襲撃をかけてくるとは危険な奴だ。

襲いかかる鉄球はとりあえず3秒ほど先読みしてかわしてしまおう。

おそらくこの一年生らしき女子生徒が攻撃してきたのは、去年起きた出来事と同じ事だろう。

私だけではなくて風紀委員長の雲仙でも攻撃すればいいだろうに。あつちは現役で『十三組の十三人』なのだから、私よりも可能性があるぞ。

まあ、今は私が襲われているのだ。そんな事を考えても仕方がないだろう。

しかしどうしたものだろうか。

先程から何度か声をかけているが、全く言葉が通じない。

名瀬ちゃんなら何を言ってるか理解できると思うけど……さすがに言葉の意味がわからないと私にはな。

……とりあえず無力化しよう。

私がそう思って先読みすると、なぜか鉄球をはずしていた。

攻撃手段をなくしたのかと一瞬考えたが、なるほどちゃんと意図があったようだ。

「8154098543375645（鉄球での攻撃は当たらないようだな）」

「何を言っているかわからないが、それでスピードアップしたんだろっ?」

「69035086（これならどうだ）」

まったく困ったものだ。

一瞬で私の後ろへ回り込む女子生徒。

『普通』なら一発くらい不意打ちを食らうんじゃないだろうか。
生憎、私は『普通』ではないのでご愁傷さまといったところだが。
後ろへ回り込む事がわかっていた私は、そのまま拳を掴んで背負い
投げの要領で床へ向かって叩きつけた。

「!?!?」

投げつけられた女子生徒はどうやら混乱しているようだ。

まあ、後ろも見ずに拳を真っ向から受け止められてそのまま投げら
れたのだ。混乱しても無理はないだろう。

というか、さつきから暴れてくれた女子生徒の分と、私が床に叩き
つけたのも合わせて、随分と荒れてしまったな。

「4316……097165!（お前……何なんだ!）」

「とりあえず気絶してくれ」

「8……」

フラフラと立ちあがりかけた女子生徒に当て身をくらわせて意識を
落とす。

バタリと倒れた女子生徒を近くの机に乗せて、身元確認をする。

新しく入った十三組の一年はまだ全員分のデータを入れてないから
面倒だ。

この際だから全員分入れておこう。

照会終了。

この女子生徒の名前は雲仙冥加というらしい。

雲仙冥利風紀委員長の姉であるらしい。

あの風紀委員長、前に名瀬ちゃんのおっぱいがなかなかだとか古賀ちゃんもまあまあだとか言いやがったので、一時期大戦争状態にもつれかけたことがあるので苦手だ。

今回はその姉を気絶させてしまったわけだが……

まあ『図書室で暴れた生徒を、図書委員長が鎮圧したのでその生徒の後始末を頼む』というところだろう。

意志の疎通も取れないこの雲仙姉を私がどうすることもできないし、弟である奴に引き取ってもらおう。

私はそう考えて携帯を開いた。

なんで番号を知っているかといえば……ちょっとした理由だ。

別に『喧嘩の果てに友情が芽生えた』という本によくある設定でもない。

『テメーから電話をかけてくるとかどんな風の吹きまわしだよ』

『いや……お前の姉が一年にいるだろう？』

『ああ、オレのお姉ちゃんが何かしたか？』

『私の元に襲撃をかけてきたぞ』

『ケケケケケ！ そりゃ大変だったな』

耳元で爆笑するな。

『これはお前の差し金か？』

『……さうな。オレは知らねえよ』

「まあいい。気絶させておいたから引き取りに来てくれ」

『ケッ。……テメーをボツコにしてくれると思ってたんだけどな』

「何か言ったか」

『なんでもねーよ……オレ直々に行ってやるから大人しく待ってな』

「元から図書室から動く気はないけどな」

電話してしばらくすると、図書室に雲仙が入ってきた。
そして図書室を見回して言った。

「随分と荒れちゃったなあ、図書委員長さんよ」

「荒らしたのはお前の姉だぞ、風紀委員長」

「ケケケ、そいつは悪かったな」

全く謝っているようには聞こえんが、いいだろう。
そもそもそんなことは期待していないのだし。
それよりもだ。

「早くその姉とやらを連れて出ていってくれ。言葉が通じないよう
で意思の疎通もできなかったぞ。一応、怪我はさせてはいないはず
だが」

「そりゃあ苦勞しただろうな。俺のお姉ちゃんは独自に開発した数字言語しか喋らねーからよ。おまけにこっちの言葉も通じない」

「意志の疎通などできないわけだ」

「そういうことだ。まあ、怪我をさせないようにしたのだけには礼を言っとくぜ」

「そうか」

気絶している姉を背負った雲仙は、入り口で一度だけ立ち止まってから出ていった。

何かを言っていたようだが……聞こえなかったな。

唇が動いているのさえ見えればわかったのだが。

騒動を起こしてくれた雲仙姉弟が出ていき、私はため息をついて壊れていない椅子に腰かけた。

そして図書室の床にある『アルモノ』に目を向けて呟いた。

「……この鉄球、どうしようか」

第参拾参記憶目（後書き）

あとがき

私はノーマルだから……とてもじゃないけど数字言語なんて理解できないさ。

ついでに熾音君は『発想力』とかは一般人のレベルだから、理解できないのさ。全くないわけではないんだけどね。

どんな事言つかがわかってても解読できないから意味が無い。

めだかと雲仙弟の他に数字言語を解読できそうなのは……たぶん真黒だろ？ 名瀬ちゃんもできそうな気がする。

王土はできてきおかしくない気がするが……行橋は解読できなくても意志疎通できそうだな。直接答えを見れるようなもんだし。

というか、原作の方に書いてないからよくわからんのだが、めだかとかはどこから通学してるんでしょうね。さっぱりわからん。

この作品、一個一個が短いのだが、何個かにまとめた方がいいだろうか。

意見をくだされば嬉しいです。

というかこの作品、時間の流れが正確に記されていないからキツツイ！

第参拾肆記憶目（前書き）

サークルの班長に、

あと2週間で「10万文字のギャルゲーのシナリオ完成させる」と
言われた。

……いや、締め切り間際までダラけてた俺が悪いんだけどね。
サークルの班長ごめんなさい。10万文字はキツイです。

第参拾肆記憶目

地下六階の図書室において。

『裏の六人』の一人である上峰書子と、私は現在対面中だった。

と、いうのもである。

この地下六階のフロアの片隅の隠し部屋に、私が黒神めだかを探るという計画で得た機密データがあるのだ。

13階のパソコンにまとめて入れておけばいいとも思うが、必要が無くなったデータを入れておくのは無駄であるとしてこんなところにしまっておいたらしい。

当然、私がそこを通る際にはこの『地下図書館』を通る事になるのだが……

そこに上峰書子という住人がいたのである。

顔合わせ自体は初めてではない気がするが、上峰は『裏の六人』だ。この図書館という環境に置いて、なんでもかんでも食ってしまうという異常をどう鍛えてるかは名瀬ちゃんしか知らないが、知識を『食う』という表現でもあるのだろうか？ あったとしても不思議ではないが。ともかく、まともではない事は聞いている。

『裏の六人』の全メンバーが『普通』を嫌っているんだから、まともじゃないこともわかるというもの。

私は『普通』であることに嫌悪感を特に持ったりはしないし、他の者もそうだろう。

この上峰は見た目が模範的な文学少女である分、危険性が高いと言

えるだろう。

「どうもこんにちは。図書委員長の天宮熾音です」

「これは丁寧に。上峰書子と申します」

まあ、私もこんな場所にいる『異常』な人間である以上、そこまで嫌われるという事もない。

しかし、上峰書子に対して気になった事が一つ。
後生大事に抱えているあの巨大な本、異常に関係が無いのならどうして持っているのか。
いささか疑問である。

「5番の書庫に入りたいんだけど、通してくれるかな？」

「どうぞご勝手に。私は興味がありませんから」

それならば私の前からどいて頂きたいのだが。
巨大な本棚によって構成された通路で、私の前に立っている上峰は動く気配がない。
何だ？

「しかしあなたには興味があります」

「駄目だ！ 私は名瀬ちゃんの物だぞ！」

「なぜ、記憶能力が優れているだけで『フラスコ計画』にイレギュラーとして参加しているのか、全然理解できないんですけど？」

「記憶能力が優れているわけじゃない、忘れられないだけだ。必然

的に全部覚えるということになる。だからデータバンクとしての役目を勤めてるんだ」

私からすれば名瀬ちゃんのためのデータ集めにすぎないけどな。

「そうですか。それにしてもよくあんな普通^{ノーマル}がたくさんいる所にいられますね。イライラして本も読めないと思いますが」

「そうでもないけどなあ……」

「理解できませんね。さっさと消えてください」

そう言つて上峰は去った。

正直、攻撃を仕掛けられてもおかしくはないと思っていたが、そこまでじゃないようだ。

というか、偶然会っただけなのにそこまで考えさせられるのは何故なんだろう。

やはり対面している時に感じた変な感覚はそれだけのものだったということなんだろう。

名瀬ちゃんが異常のレベルが違うと言っただけはある。

まあいい。

こちらもちちらで用があるのだ。

せっかく通してくれたのだから、このまま書庫まで行かせてもらおう。

「あのエレベーターに乗れたのなら私たちと同じくらい『異常』なはずですが……名瀬なんかに従っているのが理解できませんね」

|| || || || || ||

貴重な資料を二十冊ほど抱え、私はその書庫を後にした。
既に書庫内で十冊程記憶したので、これくらいの冊数でも問題ない
だろう。

地上ではそろそろ放課後になる時間帯だとは思うが……
仕方ない。理事長のお願いを聞いてあげるとしよう。
黒神めだかは現在どこにいるのかな？

「あ、図書委員長じゃん　外にいるなんて珍しいね」

しばし校内をうろついていると声をかけられた。
その声に覚えがあるので横を向くと、案の定不知火の姿があった。
今日も絶賛食べ歩きの真っ最中であるようだ。

「ちょうどいい。不知火、黒神めだかが今日どこにいるか知ってい
るか？」

「今日はおのお嬢様、柔道場の方に行くつてさ」

「剣道部から陸上部に引き続き……面倒な」

「あひゃひゃ　　図書委員長も大変だね」

全くだ。

あっちへ行ったりこっちへ行ったりと……面倒事を増やしてくれる。
……そういえば。

「ところで不知火、その黒神めだかを除いて唯一の生徒会メンバーである『人吉善吉』はまた行動を共にしているのか？」

「うん、人吉はあのお嬢様がだーいすきみたいだからね。図書委員長も同じだって聞いたけど？」

「私の場合は限らない『愛』だよ。『普通』な一般生徒と一緒にするな」

「そーでしたそーでした。それじゃあたしお菓子買ってくるから」

「勝手にしろ」

一年一組の人吉善吉。

黒神めだかが生徒会長になった後、生徒会の庶務に着任。

本人は『特別』でもなければ『異常』でもなく『普通』である。

それでいて最上級の『異常』である黒神めだかが近くに置いてあるからには注目するべき人物ではある。

……まあ黒神めだかがいるところにはだいたい一緒にいるので、何度か目にはいるが正直どうでもいいというか。

それはともかく柔道場か。

前に名瀬ちゃんと古賀ちゃんと一緒に見に行ったな。

……名瀬ちゃんに名前呼びされてる野郎が一人いたような。

あとは現在部長の鍋島猫美だったっけ。

黒神めだかが何の用で行ったかは知らないが、なんとなく面白そうな予感がするな。

早足で移動して柔道場へ。

視力4.0を生かして、遠く離れたベンチより中を観察する。

……阿久根高貴が中央で黒神めだかに跪いているな。そういえば、同じ中学出身だったか。

私の聴力も視力と同じくらい優れているのだが、他の部活動の音も拾ってしまうためよく聞こえない。

仕方ないので、唇の動きを記憶して何と言っているか当てはめてみる事にする。

……どうやら、新部長の選定に来たようだ。

「さて、私に言わせれば柔道は教わるものではなく学ぶものだ。それゆえに！」

黒神めだかがそう言っているのが妙に耳に入ってくる。

他の音を押しつけるようにして、それがやたらと大きく聞こえる。

まあ、存在感があると一口に言ってしまうはおしまいだが……

黒神めだかは部員全員を相手にするらしく、柔道場の中央で天地魔倒の構えをとっている。

「まずは選定してやろう！貴様たちの値打ちをな。我こそはと思うものから名乗り出よ！全員まとめて一人残らず！私が相手をしてやろう！」

正直言うと結果は見えている。

『予知』を使うまでもなく、これは確實だと言えるだろう。情報では黒神めだかは柔道経験者。

たとえ少量の経験しか積んでいないと言つても、『普通』とは比べ物にならない強さを誇るだろう。

それこそ『柔道』という場に限定していたとしても、その強さは半端にならない。

しばらく様子を見てみると、柔道部員全員を倒し終えた黒神めだかに変わつて、人吉善吉と阿久根高貴の二人が出てきた。鍋島猫美もそれに続いている。

何事か話をした後に、仕合の準備を始める。

「なんだ、あの二人が戦うのか。実力的には確実に阿久根が上のはずだが」

ハンデは人吉善吉は一本取れば勝ち、阿久根高貴が十本取らなければ勝ちではないというもの。

それでも正直無理ではないかと思うが、まあいい。

人吉善吉が勝とうが負けようが、私には何の関係もない。

さて、試合経過は別にいいだろう。

対して面白い事もなく、あつという間に阿久根高貴が九本先取した。しかし人吉善吉は、ここまで一度も反則というものはしていない。

私は一応どんなスポーツのルールも覚えているので断言できる。

まあ、反則云々はともかく勝利をしなければ意味がないのだろうが。

「善吉！」

そこで黒神めだかから言葉がかけられた。
若干グロッキー気味の人吉善吉を心配したのだろうか。

「いついかなる場合においても決して私は貴様に負けるなどとは言わん。だから勝つて！貴様がいなくなったら私はすごく嫌だぞ！困るぞ、泣いちゃうぞ！」

……できれば、黒神めだかなんかの声じゃなくて、名瀬ちゃんの声で聞いてみたかった。

うん。これだけ言われるようになってみたいものだ。
なんとなく、名瀬ちゃんに言われたら気持ちが高ぶり過ぎてしまうかもしれない気がするけど。

私が思いにふける間に人吉善吉が阿久根高貴を倒していた。
双手刈りを使ったらしい。足を引っ張ってやったとはなかなか面白い表現だ。そのまんまだな。

今回はこれで終わりのようだ。
部長を誰にするかは決まったらしく、黒神めだかと人吉善吉が柔道場から出てくる前に、私はその場を去る事にする。

数日後。

「阿久根高貴が生徒会に？」

「あれ〜？ 知らなかったの図書委員長？」

「……一生徒の事など気にする性格じゃない」

「ダメだね〜おじいちゃんに怒られちゃいますよ？」

「問題ないだろう。たかが『特別』が生徒会に入っても」

「だいたい、『予知』でなく『予想』でそうなるのではないかと推測はしていた。

同じ中学、心酔している様子、本人の発言、それらの理由があればそれもありうるとは思った。

「ところで不知火。どこかいケーキ屋か喫茶店を知らないか？」

「ふいつふえふおうふるんへふか？」

「食いながら喋るな。そして何をするかは私の自由だ」

「……タダで頼む気？」

「不知火が満足するだけの食券をくれてやろう」

「あひゃひゃ まいどあり〜」

「名瀬ちゃん！ ショートケーキとチーズケーキとチョコレートケーキはどれが好き？」

「甘いもんは好きだぜ。 糖分とらなきゃ頭が働かないからな」

「古賀ちゃんは？」

「ショートケーキ！ もちろん全部好きだよ！」

「そう思って全種類ホールで買ってきた！ さあ皆で食べよう！」

「やったー！」

「ありがとな」

「礼なんか言う必要ないよ（でもすごい嬉しい）」

「不知火……なんか、いつにも増して大量に食ってねえか？」

「人吉は知らないんだね」

「何をだよ」

「この世の中にはね、少しの親切でいくらでも食券をくれる人がいるんだよ」

「……ひねるかーかなあ」

第参拾肆記憶目（後書き）

あとがき

図書室については、地上と地下に一つずつある事に。

まあ、元々地下のは研究用ですから、地上に生徒用の図書室があってもおかしくないですね。

ってちよつと待て！

名瀬ちゃんが出てねえじゃねえか！

どついう事だコレどついう事だコレ！

次回は登場させよう。

第参拾伍記憶目（前書き）

ちよつと長くなった。

詰め込み過ぎたせいで詰めが甘くなった部分があるかもしれない。

追加：やばい。ミスって返信を削除しようとして感想を消しちまった。だいふくさん、真にもうしわけない。ああいう感想は本当にうれしいです。すいませんでした。

第参拾伍記憶目

「部活動対抗水中運動会？ それを生徒会が？」

「そーそー。あたしは解説役やるんだけど」

「……それを私に言うということは、巻き込むつもりなのか？」

「わかってるじゃん図書委員長。解説すんのめんどいからよろしくね」

……元々、なんとか近い場所で観察しようとは思ってたが。

解説役を？ 私が？ 正直乗り気じゃないが、まあ……

『噂の黒神めだかがどんだけ化け物かわかるいい機会だろ？ ついでに他の生徒からもデータとってくれと助かるぜ』

なんてことを言われてしまったので引き受けることにした。

フツッ。やはり私は名瀬ちゃんには逆らえない男なのさ。むしろ嬉々として引き受けたんだけどね。

解説役だろうが実況役だろうがやってやろうじゃないか。

そして日曜日。

デートにでも出かけたいたい天気だが、名瀬ちゃんは地下で研究中だ。一人でじっくりやりたいと言うので、私も安心して解説役を引き受

けられる。

ところで、第一回水中運動会ということは第二回もあるのだろうか。元々この大会は予算関係の問題で発生したと聞いたが……あったとしても関係ない事を祈りたい。

参加部活数15、それに生徒会のチームを加えて全部で16チーム。1つのチームが3人組なので、計48人が参加ということか。

『さあ貴様達、戦争の時間だ』

まあしかしだ。

マイクを持って生徒達に対する第一声がそれではいかんのではないだろうか。

しかしなかなかきわどい水着だ。

中学の頃は名瀬ちゃんを連れて海水浴にいくにも頑固として拒否されたからな。

顔を隠す事をやめるようになってくれたら皆で海に行こう。決めた。

さて競技の説明。

4つの種目で競い、その総合点で優勝を競う。
ルールとしては次の3つ。

1つ目は各部は3人1組で参加

2つ目は男子生徒にはヘルパーによるハンドの装着。

そして3つ目は……生徒会チームよりも総合点が高かった部には、順位に関わらず予算を三倍に。

どうなのだろう。学校の予算に私財を投じることは確実に計算が狂うことになると思うのだが。

まあ、別にそんな事興味ないからいいか。せいぜい面白い事になっ

てほしい。

「部活動対抗水中運動会！ 第一種目水中玉入れ！ でわでわっ！
これより開始したいと思います！」

解説席として用意された席に座って、前にいる阿蘇短冊が実況しているのを見る。

ちなみにその横には不知火が座っている。

「本大会、実況はわたし放送部部长代行の阿蘇短冊が！ 解説は図
書委員長の天宮熾音さんと」

「この世に知らぬことなし！ 一文字流不知火ちゃん で つす」

「が、お送りします！」

どうでもいいがこのチビ二人、テンション高すぎるだろう。
片方が三年生だというのだから驚きだ。

「えーと、なんだか十三組の天宮さんがこうして要請に答えてくれ
たのはとても信じられないんですけど……」

「なんだ？ 来てはいけなかったか？」

「いえいえいえ！ そんなことないですよ！？」

「別に怒ってるわけじゃないから普通に話せ」

「あー、えー、そうですね。そうします」

ごほんごほんと咳をしてから、阿蘇短冊は普通に話し始めた。

「えー部費増額をかけた本大会ですがまずは第一種目。解説のお二人はどう見ますか？」

そう聞いてくる阿蘇、不知火がハンバーガーを食いながらこつちをニヤニヤと見てきているので仕方なく口を開く。

「別に、玉入れならば得意不得意はそう関係はないだろう。強いて言うならバスケットボール部か」

「え？ バスケ部ですか？」

「んー、図書委員長の言うとおりだね。玉入れなんてみんな小学校以来やってないだろうからね。水中だろうが陸上だろうが玉入れは玉入れだし。バスケ部が強いのは仕方ないんじゃないかな？」

「……………」

なんだ阿蘇、急に黙りこくって。

「なに？」

「いえ、まともな解説してくれるんだなーって……………」

私は仕事はしっかりやるぞ。

名瀬ちゃんにもちゃんとやるように言われてるし、そうしなきゃこの席にいる意味もなかるうし。

「まあ、玉入れには玉入れのテクニクがあるんだけど、そんなの知ってる奴はいないだろうし？」

「そうだな。一応そういうテクニクはあるが……ここで言ったらネタバレというやつだろう」

「まあね。だからあたしが注目してんのは、玉入れがどーとかそーいうトコじゃないんだよねー」

そう言つて不知火が獰猛な笑みを見せる。

「……えーっと……あれ？（なんだこのコ、コワイぞ？）」

「気にするな阿蘇。さっさと実況しろ」

「あ、すいません、そうですね。いつのまにやらもう時間です！みなさん準備はよろしいでしょうか！

位置について、よおおおい！ どん！」

さて競技開始。

先程不知火が言っていたように、玉入れでは技術の差なんてほとんどない。

まあ大前提として、しっかりと地面に足を着いて球を投げるといふ事が必要だが。

この深いプールの底に沈み、重くなっているお手玉を拾い、しっかりと籠の中に投げられるのか。

その答えは眼下に広がる光景を見ればわかるだろう。

「おーっと早くもプール内はアビキョーカンの様を呈しております！ どう見ます解説の」

「あひゃひゃひゃひゃひゃ！ 楽しげ！ 楽しげ！ 人間が右往左往してて面白い！」

「……あの、天宮さんはどう思いますか？」

「冷静に方法を考えて動かないからこうなる」

「はあ、もっともなお言葉ですね」

まあ、既に冷静に考えて動いているチームもいくつかあるにはあるが……

ん？ 生徒会チームは男二人がプールから上がった？

ということはだ。黒神めだかが何かプールの中でやっているということだろう。

お。水底の影が上がってきたぞ。

「おっおおおおおおおっ！ 黒神めだかつ！ お手玉をつ！ 一気に！ まとめて投げ……はっ入ったアアッ！ 生徒会執行部！ なんと一気に20ポイント獲得だあっ！」

阿蘇がやたらとうるさく実況する中、私は菓子を食べる不知火と共に黙って観察する。

黒神めだかの取った手段は単純明快。

一度に投げる数を増やせば、それだけ入る確率も高くなるというものだ。

……まあ普通の奴らでは『20個一気に』というのは無理だろうが。

しかしそんなことより気になるのは競泳部の三人組か。

とりあえず玉入れのテクニク云々は不知火に任せて競泳部を観察する。

誰もが注目を集めるような勝ち方をした生徒会チームとは違い、彼らはあまりにもあっさりとクリアしたために誰にも注目されることがなかったのだ。

3人が3人とも優れた能力を持っているから、黒神めだかと同じ手段を使えば3分の一程度の時間で終わる計算だ。

今でこそ不知火が玉入れのテクニクをマイク越しに口にして、どのチームも同じ手段を取ろうとしているが……その混乱が起こるよりも遥かに先にクリアしていたのだ。

さすがに『特別』の十一組所属の競泳部だけはあると言えよう。

「しかし、これでは早くクリアしたチームに対しての恩恵がないな」

結果的に不知火のせいではほぼ全部のチームが高得点を獲得し、20ポイントを獲得したチームもかなり多い。

これではあまり点数差が開かないのであまり面白くはないのだが……

「それでは続いて第二回戦！ 水中二人三脚です！」

この競技に期待するでしょう。

これならば順位によって明確なポイントの違いが出てくる。

少しは生徒達も必死になって頑張ってくれるだろう。その分生徒がどれだけやれるかというのも把握できる。

特に生徒会、できれば運動部連中のデータも取りたい。

「1位でゴールすれば15ポイント！ それ以下は2位が14ポイント、3位が13ポイント……と続きます！ 最下位16位の0ポイントは避けたいですね！ さあ！この競技はどう見ますか解説の天宮さん！」

「……これは単純に考えれば陸上部が有利だろう。結局は水の中でやると言うだけです。事自体は変わらないのだから。しかし、先程のように生徒会と競泳部が何かをする可能性は大いにあるだろう」

「それは一体……」

「そんなのは見てからの楽しみじゃん！ そうでしょ、図書委員長？」

「そうだな。実に楽しみだ」

身体能力でいえばトップクラスが揃う生徒会か、水中でなら生徒会以上のポテンシャルを誇る競泳部か。

そのどちらかが面白い方法を見せてくれることを期待しよう。

私では想像もできないような方法をやってくれと尚更いい。『予知』してしまってもつまらないからな。どの道過程は見えないのだし。

「図書委員長……？ 阿久根先輩、不知火と一緒に解説やってる奴

知ってますか？」

「いや……図書室は利用した事ないしな……」

「カツ！ 役に立たない先輩ですねホント！」

「何だと！？ キミこそ聞いてきた分際で偉そうに！」

「やめんか！ ……しかし、天宮図書委員長か。十三組で登校する生徒の一人……か。ふむ」

生徒会は黒神めだかは出ず、人吉善吉と阿久根高貴の二人。競泳部は屋久島と種子島の部長と副部長タッグ。
さて、どうなる？

「位置についてよおおおおい……どんっ！」

阿蘇の合図とともに生徒会チームが勢いよく飛び出した。
しかし、これは協力しているというよりは……

「あーっ！ 生徒会がいきなり飛び出したあーっ！ ……って言うかこれは二人で協力しているというより、二人で競争しています！ 何やってんだアこの二人いーっ！」

勢いよく飛び出した生徒会チームは、互いに押しのけながら前に進み始めた。

デメリットしかない進み方ではあるが、個々の能力が高いので無理矢理に前に進めている。

それも陸上部よりも遥かに速いスピードだ。

「いがみ合いながら走っております！ これは醜い！ 悲惨な絵だ！ 会場中に不仲を見せつけております生徒会執行部ーっ！」

「あーひゃひゃひゃひゃひゃー！」

たいてい競泳部はゆつくりと進んでいる。

まあ、情報通りならばそうなるのも無理はないだろう。

二人三脚で「それ」ができるのかは別としてだ。

「おや？ 解説役のお二人が注目している競泳部、大きく出遅れているようですが？」

「あーうん。そりゃ仕方ないよ。さすがのオールラウンダー屋久島先輩でも、種子島先輩に合わせられるのは25メートルがやっとだろうしね」

「はい？」

「見ていればわかる事だ」

「え……と？ おっ……おおおおとこれはああああっ！」

疑問を浮かべながら競技の様子を見ていた阿蘇が突然大声を上げる。それも無理はないだろう。

記録では確かに種子島は男子水泳界で最速の選手であるが、『二人三脚』をしたままでというのなら条件も変わるだろう。

そしてその速度に合わせられる屋久島も大概である。

「きょ……競泳部！ これは！ これは絶対にありえません！ もう危険とかそういうレベルの問題じゃない！ なんと！ 足を繋いだままで泳いでおりますう！」

「男子水泳界の事実上最速のスイマー種子島先輩！ ま、もっともこの場合はたとえ25メートルでもそれに合わせて泳げる屋久島先輩の方を褒めるべきかな？」

「二人三脚をしたままでそういった泳ぎ方を出来る二人のコンビネーションも重要だろうとは思うがな」

「そのまま全チームをごぼう抜きにして 競泳部！ そのままゴールイン！ 15ポイントげつとおおーっ！ 2位は陸上部！ 生徒会は後半遅れて3位となりました！ ここは団結力の差がでたかあゝ！？」

生徒会チームは無理矢理進んでいたからペースが落ちるのが早いのは仕方ないか。

競泳部はそれを見越して初めはゆっくりと進んでいたわけだし。陸上部は良くも悪くもマイペースだったということだろう。

第三回戦はウナギつかみどり。

捕まえた数がそのままポイントになる形式だ。

各部、代表者1名参加の競技だが、またしてもトップは競泳部。13匹ものウナギを捕まえて13ポイントをゲットした。

ちなみに生徒会チームは黒神めだかが競技に出て、一匹も捕まえられずに0ポイント。

そういえば黒神めだかには『動物避け』という性質があった。

元から生徒会の得点を下げることが目的と思われるこの競技だが、おそらくそんな必要はなかっただろう。

そんなことをせずとも、生徒会執行部は大差をつけて競泳部に負けているのだから。

さて最終種目。

これは生徒会が全ての協議を決めるのも悪いので、実況席が決めてもいい事になっている。

私はそこまでする気はないので、競技については阿蘇と不知火に任せるとしよう。

「任されたはいいけど決めきれませんねー。最終競技は何がいいと思います？」

「んー、図書委員長は？」

「不知火に任せた」

「あたしが決めちゃっていいの？　だったらねー……水中騎馬戦にしようか」

そう言った不知火から詳しいルールも合わせて聞く。

基本ルールは同じ。ハチマキを取られるか、騎馬が崩れて水の中に落ちてしまえば負け。

普通と違うのは、『集めたハチマキの数ではなく質でポイントを獲得』という部分。

順位の高いチームのハチマキほど、奪った時のポイントが多いとい

うものだ。

具体的には現在1位のチームのハチマキは16ポイントで、最下位チームのハチマキは1ポイント。
上位チームほど狙われやすいというルールだ。

「それは確かに面白そうだな」

「図書委員長もそう思うでしょう？」

「あはは……じゃあそれでいきましょう」

ということと最終競技。

「部活動対抗水中運動会！ 最終競技は水中騎馬戦です！ 泣いても笑ってもこれで優勝チームが決定します！ 部費増額の権利を得るのは果たしてどのクラブになるのでしょうか！」

競泳部は生徒会チームのハチマキを取れば確実な安全圏へ。生徒会は競泳部のハチマキを取れば一躍トップへ。

不知火が狙ってやったとは思えないポイントルールだ。

見ていた限りは競泳部は他のチームを狙っていくように見えたのだが……黒神めだかがやたらと競泳部を挑発したおかげで、確実にぶつかり合う雰囲気だ。

特に競泳部の1年女子、喜界島が親の仇を見るような眼で黒神めだかを睨みつけている。

さて……

「それではラストバトル！ 位置についてよおーい……どんっ！」

阿蘇の合図で競技開始。

そしてさっそく生徒会と競泳部がぶつかり合った。

「これは……互角でしょうか？」

「んー。つーか足場の問題だね。ただの腕力ならお嬢様の方が圧倒的なんだけど、騎馬を二人で組んでるからね。上手に組まないとバランスは相当不安定なんだよ。これに関しちゃう水中とか関係なくチームワークでは競泳部が一步リードって感じかな」

「それよりも問題は、どのチームもあの2チームの戦いに注目し過ぎている事だな」

「はい？ それって……」

まあ、こつそりと動き回ってる柔道部が何をしてるかを見てればわかるさ。

真剣勝負も大事だとは思うが、これが多くのチームが参加している大会だという事を把握しておくべきだったな。

「く……黒神めだか生徒会長！ 水の！ 上に！ 立っている！
だつとおおーっ！？」

しかし、相変わらず『異常』な存在だ。

たったひとつのヘルパーの上に立ってのけるとは、どれだけのバランス力が必要か。

いや、古賀ちゃんなんか天井だって歩けるんだから今更だが、これはそれ以上に凄まじいだろう。

本来は重さに耐えられないはずなのだ。

そしてそこからさらに競泳部の騎馬に飛びかかるために、足場とな
っているヘルパーに体重をかけなければいけないはずなのだ。いく
らバランスが良くても、そこまで不安定な足場で数メートル先の騎
馬に飛びかかるなどというのはまさしく「異常」なことだ。

「おおおおおっ！　これは！　両者同時に着水だあーっ！」

「うん、でもその前にお嬢様がいい事言いながらちゃっかり競泳部
のハチマキを奪い取ってたね」

「……え〜と、この場合はどういう判定になるんでしょうか？」

「失格の条件は『水の中に落ちるか』『ハチマキを奪われるか』の
二つだけだ。つまり　」

「浮かぶヘルパーの上はまだ水上だし！　故に最後の攻防は有効！」

「で……では生徒会執行部は見事16ポイントを獲得！　総合得点
トップですね！」

今回は色々な事があったけど、面白そうな事はこれくらいか。

黒神めだかの「異常性」を目の当たりにできたのは良かったな。名
瀬ちゃんともいろいろと話せそうだし。

古賀ちゃんあたり、対抗意識燃やして水の上に立つことにチャレン
ジとか……しそうだな。

この水中運動会、結果は先程の柔道部の動きを見れば一目瞭然だろ
う。

いくら生徒会が競泳部を倒してトップに立っても、もしも他のチー
ムの得点を全てゲットするようなチームがあれば敗北は必至である
とどのつまりは

「優勝は鍋島猫美率いる柔道部チーム！ おめでとございます！」

解説役の仕事はこれで終わりだな。

不知火から報酬の有名店の和菓子セットを貰ったし、名瀬ちゃんのところに行こうつと。

名瀬ちゃんのところに向かうために時計台の一階へ。

『拒絶の扉』を通り抜け、4階で研究中だろう名瀬ちゃんの元へ向かう。

エレベーターが使えるばいいんだけど……生憎と13階までの直通しかない。

仕方ないから和菓子をあんまり揺らさないように、フロアを抜けて階段を下りていく。

そして2階から3階への階段を下りている時、偶然に一人の『十三組の十三人』とすれ違った。

行橋未造。

験体名は『狭き門』、名瀬ちゃんによれば『心を読める異常』を持っているとか。

そんな存在がなぜここに……とも思ったが、彼はただ地上に向かっているだけだろう。

彼は一人だけではエレベーターの暗証番号を抜けられないはずだし。

「どうもこんにちは、行橋先輩」

「こんにちは天宮くん、手に持ってるのは……和菓子かな。美味しそうだね」

「あげませんよ？」

「いやいや、別にいらないよ、君の渡したい……名瀬に渡したいんだろう？」

どうにも心を読まれるというのはやりにくいな。

どの程度の事が読まれるというのかもわからないし、感情というもののまで読まれるのは筆舌しがたい気分だ。

私の名瀬ちゃんを愛しているという感情まで伝わるのだろうか。：

…まあ、ないだろう。

「その通りですよ。私は名瀬ちゃんが大好きですからね。それでは名瀬ちゃんのところに行くので」

「本当に名瀬の事を慕ってるみたいだね」

「そりゃもちろん」

「うんうん。まあ今後がんばるようにとっておくよ」

……何をだ？

「知らないかもしれないけど、君に興味を持ってる人間は少なくなんだぜ？」

「……私は名瀬ちゃんしか好きになれないぞ」

「それじゃあボクは用があるから。それじゃあね！」

最後の最後に無視していった。

まあ、こちらも用があるから好都合なんだが。

私なんかに興味持たれても困るんだがなあ……名瀬ちゃんが興味持ってくれるなら万々歳だけど。

「ま、いいか」

今日の運動会の様子を報告しながら名瀬ちゃんとお茶しよう。
うん、それがいい。

おまけ：裏

「王土に言われたとおり会ってきたよ」

「そうか。それでどうだった？」

「やっぱり『フラスコ計画』に参加してるだけあるね。心を読もうとするのにかなりの時間がかかったよ」

「時間がかかったという事は、一応は読めたのだろう？」

「なんというか、発信する情報量が多くてね。チューニングするのにかなり時間がかかるんだ。それこそ数人分の思考があるみたい」

ノイズの量がやたらと多いんだよね」

「おそらくは奴の記憶能力とやらが関係しているのだろうな。偉大なる俺からすれば矮小な『異常』ではあるが、『フラスコ計画』の全てを記憶しているというのは役に立つかもしれない」

「えへへ。王士、また面白い事を考え付いたんだね」

「わかるか行橋？　しかしあの男は名瀬ごときに夢中になっている。全くもって惜しい。ま、来るべき時を待つとしよう」

「お前が待つなんて変わってるじゃないか」

「王には時として待つべき時もあるのだ。言わずともわかると思うが？」

「えへ！　そうだったね王士。気をつけるよ」

第参拾伍記憶目（後書き）

あとがき

最近「SIREN：NT」をやったんだけど、アレだ。そこまで怖くなかったという。ビックリはあったけど。沙耶の唄に慣れると、あの程度のグロなら許容できるようになる。ちなみにこの作品には『グロ』はありません。

ていうか人吉くん……めだかにベタ惚れでしかもめだかからも好きって言われてるのにもかかわらずフラグたてるのはどういうこと？
ねえ？ 不知火にまでフラグ立てたよねえ？ ねえ？
ま、人吉くんには球磨川相手に散ってもらいましょう。南無。

どうでもいいけどG線上の魔王をやったら泣いてしまった。胸にジーンときたよ。あとブックオフで『バイトでウィザード』ってのを全巻まとめて買ったんだけど、アレ結構名作だと思うんだけどな。一冊百円で買えちゃうんだよな。

第参拾陸記憶目 図書室編（前書き）

オリキャラが増えても問題ない。
だって生徒会との橋渡しが必要だから。

第参拾陸記憶目 図書室編

目安箱の管理。

それが生徒会庶務たる人吉善吉の仕事の一つであるわけだが

「なんか、前の秋月先輩の子犬探しの時以上に異彩放ちまくりな投書が……」

目安箱を前で人吉善吉は大きく溜め息をついた。

「図書委員?」

「そうそう。前の水中運動会の際に不知火と一緒に解説役やってた、十三組の図書委員長からの投書。なんか豆粒みたいな字が手紙いっぱいに書いてある」

「……人吉くん、どうにも信じられないけど、本当にそんな風に書いてあるのかい?」

「んじゃ見てみます? マジですから」

はい、といった感じに人吉善吉は阿久根高貴に投書を手渡した。

それを読んだ阿久根と、同じく読んだ喜界島もがなは思わず口を開く。

「これは……さすが十三組生と云えばいいのかな？ 図書室がどうなってるのかは知らないけど」

「黒神さんはどうなんですか？ 図書室に行ったりとか……」

「いや、めだかちゃんは……」

「うむ、別に本など家にいくらでもあるからな。わざわざ図書室に行くほどの事もなかったし」

そう言つて黒神めだかは紅茶の入ったカップを傾ける。

「どうするめだかちゃん？ 今日の投書はこれだけだぜ？」

「そうだな……ちょうど業務仕事も一息ついたところだ。図書室に興味もわいた。さっそく図書室へと出向こうではないか」

〓 〓 〓 〓 〓

お昼休み、図書室にて。

「……ん？」

適当に昼飯を食べて、図書室へ帰ってきた私は、入口の扉の前でふと首を傾げた。

図書室の中が少々騒がしい。

この図書室の利用者はそんなに多くない。

だが、一応いるにはいるのだ。

それは主に文系の生徒だったり、12組の生徒が学術的、芸術的資料を求めにくることもある。

そして、ほとんどの生徒は本を借りれば図書室を出ていく。

まあ図書委員長である私の邪魔にならないように、静かに本を読み続けるモノ好きもいるのだが。

最近は静かに本を読んでいた1年3組の生徒を一人図書委員にしたが、問題があっただろうか。

任命した古屋素子という女子生徒はかなり大人しい性格だと判断したのだが。

とりあえず中の様子をうかがう事にする。

「や、やめてくださいーい。図書室では静かにしなきゃダメですよー」

「あー!? こんな誰もいないようなところどうしようが俺達の勝手だろ?」

何か言い争うような声が聞こえるが。

「うう……」

扉を開いて古屋が出てきた。
肩を落として微妙に泣いている。

「どうしたんだ？」

「ああつ！ 委員長！」

古屋は推定30センチほど跳びあがって驚き、物凄くうるたえて釈明を始めた。

首をブンブン振っているため、両耳の上で結っている髪の毛の束がものすごい揺れている。

ふと、名瀬ちゃんが長髪になった姿を妄想してみる。

……意外と似合うかもしれない。ふふ。

「ベベベ別に私が悪いんじゃないですよ？ ちゃんと仕事してたら急にあの人たちが入ってきて私はちゃんと注意してたんですけど聞いてもらえなくて追い出されてしまってますね」

「別にそれはいい。そういう面で期待してはいないから」

「がーん！」

ショックを受けて地面に膝をついた。

それは放っておいて図書室の中を見る。

……いかにも柄の悪い連中が菓子やら何やら食べたり飲んだり煙草を吸ったり。

大方一年生だろう。

現在学校にいる連中の中でそんな事やろうとする生徒は、私の事を知らない連中くらいだろう。

去年そう言う事やってきた奴は問答無用で叩きだして風紀委員に売

り渡した。

あの後、雲仙に叩きのめされた連中はどうなっただろうな。

さて、とりあえず奴らを追い出すか。

すぐく邪魔だし。

「そんなのもつたいたないじゃーん！　せつかなんだから有効活用すればいいのに」

……はあ。

「不知火か。いったいどこから現れた」

「図書委員長が声かけたところから」

「つまり初めからか」

「そーとも言っね」

「なななななんですかあなたは！」

不知火を指差して騒ぐ古屋。

どうなのだろう。確か人を指差すのは失礼にあたると思うが。

「古屋の同級生だ」

「こんなに小さいのに！？」

というか一年生ならそれ以下はいないはずだが。

中学生や小学生が高校の制服を着ているはずがないだろう。

「それで不知火、こつちの馬鹿は無視していい。有効活用とは？」

「だからさー。困ってるなら投書すればいいじゃん？ おじいちゃんから色々頼まれてるんでしょ？」

「……正直この程度で呼ぶというのも癪だが」

片付けも色々とやってもらえれば楽であるし。
言えばそれくらいはやってくれそうなものだが。

「……あのー」

「なんだ古屋」

「投書ってことは、あの目安箱ですよね？」

「それがどうかしたか古屋。何か悩みでもあるのか？」

人に相談するような悩みなどない私よりは、『普通』な古屋の方が
そう言った事を書きやすいのではと思うが。
いかにも悩みが多そうな性格をしていると判断するが。

「でもあの、できれば図書委員を増やしてほしいと……」

「却下」

「なんでですか!？」

「人数が多くて邪魔なだけだ」

元々、古屋の採用理由が図書室で静かに読書をしていたからなのだ。私が不快に感じる雰囲気の間が増えて騒がしくなるなら、そんな者はいらない。

「あ、じゃあ新しい本の入荷とか……」

「そうだな。それでいいか。古屋が生徒会連中と一緒に入荷する本を選ぶって事だな？」

「委員長は手伝ってくれないんですか!？」

「今は他に読まなきゃいけない物があるからな。新しい物を読んでいる暇はない。買った物の目録は記憶しておくから問題はないぞ」ちなみに読まなければいけない物というのは地下書庫の資料だが。まあ、新しい本を図書室に入れるにしてもそう数があるわけでもない。

題名と分類だけ覚えておけばなんとでもなる。

「それじゃあ不知火……む。消えたか。相変わらずいつの間にかいなくなる奴だな」

「あ、本当だ。いつのまにかいないです」

「まあいい。それじゃあ適当に悩みを書いて投書して来い」

「わかりました!（こっさり人員不足も書いておこう。うん。静かな人を見つければ大丈夫だろうし。あ、あとそれから……）」

古屋は声を上げるなり廊下を走ってどこかへ去っていった。

やはり、あれはあれで便利だ。
雑用を任せておけば失敗はしないし、こちらが本を読む時間が増える。

「……しかし、現在図書室を使えないというのは困ったな」

一応読むべき本が図書室にも置いてあるのだが。

勝手に問題を解決してしまつては計画破綻であるし。

……仕方ない。あとは放課後まで名瀬ちゃんとお喋りでもして時間を潰そう。

あくまで仕方ないから行くだけで、嬉しいわけじゃないんだからな。

「」

さあいざ地下研究室へ！

〓〓〓〓〓〓〓

放課後、図書室への道中。

生徒会メンバー4人と古屋が投書について話し合いながら歩いていた。

「しかし、本当にこれって古屋が書いたのか？ 委員長って奴が書いたとばかり思ってたんだが……」

「はい！ 細かい仕事を丁寧さがモットーですから！」

細かく書き過ぎてある投書を見ながら善吉が問うと、古屋元氣よく答える。

本を読ませたり仕事をやらせたりしていれば大人しいが、基本彼女は元氣ハツラツなのだ。

「細かすぎると思うけどね……」

「うむ。よい心掛けではないか古屋同級生。私も応援するぞ」

「ところで、その図書委員長さんはどこ？」

「委員長はたぶん書庫だと思いますよ」

阿久根とめだかの後に続いた喜界島の疑問に古屋はすぐに答えた。しかし、それを聞いていた善吉たちは首を傾げる。

「書庫？」

「はい。図書室と同じ階にあります。廃版になった貴重な本も置いてあるんですよ」

「へえ。ところでなんでそんなところに？」

「もちろん本を読んでもらうのだと思います」

自信満々にそう言った古屋に、喜界島が少しだけ眉をひそめて聞いた。

「……問題あるんじゃないの？」

「書庫には今のところ問題が発生してませんから！」

会話が微妙に成立していない気がする。

そんな中でめだかが言う。

「ふむ。それではまず書庫の方に行くでしょう。話を通しておくためにもその方がよいだろう。実際に会ったことはないが、天宮二年生も十三組だ。おそらくは変わった方だろう」

「……まあ、確かに委員長は変わった方ですけど」

「とにかく古屋、投書を見る限りはその図書室の中にいた連中を追い出してほしいってことか？」

「そうですね。委員長は静かに本を読めない生徒は図書室から追放って言っていましたし」

「……すげーこと言うな。その委員長」

過激な発言に思わず引く善吉。そういうのに慣れてはいるが別に慣れてるからどうこうといった物ではない。

そんなこんなで会話を続け、彼らは書庫への扉を開けた。

そこはまさに書庫だった。

いかにも古そうな本が箱詰めになれ、天井にも届きそうな本棚がいくつもあった。

若干けむっぱいところであるが、換気や掃除はされているらしくそこまではない。

そして、奥の方。

窓からの日の光が直接当たらない位置に、椅子に座って本を読む天宮熾音がいた。

第參拾陸記憶目 圖書室編（後書き）

あとがき

オリジナル編開幕。

これがいかなうな評価をされるか、感想が待ち遠しいであります。不知火の発言も一般生徒にバレないように押さえてますから大丈夫ですよね。

正直、オリキヤはもういらぬ氣もしたが、こつしなないと生徒会との会話が成り立たない。

図書室内限定＆日常編限定のキャラなのでそんなに出演は多くないと……と思う。もっと出した方がいいかな？

あと、実は投書したのは熾音くんではなく古屋さんだったという才子。名前は図書委員の名目だから委員長の熾音くん。

名瀬ちゃんが出せないiiiiiiiiiii！

ぐあああああああ！

出したくても出せないこの苦しみ。だって原作の中に絡ませられないんだよ!?

ならどうするか……日常編挟むか。うん。

オリキャラの設定なんか考えてみた。

名前：古屋素子

所屬：一年三組

役職：図書委員

性格・外見：真面目な性格の、眼鏡をかけた文学少女。本を読んでいけば大人しい。

属性：微M

備考：読書が好きで図書室で本を読んでたら図書委員にされた。

微Mのため、逆らうことができずに図書委員になった。

熾音くんに命令されてどことなく喜んでいる。

実を言うと、八代先輩を登場させる予定だったという設定が無きにしも非ず。

何かしらで惚れたということにして、原作第一巻の事件で告白騒動。しかし名瀬ちゃんに惚れているゆえ熾音くんが断る。

しかし男らしい八代先輩が「惚れさせてやる」宣言 図書委員に。みたいな。

いったい、どっちがよかったんだろうか。

実に悩みどころである。

現在検討中。

追伸：FF14買った友達が「死んだ！俺死んだ！」と言ってF

F7をやり始めた。

何があっただろう。

第参拾?記憶目(前書き)

閑話のような閑話でないような。

第参拾?記憶目

放課後、図書室と同じ階の一般書庫。

私は本を読んでいた。

生徒会がこの場に来ると予定されているので、今回は普通に発売されている本だ。

推理小説を読むというのはなかなか楽しい。

読み終わるまでは犯人側からないからな。『予知』や『知識』頼りではなく、自分の思考で犯人を予想するのもいいものだ。

……名瀬ちゃんのために、恋愛小説などを今度買ってみるのもいいかもしれない。

そんなこんなでしばらくすれば、私の耳に廊下をこちらへと近づいてくる数人分の足音が聞こえてきた。

生徒会の面々を連れて古屋が戻ってきたのだろっ。

まあいい。

ギリギリまでは私も本を読むだけだ。

書庫の扉が音を立てて横に開き、私は意識を少しだけそちらに向けた。

先頭に古屋。後ろに黒神めだかと続き、その後ろには人吉善吉と阿久根高貴、そしてあの水中運動会の後から生徒会に入ったという喜界島もがながいた。

生徒会メンバー全員でお出ましか。

「委員長、生徒会の皆さんを連れてきました！」

「見ればわかるから一々言わなくていい」

「が〜ん！」

またなにやら打ちひしがれてる古屋はおいといてだ。

生徒会メンバーのほうに目を向ける。

書庫が珍しいのかどうかは知らないが、書庫の中を見回している。黒神めだかは……何をしてもなくこっちのほうを見ているか。

「天宮二年生、古屋同級生から事情は聞いた。現在、図書室を一年生が数人不当占拠しているらしいな」

「間違ってはいないな。正直邪魔だ。生徒会諸君には彼らを何とかしてもらいたい。手段は問わないよ」

「……それはどういうことだ？」

「単純に追い出してもよし、改心させて読書好きにするもよし、とにかく図書室内が静かになればそれでいい」

「ふむ。それで手段を選ばないとそういうことか」

「そのとおりだね」

〓
〓
〓

「古屋、書庫でこれなら図書室なんてすごいだろ？」

「何がですか？」

「本の量だよ。あつちのが多いんだろう？」

「それはもちろんですね。でも本が好きですから」

古屋が説明役となって、生徒会メンバーからの問いに順番に答えていく。

いくつか答えになってないとか聞いてはいけない。

「でもそんな人たちが図書室にいて大丈夫なの？」

「大丈夫って？」

「だって、カウンターにパソコンくらい置いてあるんじゃないの？」

「いいえ。その心配は全く要りません！」

喜界島の問いに胸を張って答える古屋に、阿久根が口を開く。

「へえ？ その理由は？」

「だってパソコンなんてありませんから！」

「……貸し出しとかやってるって聞いたけど、どうしてるの？」

まさか予算不足で紙に書いてるとか……と心配するが

「委員長が全部覚えてるんです！」

「「「え！？」「」」

「あんなにたくさんある本一冊一冊の書籍番号を全部覚えて、誰が何の本を借りて言ったのかも全部覚えてくれるんです。だからパソコンなんて必要ないんです！　すごいでしょう！」

なぜか自分のことのように言う古屋から目を離し、彼らは黒神めだかと話す図書委員長、天宮熾音の方を見た。

彼は黒神めだかを前に一切物怖じせずに普通に話し合っていた。彼らが、13組つてのはみなすごいんだろうかと思ったり思わなかったり。

〓 〓 〓

「後は古屋からいくつか悩みがあるらしいから聞いてくれ」

「天宮二年生からは何もないのか？」

「私には人に相談するべき悩みなどない。本当はこういう問題の対処は風紀委員に任せるものなんだが、あの組織は嫌いだからな。その点、生徒会に任せたほうがいいと判断した」

「……あなたならば自力で解決できたのでは？」

「生憎とまともな解決法を『思いつく』ことができなかったのですね。その点、生徒会長ならばと判断したわけだ」

「評価してくれているようでありがたいですね」

「それならば、その評価に値する働きを見せてくれるかな？」

「もちろん。私は24時間365日、誰からの相談でも受け付けると約束したのだ」

「それはなにより……なら、早速図書室に移動するか。古屋？」

「はい！ 私が案内します！」

「うむ。皆もついて来い！」

そんな感じのやり取りをして図書室へと向かう。

古屋はやたらと元気よく生徒会の面々と話しているが、生徒会のメンバーはそこまでテンションが高くなさそうだ。

まあ、誰に迷惑かかってもどうでもいいからほっとくけど。

先頭を黒神めだかと並んで本を読みながら私が歩き、それに続いて古屋と生徒会メンバーが歩く。

本しか見ていなくても、校内のいかなる場所も記憶している私には問題ない。

いや、本を視界の中にさえ入れていれば熱心に読みふけることも必要ないのだが。

黒神めだかという人間に話しかけられたくないというのが大きいのか。

私にとってこの女は毒だ。

いや、普通に接する分には問題ないだろう。

ただ、すべてを記憶してしまう私にとってこの女のやることなすこ

と全てが毒となりうる。

強いて言うならばその思想か。

だが、私はそれも承知して理事長からは仕事を請けている……が、やはりままならんものだ。

今のところわかったことは……そうだな。

前からわかってのことではあるが、黒神めだかの理想は「名瀬ちゃん」の思考」の逆側にある。

それを放置してこのまま、もしも生徒会が邪魔になるのなら……ありえないことだとは思うが、やはり敵となりうるのだろうか。今はわからない。

予知を使うべきかそうではないか。それすらの判断もままならない。

……思考が逸れたか。

今はただただ仕事に集中しよう。

黒神めだかがいかに鎮圧するか、間近で見たことはなかったからな。言葉だけではなく何かほかに感じるものがあるかもしれない。

たとえ毒になるとしても、それを観察して記憶するのが仕事なのだから。

さて、何事もなく図書室に到着。

ここから仕事をしてもらおうというわけだが……

「いいいい委員長！　こここれはどういうことでしょう！」

「さすがに完全に理解はできんが……」

「物の見事にもぬけの殻だな。天宮二年生、古屋同級生」

「そんなことより地面に陥没があったり、机が真つ二つになつてることが気にしろよ！」

「いや、その程度なら前にもあつたからな」

「「あつたの!?!」」

図書室なのに!?!とかいうツツコミは置いて中の様子をもう一度しっかりと見る。

散らかした跡や菓子類の袋などが散らばっているのは正常か。ただ、本棚が倒れていたり、机が真つ二つになっていたり、地面に何かを力強く叩きつけたような跡があるのはおかしいだろう。心当たりは数人あるが、ここに来る可能性がある生徒の中で、あたりを破壊しながらここを占拠していた連中を連れて行くような奴は一人しかいない。

「おそらくは風紀委員の連中だろうな」

「そういえば、風紀委員長が変わっている」と過激になったと聞くね」

私がつぶやいた言葉に阿久根が答えた。

あのメガネの一年生か。

おそらくはここに来てあの生徒たちを見て取り締まっていたのだろう。

……面倒なことをしてくれる。

「とりあえず、片付けるのを手伝ってくれないか？」

「ああ、もちろんだ」

「じゃあ男二人は本棚を直してくれ。古屋は本を集めるのを手伝ってもらえ」

「うむ、善吉も阿久根書記も喜界島会計も頼んだぞ」

そんな黒神めだかの声で生徒会メンバーが動き出す。

これでは予定が狂ってしまう。

まあ面倒がつぶれたのはよいとしてだ。

……ふむ。古谷の悩みとやらに私も付き合ってやるか。

そうしなければ生徒会を呼んだ手間が無駄になってしまうからな。

あとは……そうだな。

話でもしてみるか。

アンケート形式でも質問形式でも、必ず答えてくれるだろうし。

……まずは片づけを済ませてしまおう。

第参拾?記憶目(後書き)

あとがき

人吉イ……名瀬ちゃんに修行つけてもらえとか超羨ましいんだけど!?

俺だったら一年中でもつけてもらいたいくらいです!

というか原作……たった一週間で目を閉じて戦闘可能になるとかは
っちゃけてるな。

しかもそれやってるのが人吉とか……

ところで外伝も一緒に投稿してみますか。

がんばって書いたけど微妙に設定が違うかもしれない。

都城王土in学園都市（前書き）

なんとなく思いついた。

今回はとあるの二次創作も同時執筆だったし仕方ない。

都城王土inn学園都市

「……ふん。今日も予測は変わらず晴れか。快適ではあるがつまらんな」

都城王土の朝は早い。

それは、彼が毎日欠かさず高所から日の出を眺めるからだ。

それは、立ち昇る太陽を見つめる事で自分の姿を確認するため。

彼は自分の事を偉大だと思っているし、その自分に匹敵するのは太陽しかあり得ないと思っている。

故に、彼にとつての太陽は常人にとつての鏡と同じであつた。

この学園都市においてもそれは変わらない。

自分に対しての評価が不当な物ではあると思つたが、彼はそれを仕方なしと受け止めた。

ただの研究員や機械程度では自分の偉大さを理解できないと考えたのだ。

彼は「人身支配」と呼ばれる「発電能力」を使う電撃使い（エレクトロマスター）である。

少なくとも、研究員にとつてはそう呼称されていた。

そして彼は一応「大能力者」として扱われている。

電磁波を発して人間の駆動系に干渉し、人の体を操る能力を持つ彼がなぜ「超能力者」ではないのか。

それはただ単純に出力が足りないからである。

つまり、電流による直接的な攻撃ができるほどの出力が無いのだ。

単純な出力でいえば、「異能力者」にも劣るだろう。

それでも彼が「大能力者」なのは、その能力を人の体を操れるほどに操作することができる点にある。更に、条件さえ整えば洗脳すら可能なのだ。

さらに、電磁波を磁力の用に干渉させて機械すら押しつぶす事が可能である。

どんな人間にも電気は多少なりとも流れていて、彼はその微細な電気と、それが関わる神経に干渉して他人の体を動かす事が出来るのである。

これは、実を言えば「超能力者」のとある少女にも不可能だったのだ。

故に「大能力者」の扱いなのである。

もしも彼に数万ボルトでも電撃を放つ力があつたのなら、文句無しで「超能力者」だっただろう。

その場合、彼に今の力が備わっていたかはわからないので、あくまで仮定の話ではあるが。

日の出を見た後、彼は朝食を取るために街に出た。

彼が住んでいるマンションの一室にはキッチンもついているが、彼が料理などという物をするはずがない。

それは都城王土にとって、自分ではなく他人が彼のためにすべきことである。

そんなわけで彼は近くにあるファミレスへと入っていった。

別に、食べる物まで高級品でなければならないという考えはないのである。

ところで、彼は長点上機学園に在籍している。

「人身支配」という通常の「電撃使い」では出来ない希少な能力と、その能力の進化の可能性を開くためだ。

本来学校になど行かないだろう彼が登校するのは、常に進化し自らの限界を超え続けるという考えがあるからだ。

それは常に上を目指し続けなければ王たる自分ではないという考えでもある。

そして学校を終えた彼は今日も退屈そうに街を歩いていた。

そんな彼に近づこうとする人間はいない。

彼が人を近づけさせない雰囲気を纏っているため、歩いている現在も近寄れないでいるのだ。

彼が常に発している電磁波が影響しているのか、近くの動物ですら逃げ出していく。

つまるところ、この学園都市において彼は孤独なのだ。

そんな彼が、唯一興味を持つ人物がいた。

初対面では彼女はただの凡人であり小娘であつた。

彼が彼女と会つたのは彼女がレベル3だつた頃、たまたま文句をつけてきたスキルアウトをあしらっていた時である。

「てっ……てめえ……っ！」

「ふん。偉大なる俺を舐めるような真似をしてその程度か？」

「このっ！ てめえだつて電撃使いだろうが！」

「む？」

後ろで何とか立ち上がった一人の不良がバットを振りかぶって叫ぶ。発言からすれば彼も『電撃使い』であるらしいが……

「これを解除できたということはレベルも1から2はあるのだろうな。しかし王に武器を振り上げる無礼はいただけん」

「黙りやがれっ！」

「王に反旗を翻すか……『平伏せ』」

「っ！？！？」

グシャツという音を立てて、コンクリートの地面にヒビが入るほどの勢いで突然に倒れ付す電撃使いの男。

その衝撃で、叩きつけられた男の血が周辺に飛び散った。

そして、その血が都城王土の靴に、たった一滴ではあるが飛び散ってしまった。

そのことに気付き、彼は不機嫌そうに顔を歪ませた。

「お前、我が所有物を血で汚すとはやってくれるな」

血がついたのは自分のせいだが、そのようなことを彼は気にしない。

「その死を持って償ってもよいぞ、この俺自ら死をくれてやろう」

そう言っただけで彼が少し目線を動かし、すぐ傍にあったパイプや鉄骨などの廃材に目を向けた。

するとすぐに、平伏している彼らの上に大量の廃材が浮かび上がった。

「ひっ！？ うっ動かない！ 何で！？」

「や、やめる！ やめてくれ！」

「おいマジかよ畜生！」

それを見ながらも、彼らは体を動かすことができない。

その場での絶対的な強者は都城王土であり、彼らの体の支配権も彼にあったのだ。

故に、彼らは自らの上に大量の廃材が浮かび上がるのを恐怖しながらも、逃げ出さずに見続けるしかない。

そこに全く予想外のことであるが、一人の少女の声が響いた。

「ちょっとあんた！ やめなさいよ！」

それを聞いた王土はそちらに意識を向け、誰が邪魔に入ったのかを見た。

そこにいたのは一人の少女。気の強そうな雰囲気をしているがただそれだけだ。

「ふむ。王の邪魔をするとは無礼だが……そうだな、お前の言うとおりやめてやろう」

そういなり彼は電磁波で操っていたことをすべて解除した。

すなわち男たちの体を動けないようにしていたのをやめると同時に廃材を浮かしていたのもやめたのだ。

すると当然、廃材は男たちの上に落ちることになる。

廃材同士がぶつかりあったことや地面にぶつかったことで、その場に甲高い金属音が鳴り響いた。

王土の前に立つ少女はそのことに驚き硬直し、ただただその場に佇んでいた。

「どうした？ そんなに驚いた顔をして。こいつらは元々俺に攻撃を仕掛けてきたのだぞ？ どちらが悪かは明確だろう」

「でも、限度つてものがあるじゃない！」

「限度？ そのようなものは俺にはない。それよりお前、心配しているようだが奴らは逃げたようだぞ？」

「え……」

ふと見れば、廃材の下には人の姿はない。

王土が支配を解いた途端、ギリギリでなんとか逃げ出したようだ。

元より男たちに興味のなかった王土は、それを黙って見逃した。

今はすでに彼らに対する興味が失せて、目の前の少女に対する興味しかなくなっていたのだ。

彼自身が発する電磁波が強すぎるせいでほとんど紛れてしまっているが、確かに目の前の少女も電撃使いであるとわかるくらいの電磁波を発していた。

「まあそんなことはどうでもいい。それよりお前はいつまで俺の前に立っているつもりだ？」

「は？」

「『跪け』」

「ぐっ!？」

その言葉を彼が発すると同時に、少女は彼に対してひざについて服従の姿勢を取らされた。

そこで彼女は自らの体に干渉しているのが、目の前の男の発する電磁波であると気付くことができた。

それはすなわち彼女がひたすらに努力をしているため、自分の能力でもある「発電能力」を詳しく学んでいたからに他ならない。

よって、先ほどの電撃使いの男よりも早く自分の置かれている状況を把握した。

「この、いい加減にしなさいよ……!」

「ほう。立ち上がるか。なるほど力はあるようだが……次は本気で行くぞ? 『平伏せ』」

「がつ!? つ!? ……!？」

相手からの電磁波から制御を取り戻してみれば、今度はそれ以上の電磁波が彼女に襲い掛かった。

苦悶の声を上げて彼女は地面に倒れ伏し、そんな彼女に王土はゆっくりと近づいた。

「どうした? 先ほどの威勢がまるでないではないか。もう少し努力とやらをしてみるがいい」

「……っ!」

近づいて髪を掴んで頭を持ち上げられ、彼女は王土を睨みつけた。

彼女にとってはここを通ったのは全くの偶然なのだ。

たまたまできた用事で、たまたま近くを通り、たまたま発せられたたたきつけるような音を聞き、その音の方向から発せられる強力な電磁波を察知しただけ。

そして悲鳴まで聞こえて近づいてみれば、そこには強力すぎる電磁波を発する謎の男が見るからに不良に見える者に過剰な暴力を加えている現場。

巻き込まれた彼女には何の落ち度もない。

故に彼女は、理不尽な暴力を振るう目の前の男に頭にきていた。

自分の努力を嘲笑われたからか、それとも顔面を地面に打ちつけられたからか。

とにかく、自分より優れた電撃使い（認めたくはないが）である男一矢報いたかった。

そのために頭をつかまれながらも必死に演算を行い、男からの干渉を遮ろうとし、その結果

パンツという音とともに、彼女の右手は振り切られ、王土は顔を横に向けることになった。

あたりに沈黙が流れる。

唐突に、ビンタをくらった都城王土は怒り狂うでもなくその場に立ち上がった。

そして顔に満面の笑みを浮かべた。

「面白い」

「……………」

「王の^{おれ}圧政^{しうせい}に少しでも革命してみせるとはな。ただの女^{おんな}にしては見

所がある。女、名を名乗れ」

「……………」

「どうした。偉大なる俺が矮小な貴様の名前などを覚えてやろうと
いうのだぞ？ 多少は見所があるかもしれないがそれだけの貴様の
名をだ。手間を取らせるな」

「……………御坂美琴よ」

殺気と共に放たれた王土の言葉に、仕方なく美琴は口を開いた。
先ほど一瞬動けた体も、再び動かなくなってしまうていた。

「そうかミコトか。せいぜい凡人なりに足掻いてみるがいい。偉大
なる俺を楽しませることを許してやる！」

王土はそういつてひとしきり笑うとその場を去った。
後に残された美琴は、しばらくして体の自由を取り戻して立ち上が
って口を開いた。

「絶対に一泡吹かせてやる！」

そして数歩歩いて立ち止まりもう一度口を開いた。

「なんで人に名前を聞いというて自分の名前は言わないのよっ！」

その日、その路地には少女の叫びと電光が奔ったとか。

これでよかったのか……？
続くかはわからない。でも続いたらバトルですね。

都城王土inn学園都市（後書き）

：設定

都城王土

「人身支配」と呼ばれるレベル4（扱い）の電撃使い。

強力な電流は発生させられないが、通常の電撃使いには不可能なほどの強力かつ精密操作が可能な電磁波を発生させる。

それは対象とした人間の動きをある程度操作することができ、通常では不可能な動きをさせて骨折させることもできる。

また、電磁波によって磁力を発生させ、機械を押し潰したり、物を浮かせることができる。

機械を操り、大量のパソコンをいっせいに動作させたり、ネットを介してのデータ操作も可能。

能力の主体となる力が電磁波であり、強力な電撃を繰り出すことはできない。

ミサカ達の頭を掴みながら脳波パターンをコピーし続けることによって、無理矢理ミサカネットワークに接続することも可能ではある。体から発生させている電磁場の範囲が広すぎて、一定レベル以上の電撃使いなら彼の存在を察知できる。

同じ電撃使いとの対決において、出力不足の彼では圧倒的に不利である。

だが、相手の自分より出力の大きい電撃を「電磁波で作った道に流し込んで曲げる」方法を持つ。

更に格上の相手に対しては、相手の脳を対象にした「電子戦」を展開する。

単純な出力で勝てないのなら、相手の脳に電磁波を送って操ろうとする。

相手がそれに気づいて電磁波で命令を拒否しようとする。

それから後は支配しようとする自分と抵抗する相手の演算勝負になる。

レールガンに対しての対処。

磁力を一転に集中させて発生させ、電磁波による干渉も行い、少しでも斜線をずらして逆側に飛んで避ける。

ただし、無様であるのであまり使わないと思う。

第参拾捌記憶目（前書き）

記録者・傍観者たる彼が動く日は近い。

第参拾捌記憶目

「よつと……これでいいか？」

「はい！ それで大丈夫です！」

「でも、なんで予備の机なんてなんであるの？」

「確かに、そう簡単に交換するものじゃないだろうしねえ……」

「なんとなくだ。気にするな阿久根」

他の者の疑問にを答えながら、図書室の復旧作業を進めていく。
さすがに生徒会のメンバーは手際がいい。

古屋一人に任せていれば丸一日以上は掛かるだろうが、これならすぐにも終わりそうだ。

残りは適当に任せるとして、まあ私も適当に情報収集しようか。

「は？ 今なんて？」

「うむ。つまり本の紹介を手伝ってほしいらしい」

「いやあの、らしいって……黒神さん？」

「人数不足で、図書委員会で発行するたよりに乗せる量が足りないらしい、今回のみ手伝うことになった」

「めだかさんはそういうの大得意でしょうしね」

「そういうわけをお願いしますね皆さん。委員長も手伝ってくださいーい！」

ただ一人受付のデスクに足を乗せて本を読む私に、古屋が声をかけた。

「だが断る」

「ええーっ!？」

やたらと驚く古屋の声を聞いて、私は再び口を開いた。
もちろんその際、視線は本から動かさずに。

「冗談だ。そんなことをすればその生徒会長に委員長を解任されるかも知れぬんしな」

「はっはっは。そんなことはせんぞ天宮二年生。この仕事にふさわしい者からそれを奪うことはできんよ」

「まあそういうことらしいが、どうせ暇つぶし程度だ。一冊分くらいは書いてやる」

「ビックリさせないでくださいよー!」

本の紹介なんてアホらしいものを何でやらなければいいのか甚だ疑

問だが、それが業務にあるのだから仕方あるまい。

これも図書委員長という地位にいるために必要なのだ。

名瀬ちゃんのため名瀬ちゃんのため。

本の紹介なんてものはやりたくないが、名瀬ちゃんに渡すデータや資料を纏めるのに比べれば難易度は低いだろう。

……達成感は果てしなく無きに等しいのだが。

「生徒会の面々も、適当にやってくれて構わんぞ。今まで読んだことのある本を書いてみるがいい」

「え？ 図書室にある本じゃなくていいんですか？」

「構わん。それに、たいていの本はここにある。さっきの書庫を探ればいくらでもな」

「よかった。いきなり言われてどうしようかと思ってたんだよ」

「だから黒神生徒会長、どのような本を書いてくれても結構だ。思ったことを、皆に読ませたい本を紹介したまえ」

「うむ。私たちに任せておくがいい！」

そしてしばらく。

「それで、生徒会長サマがどんな本を生徒に読ませたいのか調べてきたと？」

「まあそうなんだけどね。人間、咄嗟にどんな本を読んで他人にどう勧めるかで色々わかるものなんだよ」

「へー！ それでどうだったの？」

放課後。

私は全ての用事を済ませて地下の名瀬ちゃんの元まで戻った。そしてフラスコ片手に研究中の名瀬ちゃんと、絶賛アニメ鑑賞中（昭和ライダー）の古賀ちゃんに、さっきの生徒会の連中との一件を話していた。

「まあ……正直予想外と言うかね」

「おいおい。熾音くんが予想外とかなんの冗談だよ」

「いやいや。私にもそういうことがあってもいいだろ名瀬ちゃん？」

「ハア……まあいいけどよ」

「ねーねー。それで結局どうだったの？ 結果教えてよー」

古賀ちゃんがテレビから離れてぐいぐいと腕を引っ張ってくる。怪力なので若干痛いんだが……まあいい。そろそろ発表するか。

「人吉善吉については　普通すぎるからカット」

「あのなー熾音くん、一年一組の奴に何を期待しろってんだよ。次は？」

「ところで何の本だったの？」

「他愛もない3流小説……まあいい。次は　阿久根か」

特別の十一組所属ではあるが……まったくもってつまらない。

「普通にスポーツの指南書……後輩思いなのは結構なことだが、いやはや……」

「あゝ。そりゃスポーツの特待だし……しゃーねえか。じゃああつちの女も変わらねえだろ？」

「えゝつと確か……喜界島だっけ？」

「そうだよ古賀ちゃん。まあ水泳部だし仕方ないのかもしれないね。こっちも特待だし」

服の下に水着着てるだけあって、紹介する本も水泳関連……つまりなすぎるだろう。

もう少し観察しがいがあるというか、やりがいのある仕事にしてくれた方がいい。

「それで熾音くん？」

「なんだい名瀬ちゃん？」

「本命はどうだったんだよ。あの生徒会長サマはよー」

「あー。それ私も気になるー！」

「もちろんここにデータがあるとも」

私は懷から纏めた資料を取り出して名瀬ちゃんに手渡した。
既に私は記憶しているので問題ない。

すぐさまそれに目を通し始めた名瀬ちゃんと、天井からぶら下がって名瀬ちゃんの上から読む古賀ちゃん。

そんな二人が半分ほど読み進めたところで私も口を開く。

「これが笑えるものでね……まさに予想外だったよ。いい意味で予想を裏切ってくれた。そうだろ？」

「ケケツ……まあ、確かにこいつは笑えるな」

「確かにちよつとこれはねー」

「なんともまあ、いい話じゃないか。生徒会長サマは自分も一年生だと言うのに、学校生活をいかに送るかをお教えしたいらしい！」

私は二人に向かって腕を広げ、多少大げさに言ってみた。
するとどうだろう。

何故だか知らないけど視線が冷たい。

「……いやまあ、熾音くんなりのギャグなのか」

「……はつきり言って変だよ」

「なん……だと……!？」

こういう時は大袈裟に言ってみるのが普通だと、確かに映画で……
名瀬ちゃんが見ていた映画でもそうだったはず!

「熾音くん、いろいろなこと覚えてるのはいいんだけどさ。なんか
余計なことまで覚えてるから変になってるんじゃないか？」

「あゝ。そういえば天宮君、部屋にあったアルバムに名瀬ちゃんの
身長とか体重とか」

「いや、それは当たり前のことだからかかせないな」

「あ、そうなんだ……」

私がきつぱりと告げると古賀ちゃんは微妙に引きながら頷いた。
なんだ。そこまで変だったのだろうか。

というか名瀬ちゃんも達観したような顔をして研究に戻ってるし!

……しかしまあ。

さっき渡したデータをしまったところから見て、有用なデータの
つにはなったようだ。

黒神めだかが本当にお人好しらしいとか、どっかの聖人君子みたい
な考え方をしてるとか。

そついうのもあるが、生徒に対しての関心も高いようだし。

来るべき計画の根幹に関わる事件も近いようだし。

……ただ、しばらく先の未来が、暗雲が立ち込めるかのように見えないのは何故なのか。

それに付随するものが確たる未来として見えないのは何故なのか。

名瀬ちゃんに心配をかけるわけにはいかない。

未来に暗雲を作ることとなる「それ」が来た時に、私がそれを排除するだけだ。

名瀬ちゃんに害をもたらすモノは排除するということなど、遙か昔に決めていたことなのだから。

第参拾捌記憶目（後書き）

あとがき

遅くなってスマンかった。

名瀬ちゃんがアイスマンになったせいで、頭が混乱しました。
色々と迷ってます。

第参拾玖記憶目（前書き）

短めですけど、許してつかーさい。

第参拾玖記憶目

図書室での一件からしばらく。

あの後も黒神めだか率いる生徒会はこの箱庭学園で活躍を続けていた。

生徒からの悩みの解決率は100%、おまけに悩みの内容に関わらず本人のためになるように動いている。

学園長の命令に従って色々やってる私としては面倒くさいことこの上ないのだが。

「つーわけで天宮よお。黒神めだかのこと色々教えろよ。陰でこそそそ調べてるんだろ？」

「貴様に教える義理など無いがな。雲仙冥利風紀委員長？」

私は眼前でふんぞりかえるチビを思い切り睨みつけながら言った。
いくら私が温厚な性格でも、この男を気に入る事はないだろう。
アレは名瀬ちゃんがフラスコ計画の統括になって、雲仙とファーストコンタクトした時の事だ。

第参拾玖記憶目

あれはフラスコ計画の統括に名瀬ちゃんが選ばれ、新しくフラスコ計画のメンバーに選出された生徒と顔合わせをしていた時だ。

普通に一人ずつやんわりと面接していたのだが（一部はやんわりとは行かなかったが）。

相手が風紀委員で色々やらかしてるとはいえ、どうせ子供だと甘く見ていた部分もあった。

下手なことはさせないという覚悟もあった。

だがしかし　あんまりに唐突な行動だったので予知する暇も無かったのだ。

「へー。お前がフラスコ計画の統括かよ」

「そーだよ。俺が新しく統括を任される事になった名瀬天歌だ」

「ふーん。で、そっちは誰なんだ？」

「……私はフラスコ計画の記録係、天宮熾音だ」

「へー」

じろじろとこつちを眺め、雲仙は右へ左へと動きながら時折頷くことを繰り返した。

心が読めるわけではない私では理解できないが、それは何かに対して興味を持って吟味する際に使われる行為だ。

何に對しての興味なのか、私がすぐに予知していれば

「ケケケ、顔は不気味に隠してやがるがいいオッパイじゃねーか」

いつの間にか名瀬ちゃんの目の前に移動していた雲仙は、目の前で

名瀬ちゃんを見上げていた。
そのままふざけた事を言って、名瀬ちゃんの胸に向かって手を伸ばした。

当然、私は黙って見ているような愚図でも愚鈍でもない。

雲仙の背後に瞬時に移動し、名瀬ちゃんに伸ばしていた右手と奴の頭をがっしりと捕まえる。

悪意と憎悪と敵意を持って思い切り両腕に力を込めた。

「……ふざけた真似は私が許さん」

「テメー、ただの記録係じゃねえのかよ」

「無論、記録係ではある。が、それ以上に私は私の守るべきルールに従って行動している」

ちなみに名瀬ちゃんが絶対というのがルールの大まかなものだが。まあそんなことはどうでもいい。

問題はそんな事ではない。問題はこの雲仙の処置だ。

「雲仙、私は正直言っ君を許せはしない」

「だから？ オレをどうしたいって？」

「完膚なきまでに、私がお前に服従の記憶を叩き込んで」

「はいストップ」

パッカーンという音と共に、名瀬ちゃんが私の頭をカルテでぶつ叩いた。

私は驚いて名瀬ちゃんの方を振り返った。

「止めないでくれ！ 私は絶対に許せん！ 許せないったら許せない」

「まーまー落ち着けよ。別にいいじゃん」

「よくない！ 全然よくない！ 私だって触ってないんだぞ！」

「 熾音くん？」

「いや、今のは妄言だよ名瀬ちゃん」

ちよつと私の欲望と言う名の妄言が漏れ出ただけだから。
気にしなくて結構なのであるぞ？

「……オイ、手エ離せよ記録係」

「む……」

「 熾音くん」

「……了解だよ名瀬ちゃん、彼は途方も無い罪人だけどここは許そうじゃないか。名瀬ちゃんに免じて！」

笑顔を浮かべて名瀬ちゃんの横まで移動する。

無論、雲仙を見る目は攻撃開始時からずっと変わっていないが。

「熾音くんもちよつと冷静になー。一々怒ってたらキリないぜ?」

「くっ……凶星をつかれた。しかし私は名瀬ちゃんに変な事する奴は許さない。絶対にだ!」

「ああうん、もういいよそれで」

名瀬ちゃんはこちらに笑顔をよこして雲仙に向き直った。

そういえば面接していたのだったな。

アホ面晒してこちらを凝視する雲仙もいるが、まあどうでもいい。

私は黙って見守ろう。

名瀬ちゃんに危害（変態行為）を加えた時がお前の最後だ。

|| || ||

結局その後、雲仙は何も行動を起こさなかった。

だがしかした。私は絶対に忘れてはいない。

何しろ一度記憶したものは決して忘れないからな。

「別に教えてもテメーに損なんて無いだろうが」

「確かに損は無い。だが得も無い」

「……相変わらず名瀬一筋かテメー」

「無論その通りだが、ただ単にお前が嫌いなだけだ」

いくら憎まれ口を叩こうが、こちらを睨みつけようが、生の情報を渡すはず無いだろう。

ただ名瀬ちゃんにはデータを取るようにいわれてるし、そろそろ『大きな動き』を見せた方がいいだろう。

そんな訳でデータ収集に協力してもらうことにしよう。

「黒神めだかを知りたいなら、自分で調べることを薦めるよ」

「どうせデータ収集に利用したいだけだろうが」

「そうだとも。それが問題か？ 情報が欲しいなら自分でやるしかないぞ？」

「チッ……」

「おっと、実力行使は無駄だぞ？ 全部知っているからな」

ガタツと椅子から立ち上がり、若干怒ってこちらに向かって立つ雲仙。

私はそれに先んじて忠告をして動きを止めた。

奴とてわかってているはずだ。どうなるにしろ取り返しがつかないということとは。

しかしまあ。

私とてデータを収集してもらう都合上、ノーヒントというわけにもいくまいよ。

そのまま私は奴に事細かにデータをまとめた書類を投げ渡してやつ

た。

「そら、次に黒神めだかが出張ってくるのはここだ。他の生徒会員は全員他の場所に出払っている。『何かする』なら絶好のタイミングだぞ?」

「……胡散臭いが、テメーの予測は100%当たるから……言っとくが、テメー等がどういう結果を望んでも俺は勝手にやらしてもらっぞ」

「ああ。自由にやるがいいさ」

こちらはそれをゆつくりと見物させてもらっただけだ。

自分の手駒の風紀委員でもなんでも自由に使え、学園町経由で入手した装備も勝手に使え、異常が異常たる様を見せてみる。

願わくばその異常が、黒神めだかの異常性を計るに足る物差しであることを願おう。

……私も色々と動くか。

予知通りなら黒神めだかは『ああ』動く。

しかし全てがその通りにいくかといえはそうでもない。

予知の重大な部分がいくつも折れ曲がって見えなくなっているのだから。

13万1313台のスパコンの情報を丸ごと一つの脳に詰め込んだ私だが、脳の中に存在する本は2356万とんで35冊分でしかない。

いくら知識量が優れていても、記録しなければならぬことはまだ多い。

できることなら、私自身にも保険がいるだろう。

何かが起こったとき、絶対に解決できるような奥の手が、今だからこそ出来る方法で。

第参拾玖記憶目（後書き）

あけおめー

脳内冊数はインデックスさんを遥かに超えていますね。
まあ関係ないですけど。

もしかしたらな記憶　その参（前書き）

この『IF編』においてのとてもなく大きな事実が発覚します。

もしかしたらな記憶 その参

「困ったねえ？ こんなことだろうと思って来てみればコレだよ」

「天宮……さん……」

「いやいや、そんな怖がること無いじゃないか。初めからこうなる
と思つてたんだからさ。私は」

不気味に笑顔を浮かべる天宮熾音が、阿久根高貴の背後から声をかけた。

唐突に声をかけられた阿久根はバツと後ろを振り返つた。

「全く、丸くなりすぎだよねえ？ いくらなんでもこれはひどい。
あらかじめ『見て』たら切り捨てちゃつてるところだ」

「俺は……」

「いやいや、何も言わなくていいんだよ？ 裏切りなんてものは感じ
ぢゃいない。こうなつてしかるべきだと認識しているのだしね？
だから恐れる必要は無いんだよ？」

うつすらと笑みを浮かべながら、熾音は阿久根に近づいていく。
一切の敵意なく近づいてくる熾音に、阿久根は理由もわからずに後
ずさつた。

悪意も無い、何も感じさせない笑顔が、無性に恐怖を伴って感じられた。

「まったくまったく、こうも予定調和だと面白くない。なんにしても改心できてよかったね阿久根君、おめでとう。祝福するよ。良かったね。お幸せに」

「……何が目的で会いに来たんですか？ 何を言っても俺は」

「そう。君は結局こっち側じゃなくてそっち側だった。再確認だよ。目的なんて無いさ。ただ祝福の言葉でも送ろうと思っただけ。それだけさ」

何を言っても話が通じることは無い、始めからわかってはいたがズレている会話。

しかし阿久根だってバカではない。

目の前の人間が、そんなことを本当に祝福などということをするはずがないということくらいはわかる。

「嘘……ですよね？」

「さあ？ それが私の口から語られることは無いんだから、勝手に想像してみた方がいいんじゃないかなあ？」

クスクスと笑って顔を近づけ、何の意味も無い言葉を吐き出していく。

何を考えているか全くわからない目の前の人物に、阿久根は困惑しつつも沈黙を保つ。

そのまましばらく阿久根を見つめた後、熾音は彼に背中を向けた。

「そろそろ行くよ。阿久根君はこれから毎日楽しく生きればいいさ。黒神めだかでも追っかけながらね」

「それはどういう」

「興味を失った君にはもう用は無いんで。それじゃ」

後ろを向いて手を振りながら熾音はその場を去っていく。

阿久根がどれだけ何をしようとも、もう振り向くことは無いだろう。それは彼にとつては実に幸運なことなのだが、阿久根は何か嫌な感じが背中を這い上がってくる気がしてならなかった。

「さてさて。案の定だね。未来が変わるとはよく言ったものだ。運命は変わる、変えられる、か。彼もそのままなら尖兵として大活躍だったろうにねえ……惜しいものだよ」

熾音は廊下を歩きながら携帯越しに球磨川へと話しかける。

そうすれば、いつも通りの調子で向こうから返事が返ってくる。

『「それで?」「君は何もしなかったのかい?」』

「そんな義理は無いしねえ。興味の無くなった玩具にいつまでも構うほど執着してたわけじゃあないんだよ。それとも今から引き返して壊しておこうか?」

『「いやいや」「高貴ちゃんはどこまで頑張ってくれたしね」「そのままにしておいてあげようよ」「』

「言つと思つた。その方が後々面白そうだしねえ……」

互いに思うところは放つておいた方が面白そうという結論。
いや、むしろそれは建前で、『どうでもいい』という事こそが放つておいた理由だろう。

「副会長は？ 黒神めだかに阿久根を差し向けたことに関して何かあつたんじゃないのかな？」

『「そうでもないね」「ただ彼女も色々考えてると思うよ」「今も生徒会室に姿が見えないし」』

「そう……それはいいね。実にいい」

天宮熾音は安心院という名の副会長をひどく嫌っている。
それはその人物の『人となり』もそうなのだろうが、彼女の持つ力によるところが大きいだろう。

天宮熾音は自らの知識を知らないうちに奪われていることを良しとしない。

熾音の知っている『過去と現在と未来』が入り混じった視界において、その全てを知るということが自らのやりたいことだと認識しているからだ。

時に、それを自分にとって面白そうな未来へと書き換えることすら行う熾音にとって。

自分以外の人間が彼の未来を見ていることは気にいらぬ。

目を開いていれば自然と飛び込んでくる『未来』の情報。
目を閉じていても流れ込んでくる『未来』の時間。

自分が『未来』を見ているのではなく、自分が見ている『何か』が『未来』となるのだと、熾音はいつだか知ってしまった。

だがそれを自分以外が見るのなら、その目に別の『未来』が映るのならば、自分が知ってきたことは何なのか。

意味も無く、理不尽に、全てが無意味マイナスでしかない。

そして熾音は、あの女の力を知った時から、目を開くことを良しとしなくなった。

全ては自分の思い通りの世界を、未来を、視界を通して強奪ジャックしてくる女から守るために。

「ふむ……ま、私のほうが他人の『未来』を操って楽しめそうに捏造してるんだから悪いよね。でもまあ他人なんて所詮は他人なワケだし、面白い『未来』が見れるならその方がいいでしょ」

他人を何者とすら思わずに、自らの定めた『未来』のみを歩く天宮熾音。

結局のところ、『未来』を捻じ曲げ捏造するのが楽しくて仕方が無いのであった。

何事にも終わりの時は来る。

まあ今回の『終わり』というものは彼ら自身が招いたものだったが。

「やれやれ。顔を剥がすとはやってくれる。満足したかい？」

「『うん』 『僕はアイドル好きの人たちとは違っていてこれで証明できたからね』 『間違いなく愛があったのさ』」

「そんなことは実行せずともわかるでしょうに。まあ、私は禊くんのそういうところが好ましいんだけどね」

「『ありがとう』 『彼女ほどじゃないけど』 『君も十分好ましいよ』」

天宮熾音は球磨川に肩を貸しつつ学校から遠ざかる。

二人には珍しく他愛も無い会話も弾んでいる様に見えるのは、一種の転換点を乗り越えたからだろう。

球磨川にとっても、熾音にとっても、黒神めだかの手から逃れおおせたのだ。

「にしても涙も流してみるもんだね。あっさり許してくれるなんてさ」

「『なかなか迫真の演技だったよ』 『男の僕よりもずっと効果的だったね』」

「そういうのはあまり得意じゃないが、知識にある以上は実行できるんだよ。簡単な恋愛小説のセリフをそっくり真似たんだけどどう

だった？」

「『バッチリさ』『週間少年ジャンプの主人公ならあっさりひつかかって畏にかかる涙だったよ』」

「お褒めの言葉として受け取っておくよ」

そう言つて熾音は、球磨川に肩を貸したままでその長い髪を後ろでまとめる。

そうした後、黒神めだかによつて傷つけられ、汚れてしまった『スカート』から埃を払う。

「『めだかちゃんは甘いけど』『女の子相手にも容赦ないんだよね』『まあ僕を倒したんだからそうこないと』」

「女の子扱いには感心しないけど、殴られた頬が痛いのも確かだね」

球磨川は熾音の頬を眺めながらそんなことを言う。

熾音は自分の顔を見られているとわかりながらも、未だに少し腫れている頬をさする。

ここから撤退するためとはいえ、黒神めだかの攻撃を甘んじて受けたのは失敗だったかと熾音は考える。

球磨川もボロボロに痛めつけられたわけだし、熾音一人が何もされていないというのは相手も許しづらいだろう。

だからこそ彼女は甘んじて黒神めだかの拳の前に頬を差し出し、何の抵抗もなく殴られて倒れ伏した。

そうしてそのまま大声で泣いて許しを請いたのだ。

恥も外聞もまるで無く泣き叫んだ熾音だが、元よりそんな物は持ち

えていない。

だからこうして、ボロボロの球磨川楔と頬を晴らした天宮熾音は、
痛めつけられた事などまるで忘れた顔で歩いているのだ。

「さてさて楔くん、次はどうする？ 反省する気はさらさら無いんだろう？」

「『当たり前だよ』『やっぱり夢は簡単に諦めちゃだめだよね』」

「くくく、違うないね」

揚げ足を取るのも皮肉るのも、彼らにとっては日常茶飯事だ。
彼らは自分達を見逃してくれた黒神めだかに、上辺だけならいくらでも反省を装うだろう。

そうしてきつと、黒神めだかはそれを許してしまうだろう。

彼女が人間を愛するがゆえに、彼らとわかりあうことは無いだろう。

「それじゃあしばらくは他の学校にでも居座ろうか。楔くんとなら
楽しめそうだ」

「『そうだね』『エリート抹殺計画の素晴らしさ』『熾音くんはきちん
とわかってくれるからね』」

互いに笑顔で、何の意味も無い無意味で無価値な笑顔を浮かべ、二
人のマイナスが歩いていく。

次の標的は一体どこに。

それを知るのは彼らだけ

もしかしたらな記憶　その参（後書き）

あとがき

IFの世界だけあって、あっさり性別を変えてみました。
髪長いのは変わってないし、設定的には貧乳で背が高いので問題ないっすね。

ああ、ちなみに

マッドウォッチ
壊狂時計が天宮熾音（過負荷・実は女）の過負荷となりますね。

第肆拾記憶目（前書き）

クイックリチャージャー！

第肆拾記憶目

「雲仙、オーケストラ部を全滅させるか。まあ別にかまわんだろう。むしろそれくらいした方が黒神めだかも動いてくれる」

急遽設置した監視カメラの映像を見ながら、天宮熾音は呟いた。その横には、同じくその映像を見ている名瀬天歌と古賀いたみがいる。

「これが熾音くんの言ってた事か。面白そうじゃねーか」

「うわゝ。全滅してるね」

天宮の予知で得た情報を活用し、雲仙は黒神めだかに突っかかるように動いていく。

情報どおりに『偶然』アホみたいな格好で現れた黒神めだかに攻撃を行い、他の生徒会役員を潰すと刺客を放ったと言い放つ。

「さてさて、名瀬ちゃんはどう思う？ 黒神めだかと雲仙冥利、いよいよ衝突って感じだけど」

「俺はどっちでもいいぜ。データさえ取れるならな」

「私は、えゝつと……熾音くんはどう思うの？」

スパッと答える名瀬に対し、古賀の方はすぐさま答えはしなかった。ひとしきり悩んだ後で、先に熾音に対して意見を求めた。

「……さて、雲仙冥利は風紀委員長として、飛び級してきた者として、フラスコ計画に参加している者として、今まで十三組の連中を何人も相手取っている。『異常』を相手にするのなら、経験という面で勝ってるだろうね」

「じゃあ、戦ったら雲仙くんの方が強いのか？」

「そんなことは無いさ。黒神めだかは誰もが注目する『異常』だからね。能力もあらゆる面でズバ抜けている。そう簡単にはいかないさ」

「へ」

簡単な考察を述べる熾音に、古賀は納得したといった感じの表情を浮かべる。

そんな中で、ずっとモニターを眺めていた名瀬が呟いた。

「熾音くん、黒神の事をずいぶん評価してるのな」

「そりゃまあ観察対象だしね。あ、でも安心してくれよ？ 私はいつだって名瀬ちゃん一筋でその気持ちが揺らぐことなんか地球が反対の向きに回転始めるくらいにありえないからさ」

明るすぎる笑顔で、熾音は名瀬の方を振り向いた。
その顔に名瀬はとある書類を叩き付けた。

「そんな事聞いてねえよ」

「あいたたた、これはなんだい？」

「俺も知らねえよ。地下十三階に来てくれってさ。進展したとは聞いてないが、バックアップでも取るんじゃないの？」

名瀬がそう言った途端、熾音は顔を歪めた。

勿論名瀬に対して何か思うところがあったわけではない。

せつかくここまでお膳立てしたものを、最後まで見れなくなることに対する

「こんな時に……まあいいさ。映像なら後でいくらでも見れば良い」

「熾音くんも大変だな。ま、こっちは俺らが見てるからよ」

「そうそう。頑張ってお仕事してきてね」

自分が愛する人とかけがえの無い友人に送られて、熾音は部屋を出て行った。

そうしてポツリと彼は呟いた。

「……元氣も湧くというものだね」

ゆっくりと階段を下りて行って、熾音は地下十三階へと降り立った。そこに待ち受けるは都城王土。

いつも通りに高圧的で、やたらと底知れない男。

「ようやく来たか」

「……正直言つて邪魔された気分だったが、これも役割だからな」

「さつさと奥に行け。偉大なる俺を煩わせるなよ」

「無論だ」

熾音は口数少なく会話をこなし、王土の横を通ってデータを写す画面の元へと移動した。

そして、フラッシュ暗算のように高速で表示されていくデータを記憶していくうちに、何か違和感を覚えた。

時間が経っていくほどに、その違和感は確信へと変わっていく。

（特に更新は無い……な）

熾音の記憶しているデータと、今現在確認しているデータに、ほとんど違いが見られない。

何かおかしいと思い始め、そこでやっと異変に気付く。

「……これ、は？」

彼の『予知』は、制御できるようになってしまったがために常時全てを知ることが出来るわけではない、

故に、知ろうと思つて『予知』を行わない限りは、それを知ることが出来ないのだ。

だから、こうして睡眠ガスを知らない間に散布されているなんて事にも気付かない。

そして何故か一切動くことが出来ないままに、熾音は巨大な画面の前に座ったまま意識を落とした。

「王土、結局こいつはどうするんだい？」

「ふん……この者の『異常』を徴税するのは簡単だが、それではバツクアップがいなくなるからな」

「まあ、コイツも結構プラスα計画にとって重要な位置にいるしね」

「だいたい、記憶能力などというものは偉大な俺には似合わん。行橋もそうは思わないか？」

「確かに王土の言う通りだよ。そういうのは臣下の仕事だよ」

「そうだな……さて」

「王土、そいつをどうするの？」

「何、この記録係は『どんな事も記憶する』らしいからな。服従させるのにもたいして手間をかけずに済みそうだ」

「えへへへへ。この堅物はどう変わるのかな？」

数刻後。

「あ、熾音くんおかえり」

「やっと帰ってきたか。もう全部終わっちまったぜ？」

「あーうん。ごめんごめん」

私はいつも通りの姿で、名瀬ちゃんと古賀ちゃんの元へ戻ってきた。ただ、少し気分が悪いようにも見えるかもしれない

「……どうかしたのか？」

「いや、なんともないよ。ちょっと時間がかかったただだからね」

今回は、暗記作業にも不思議と時間がかかってしまった。

特に問題は無く終わったはずなのでなぜかはわからないが、そういうこともあるのだろう。

それよりも気になることがある。

「それで名瀬ちゃん、結果はどうなった？」

「雲仙くんが生徒会室吹っ飛ばして、黒神が校舎ごと引きずって歩いた」

「……さすがに予想外だね。それは」

「私もすごいビックリしたよ。だって黒神、いきなりキレるんだもん」

名瀬ちゃんも古賀ちゃんも、結構驚いている様子だ。

無論私とて驚いている。

雲仙じゃあ黒神に勝てないにしろ、何かやらかしてくれるだろうとは思ったが、十分な成果だ。

十分に過ぎるかもしれないくらいの。

「雲仙は道具で固めたくせに素手の黒神に負けちゃったし。まあそれ以前に、雲仙が退場って事が重要なんだけど」

「『十三組の十三人』は一人でも欠けたらダメだったっけな」

「そうそう。雲仙は万能型だったしね。代わりに私が穴を埋めてもいいけれど、やっぱり学園長は黒神めだかを欲しがってるだろうし」

そもそも、学園長はそういう目的で私に観察させてたんだと思うし。

「熾音くんなら十分に資格があると思うんだけど……」

「それでも私は名瀬ちゃんの補佐で記録係をやらせてもらっよ」

「愛だね！」

「愛だよ！」

「……はあ、さっき学園長から連絡あったから行くぞ。雲仙くんがやられた事についてだよ」

「了解！」

さあ、明日からは更に忙しくなるぞ。

何にしても頑張らなければ。

第肆拾記憶目（後書き）

あとがき

サラッと済ませといて意外と重要。

もしかしたらな記憶　その肆（前書き）

皆、何故かこっちのほうで好評だったんだもん！

もしかしたらな記憶 その肆

「『熾音くん』『こっちで学園長室はあってるかな?』」

「全然違うよ楔くん。でも、君の感覚みたいなものは確かだね」

「『それは』『どういう事だい?』」

「さあね。行ってみればわかります。だってその方が」

「『OK!』『ドラマティックな展開を』『期待してみるよ!』」

「うんうん。その方が」

「運命的ですからね」

時計塔一階、地下十三階への直通エレベーター前。

「おーやおやおや、どうやら今にも喧嘩が勃発注意報？」

「『熾音くん』『学園長室よりも面白そうなのは確かみたいだね』」

「そうでしょうそうですね。私の言うことは、まあ、だいたい間違いはありませんよ？　嘘をついていなければ、だけどね」

「『大丈夫さ』『熾音くんは僕に嘘をつかないでしょ？』」

「あはははは。違うないね」

生徒会が地下施設へと乗り込み、黒神めだかが既に囚われているというそんな時。

時計塔の一階で、『負け犬軍団』と『裏の六人』が戦っている時にその男女二人は唐突に現れた。

男は、得体の知れない『負』の雰囲気を持つ黒髪短髪の地味な男子学生服の少年。

女は、把握のできない『謎』の雰囲気を持つ黒髪長髪の地味な女子学生服の少女。

「なんだお前ら？」

「また敵ですかね。地味な制服です」

一番初めに彼ら二人に気付いたのは、壁に寄りかかって戦いを傍観する糸島軍規と百町破魔矢だった。

それに続き、不気味な存在を背後に感じた鍋島猫美と雲仙冥利の二人がバツと後ろを振り返った。

彼らは後ろで『負け犬軍団』と『裏の六人』の戦いの全体に目を向けているつもりだったが、後ろから感じたその『負の存在』は無視できるようなものではなかった。

そしてそれは、戦いを行っていた他の者達にとっても同様である。

「『おいおい』『なんで僕達が敵扱いされちゃってるんだろっね』『ここは仲裁して喧嘩を収めてあげるしかないんじゃないかな』」

「そうですね。うら若い美少女を相手にそんな事を言うなんてひどいんじゃないでしょうか。喧嘩はどうでもいいけれど」

「『熾音くん』『ギャグもいいけど真面目にやろっぜ』」

「そういう君こそ、おふざけはよくないんじゃないかな？」

今となつてはその場にいた全員から視線を集めているような状況になりながらも、二人は呑気に会話を続ける。

ただ、その内容も段々と物騒なものへと変わってきているが。

「なんなんこの二人？ ここの制服やないみたいやけど」

「……いや、俺は知ってるぜ。こいつらの着てる制服、日本屈指の名門校の水槽学園の制服だ」

「でも委員長、なんでその制服を着てる人がここに？」

「そんなもん知らねえよ。ただ……その水槽学園な、先月に廃校になってるんだわ」

鍋島猫美が目の前の二人の制服について雲仙冥利に問えば、すぐさ

ま答えが帰ってきた。

そして更に問いかける鬼瀬針音の問いに答えつつ、その制服を着ている事の意味を考えた。

まさかという考えは頭に浮かぶが、それを確定できるだけの証拠は何も無い。

それでも雲仙の頭に浮かんだのは、目の前の二人が水槽学園を潰したのではないかという懸念だった。

「『ひどいなあ』『僕達が不気味だつてさ』『熾音くん』」

「本当にひどいよね榎くん。僕達は善良な生徒だつていうのに？」

「『そうそう』『でも僕達は差別には屈しないぞ』『人は心だよ心』」

「

「あはははは。全く持ってその通りだよその通り」

感情の籠らない純粋な、純粋すぎる笑顔を浮かべて会話をする二人。しかしその純粋さは、必ずしも良い意味というわけではない。

「……正直誰だか分からないけど、攻撃した方がいいのかな？」

「部外者として邪魔者に過ぎん。普通は死ね^{カス}」

「おやおや、君達が可愛い女の子を前にして思うことはそんなことなのかな？ まあ女の子だなんて思われるのは好きじゃないんだけどね」

「『あれ〜?』『熾音くん』『今日はやけにご機嫌だね』」

「なんとなく面白いモノが『見えた』からね。ちょっとテンション
上げ上げなのさ」

「『『『『『ツ!?』』』』』」

「『『『『『なっ!?』』』』』」

一体何があったのか、彼らはどうして驚愕したのか。

それは、さっきまで時計塔の入り口付近にいた二人が消えていたか
ら。

同時に、会話をする二人の声が背後の直通エレベーター前で聞こえ
て、振り返った先に二人がいたから。

「『相変わらず』『全部忘れた後の表情は面白いね』『さっきまで
暴行してくれちゃったのにさ』」

「でも、何度でもやり直させてあげる慈悲つてのも必要だよね」

「『駄目駄目』『今回のコンティニューは一回だけだよ』」

「ふーん。じゃ、まあそういうわけだから二度目は無いかな」

「『はっはっは』『相変わらず容赦が無いね』『熾音くんは』」

「それほどでも」

驚愕の視線を浴びながら、それを一切気にすることなく会話を続け
る件の二人。

そしてまたもや近づいてきたその二人を、彼らは自然と取り囲むように歩を進めていた。

得体の知れないその二人に、何を感じたのか。脅威か、恐怖か、それとも悪意か。

「今のは何だ？ 俺の反射神経も無反応だと？」

オートパイロット

「単なる高速移動とかそういう類じゃないって事かな」

「ケツ。瞬間移動とでも言うつもりかよ」

この不可解な現象に、オートパイロット反射神経という異常を持つ高千穂仕種は頭を悩ませる。

しかし答えは出ない。

宗像形も、雲仙冥利も、まともな答えを出すことは諦めたようだ。そして『負け犬軍団』が多少悩むようなそぶりを見せたのに対し、『裏の六人』は早々にこの二人を処分することに決定した。

「こいつらが何をしたのかは関係ありません」

「にひひひひひ、その通り。何をしたのかはドウデモイイ」

「確かに、次は何かする前に駆除してやろう」

瞬間、男子生徒が筑前優鳥の伸ばした黒い髪でぐるぐる巻きになり、その上で百町破魔矢の放った何本もの弓矢が突き刺さった。

バックステップした女子生徒を後回しにしてそちらを狙ったのは、より『負の雰囲気』が強い方を狙ったからか。

そして黒い髪から解放されるやいなや、鶴御崎山海の指先が男子生徒の脇腹へと胸元へとめり込んだ。

そこを中心に男子生徒が溶け崩れていく。

「『い』『たたたた』『熱い』『それに』『骨も折れたかな』『本当に』『痛いなあ?』」

しかしそれでも、まったく倒れる気配が見えないのは何故か。

そうしてそのまま男子生徒は、どこから取り出した巨大な螺子を、目の前の鶴御崎山海へと突き刺した。

その拍子に、今まで突き刺さっていた指先が抜ける。

「熱そうだね楔くん。どんな気分だい?」

「『そうだなー』『真夏に熱湯風呂』『って感じかな?』」

「やったことないからわからないね。今度どうだい?」

「『遠慮しておくよ』『後が怖いからね』」

何事も無かったかのように会話を交わす男子生徒には、既に何の傷跡も残っていない。

すべてが『なかったこと』のように、元通りになってしまっていた。

「何だ……ヤバイ感じがしやる!」

「僕も、同感だよ!」

雲仙冥利がそう言い放ち、宗像形が両手の機関銃をフルオートでぶっ放した。

もちろんその斜線上にいる他のものも危険なのだが、体を液体に変える湯前音眼には効果が無い。

そして機関銃を撃たれた二人はどうしたのか。

「おっと」

「『いたっ』『熾音くん?』『いたっ』『いたいいたい!』『」

「ごめん楔くん、ちょっと怖かったんだ」

「『嘘泣きは』『正直似合ってないよ』『普段はボーイツシユタイ
プの癖してさ』『」

「うるさいよ楔くん。ほら、次が来るよ。盾役ファイター」

「『熾音くん』『相変わらずだねえ』『」

機関銃を撃たれる寸前に、女子生徒は男子生徒の影に隠れた。

そのまま男子生徒の背中をがっしり掴んで、自分に弾が当たらない
ように動かしてガードする。

撃つても撃つても死なない男子生徒を諦め、女子生徒のほうに標的
を変えようとしても、決して攻撃対象にならない位置に立たれてし
まう。

そうこうしている内に機関銃の弾が切れ、宗像形は機関銃を捨て去
った。

更に、いい加減に場を打開しようと思ったのか、ロケット砲を発射
した。

「ちょ、それはやりすぎとちゃう!？」

「これくらいで十分だよ」

「そうだな。あいつらは危険すぎる……何でアレだけやって傷一つ付いてないんだ？」

「確かにそうですけど……」

鳴り響く爆音に、彼らのいる通路全体が揺れている。

そして舞い上がった煙の先には、いくらなんでも無傷ではないはずのあの二人組がいると思っていた。

いや、本当に思っていたのか。

既に、到底齒が立たないと、心のどこかで諦めていたのではないだろうか。

だからというわけではないだろうが、彼らの不安は現実となった。

「『うわー』『さすがに怖かったね』『怪我は無い？』」

「大丈夫だよ。爆風自体は一部不発気味に変えたしね」

「『よかったよかった』『女の子の顔に傷が付いたら大変だ』『ちよつと』『おかえしでもしておこうか？』」

「私のはちよつと不安定な部分も多いからね。お任せするよ」

平然と、傷どころか埃すらも付いていない綺麗な姿で、舞った土煙の中から姿を表した二人。

いよいよもって異常じみているが……まさしく、『異常』なのだろう。

煙の合間から一瞬だけ見えた男子生徒の体は、確かに何箇所もが焼け焦げて破損していたのだ。

にもかかわらず、痛みを感じないのか、それとも痛みをなんとも思っていないのか。

今、その男子生徒が『負け犬軍団』や『裏の六人』に向ける視線には、何の感情も籠っていない。

痛みを受けた恨みを持つでもなく、ただただ相手を害するという『負』の感情を持ち、両手に螺子を持った男子生徒は突進した。

その場に存在する自分達以外の存在を害するべく。

球磨川楔という、新しく箱庭学園に転校してきたその生徒は、何よりも不幸で何よりも負^{マイナス}な存在であるのだから。

そうして相手の攻撃を甘んじて受けつつも、全ての傷を無かったことにして相手を制圧していく球磨川楔。

そんな彼を後ろで眺めつつ、そっと呟く女子生徒。

「素晴らしいね。ここにいる人たちもやっぱり異常の塊ばかりだ。後で色々と覗かせてもらおう」

腕を組んだ状態で笑いながら、流れ弾のような攻撃や彼女を標的にした攻撃の悉くを、まるでそんなものは無いかのように避けていくいや、彼女が避けているのではなく攻撃の方が避けているとも言うべきか。彼女は一步たりともその場から動かない。

一度だけ場所を移動してからは、攻撃も全て『先程まで彼女がいた場所』を狙って攻撃している。

一体何が起きているのか。そして何故、攻撃をする方向を修正しないのか。

「さっきと同じ繰り返しだね。つまらないな」

女子生徒、天宮熾音は笑う。

自分の過負荷『壊狂時計』の前で、どうしようもない未来を辿り続ける人間を見て。

何しろ彼女にとって、さっき『既に一度制圧済み』の彼らは。

全ての記憶を壊され、全ての傷を無かった事にされて。

こうして球磨川楔と天宮熾音の掌の上で踊っているようなものなのだから。

「あなたの未来は、一体どのように変わっているのでしょうか……
黒神めだか」

熾音は笑う、楔の奏でる螺子曲げる音を聞きながら笑い続ける。

もしかしたらな記憶　その肆（後書き）

あとがき

よりマイナス成長できる方向に導いてるせいで、若干球磨川の不気味さがましてるのかもしれない。

マッドウォッチ
壊狂時計

現在判明している能力：人の記憶をある程度壊し狂わせる。

既に見た未来の道筋を、『現在の事象』として確立させる。

もしかしたらな記憶 その伍（前書き）

次回からは本編やりますので・・・・・・・・ツ！

もしかしたらな記憶 その伍

エレベーター前の生徒諸君を適当にお掃除した後。

私と楔くんは、もうすぐ黒神めだかと愉快的仲間達の出て来るだろうエレベーターの扉の前でのんびり歓談していた。

「そろそろ来るね」

「『ふふふ』 久しぶりに会うことになるね』」

「私は顔を殴られた痛みを忘れてはいないよ。全てをしっかりくつきり覚えてるからね」

「『ん？』 『あれれ？』 『熾音くんはそんなに根に持つタイプだった？』」

「彼女は特別、とか言ってみたりね」

「『なんだか』 『いつもの君の』 『柄じゃないなー』」

「ふふふ、まあいいじゃないか」

私は初めてあの子に会った時に色々言ったが、結局はつまらない子になってしまった。

すべてが決まりきってしまっているこの世界で、そんなつまらない選択をした黒神めだかには何の興味も無い。

全ての事が出来すぎているともいえるこの世界で。

私達にとって理解の外にある誰かが決めているとしか思えないこの世界で。

大局を変える術など持たない私より、ただ只管に王道という名の異常を貫く黒神めだかより、全てを捻じ曲げ未来を変える力を持つ球磨川楔の方が、ずっとずっと好意と興味を持つことができる。

やはり、私は正しい現実よりも虚しい未来の方がいいよ。

もしかしたらな記憶　その伍

エレベーターが開き、その惨状を目にした生徒会の面々＋　の連中は呆然としている。

それも無理は無いだろう。

なぜなら彼らのために足止めに回った『負け犬軍団』とフラスコ計画側の『裏の六人』の全員（ついでに門番二人）が、全身を巨大な螺子に貫かれて全滅していたのだ。

「なんだこりや……何があつたらこんな光景になるんだ？　まさか相打ちにでもなったのか？」

生徒会庶務の人吉善吉はそう呟いた。

そう確かに、『負け犬軍団』の中に螺子を使う人間がいないことを彼は知っているが、もしかしたら『裏の六人』の中にそんな奴がい

たのかもしれない。

そして何がどうなったのかは分らないが、そいつのせいで相打ちになっただとしてもおかしくは無い。

おかしいことなんて無い　はずがない。

「いやいや、彼もそんなことがあるはず無いなんてわかってる、きつと現実から目を背けたがってる証拠だね。」

「『そうだね』『相打ちじゃあこつはならないよ』『ちゃんと考えればわかることさ』」

そんな時に唐突に聞こえてきた声。

やけに無感情で透明でよくわからない女の声と、やけに屈託の無い調子で聞く者によつては不快感を溢れさせる男の声。

そんな声は、彼らに向かって続けて言葉を放っていく。

「『14人全員が同じように串刺しにされている』『どんなアブノーマルであろうと自分で自分を串刺しにするなんて不可能だよ』『これは明らかに第三者の仕業に違いない』『一体どういう目的があつてこんな面白半分の惨状を演出したのかはさっぱりわからないけれど』」

「誰だ！」

人吉善吉はそんな男の声に対して叫ぶようにして問いかける。

それに答えるようにして、正体不明の二人分の声が響く。

続いて時計塔の入り口の方から二人分の足音が近づいてくる。

「おやおや、そんなに過敏に反応するなんてよくないよ。それじゃあまるで私達が犯人であると決め付けているようじゃあないか。そ

れはよくない、実によくないね」

「『そうだね』『早とちりはよくないよ』『僕らが来たときにはもうこうなっていたんだ』『だから』」

そうして彼らは姿を現した。

何人かにとっては忘れようにも忘れられないその姿。
忘れてはならない、その負の人格マイナスと思考。

『僕は悪くない』

「私は悪くない」

球磨川楔と天宮熾音は、前とはいくらか違う姿でそこにいた。

球磨川の髪は中学の時よりも少し伸ばしているだろうか、背もこちらの男子高校生と同じくらいには伸びている。

天宮の髪は前よりも更に伸びただろうか、平坦な胸は変わりないが球磨川と同程度の背丈にはなれたようだ。

ただ、彼らの内面は絶対的にマトモな成長をしていない。

「『めだかちゃん久しぶりっ』『僕だよ』」

「お久しぶりだね黒神めだか、私を記憶していますか？」

二人は黒神めだかへと無垢な笑顔を向ける。

周りの惨状のように血と汚れに塗れた姿の球磨川も、周りの惨状とはかけ離れた綺麗な姿の天宮も。

「球磨川、楔……っ！？ 天宮熾音まで……！？」

驚愕の表情を浮かべる黒神めだか。

いや。彼らを知っている者全員が、とすべきだろうか。
そしてそんな空気の中で、球磨川楔が指を一本立てて、ふざけたようにこう言った。

「『いいや違う』『僕は球磨川楔じゃない』『彼の双子の弟の』『球磨川雪だ』」

「『!?!?』」

そんな事を言われて驚くのは彼をよく知る人間だ。
思わずそんな人物がいたのかと勝手に想像して驚いてしまう。
まあ嘘であるのだが。

「……楔くん？」

「『あはは』『嘘嘘ぜーんぶ嘘っ!』『引っかったあ?』『だいいょーぶ正解正解っ!』『熾音くんが言っちゃったけど』『僕が球磨川楔でーっす!』『いやんっ!』」

「そして私が天宮熾音です。ちなみに姉妹なんてものはいないから安心してね」

天宮が向けた白けた視線を受けて球磨川が自己紹介し、それに続いて天宮も彼らに名前を告げる。

無論、知らない人間にとってはだから何なのかという程度の事ではあるのだが。

黒神めだかにとっての天敵のような球磨川の発言は、彼女にとっては見逃せないものだ。

「……いつだって縋りつきたくなるような嘘をつくよな、貴様は…」

…」

「駄目だよ黒神めだか、女の子が『貴様だ』なんて汚いぞ」

「お前も、相変わらず何を考えているかわからない……」

「お前だなんてひどいなあ。私はいつだって優しいアドバイザーだった気がするけどねえ。少なくとも私の記憶の限りでは」

くすくす笑ってやれやれと首を振る天宮熾音。

そんな彼女を、黒神めだかは珍しくも敵を見るような目で注視している。

「ッ！」

「どうしたっ!？」

そんな時に突然起きた異変。

未だにエレベーターの前に立ち、事態を把握できずに眺めていた面々の中の一人。

元『十三組の十三人』の行橋未造が、突然に声にならない小さな声を漏らしながら膝から崩れ落ちそうになった。

彼はなんとか持ち直したようだが、それでも隣に立つ都城王土を支えとしなければ崩れ落ちてしまいそうだ。

友の異変に声を上げた王土自身も、かなり心配そうに見守っている。

「これは……っ！ 何をした!」

黒神めだかも声を上げるが、血を拭って綺麗になった球磨川はすみし顔だ。

「『えゝ？』 『僕は何もしてないよ？』 『人のせいにするなんてひどいなあ』」

あっけらかんとそう答える球磨川に対し、天宮熾音はふらふらの行橋未造に顔を向けていた。

「ふゝん……へえゝ？ でもま、これくらいで倒れてるんじゃ無理だね」

行橋未造が倒れかけたのは他でもない、彼の持つ感受性が天宮熾音から受信した情報量が余りにも多すぎたことが原因だ。

都城王土が傍にいたことで緩和されていなければ、きっと意識を失って倒れていただろう。

だから彼は幸運なのだ。

恐怖に満ちた視線を天宮熾音に送ることが出来ているだけ、十分に幸運といえる。

「おい、人声……何者なんだよこいつら。昔の友達だってんなら俺たちにも紹介して ツ！？」

状況が怪しくなってきた中、名瀬天歌はなんとか情報を得ようと人吉善吉に声をかけた。

しかし、そこで見たのは何かに怯えているかのように全身を振るわせる善吉の姿。

宗像の繰り出す銃器などの攻撃にも、その他のいかな敵にも恐れなかった彼が、見事に恐怖に屈していた。

トラウマとでも言うべきか、球磨川楔という存在は彼にとっては毒

のようなものなのだ。

それでも彼はその震えを止めた。

いや、止めてもらった。

他ならぬ、黒神めだかの手によつて。

そして善吉の代わりに彼女が名瀬天歌　　黒神くじらの問いに答えた。

「この男は私達の中学時代の先輩ですよお姉さま。かつては生徒会長を勤めた男です。支持率0%で生徒会長になつた脅威の男。もつとも、たったの数ヶ月でリコールされましたがね」

「支持率……ゼロ!？」

驚愕の声を上げるのは生徒会会計の喜界島もがな。

人吉の様子にも、黒神の様子にもどこかおかしいと気付いて、球磨川と天宮に対して昔に一体何があつたのかを気にしている。

「それで、こつちの天宮とか言うのは？」

「この女は……天宮は、球磨川と同じく中学時代の先輩ですよお姉さま。その頃も球磨川とは仲がよく、生徒会では奴の補佐として色々と動いていましたよ」

「……暗躍つてことかよ」

吐き捨てるように言い捨てる名瀬天歌。

何を考えてるのか分らない上に、あんな球磨川と仲が良くて暗躍など、一体どれだけの事をやってきたのか。

不幸を求めて彷徨った過去のある名瀬からすれば、それは球磨川と同じく危険人物ということに変わりはない。

むしろ、実際にやってきたのなら天宮の方が危険なのではないかと思えてしまう。

だから今、球磨川がこちらに向かって歩いてきて、生徒会のメンバー達に毒のある言葉を残していったとしても。

少し離れてそれを一望する天宮熾音の存在が、全てを見通しているのではないか。

そう思えてしまえば、迂闊に思考をする事すらも躊躇われてしまうのだ。

「…………おい」

台風一過のごとく、球磨川楔はあらかた言っただけで離れていった。

そうしてそのまま天宮熾音の隣へと立つ。

しかし、そのまま外へと歩き出そうとして後ろから声かけられた。

「それで私には何も無いのか？ 球磨川、折角の再会で折角の機会だ。私にも言いたいことがあったら言っておけよ。さっきから離れて見ている天宮も、言いたいことがあるなら今だろう」

そう言い放つのは黒神めだか。

確かに彼女にだけは、球磨川は毒のある言葉をかけることをしなかった。

だが、別にそこには意味など無い。

「『んー？』『僕が』『めだかちゃんに』『言いたいこと』『ねえ』」

「突然に私に話を振るんですね。でも、話ですか……そうですねえ……」

そう、意味など無い。

そもそも、彼らは話しかける必要も無かったのだ。コレは彼らがただの気まぐれに行っただけに過ぎない。だから、天宮は球磨川と顔を合わせてこう言った。

「『別に無いけど』『』」
「特にありませんね」

彼らは黒神めだかを自意識過剰と笑う。

彼らは余計なことを考えすぎだと彼らは言う。

おちよくるかのような言葉を吐いて黒神たちのことを笑う。

そんな彼らが発した言葉に、人吉善吉は驚愕を露にする。

『今日付けでこの箱庭学園に転校してきた』という、嘘であつてくれと願いたくなるような情報。

通う学校通う学校、全てを廃校にしていた彼らが。

何よりも、黒神めだかにとって最大の敵になるだろう彼らが、この箱庭学園に入学してくるといふ悪夢。

そうして散々心を抉った後、去っていく際にも球磨川は異常だった。都城王土の要求を曲解して勝手に行動。

『自分の頭』に螺子を突き刺して、そのまま歩いて去っていく。自分で自分を串刺しに出来るはずが無いと、先ほど彼自身で言っていたのは何だったのか。

……やはりそれも嘘なのだろう。

そして天宮熾音は普通だった。

少なくとも、圧倒的に印象を残していった球磨川に比べれば普通だった。

なにせ、いつ去っていったのかわからないのだ。

感覚はある。去っていったという感覚は。

ただ、去った時の姿を誰も記憶していない。そんな矛盾を残して彼女は去った。

本来、似た感覚を前生徒会長で味わった事がある黒神らだが、その生徒会長の事自体を忘れてしまっていては意味が無い。それにもしそれを都合よく思い出せたとして、彼のそれとは種類が異なる異常なのだ。きっと、今感じている矛盾の謎を解明することは出来ないだろう。

彼女の『それ』は記憶に残らないというモノではなく。

他人の記憶自体に作用して、それを壊してしまうというモノなのだから。

「馬鹿な！ 今、一体何と言ったのですか球磨川くん！」

箱庭学園の理事長室。

そこに、理事長である不知火袴の声が響いた。

それは理解の出来ない事態への驚愕に満ちている。

「おやおや、耄碌して記憶できなかったんですかね。というわけで楔くんもう一度！」

「『まったく』『やだなあ』『別に二度言うほどのことじゃあないのにさ』」

理事長を嘲るような声で笑う天宮熾音の声に、ヤレヤレといった感じの球磨川楔の声が続いた。

そうして天宮にもう一度言うように言われた球磨川が、先ほど言った内容をもう一度理事長へと反芻する。

「『この学園に巣食う十三組アフノーマルの生徒を一人残らず抹殺します』『僕たちはそのためにこの箱庭フラスコに転校してきました』」

「ッ！」

そう、球磨川はここへやってきた目的を告げる。

それを聞いて絶句して声を出すことも出来ない不知火理事長の前にして、彼らは声を揃えてこう言った。

「『だってあいつら』 気持ち悪いでしょう?。」

「だってあいつら、 気持ち悪いでしょう?。」

もしかしたらな記憶　その伍（後書き）

というわけでもしかしたら編。でした。

感想などバシバシ書いてくださいね！

第肆拾壹記憶目（前書き）

だんだん盛り上げていこうと思います。

第肆拾巻記憶目

「学園長、私だけ残すなんてひどいですよ。さっさと名瀬ちゃんの後を追わせてくださいな」

「まあまあ、そう言わないでくださいよ天宮くん。君にはただでさえ色々な情報を渡しているんですから」

「……仕方ありません。5分以内をお願いします」

黒髪めだかが理事長の元を訪れた後。

私も他の『裏の六人』を除く『十三組の十三人』全員と一緒に隠れて観察していたのだが、私だけ理事長に呼び止められてその場に残る事になった。

面倒だが仕方ない。名瀬ちゃんも私の仕事に期待してくれているし、学園長の話もしっかり聞いていくとしよう。

情報提供もしてくれるというのなら願ったり叶ったりだ。

「雲仙くんの『十三組の十三人』からの離脱、及び黒神さんの勧誘が失敗……早い話が困っているのですよ」

「ほう、そうですか。それで？」

「いえ、暫定的にですが君に穴を埋めてもらおうと思ひまして」

そう来るのか。まあ予知しなくても十分に考えられたことだが。元々、理事長からは予備のような扱いを受けてましたからね。

正直余り気に食わないが、甘んじて受けることにしますか。

その方が色々動きやすいはずだ……まあ、理事長の命令よりも名瀬ちゃんを優先しますけど。

「それで、言いたいことはそれだけですか？」

「……実はまだある。と言ったらどうしますか？」

「さあ？　ですが残りはあと1分と16秒です。話があるならお早めに」

私はわざわざ秒単位でそれを教えることにした。

まあ5分とは言ったしね。その範囲内でなら聞いておいてあげよう。

「別に構わないのですが、地下十三階のパソコンを計画とは違う目的で動かしましたか？」

「ええ。動かしました。事のついでという奴ですね」

「……まあ、君が動かしたのなら問題ありませんね。特にデータが改竄されているというわけでも無いですし」

「そんな事やつても私に何の得もありませんからね。それではそろそろ5分です。失礼します」

そんなこんなで話を切り上げ、理事長の部屋を後にする。

何にせよ、フラスコ計画を知ったからには黒神めだかも動くはずだ。お人好しで善人だというあの生徒会長なら、そんな計画にはいと願くはずもないし、そんな計画を黙って見過ごすような奴でもないだろう。

一応、黒神めだかの観察をやっていたのだからそれくらいはわかる。正直そこまでわかるほど接していたくはなかったんだが……まったく、面倒なことだ。

……そろそろ、最近不安になってきている私の予知がそのままならば雲仙の姉が動くはず。

どうせ黒神あたりに負けるんだろが、どちらかといえば私はその副産物の方に注目したい。

雲仙冥利がフラスコ計画から外れたという事を知れば、おそらくは他の誰かにしわ寄せが行くだろう。

それは例えば黒神めだか。

雲仙冥利を倒した張本人であり、元から注目されている。そいつを潰せばフラスコ計画に参加できると。

しかし、事態は既に動きつつある。

私が黒神めだかがフラスコ計画に組み込まれるまでの穴埋めを勤めるということになった以上。

そのしわ寄せは当然、私にも来てしまうのではないかということだ。

「さて、それでは話を聞こうか？ 一年生の十三組諸君」

私はすたすた歩き続けてそのまま人気の少ない校舎裏までやってきた。

本当ならさっさと地下に潜って名瀬ちゃんと紅茶でも飲みたいところなのだが、忌々しいこの一年生連中が迷惑掛けてきたら嫌だからね。

それでも連中は時計塔のパスを抜けられないのだから無視してもいいのだが、この先何らかの邪魔が入るというのなら、それはとても

ではないが無視できない。

そんなわけで私は、ここでこいつらの相手をすることにした。

始めに言うておくが、私には黒神めだか程の超人的身体能力はない。私の体が進化し続けてどんどんと強くなっているのは確かだが、元々が脳を中心とした進化なのだからそれも仕方ないだろう。

だがしかした。それでも私は名瀬ちゃんを守るためにある自分の力には、それなりの自信を持っている。

この程度の、ただの十三組の一年生になど負けるはずもない。

「私には時間がない。フラスコ計画に参加したいのなら、さっさとかかってきたまえ諸君。面倒だが、脳の片隅に残すくらいはしてやるう」

「舐めてんじゃねえぞ！ フラスコ計画参加者の中でもお前は下っ端だろうが！」

「さっさと『十三組の十三人』の席を明け渡しやがれ！」

「……にしても情報の流れが早すぎる気もするが、まあいいか」

さっさと片付けよう。

名瀬ちゃんが私を待っている気がしてならないのだ。

それを邪魔する有象無象はすぐさま消えうせてもらいたい。

バカどもに向けて一歩踏み出すと同時に、すぐ先の未来だけを予知して動く。

相手の攻撃するタイミングが全てわかるということは、全ての攻撃をかわせる上にそれにカウンターも合わせられるということだ。

私の攻撃に大して反射する高千穂にはそういう予知は通用しないだろうが、こいつらはただのちよっと異常なだけのバカどもだ。

一瞬で、全てを片付けることができるだろう。

間に分け入って体を動かし、振られた拳を叩き落として脚を払う。後ろから放たれた拳を屈んで避けて脚を払った男の上に背負い投げる。

二段重ねの生徒を思い切り踏みつけつつ右から伸びてきた拳にカウンターをあわせる。

簡単な話だ。相手よりワントンポ速く動けばいい。タイミングがわかるなら簡単な事だ。

そうして結局、1分もしないで事はすんだのだった。無駄に時間を使うことになったな、さつさと帰ろう。名瀬ちゃんと古賀ちゃんが私を待っている。

「それで、私が動けばいいわけだね」

「そーなんだよ熾音くん」

「ごめんねー。どうしても気になるんだって。私も行ったほうがいかな?」

「……気持ちだけで充分さ。古賀ちゃんはゆっくりしててくれよ。名瀬ちゃんの願いならいくらでも聞くさ」

地下四階の工房で、やってきた名瀬ちゃんに私は一つ頼まれた。もちろん、黒神めだかの事で。

どうやら黒神めだかが雲仙姉に襲撃されたらしい。そしてその後黒神めだかが都城王土と接触。詳しいことは知らない

が、どうせ何か言っただに違いない。

私が頼まれたことは、黒神めだかが一体いつどのような対策をしてくるのか来るのかという事。

もちろん予知さえ使えば明日来ることはわかっているが、現在何をしているのかという事まではわからない。

仕方ないから『どうすれば見つかるのか』という事を予知して向かうとする。

遠いな。旧校舎……『ゴーストバベル軍艦塔』にいるのか。

あそこには確か学校辞めて管理人をやっている黒神真黒がいたはずだ。

大方、黒神めだかは兄を頼ったというところだろう。

あの男なら黒神めだかをさらに異常に進化させるのに役に立つだろう。

3年の宗像形をあそこまでの異常にしたのは彼だと聞くし、前の統括アナリシスな上に『解析』という異常を持っているのだ。

おそらく、雲仙を倒した時よりもっと強くなっているのだろうな。

それは、黒神めだかを研究対象にしたいこちらにとってもかなり都合なのだが。

まあいい。たった一日であろうがああ男の事だ。充分な仕上げをしてくるに違いない。

まあとりあえずはそんなところだな。
帰って報告という。

いよいよ……未来の途切れる日か。

果たして私が物理的に未来を見ることが出来なくなるのか、それとも何か他の要因があるのか。

推し量ることは出来ないが……名瀬ちゃんにさえ何もなければそれでいい。

大事な大事な愛する名瀬ちゃんと、大事な友達の古賀ちゃんさえ、いつも通りにいられるのなら。

フラスコ計画も何もかも、それに比べれば二の次以下だ。

未来は一体、私に何を見せるのか。

第肆拾壹記憶目（後書き）

あとがき

ちよつと少ない気もするが投稿。
ツイッターでの情報漏洩って怖いよね。
リアルでもマジで怖いよね。

第肆拾貳記憶目（前書き）

フフフラスススココココ

第肆拾貳記憶目

そして運命の日。

その時、私はまだ図書室にいた。

というのも遅刻したとか地下に行く気が無いとかそういう理由じゃない。

ある男を待っていたのだ。

その男なら、きっと予知通りに私の目の前に姿を現すだろうと、その男が私を訪ねる際にわかりやすい場所で待つことにしたのだ。

「やあ、待ったよ。元統括」

「待っていてくれたのかい？」

「義理も無いが、話自体は興味深そうだからな。それにここに来たと言う事はもちろん私の事もしっかり知っているはずだ」

「そうだね。噂に聞いた『予備』のデータバンクが人だとは驚きだ。さあ、地下に行こうか。話は道中でしていこうか」

案の定、黒神真黒は私の前に姿を現した。

私と黒神真黒は時計塔へとたどり着いた。

ここに、フラスコ計画のための地下施設への入り口があるのだが……

「破壊して通るか。セキュリティをなんだと思っている」

「やれやれ、こりゃあ阿久根くんの仕業かな。ここに来るのも一年ぶりだ」

「どうでもいい。お前の目的は黒神めだかだろう。さっさと行くぞ」

異常な人間を選別するための大きな門は叩き壊され、おまけに門番であるあの双子も不在。

門が壊れてもここに残って見張りくらいはするべきだろうに、まったく。

とりあえずここで止まらなかったという事は、生徒会のあいづらは残らず奥へと進んでいったという事だろう。

ならばまあ、私も急いで向かった方がいいはずだ。

奴らがそう簡単に名瀬ちゃんの所まで到達するとは思わないが、もし早く到達するとして私がそこにいないなんて事になったら自分で自分が許せない。

黒神真黒というお邪魔虫はいるが、こいつは私の邪魔はしないだろうさ。

私のそんな行動よりも、たぶんこいつは黒神めだかの事を優先するだろう。

……しかしこの迷路。

この戦闘の跡はおそらく、黒神めだかが高千穂とやりあった跡だろう。

血の跡、擦過の跡、決れた廊下に穴だらけの天井、剥がれた壁。

『普通』に戦っていたのならアリエナイ跡である。もっとも始めから普通などというものに期待などしていないのだが。

少なくとも、ここに高千穂も生徒会の面々も誰もいないという事は、

あの反射神経を持ってしても黒神めだかには敵わなかったという事だろう。

高千穂を相手に無傷であるとは考えにくいが、いざとなれば私が穴埋めをすればいいだろう。

いや、元よりそのつもりである以上はそう考えるのも意味なきことか。

「……………」

「どうした黒神真黒、置いていくぞ」

迷路に残った戦いの傷跡を、走るスピードを緩めて眺める黒神真黒に声をかける。

得ている情報によれば奴の異常は『解析』にある。

おそらくはこれだけの傷跡を見て理解してしまったのだろう。黒神めだかのやらかした事に。

私も詳しくはわからないが、少なくとも高千穂にはこんな壁を大きく挟るような真似はできない。ならば黒神めだかがそれを行ったのだろう。

後でカメラの記録から実験の様子を記憶するべきだろうな。^{たにかい}

「思った以上に進行が早いな。遅れるな黒神真黒、運動が苦手などという泣き言など聞く耳もたん」

「やれやれ、運動もできる文系タイプだなんて反則だね」

あんな妹を持つお前が言うことでもないがな。

まあ迷路の道筋さえ覚えているならなんとかなるだろう。

私は黒神真黒と共に地下一階の迷宮を駆け抜け、急ぎ地下二階の庭園へと向かう。

今の時間ならあそこにはあの人がいるだろう。
あの殺人鬼、宗像形が。

|| || ||

地下二階、庭園。

思ったとおりに水遣りに来ていた宗像形が、生徒会の面々の前に立ち塞がっていた。

止める理由もないし言う事も無いので、このまま生徒会がこの場をどう切り抜けるのか見学と行こう。

「まあ、さすがにこっち側に立っているのは宗像先輩に悪いか」

「……構わないよ、君は君の仕事をすればいい」

「そりゃどうも。居心地が悪いから移動はしますがね」

返事を返され、私は生徒会の面々から離れた位置へと移動した。
本当はこんな殺人鬼、名瀬ちゃんたちの傍に寄せたくないって理由で大嫌いなんだけどね。
言われたからには仕事をこなすさ。

「真黒さん、あの人は何でここに……」

「おや、善吉君も気付いてるだろう？ 彼の異常さに」

「そりゃあまあ、そうですね……」

人吉善吉がその場に現れた私について黒神真黒に問いかける。
少し前に顔を合わせた間柄だ。気になるのだろう。

おまけにこの場所もそうだし、宗像と普通に会話を行っている事も
混乱に拍車を掛ける。

まあ気付ける奴ならすぐに気付いているだろう。

「あの人も『十三組の十三人』って事、ですよね？」

「……そうらしいな。阿久根書記の言うとおりだと思う」

阿久根高貴も、そして当然黒神めだかも、私が『十三組の十三人』
の一員であると理解が出来たようだ。

『フラスコ計画の関係者』という疑惑はあったのだとしても、こう
して現れて宗像と話したことがスイッチとなったか。

決め付ける証拠としては足りないが、そうだと思う証拠としては十
分だろう。

まあ、どっちにしても私がやることには変わらないな。

「さて、そっちの生徒会の面々も気付いているだろう。私は直接手
を下そうという気はまだ無いよ」

「まだ、か」

「そうだ。そして邪魔することなく見物させてもらっ」

「……記憶能力か」

「大当たりだとも。さすが生徒会長は理解が早くて楽でいい」

学校側にも公開にしているそっちのスキルは前に接触した時に看破していたのだろう。

しかし、もう一つの方はいくらなんでも知ることは出来ない。

予測も判断も理解も何一つできない。他人が行う予知とはそういったものなのだ。

「それで、僕は誰を殺せばいいのかな？」

そう言った宗像の前に現れたのは、私の予想通り黒神めだか……というわけには行かなかった。

予知ではなく、ただの予測。

故に外れるなど日常茶飯事ではあるが、まさかこういった事が有り得るとは。

生徒会を観察している私なら気付くべきだったな。

今は怪我を負っている黒神めだか。

妹を何より大事に思う黒神真黒。

黒神めだかを好きであるらしい人吉善吉。

そして判断力があり、後輩・友人の背中を押してやれる阿久根高貴に喜界島もがな。

黒神真黒は今回限りのイレギュラーだが、そうでないとしても、きっとおそらくこのような結果になったのではないだろうか。

「行けるね？ 善吉くん」

「はい、行けます！」

なかなか興味深い実験内容となりそうだ。

本来、理事長が追い求める黒神めだかのフラスコ計画体験レポートとはいくまいが、これもまたよしだろう。

面白い、いや、興味深いものが見られそうだ。

「黒神真黒、一応は感謝しておこう」

知的好奇心を湧き上がらせてくれたことに対して。

「だがまあ……もしも、宗像が負ける様な事があったのなら」

ただの普通たる人吉善吉に、人殺しの異常者たる宗像形が負けたのなら。

「次は、私の番が回ってくるかな？」

全階層に取り付けられているカメラに向かって、私は笑いながら呟いた。

これを見ているのは理事長に名瀬ちゃんたちに……受け取る意味は違っただろうが、多分どちらか私を許してくれるだろう。

久方ぶりに燃えてきたよ。名瀬ちゃん以外の事でね。

|| || ||

「うわぁ……」

「どうしたの名瀬ちゃん……て、うわー。これ熾音くんじゃん。何でカメラに向かって笑いかけてるの？」

「たぶん何かを言いたいんだと思うんだけどよ……」

地下四階の名瀬天歌の工房にて。

現在進行形で地下へと潜ってきている生徒会の動向を、彼女達も設置されたカメラを通して観察していた。

そしてニッコリスマイルをカメラへと向けた天宮熾音を発見したわけだが。

「どうする古賀ちゃん、今度はウィンクしてるんだけど」

「え、私に聞くの!？」

付き合いの長い名瀬天歌ですら、その笑顔の意味を理解することは出来なかったという。同じくらい熾音と親しいと思っている古賀いたみも同様である。

まったく、これじゃあ笑顔の意味が伝わっていないじゃないかとも思うがそこは安心。

笑顔一つでわからずとも、なんだかんだ言っても彼らの付き合いは長い。

「悪戯とか……ほら、熾音くん以外とお茶目だし」

「そうだな。熾音くんならそういう事もやりそうだな。後はほら、一人で先にやりあおうとしてるからカッコつけてるとか」

「ああ！ そっか！」

笑顔など無くても、充分に意図は伝わっていたのである。

まあ、多少は伝わっている内容が違うようだが。

「さすが名瀬ちゃんだね！」

「？」

本人にその意思は無いようであるが……しかし。とにかく彼らの絆は深いようだ。

「でも、熾音くんには絶好のタイミングでやってもらわねーとなー。あいつらが3階まで降りてきてからのほうが、色々と仕込みやすいしよ」

「わかった、じゃあ携帯に電話してみるね」

彼女らの考えた企みを知らせるべく、古賀いたみは天宮熾音の携帯電話へと電話をかけた。

第肆拾貳記憶目（後書き）

あとがき

難産ここに極まれり。

なんか毎回こんな事言ってる気がしますかね。

盛り上がる場面が近づいているため、そこまでの道程がやたらと長く感じます。

意見や感想をドシドシお寄せください！

第肆拾参記憶目

さて、こんな時になんだが一つ話をしよう。

『異常』という物がそれすなわち『戦闘力』に直結するか否かについて。

実際、異常度の高い『裏の六人』^{プラスシックス}は、科学では説明も出来ないような『普通じゃない事』ができるのだから戦闘能力は高いと言ってもいいだろう。

ただ、異常度が高いからと言って必ずしも強いというわけでもないのだ。

心を読むことのできる行橋未造には直接的な戦闘能力など無いし、私の愛する名瀬ちゃんは『元普通』の古賀ちゃんに『異常』を付加できるほどに異常だけれど、戦闘能力なんてほとんど無い。

先ほど上げた『裏の六人』だって、全員が全員強いかわれればそうでもない。

反射神経が異常な高千穂は異常度では劣っていても『裏の六人』にそうそう遅れはとらないだろうし、元々普通の古賀ちゃんだってそうだろう。

異常を持つ奴は一点特化型の者が多いのもその原因の一つともいえる。

黒神めだかや雲仙冥利といった万能型の例外は除くとして。

他の者は何かしら一点に優れているだけで、それが必ずしも戦闘能力に結びつくものであるとは限らないのだ。

私の場合は……まあ、私もある種の例外ともいえるのかもしれないが。

それでは今、普通の人吉善吉が戦おうとしている宗像形はどうなのか。

戦闘力が高いか低いかで言えば……文句なしで危険と言えるだろう。どこに持っているかわからないほどの大量の武器を、惜しむことなく使い捨ての武器として使ってくる男だ。

刀剣の類だけでなく銃火器までも使ってくる時点で、その戦闘力が高いという事は予想できるだろう。

私にとっては先手をとるだけで勝てる容易な相手ではあるが……武器も何も持っていない人吉善吉にとっては恐るべき相手であることだろう。

さてさてまともな戦いになるのかどうか。

「と、思っていたんだけどね」

どうにも予知を使わない私の予測は外れやすいようだ。

天井には宗像形の取り出した無数の刀剣が突き刺さっている。

それら全てが、普通であるはずの人吉善吉によって宗像の手から弾き飛ばされたものだというのだから驚きだ。

今のところ、宗像は人吉にクリーンヒットを当てられてはいない。

『おいおい、普通相手にやられちゃってるじゃん』

「そうだねえ。どうする名瀬ちゃん」

『俺は戦えないって知ってるだろ?』

「もちろん」

そんな事は百も承知だよ名瀬ちゃん。

だからこそ私は聞いているんだよ？ 私が出て行ってもいいかどうかをね。

まあ、だとしても宗像が人吉に敗北してから……という事になるだろうけどさ。

この結果はしっかりと見届けないと。

「たとえあいつらが嫌いつて言っても名瀬ちゃんの為なら何でもするよ。足止めだろうと時間稼ぎだろうと、名瀬ちゃんが命じるのならね」

『んな事言つて、どうなつても知らねーからな』

「ははは、望むところだと言わせて貰おう。おっと、状況に変化だよ名瀬ちゃん。とうとう宗像が銃火器使用に踏み切ったようだ」

私の視線の先では宗像が両手に銃を手にしていた。

そして今にも、銃殺が執行されようとしていたんだけどもねえ。

宗像へと一瞬で踏み込んだ人吉の蹴りが、宗像の手から銃を蹴り飛ばした。

そして両手でそれをキャッチして一瞬で分解。

まあ、知識があれば実行できるのかもしれないな。だとしてもその胆力は凄まじいが。

というかなんだこれは。宗像が全く太刀打ちできていないじゃないか。

「本気で考え直す必要があるんじゃないかな。普通そのまま異常相

手に圧倒するとは色々読み間違えていると思うんだけど」

『あの人、武器を持っても才能あるわけじゃねーからなあ……』

『でも所詮は普通^{ノーマル}じゃん！ 宗像さんが異常なのはそういう所じゃないでしょ？』

「ま、古賀ちゃんの言う事も最もだね」

あの人は殺す事にかけては他に類を見ないほどに異常だ。^{アブノーマル}

だからそこをはきちがえてしまえば、人吉は負けてしまうだろう。

……負ける、で済めば一番なんだけどもね。さすがに学園の敷地内で人を殺すのは良くないだろうし。

十分なほどに鍛えられたサバットで宗像を昏倒させれば人吉の勝ち、もしも気を失ったフリをしているだけで終わってしまえば

「普通の人間による、普通の勝利だ！」

「……ま、普通じゃそこで終わったと思ってしまうか」

まあどっちにしても面白いんだけどさ。

そんな普通な思考じゃ異常な宗像さんの殺しの手口を考えることなんか出来ないはずさ。

まあやった事は至極簡単な死んだフリってヤツなんだけど。この場合は死んでないからやられたフリってやつかもね。

全ては一瞬、誰もが人吉の勝利を信じて疑わないというその瞬間。宗像は手持ちの刀剣を数本投擲し、人吉の背中へと突き刺した。

「あらら。どうしようか、霊柩車の手続きとかする方がいい？」

『恐ろしく話が飛んでるぜ熾音くん。つってもまあ、決着はついて
そうなもんだけどな』

「そうだねえ……いくらなんでもアレだけ投げておいて急所をはず
すなんて事は無いだろうし」

人間の急所なんて、宗像なら知り尽くしてるだろうし。

これで決着がつくはずなんだよ。

……そのはずだったんだけど、これは一体どういうことなんだろう
か？

死なないにしても立てるような怪我には見えなかったのだが。

いつの間にやらさつきから泣き喚いていてうるさかった黒神めだか
も泣き止んで、誰もがみんな武器を背中に刺されてウニみたいにな
った人吉善吉をビックリといった感じに眺めている。

私も実に驚いて眺めているところだ。異常でもない普通なら、ここ
で倒れて終わってしまうと思っていたのだから。

「……よくもめだかちゃんを泣かせたな」

ましてやまだ戦う気概も充分ときたものだ。

これはいよいよ面白くなってきた。

これは本当にもしかしたらもしかするのかもしれない。

ただ問題は、今のたっているのが精一杯といった感じの人吉善吉が
体力がまだ残っている宗像にどう対抗するか。

「よしとおけよ、その様じゃ立っているのがやっとならう。折角助
かった命だ。大切にしろ」

「あれ？ おかしな事を言うじゃねえか人殺し。そのセリフまるで、

殺したくないみたいに聞こえるぜ？」

「……世迷言をほざくなノーマル。　　殺すぞ」

宗像の言葉に人吉が返した言葉に、どうやら遂に宗像がキレたようだ。

少なくとも私にはそう見えた。

ただ、人吉が言った言葉。あれは注目に値する。

確かに宗像さんの攻撃で人吉が死ななかったというのは不自然に過ぎる。

今思えばだ。あそこで殺す気であつたなら、隙についてマシンガンを撃つなり手榴弾を投げるなりすればよかったのだ。

……もうこの時点で破綻しているな。

もしも本当に宗像が殺しを躊躇わない人殺しなら、その選択をしない時点で設定が破綻している。

む、嫌な予感がしたから思わず予知を発動してしま　　危ないな全く。

天井に刺さっていた剣を震脚で揺らして落下させるとは、もう人吉善吉はただの普通とは考えない方がいいな。

「どうだろ名瀬ちゃん、この結果。『違った意味』で面白いことになったけど」

『確かにそうだなー。普通が異常を倒しちまうなんて計算外だぜ』

『……むー！　ただ単に宗像さんが本気出さなかっただけじゃん！』

「まあまあ古賀ちゃん、どうやら宗像には負ける要因になるだけの事情があつたみたいだし、ちよつとここで聞いてからにしてみよう

か」

もう既に私を無視して生徒会の連中は和みモードに入っているし。宗像もいつの間にか晴れ晴れとした顔で人吉と握手を交わしているし。

異常な人間というものは移り変わりが激しいから、こうしてオトモダチを作って依存する事自体は珍しくも無い事なんだけどね。

私の記憶しているフラスコ計画のデータの一部にも、そういった異常者は結局『他人との繋がり』を求めると結果が出ているし。

『異常』であるがゆえに周りの『普通』に溶け込むことが出来ず、まともに『他人との関係』を築けないというのがその一因であるという事。

「まあいいさ。これで宗像はアウトだね。次は私の」

『早とちるなつて。こっちの準備も出来たからこっちに進んできてくれよ。そしたら熾音くんは阿久根以外を足止めしてくれりゃいいからよ』

「……………何だつて？」

『あはは。落ち着いてね熾音くん。下で待ってるね』

「クツ……………了解！」

余り大声で話すことも出来ないから仕方なく声と感情を押し殺して電話を切った。

いや、仕方ないのはわかっている。

利害などを考えて動いたりできて、元々は『こっち側』に近い人物とにかく生徒会側に話が通じそんな人間は阿久根高貴しかないだ

ろっ。

黒神めだかはそもそもここに来ようと決めた張本人で、人吉善吉はその黒神めだかの決定には従うだろうし、喜界島もがなは彼らと知り合って日が浅く、黒神真黒は今回は傍観のような立場に徹するようだ。

そうとも。これは仕方ないことだ……だが！ それでもあんなチンピラもどきとは話して貰いたくないのが本心である。
セクハラみたいな真似をしたら絶対に生かしてはおかんど。絶対にだ。

「それで、あんたは仲間がやられても見てるだけかよ」

戦いが終わってしばらくして、人吉善吉が私にそう問いかけた。
どこことなく非難するかのような視線だ。

「私は記録係だからな。過程と結果さえわかれば文句は無い。じっくり拝見できただけで十分だよ」

「なんか不気味だね」

「……いや、それはちよつと言い過ぎじゃ」

「だって本当じゃん」

相変わらず情報通り、ひどい物言いだ喜界島もがな。
名瀬ちゃん相手なら嬉しく感じるけど他の女にそんなこと言われて

モイライラ……いやむしろどうでもいいだけだな。

地下二階から地下三階へと向かう階段を、私は彼らの一番先頭に立つて下っていく。

「すまん、天宮二年生」

「謝る必要など無い。なんとも思っていないからな。……着いたぞ。ここが地下三階だ」

背中越しに聞こえた黒神めだかの声に応答し、階段を下りきった先にある扉を開く。

地下三階、そこは古賀ちゃんの担当フロア。

そこはまさしく動物園の様相を呈していて、犬猫のメジャーなペットを始めとして、キリンやゴリラ、更にはパンダ・各種の野鳥まで様々な生物がいるフロアとなっている。

ちなみに名瀬ちゃんと出会ってから私が実験動物として集めた動物達も、今ではその中に仲間入りだ。

そして更に特筆すべき点。

その動物達はどれもが名瀬ちゃんによって改造を受けている。

すなわち、このフロア担当の古賀ちゃんを始めとする『生物』は、全てが改造人間&改造動物なのである。

しかし。

「ではこっちの端から順番に愛でよう！ ほら喜界島会計もこっち
こっち！」

このやたらとはしゃいでいる黒神めだかは何なのだろう。
新たな発見というべきか、見たくも無い人間の笑顔を見てしまった。
これが名瀬ちゃんだったら百倍良いのに。

まあ、はしゃいで油断してくれているというなら好都合。
私は名瀬ちゃんから託された足止めを上手くやりきろう。

第肆拾参記憶目（後書き）

あとがき

とりあえず皆忘れてるだろうけど、単行本第五巻で宗像さんが言っていた事。

黒神真黒が『現在のフラスコ計画』を立案して云々

一年前に理事長に余計なことを吹き込まなければあの子は死なずに済んだ云々

これって次章のフラグかな？

そして高千穂の「ないよりある方がいいに決まってる！ 無い方がいいのは女の胸くらいなもんだぜ」って発言。

そうか、お前ツルペタが好きなんだな。

ロリではなく貧乳が好きなんだな？ もしかしたらロリも好きなのかも知れんけど。

いや、どんな胸だって好きだという事かもしれないな。
謎は深まるばかりだ。

第肆拾肆記憶目（前書き）

i
m
p
o
s
s
i
b
l
e

第肆拾肆記憶目

ガシャアン！

「なんだ！？ シャッター！？」

「そついえば阿久根くんがいないね」

「あ、本当だ」

「マジかよ……あの人は一体どこ行っただ？」

唐突に響いたシャッターの閉まるような音。

その音と共に、生徒会の連中は一斉に騒がしくなった。

さっきまで仲良く言い争っていた黒神めだかと喜界島もがなも、今はさすがに言い争いをやめて一つ所に集まってきた。

「了解。それではまた後で」

私は私で唐突に鳴った電話に答え、生徒会の面々を眺める。
さて、そろそろ動きますか。

「天宮二年生、何か知っていないか？ 阿久根書記が消えてしまったのだが」

「おいおいめだかちゃん、その人だって『十三組の十三人』なんだから？ 教えてくれるわけ」

「別に構わないよ。聞いたところであまり意味は無いだろうし」

「ってかまわねーのかよ！」

私の役目は阿久根に構っている名瀬ちゃんたちのために君達を向かわせないようにする事だからね、とは口が裂けても言わないが。別にそれくらい教えたところで全くたいした問題ではない。

「まず阿久根高貴だが、彼にはこちらの実験に付き合ってもらっている」

「それは他の『十三組の十三人』が、という事か？」

「ああそうだ」

「カツ！ あの人はシャッターの向こう側でピンチって事かよ」

そう吐き捨てる人吉善吉。

普段は仲が悪いように見えるが、やはり仲間は大切であるということか。

「さて、それでは仲間を心配しているところ名乗らせてもらおうか」

「心配？ それは間違っているぞ天宮二年生。こと破壊する事にお

いて、あやつは私や善吉よりも強い。心配なんてしてはおらんよ」

「……それはいい。そのほうがむしろこっちにとっては好都合だよ」

心配してないって事は、阿久根を助けることを優先するわけではないという事だ。

躍起になって助け出そうとするよりずっとやりやすい。

「では改めて、『十三組の十三人』の一員で記録係、『知識の匣』の天宮熾音だ」

「記録係、ね……」

「あなたも私たちと戦うの？」

喜界島もがなが至極全うな質問をしてきた。

確かに、会ったからといって必ずしも戦うという選択を選ばなければならぬのか？ というのは疑問はあるだろう。

だが、このフラスコ計画に参加している時点でそれを潰そうとする生徒会は敵であり、『十三組の十三人』である以上はそれを阻止するべく、また彼らを実験台としてフラスコ計画の進歩に努めようとするのは自然なことだ。

「そうだな。それでも別に構わないと思うが……そうだな。少し質問をさせてくれ」

「別に構わんぞ」

「お前達にとってフラスコ計画とはなんだ？ できれば答えてもらいたい」

「フラスコ計画はこの箱庭学園の生徒を犠牲にする。私はそれを」

「ああ、すまないすまない。理論的な理由は要らない。簡単に好き嫌いで答えてもらって構わないよ」

「カツ！　んなもん嫌いって答えるに決まってるじゃねーか。なあめだかちゃん？」

「……まあ、そっちが答えるとは思わなかったけど概ね間違っていないみたいだな。反応を見る限りは」

割り込んで答えた人吉善吉の言葉に黒神めだかは頷いている。

喜界島もがなも、あろうことが黒神真黒まで同意を示している。

まあそれはいい。

ここまでできたのだから当然の事だ。

ただ……

「私はこのフラスコ計画が好きなんだよ、君達から見ればおかしい事かもしれないけどね」

正確に言えば『名瀬ちゃんが携わっているフラスコ計画』なんだけどな。

ただ私自身、このフラスコ計画というものに対して全く興味が無いというわけではない。

私の知識の欲求は今尚薄れてなどいないし、むしろ高まっている節があるのだから。

私自身がその先を見てみたくてたまらない、そして何よりも私の好きな名瀬ちゃんが完成させたがっているフラスコ計画を嫌いになど

なれるはずが無い。

「だから残念ながら、フラスコ計画が嫌いなお前達とは敵対せざるを得ないわけだ」

「……それは残念だ」

「残念で何より」

私はお前が嫌いだからな、黒神めだか。相対していて反吐が出るほどに大嫌いだ。

だからお前の相手は直接しない。取り急ぎはまあ、無視することにして。

こうして話しながら場所も移動できたし、確かこの下はあの部屋だろう。ああ、ちゃんと壁にスイッチもある。

そら、ポチツとな。

「……え？」「……」

パカッと開くようにして、突然にして床に穴が開いた。

もちろん地下施設という設計上は不味いような気がするけど、私が予知を駆使して使う機会があると判断したんだから大丈夫。

こうして役に立ったんだから問題ないよね。こんな事もあるうかと、というのは実にいい言葉だと思うよ。

生徒会の面々が落ちたのは地下4階の名瀬ちゃんの研究室フロア。

その中でも、私が使うために用意してもらっていた個室スペースだ。

「このままじゃ面倒だから仕分けもしないといけないしね」

開いた穴へと飛び込みながら私は呟く。

さすがに全部まとめてというのも面倒だし、とりあえず興味のある『異常』ではない面々から相手にするべきか。

つい最近に黒神めだかに変えられてしまった喜界島もがなに、ずっと前から異常である黒神めだかについてきた『普通』の人吉善吉。名瀬ちゃんは何久根高貴が一番変えられたとは言っていたけど、こいつらだって興味深いことには変わらない。

しかし、穴から下に降りてみれば何故だか誰もいなかった。どうやら散開していなくなってしまったようだ。何を考えているのやら。

「……こんな所で鬼ごっこをするハメになるとは思わなかったよ」

まあでもこういう場合たいてい、誰かが囿に残ってるもんだ。男つてのはそういう役割を引き受けたがる。

そしてもしもその役割を務めることを拒否されたとしても、勝手にやってしまうのが男だろう。だからこうして待っているだけで、たぶんそいつは現れる。

「行かせねえよ！」

「いやまあ、予想通り過ぎて笑えてくる。それで、君が私の相手をする？」

「……相手をするつつつてもあんたは記憶係だ。真黒さんが戦うタイプじゃないみたい、あんただって戦えるわけじゃ」

「あ？ ああ、なんだ、随分と私のことを誤解しているらしいな」

まあ私の事を深く説明したわけでもないから仕方ない。

単なる記憶能力だと誤解してしまうのも無理はないのか。

黒神真黒の『解析』でも、私のそれを完全に読み取るとは不可能だったのだし。

私は目の前にいる人吉善吉に、私を手っ取り早く理解してもらうことにした。

「私は戦うタイプじゃないと思われているが、そんな事は全く無い。むしろ戦うのだって得意なタイプだ……よつと！」

私は手近にあった処分決定済みの本棚の縁を掴んで、人吉善吉へとそれを丸ごと投げつけた。

彼が驚愕を顔に浮かべるのも仕方ないだろう。

記憶能力とか記録係とか、そんなことにはばかり思考を囚われていたのならそれだって仕方ないだろう。

まあもつとも、この程度でどうにかなるなどとは思っていないが。

「うっ、うおおおおお!？」

本がぎゅしりと詰まっている本棚を、人吉善吉は大声を上げて横っ飛びに回避した。

私もそうだが、なかなか普通じゃない反射神経だな。結構な速度は出ていたと思うが。

やっぱり人吉善吉もなかなかに興味深い。

「まあ、こんな感じだ。理解できたかな？」

「あつぶねーじゃねーか！」

そう喚くなよ人吉善吉。

これが異常だ。これこそが異常だ。ただとても重そうな本棚を片手で放り投げたことくらいで目くじらを立てていたら、この先何があっても生きていけないぞ？

それこそ『十三組の十三人』はビックリ箱のようなものなんだから。

「さてそれじゃあチェックと行こう」

「っ!？」

私は身構える人吉善吉に向かって、ゆっくりと一步を踏み出した。

まあ、結果なんて見えてたようなものなんだけどね。

こんな満身創痍の相手に私が手こずるわけもなし。

いくら　しろとは言われていても、さすがにこれ以上の譲歩は出来ない。

気絶させる程度で済ませてやろう。

はあ、どうして私がこいつら相手に手心を加えなければならんのやら。

あれ？　本当になんでだっけ。言われたのは覚えているけどそれを聞く気になったのは何故だ。

まあいいさ。後で考えよう。今はさっさと終わらせて名瀬ちゃんの
ところに向かうだけさ。

第肆拾肆記憶目（後書き）

あとがき

不可解な行動が増えてきました。
ありえん思考も増えてきました。
はてさてこの先一体どうなる事やら。

『十三組の十三人』には黒神めだかの逆の奴ばかりらしいですが。
その場合、熾音くんはどんな部分が逆なんだろう。
全員を愛する黒神めだかと違って、ただ一人を愛する点？

第肆拾伍記憶目（前書き）

なんとなく『喜界島ればーと』を書いてみました。

第肆拾伍記憶目

「呼ばれて飛び出てジャジャジャーン！ 愛の担い手天宮熾音、ここにさフベア！？」

「あ、ごめんね熾音くん。つい殴りたくなっちゃって」

「謝る必要はねーぜ古賀ちゃん。全く問題ない対応だ。熾音くんもそれくらいじゃ怒らねーよ」

「もちろんさ！ この程度で怒るほど気が短くは無いんだよ！」

それに古賀ちゃんは既にパワーが落ちかけてたからね。

ハハハと笑って床から起き上がった私に、周りからおかしな視線が浴びせられる。

まったく、そんな視線を浴びせないでくれよ名瀬ちゃん。嬉しくなるじゃないか。その他はどうでもいいけど。

さあ、私を足止めしようなんていう普通生徒は気絶させた！

その変態野郎共々、私たち最強の友情タッグがお相手するよ！

「いや、もう決着ついたから」

「なんですと！？」

名瀬ちゃんの言葉に、私は驚愕を浮かべて立ち尽くすのだった。

第肆拾伍記憶目

「と・こ・ろ・で、なあああんで顔の包帯を取っ払っちゃってるんだい名瀬ちゃん!？」

「今更だなーおい」

「余りにシヨックで気付かなかったというかなんというかね!？
ってそんな事はどうでもいい！」

「どうでもいいのかよ」

もちろんどうでもいいとも。どうしてもよくないのは名瀬ちゃんの格好だよ。

私なんてどれだけ苦労して素顔を見せてもらったことか。

だというのに！ 名瀬ちゃんの可憐にして美しい顔が晒されている
じゃあないですか！

「熾音くん！ さっき名瀬ちゃんがスカート脱がされたの！」

「嫌アアアアアアアアアアアアア！」

「ああっ！ ごめん！ どうぞ熾音くんどうぞっ！」

「もう嫌アアアアアア！」

耳を塞いで私は倒れた。

それ以上聞かせないでくれ。頼む。お願いだ。

現実から目を背けたい……引き籠もりたい……だがっ！

そんな場合じゃあないよなあ！

「ザ・復活！」

「おっ！」

古賀ちゃんがパチパチと拍手する中、私はすっと立ち上がった。そつとも、寝ている場合じゃあない。

「ははははは。やってくれたようだなこの変態野郎ども。私の名瀬ちゃんによくも破廉恥な！ 私だってやったこと無いのに！」

「別に熾音くんのじゃあないからな。言っとくけど」

名瀬ちゃんの言葉を背に受けて、私は黒神真黒と阿久根高貴に相對する。

もう既に怨敵に対しているかのような気分だが間違っではないからいいだろう。

特に黒神真黒、貴様にだけは容赦はしないぞ。

どうせたぶん絶対に、お前のような変態がいる事こそが名瀬ちゃんに被害が及んだ原因に違いなからな。

もちろん名瀬ちゃんのパンツ見た阿久根高貴だって許す気は無いけどな！

「ふっ……どうやらこんな所にも変態が隠れていたようだね」

「貴様に言われたくは無いな、黒神真黒。私の名瀬ちゃんに破廉恥な真似を！」

「どつちも変態に見えるよ」

（言いたくないけど俺も賛成……）

さつきから地獄耳と愛情パワーで聞いてれば『マイシスター』だの『妹』だのと。

私にとって腹の立つ単語ばかりだ。

例えばそれがリアルな言葉なんだとしても、ムカつく事であるっていうのには変わらない。

さあ今度こそ鉄拳制裁……

「熾音くん、余計な事すんじゃねーよ」

「え？ いやいやいや名瀬ちゃん名瀬ちゃん。私はまだ負けちゃいないよ。だから」

「いいんだよ別に。俺たちは失敗した。そうだろ？」

「……わかったよ。もちろん従うさ」

基本的にいつまでもしつこく覚え続ける私と違って、名瀬ちゃんは一度終わったことに対してはスッキリしてるからね。

失敗は成功の元というヤツだね。

まあ名瀬ちゃんの場合はもっとシビアなんだろうけど。

なんだって失敗して元々、成功すれば御の字、とりあえずやってみるというのが行動の始まりなのだし。

「ごめんね熾音くん、私が負けちゃったから……」

「いやいや、何も気にする事はないよ古賀ちゃん。思えば私の役割は記憶係。こうして負けた事すらも糧として蓄えて見せるよ。ははは」

「……本当は怒ってるでしょ？」

「……ははははは」

怒ってるわけじゃないか。

いくら私でもクソム力つく連中に負けを認めることがム力つくとかそんなんじゃないけど怒ってるわけじゃないか。

怒ってないとも。私が親友の古賀ちゃんが負けたからって怒るわけじゃないか。

あれ？ どうしたんだいそんな目で見て。何だい、絶対に怒ってるって？ そんな心配は親友の間には要らないだろ？

「ふざけてねーで行くぞ二人とも。俺らの負けだ。さっさと次のことを考えねーとよ」

「さっすが名瀬ちゃん！ そこに痺れる憧れるう！」

私は古賀ちゃんを背負って、奥の方へと歩いていく名瀬ちゃんの後についていく。

いやまあしかし。フラスコ計画における情報収集はほぼ終わっているし、こうして新しいことに着手するというのもいいのかもしれないね。3人の新たな門出的な意味でもいいかもしれない。

「……待ちなよ名瀬ちゃん、逃げるのかい？」

空気読めこの変態糞大馬鹿野郎。

ここは私の知ってる漫画や小説的にはフェードアウトして終わるところだぞ。

何でそこで声をかけるんだよ。そして何勝手に名瀬ちゃんに話しかけてるんだ。

まあいいとも、ここは華麗にスルーだよ。

「逃げる？ 何言ってるんだ。帰るだけだよ」

スルーしないのね。

雲行き怪しいけど古賀ちゃんもあわわしなくて大丈夫だって。なんせ、名瀬ちゃんは名瀬ちゃんだ。

「いいや、君は逃げるんだよ名瀬ちゃん。いや 名瀬ちゃんじゃあないな。黒神くじら、それがお前の本当の名だ」

だから私は何にも心配する事はない。
そんな遠い昔のどうでもいい名前を聞かされても関係ない。

「あれからもう六年か。めだかちゃんはあるという性格だから君の強い意志を尊重したようだけれど、僕はずっと手を尽くしてお前を探していたよ。その過程で解析なんて異常に目覚めてしまつて、お前が嫌った黒神グループを更にでっかくしちゃったのは皮肉な話だけだね」

私たちの後ろで黒神真黒の独白が続く。

正直言つてたかがそれくらいの事、私たちには関係ない。

妹を探すためだけに箱庭学園に入った？ 人間の限界はどうでもい

い？ 妹以外に興味が無い？ 六年間ずっといなくなった妹のことを考えていた？

だからなんだ。

まったく……『名瀬ちゃん』と一番長く一緒にいたのは私たちだったのにさ。

でもそれを聞いてただごとじゃないと思ったのか、私の背中に背負われたままの古賀ちゃんが話しかけてきた。

「熾音くん……あんな事言ってるけど……」

「そうだねえ」

「あれ？ いつもの熾音くんならツツコミとか入れると思ったのに」

「いくら私だってそんな事しないよ。空気読むよ」

「え……？」

なんだよその目は。

別に空気くらい読むさ。名瀬ちゃんのためだもの。

「あと、私すごく驚いてるんだけど」

「ああ 黒神くじらとか妹とか、そういう事に？」

「うん、ってあれ？ 熾音くんは驚かないの？」

「まあね。名瀬ちゃんの顔は前に見せてもらった事があつたし、昔に色々調べた頃があつたからさ」

まあ特に気にはしてなかったんだけど。

私や古賀ちゃんにとっては名瀬ちゃんの昔の名前なんて本当にどうでもいい事だし。

ところで何か言いたそうだね古賀ちゃん。

「知ってたなら教えてくれればよかったのに」それに私だってさっき初めて名瀬ちゃんの顔見たんだよ！」

「ごめんね。私だって気にしてなかったから教えなくてもいいと思っただよ」

今を知ってる私と古賀ちゃん的には、あまり用の無い情報だったし。まあ名瀬ちゃんの顔見たこと無いってのは言われなければ気付かなかったけど。そういえば古賀ちゃん、見たこと無いんだっけ。

私の予知の事も教えてないし、一段落したら皆で話し合いだな。ところで黒神真黒の話はまだ終わらないのか？ いい加減飽きてきたんだけど。

「六年間お前の事を忘れた日は一日だって無かった。さあ振り向いて、その可愛い顔をよく見せておくれ。不幸はもう十分味わっただろう？ お前だって少しくらいは幸せになっていいんだよ」

黒神真黒はそんな事を名瀬ちゃんに言っていた。

正直、なんというか。

私が思っていた以上に馬鹿だったようだ。

「……お」

ちなみに私だが、この後の展開は予知をしているのでわかっている。逃がさないとばかりに追撃をしてくる可能性もあるにはあったし、

黒神真黒がそういう手札を持っているかもしれないからだ。
今回、それは非常にいい方向に働いた。

さすがに私でも、いくら名瀬ちゃんがそんな事をするはず無いと信じていても、予知として知っていなかったら啞然としてしまっていたかもしれないからな。

「お兄ちゃんっ……」

名瀬ちゃんはそう言って、腕を大きく広げた無防備な黒神真黒に抱きついていった。

背中の古賀ちゃんが呆然としているのが雰囲気伝わってくるし、知ってたとはいえ私も怒りを抑えるのに精一杯なので動く事はできない。それにこの行動の結果を知っている以上は動くわけにはいかない。

こうしてまんまと、無防備な黒神真黒の背中に名瀬ちゃんは注射器をぶっ刺すことに成功した。。

「なっ……えっ……!？」

「……いや、別によ。あんたの話を疑うわけじゃねーんだ。たぶん、それは本当の話なんだと思うよ」

ガクガクと震えながら、驚愕の表情で膝をつく黒神真黒に名瀬ちゃんは言い放った。

至極普通にあっさり。なんでもない事のように。

「だけどこめんな。そういう幸福な記憶を俺は心ん中改造して消したんだわ。俺は家を出て、名を捨て、顔を隠し、記憶を消した。俺の人生は六年前から始まったのさ。地獄みたいな、何の救いもねえ人生がな」

私は名瀬ちゃんの言葉を一字一句漏らさずに記憶した。
ああそうだ。初めて会った頃の異常な名瀬ちゃんの雰囲気そのもの
って言葉だ。

「そしてそれでいい。俺には兄とか妹とか家族とか！ そんな幸せ
そうなものはいらねーんだから」

「く……くじらちゃん……」

だから『くじらちゃん』じゃなくて『名瀬ちゃん』だったのに。
まああんな男の戯言なんてどうでもいいけど。

「俺を幸せにしようなんて奴はおよびじゃねーんだよ見知らぬ人。
大親友の古賀ちゃんや、大馬鹿野郎の熾音くんみてーに俺と一緒に
不幸になってくれるっつーなら話は別だがね」

……あれ？

「古賀ちゃん、そこで若干引いてるのは見逃してあげるから聞きた
いことがある」

「へっ！？ う、うん。何かな？」

「私は、古賀ちゃんと名瀬ちゃんから見て……馬鹿に見えるのか？」

「ど、どうだろう？ あはは、ちょっとわかんないかな」
なんだその口調は！ いつも通りの口調にするんだ古賀ちゃん！
それは私が馬鹿だって言いたいのか？ そうなのかつ！？
そしてどうして古賀ちゃんは大親友で私は大馬鹿なんだ名瀬ちゃん！
区別するにしても恋人とか色々あるだろうにさ！

「そんなことはいい！ それより今真黒さんに何を注射した！」

私が心の中で葛藤している最中に、阿久根が名瀬ちゃんにそういった。

そうだなー、仲間が得体の知れない何かを注射されたら気になるものなー。

「さーなんだろうねー、わっかんねーけど、まーでも確かに言える事が一つだけあるぜ。自称肉親のこいつをぶっ潰せば俺は更に不幸になれる。つまりもっとすげえ異常を生み出せるってことだよな！
いいだろう！ 気が変わったぜ フラスコ計画続行だ！」

名瀬ちゃんが楽しそうで何よりです。

自分が自分でもおかしく思えるほどに、古賀ちゃんがびっくりするくらい笑顔を浮かべているのがわかる。

そんな私が名瀬ちゃんに声を掛けようとした瞬間。

すぐ隣の壁が何者かによって蹴り砕かれ、その何者かが部屋の中へと飛び込んできた。

まあ、何者かだなんていつてもそんな人物は一人しかいないわけだが。

「さて、気のせいかと思ったが確認に駆けつけたぞ。黒神くじらと

いう素敵な名前が聞こえた場所は」

そんな事を言つてその場に現れた黒神めだかは、名瀬ちゃんを指差してこう言つた。

「あ、くじ姉だ」

相変わらず名瀬ちゃんに似たこの女、やっぱりムシャクシャする。あの時に名瀬ちゃんの顔を見てからはずっとそれが宝物だつてのに、目つき以外がこつも似た顔があるっていうのはやっぱり腹が立つな。

おまけ

喜界島ればーと特別編

あぶのーまるこれくしょん

あまみやしおん

『ぱんどら』

きおくたいぷ

とつてもつよいきおくりよくで
いちどみたこときいたことは
ぜつたいにわすれないんだつて。

ひかくてきまともなでふだんはやさしいひとなんだけど、
すきなひとがかかわるとおかしくなるよ。

みんなにかくしてるちからがあるんだって。

第肆拾伍記憶目（後書き）

あとがき

え？ 善吉？

知らんな、これは天宮熾音の物語だ。

真黒の言葉？

知らんな、これは天宮熾音の物語だ。

おまけはアレだ。

そうしろと囁いたんだ、俺のゴーストが。

第肆拾陸記憶目

「気をつけてくださいめだかさん！ 彼女は自分の記憶を消していきます！ 真黒さんも彼女にやられました！ 彼女はもうあなたの実姉黒神くじらではなく！ 『十三組の十三人』の一人、名瀬天歌です！」

お、阿久根が珍しく良いこと言った。殴るのは最後にしてやる。でもアレだ。お前は黙ってる。目障りだ。黒神めだか。

「……と、私の愛すべき友人が言っているのですが。確かですかお姉さま？」

「イツエース！ 確かだよ。邪魔にしかならねえ昔の幸福な記憶は俺の中から完全に消去してある。だから俺はお前の姉じゃねーし、だからお前は俺の妹じゃねーのさ」

……全く、名瀬ちゃんの素晴らしいセリフの最中だというのに。なんて最悪なんだこの生徒会長は。

「俺はお前の敵で、お前は俺の敵だ」

名瀬ちゃんがそう言いきつたと同時に名瀬ちゃんへと振るわれた扇子を、私は黒神めだかの手首を握って受け止めた。古賀ちゃんには悪いけど床に放置して、瞬時に名瀬ちゃんの前へと

体を割り込ませたのだ。

「……どいてくれぬか？ 私はお姉さまに言いたいことがあるの
な」

「どくと思うか？ それに名瀬ちゃんが言ったはずだ。お前と名瀬
ちゃんは何の関係もない。ただの敵同士だ」

「確かに言った。だが、姉であるということと敵であるということ
は、私の中で矛盾はしない」

「減らず口を……」

ギリギリと歯を鳴らしつつ、思いつ切り黒神めだかの手首を握り締
める。

受け止めた時のパワーからして、可愛い名瀬ちゃんの非力なボディ
にはダメーシ浸透しまくりな威力だったぞオイ。

今の私は怒り心頭マジ切れ寸前だ。

「今の一撃、天宮が防がなかったら頭部に直撃してませんでしたか
？」

「『敵さえ好む』めだかちゃんの性格は、裏返せば『好きでも敵』
って意味だからね。実の姉が相手だから戦えないという心配はない
よ。しかし（高千穂くん戦での怪我がいつの間にか全快してい
るし、どこるか超回復さえしているようだ。今の僕にはよくわから
ないが トレーニングを終えた時より更に神がかっている。あれ
は既に全盛期どころじゃないぞ！ 一体僕の妹はどこまで化け物に
なる！）」

横で傍観者に徹している二人を無視して、私は目の前の黒神めだかを睨みつける。

名瀬ちゃんに暴力を振るおうとした奴なんて絶対に許さん！

「おー。さっすが熾音くん。ナイスタイミング」

「ふっははは。ガンガン褒めてよ名瀬ちゃん！」

私は名瀬ちゃんの激励の言葉を聞いて、笑顔で振り向きつつ拳を振り下ろした。

ちょうど、私が掴んでいる腕の持ち主である黒神めだかの脳天へ。目には目を、歯に歯を、言葉があるからねえ。当然名瀬ちゃんへやろうとした事は罰として受けてもらう！

「あ」

「又ウ！？」

だというのに。

この黒神めだかはやっぱり最悪な女だった。

あくまで目的達成に動くわけだ。

一瞬！ それこそ一瞬で名瀬ちゃんの手から注射器を奪い取るとは！ それも私からフルパワー拳骨を受けておきながら！

そして私が掴んでいた腕を振り払って一瞬で後ろに跳び退った。

「つつ……この注射器が、兄貴がそこで悶えている原因だな？ 大方、くじ姉を変態的にハグしようとして反撃されたのでしょうか？ 教えてくださいお姉さま。これは一体どういった毒なのですか？」

自分の頭部を押さえることすらせずに、名瀬ちゃんから奪い取った

注射器についての説明を求めてくる黒神めだか。

当然、私にはそんな事を説明する義理は無い。

ただ名瀬ちゃんは……と言うと、そういう無駄な事でもしてあげちゃうのが名瀬ちゃんだもんね。

「毒？ いやいや違うねえ実に心外だ。それは薬だよ。『ノーマライズ・リキッド』！ おれたち
アフノーマル 異常の異常を『病気』とみなした特效薬。言うなら異常殺しのワクチンだ」

私の後ろで腕組みをした名瀬ちゃんが、黒神めだかの方を見ながら説明を始めた。

そんな名瀬ちゃんの更に後ろの方では、私が放り出した古賀ちゃんがふくれつつらで私を見ている。悪かったと思ってるさ。

「元々はその自称兄貴こと前統括が開発してた薬品でな。まあフラスコ計画の一環だよ。とはいえアフノーマルを普通化しちゃうなんてフラスコ計画の目的とは真逆の効果だから、開発はすぐに中止されたそうだがね」

「……理事長でさえ葬ったその研究をあなたが引き継いだと言うわけですか、お姉さま」

黒神めだかの言っていることは、まあ正しい。

私としては、『普通』を『異常』にする研究の一例である古賀ちゃんと言う存在と、『異常』を『普通』にする研究の一例である『ノーマライズリキッド』。

どちらがどちらともフラスコ計画を進めるに当たって非常に有用であると思う。

まあ、結局『ノーマライズリキッド』ではフラスコ計画を直接的に進めるということにはならないだろうが。

「ああ。しかしまるで未完成の実験段階だよ。肉体をゼロから構成し直すようなものだから、全身をとんでもねー苦痛が襲うって副作用は解決できてねえ……もつとも、解決する気はねーけどな！ 痛みなくして改革はありえねえ！ そうだよなあ古賀ちゃん！ 熾音くん！」

「その通りだとも！ 名瀬ちゃんの言うことはいつも正しい！」

「……うん、そうだね」

若干古賀ちゃんのテンション低い気がするな。
そんなに私が床へ落としたことが気に食わなかったのかい？

「前統括どのとしちゃ本望だろうぜ 能力が失われるにしろ、このまま痛みでショック死するにしろ、自分が発案した薬の実験台になれるんだからな」

「……………」

「もちろん俺も本望だぜ。覚えてねえとはいえ実の兄貴を犠牲に学究に邁進するとか！ 実に不幸で実に不遇でとっても偉人^{アフノーマル}っぽいじゃない^{スライク ヒロイック}」

ああっ！ 痺れるマイハート！

名瀬ちゃんの素晴らしい笑顔を前に私は思わず立ちくらみでクラクラリ。

「熾音くん」

「なんだい？」

「キモい」

「はうあつ！」

さすがにこの状況で恍惚とトリップしたのはまずかつたらしい。いくらなんでも少しショックです本当に。

「……『素晴らしいものは地獄からしか生まれない』『不幸だからこそ這い上がる』それがお姉さまの口癖で、めだかはそんなお姉さまを尊敬していました」

また黒神めだかが何かを言い出した。

しかし、『尊敬していました』？　まるで今は尊敬できないような言い草だな。

「誰もが教授する当たり前の幸せを拒絶して、あえて劣悪な環境に身を置き、目的のために自らを痛めつけ、どんな犠牲も厭わないあなたが大好きでしたし、記憶を無くそうとまるでぶれていないあなたとこうして再会できて、めだかは本当に嬉しかったのです。ただ昔のあなたは、周りまで不幸にはしなかった」

……ふう。いやまったく。まったく。

つまりそうきてそうくるのか。なら口出しはしないさ。

「今すぐ解毒剤を出してくださいお姉さま。そうしないとあなたを許せなくなる」

「……………」

「あるはずですよ？ 解毒剤。だってフラスコ計画的にはそっちの方が本筋なのですから」

「……ねーじゃねーさ、確かにな。いい読みだよ自称妹、解毒じゃねーけどな。しかしだからってはいどうぞと渡すとも思うのか？ これはれっきとした実験なんだぜ お前が兄貴の身代わりに実験台になるっつーなら話は別だがよ！」

名瀬ちゃんがそう言った途端。

黒神めだかは、先程名瀬ちゃんから掠め取った注射器を自分の腕に突き刺した。

「わかりました。私が実験台になりましょう」

「!?!」

「ふ……」

「ふむ、なるほど。これは確かに痛い」

阿呆な行動をした黒神めだかは、ドサリと床にぶっ倒れた。

「存外、ただの馬鹿だったね？ 名瀬ちゃん」

「まーそうだな。いいじゃん、兄貴が変態で妹が馬鹿。そこそ不幸でいい環境だぜ」

ん、違いない。

そんな家族がいれば間違いなく不幸だね。

「さーて古賀ちゃん、こいつらの手足へし折ってくれ。んで熾音くんは他の工房行って実験準備。リキッドの効き具合を検証してみてえ」

「了解。あ、そうだ古賀ちゃん。まだ体を動かすのが辛かったりするなら私が代わりにやろうか？」

「え……でも……」

なぜだか古賀ちゃんは躊躇しているようだ。

さて、手足をへし折ることに抵抗でもあるのかな？

古賀ちゃんも女の子だからね。さすがにそれはやりたくないのかもしれない。私の配慮が足りなかったか。

「じゃあ私が代わりにやるよ。思えば、友達の女の子を気遣うのは当然の事だったよね」

「いや、そうじゃなくてね？」

「？」

「その二人って、名瀬ちゃんの家族なんだよね？ 手足をへし折っても……いいの？」

「当然だろ？ むしろ、だからいいんじゃないか。家族でなきゃあ犠牲にする意味がない」

「……………」

古賀ちゃんが悩んでいた原因はそっちにあったのか。

古賀ちゃんは元々普通の女の子だったからねえ、頭の中の根本的な部分までは改造しようがないし。

ちよつと普通っぽい考え方で葛藤しちゃうのも無理ないかな？

「話が違つぞ名瀬さん！　めだかさんが身代わりになれば解毒剤を渡すと言つ約束だろう！」

「約束？　んなもん守るわけねーだろ」

「というか、あれは約束をしてたようには見えなかったがね。ここで見えた私からすると」

「ぐっ……！」

ぎゃーすか言っていた阿久根が、私たちの言葉を受けて押し黙る。

まあ、黒神めだかがやったことはただの自業自得、もとい自爆であつて私たちに非はないし。

それに、阿久根の言葉くらいではどうとも思わないしね。

そんな考えには阿久根も至つたらしく、ならばと古賀ちゃんのほうに声をかけてきた。

「古賀さん！　きみは名瀬さんの友達なんだろう！？　そう言つてたよな！　だつたら彼女の暴挙を止めてやれよ！」

だが、無駄だ。

確かに古賀ちゃんは異常でありながら普通だ。間違いない。それを言つたら怒るだろうけど、確かにそうだ。

でも私たちの友情は、友達としての絆は、阿久根に何かを言われたくらいで揺らいだりはしない。

「友達か……確かにそうだね。だけど友達はタノシーコートだけじゃなくてヤナコトも一緒にするから友達なんだ！ぶっちゃけマジでドン引きだけど！それでも私は名瀬ちゃんの友達だ！」

そう言つて古賀ちゃんは、飛び上がった先の天井を蹴つて阿久根へと殴りかかった。

勢いもついてなかなかの威力だろう。当たれば人が数mは吹っ飛びそう。

しかし、めんどくさいことにまたも目の前には黒神めだかが立ち塞がり、古賀ちゃんの拳を防いだのである。

「あーもー」

「……熾音くん？」

感情的に、というか名瀬ちゃんたちと遊ぶ時のように私が呟いたからだろう、名瀬ちゃんが首をかしげて声をかけてくる。

その姿は非常に可愛いのだが、まあそれはそれとしてだ。

阿久根が黒神真黒を後生大事そうに抱えているのを確認して私は動く。

「残念ながら兄貴と私では鍛え方が違います。兄貴から異常を引いたら変態しか残りませんが、私はそんなもの失おうと痛くもかゆくも」

「つめだかさん！後ろっ！」

「つく、あうっ！？」

阿久根達の牽制を放って私は動き、黒神めだかの頭を掴んで床へと叩きつけた。

そうしてそのまま黒神めだかの上に乗って動きを押さえつける。

「おいおいだからどうしたって言うんだ黒神めだか。というかさっきから聞いていれば……」

「ぐっ……天宮二年生……？」

「イライライライライするなあここまで違うと！ 言っておくけど私の鍛え方も並ではないぞ？ 古賀ちゃんみたいに改造人間じゃあない私は少しだけ体が強いだけだ。その分更に強くなろうとがんばってきたんだからな。わかるはずだ。努力が大好きなんだろう会長さん？」

私はちょっと頭に来ていた。いい加減にしろと。

お前は正しいことをしようとしてるだけかも知れんが、こっちはそんな事知った事じゃあない。

特にフラスコ計画の否定なんか、親友たる古賀ちゃんの夢と存在そのものの否定に繋がるじゃあないか。名瀬ちゃんのやってる事とやりたい事を否定してる事になるじゃあないか。

とてもじゃないが、許すことなどできはしない。

「ほーら名瀬ちゃん。薬をおくれ」

「あ？ ……あー、なるほどな。さっすが熾音くん、俺がやろうとしてた事も以心伝心でおわかりなわけだ」

ニヤリと素晴らしい笑顔を浮かべた名瀬ちゃんは、そう言って注射器を投げ渡してきた。

名瀬ちゃんはもちろん私が『予知』によってそれを知ったことに気付いているだろう。

今までの実験でも使い続けてきたナイスコンビネーションというわけだ。

「それ、ブスリとな」

注射器を首筋の静脈に突き刺して薬を注射する。

効果はすぐに現れるだろう。なんせ注射した場所が場所だ。

黒神めだかが気を失ったことを確認した私は、その場を離れて名瀬ちゃんの元へと戻った。

「一体何を……」

「何って、注射だよ」

他の何に見えるんだ阿久根高貴。

いいじゃないか。黒神めだかなら、私が何もしなくても勝手に自分に注射器を射っていたさ。

「さっきから見ている限り、君は名瀬さんが好きなんだろう！　ならどうして止めようとしない！」

「止める？　どうして？」

「どうしてって……」

「止める必要なんて無いだろう。私の大好きな名瀬ちゃんが望んだことなら、私は喜んでそれを叶えようと思う。当然だろう？」

何故ならばそれは愛故に！

だいたい、私の事をどうとか言う前にだ。

「ところで、そこに倒れた黒神めだかの心配はしなくていいのか？」

「……今、注射したアンプルはなんだい？ あれは僕も初めて見る薬品だったぞ」

妹が心配だったらしい黒神真黒がそう尋ねてくる。

注射したものは簡単でお手軽な薬だったのだが、ノーマライズ・リキッドのおかげで異常が消えた黒神真黒にはわからなかったようだ。

「まー教えてやるか。今度のはそれほど異常な薬じゃねえぜ？ なんせ心療内科とかで普通に処方されてる普通の薬だ」

ゆっくりと、気絶状態から意識を取り戻して立ち上がるようにする黒神めだかを見ながら名瀬ちゃんが言う。

とりあえず普通に起き上がる姿を見て阿久根たちも安心したようだが……その黒神めだかの第一声を効いて顔色が変わった。

「ここはどこで、私は誰で、何のために生まれてきた？」

名瀬ちゃん特性の改造済み記憶制御薬！

六年前に名瀬ちゃんが使ったヤツの改悪版！

記憶能力を持つ私の記憶を一時的に吹っ飛ばすレベルのその薬に、異常を失った黒神めだかが抵抗できるはずも無し！

「お前から異常と記憶を引いたなら！ 一体何が残るのかなあ黒神めだか！」

更なる笑顔を浮かべる名瀬ちゃんに、私も歓喜の笑みを零すのだっ
た。

〓 〓 〓

100万アクセスのおまけ

「なあ熾音くん」

「なんだい名瀬ちゃん。ふふふ」

「いや、邪魔なただけだよ」

「あ、ごめんね名瀬ちゃん。ふふふ」

今日はより一層の笑顔で、熾音くんは名瀬ちゃんの顔を眺めている。
そういえば、明日は『あの日』だったね。

今までは何も貰ってないらしいし、今度こそはという事で熾音くん
は凄く期待をしているみたい。

一人の男性にここまで思ってもらえるって、普通は凄く嬉しいこと
だと思うんだけど……

名瀬ちゃんは素直じゃないし、ね。

私が直接に言っちゃうのもなんかなくって感じだし。

ここは、私が一肌脱いで上げるしかないかな！

「買い物？ 俺と一緒に？」

「そうそう。一緒に！」

というわけで今日は名瀬ちゃんとお買い物。

うんうん、町のお菓子屋さんは結構賑わってるね。
これなら……

「んー？ バレンタイン？」

（食いついたあっ！）

グツと拳を握り締め、心の中で声をあげる。

そう！ 今日はバレンタインデー！

熾音くんは朝からずっと楽しみにしてたけど、名瀬ちゃんがそんなもの用意してるわけ無いしね……名瀬ちゃんだもん。

そんなイベント自体知っているのかどうか……うん、さすがに知ってると思うけど。

「それじゃ、行こっか！」

「ん」

というわけでお買い物終了！

材料も買ったし、後は名瀬ちゃんに任せようっと。

ちゃんとバレンタインデーの事は教えだし、大丈夫だよな。

「って名瀬ちゃん！ ビーカーで作るの！？」

「え？」

……うん。ちょっと不安かも。

ま、大丈夫だよね！

私も熾音くんにチョコを作ってあげないと！

翌日。

うん、名瀬ちゃんはちゃんとチョコと作ってあげたみたい。

昨日の夜は名瀬ちゃんのベッドの方からチョコの匂いがしてたしね。ほんのりと。

「名瀬ちゃん」

「あ？ なんだよ熾音くん」

「ははは。話しかけるのに理由は必要ないだろー？」

熾音くんは朝からなんかあからさまに様子がおかしいし。

でもたぶん、まだチョコは貰ってないんだろうな。貰ってたらもつと喜んでるだろうし。

……ちよつと貰った時の反応が気になる力モ。

こんだけ楽しみにしているのを見ると、貰った後どうなるんだろうかが気になるなあ。

「あ。そーいえばよ」

「なんだい名瀬ちゃん！」

いつも通り、キッチンへと夕食の支度に向かった熾音くん。

その熾音くんが、名瀬ちゃんに声をかけられた途端にグリーンとこちらに向き直った。

ちよつとビツクリしたけどしつかりと見続ける。

「ほらさ。そーやっていつも色々やってくれてるだろ？ だから…

…まあ、アレだよ」

相変わらず名瀬ちゃんの顔は包帯で見えないけど、これはっ！

名瀬ちゃんは右手で小さな包み（たぶんチョコが入ってるんだよね！）を持って、それを熾音くんに突き出した。

その顔はそっぽを向いて、一見して凄くぶっきらぼうな仕草だけど

……

「ほら、受け取っとけっ！」

笑顔のままで凍結した熾音くんの顔に包みを投げつけて、名瀬ちゃんは研究室の方に早歩きで歩いて行っちゃった。

投げつけられた途端に凍結を解除した熾音くんは、優しく包みをキヤッチした。

そして

「イイイイイヤツフウウウウウ！」

あんなに喜んでる熾音くん、多分見る機会はすごく少ないんだろうな
な〜と思った。

第肆拾陸記憶目（後書き）

あとがき

説明シーンが長いと書くのが辛い。それでも書くのです。
早くフランスコ編終わらせたいけどそうも行かんでヤス。

第肆拾？記憶目

記憶も異常もなくした黒神めだか、その対処は容易である。

努力の成果で不調な古賀ちゃんを相手にできたからって、その努力の成果をきちんと使うことが出来なければ意味が無い。

「弱っちいねえ。名瀬ちゃんもそう思うだろう？」

「全くだな。可愛いそうで見られねえぜ。古賀ちゃんもやめてやんな」

「うんそーだね。私も弱い者いじめしてるみたいでさすがに気が咎めてきちゃったよ」

私は阿久根と黒神真黒をボコボコにした上で思い切り床と壁に叩きつけ、古賀ちゃんは黒神めだかを気絶するまでボコった後で首を掴んで持ち上げている。

上の二人が苦戦したとも思えないほど、あっさりとした勝利だった。黒神めだかも大したこと無いなあ！ 偉い事言うのは強者なんだと決まりきってると思ってたよ。

まあそういうのって、たいていは裸の王様で愚者ばっかなんだけどさ。童話曰く。

「……ッ！ 卑怯にも薬で弱らせておいて好き勝手なことを……！ 普段のめだかさんだったらきみ達なんか……せめて異常か記憶かどちらか一方でもあれば……」

「ハハハ！ 笑えること言うなよ高貴くん、記憶の方はまだまだ時間がかかるだろうが 異常性の方に関して言えばバトルの最中に既に戻ってるはずだぜ？」

グググチと文句を垂れ流す阿久根へと、名瀬ちゃんが事実を突きつけた。

たとえ両方戻ったとしても私は負けるつもりは無いけれど……異常が戻っても記が戻らなければ、黒神めだかは疲労困憊気味の古賀ちゃんにすら勝てないのだ。

つまり黒神めだかの異常たる部分は関係なしに、黒神めだかの記憶・人格の方こそがその強さの秘密であると言うことだろう。

私の予知でちよつとフライング気味になってしまったが、既に戦闘不能な阿久根や黒神真黒に名瀬ちゃんが告げたことは、そんなような事だった。

「……そんなことは後でじっくりと検討すればいいだろう。くじらちゃん いや、名瀬ちゃん。完全に僕達の負けだ。だからもうめだかちゃんを離してやってくれ」

「くくく、そんな虫のいいことを今ここにきて言うのかい？ それは何んとも笑える話だね」

「だいたいよ、そこまでわかったならまだ試さなきゃならね事が残ってるだろうが」

「ぐ……試さなきゃならない事だと？ それは……一体どんな実験だ？」

ボロボロの体を起こしつつ、黒神真黒はそう尋ねてきた。

まあ妹大好きとか言って憚らない変態だ、実験内容も気になるのだろう。

「決まってるんだろ？　じゃあ黒神めだかの身体に別人格をぶち込めば一体どうなるかつー実験だよ」

「別人格……！？　馬鹿な！　そんなことはさすがに不可能だ！　記憶を消すのとはわけが違うぞ！」

「不可能だなんて決め付けるのは駄目だろう黒神真黒。少なくとも、お前はその手段を知っているだろう？　お前がフラスコ計画にいた時のパートナー、『人身支配』の能力の使い手が」

「……………都城……………王土つ……………！」

どうやら忘れていたのではなく、考えが回らなかったただけらしい。私に言われ、黒神真黒はやっとあの都城王土の名前を思い出したようだ。

「そう！　地下十三階にお住まいのあの支配者様なら、記憶が戻る前の黒神ならば簡単に洗脳してくれるだろうぜ」

名瀬ちゃんは黒神真黒に向けてそう言った。

まだあの人に頼んだわけじゃあないけど、たぶん実行してはくれるだろう。何しろ自分の嫁とか言ってたんだから。

ところで古賀ちゃん、準備はOKかい？　よし行こうか。

「そうと決まれば善は急げだ。じゃあなー、お兄ちゃん」

「行くぞ古賀ちゃん、私に続け！」

「了解っ！」

手を振る名瀬ちゃんを抱え上げ、古賀ちゃんが黒神めだかを脇に抱えたのを見てから先程古賀ちゃんが開けたと言う穴の中へと飛び込んだ。

もちろんお姫様抱っこだよ。当然じゃないか。

この穴は地下6階まで貫通していたので、そこから階段を使って更に下へと降りることにする。

実験体は確保したんだから後は楽なものだろう。それまではこうして至近距離から名瀬ちゃんの顔を見続けることにしよう。貴重な素顔であることだしね。

「……あんまこっち見んなよ」

「ははははは。実を言うとこんな所で素顔を見れるとは思わなかったから、しっかり拝ませてもらおうかな。古賀ちゃんもそうだよなー？」

「うん、まだ隠すには早いよ名瀬ちゃん！」

「ったく……」

うーん、なんだかんだ言って断れない名瀬ちゃんは凄く可愛いなあ。

「よし、これで黒神めだかの拘束完了」

「じゃー後は都城先輩と話がつくまで記憶が戻らねーように投薬を続けるって感じかな！」

地下十三階に到着し、私は黒神めだかを担架の上に括りつけた。

黒神めだかの負った怪我も名瀬ちゃんが治していたが……まあ、あの異常な回復速度を見る限りそこまでする必要は無かったんじゃないかとも思える。

この女、一体その身に何を秘めているのやら。

あの理事長が目を付けているだけあって、なにやらとんでもない予感めいたものを感じる。

まあ名瀬ちゃんにとって、『裏の六人』かそれ以上には研究対象になるだろう。

「もー名瀬ちゃん、思いつきで行動しすぎ！ 熾音くんとも目と目で通じ合っちゃってさー」

「照つれるなあ古賀ちゃんってばもう！」

「はしやぎすぎだバカ……それよか都城先輩に連絡取ってくれよ。実験には協力してくれるはずだぜ」

「もう！ そっちもいいけど時間の問題！ 生徒会の奴らはすぐに来ちゃうと思うよ？ 黒神を洗脳するにも時間は間に合うの？」

「あーそうだなー。そういや高千穂先輩も宗像先輩もやられちゃったんだっけなー。……なんだよ熾音くん」

なんだか軽くスルーされた上に蚊帳の外な気分だったから見つめた

ただだよ名瀬ちゃん。

というか時間稼ぎとかそういう物騒なことはだね。

「まず私に頼んだらどうだい名瀬ちゃん？」

「そりゃー駄目だよ」

「なんで!？」

「黒神を洗脳した後、その記録をとってもらわないと俺が困っちゃうだろ？」

「名瀬ちゃん……」

なんて嬉しいことを言ってくれるんだ。

私の知りたがりの事も考えた上で名瀬ちゃんの傍に置いておこうとしてくれるなんて！

感動的だねえ。最高に嬉しいよホント。

「でもそれならどうするんだい？ 私は名瀬ちゃんの傍にいる、古賀ちゃんはエネルギーの補給がある。暇をもてあます人材なんてそういないじゃないか」

「んー。どーすっかなー」

「お困りのようだな名瀬統括。なんなら時間稼ぎは私たちが担当してやってもいいぜ？」

そんな風に私たちが首を捻っていると、唐突に部屋に声が響いた。聞き覚えのある声だと思ったら、そこには滅多に見ない顔がいくつ

もあつた。名瀬ちゃんの統括としての仕事に付き合つて話すことはあつても、それ以外では滅多にかかわらない連中だ。

「『十三組の十三人』……『裏の六人』！」

古賀ちゃんが奴らを指差してそう言った。

そこに並び立つ連中は『裏の六人』と呼ばれる六人組。正直言つて、こうして私たちのために時間稼ぎなんていう事をするはずないと思つていた連中だ。だからこそ私たちもこいつらの事は始めから計算に入れていなかった。

……確かにこいつらなら時間稼ぎくらいやってのけるだろう。なんせ『十三組の十三人』の中でも特に異常度が異常な連中だ。

「……理事長の指示だな」

「名瀬ちゃん？」

「ん、気にすんな熾音くん。にしても生徒会の連中も不幸だよな。なんせ『裏の六人』は、強いなんてもんじゃねーんだからよ」

名瀬ちゃんがははと笑つて言つた言葉に私は頷いた。

確かに、負傷した上に黒神めだかを欠いた生徒会連中なら『裏の六人』を相手に為す術も無いだろう。

……ただ、そうはならないようだが。

「あのさ、熾音くん」

「ん、なんだい古賀ちゃん」

『裏の六人』が足止めのためにエレベーターに乗っていき、私が名

瀬ちゃんに予知したことを伝えようとした時だ。
栄養補給を行っていた古賀ちゃんが話しかけてきた。
やけに笑顔なのが少し怖い。

「さっきの事だけど、色々教えて欲しいな」

「なんのことだい？」

「とぼけないでよ。名瀬ちゃんが思いついた事を言われる前にわかってみたいだったし」

「ああ……」

そうだったね。

思えば古賀ちゃんは名瀬ちゃんの素顔も今日やっと見たらしいし、
私が予知の事を秘密にし続けるのは駄目だろう。

ここは3人の絆をもっと深めるべき場面だ……たぶんそうなのだろう。

これ以上の隠し事はなしにしよう。そう思って私は口を開くことにした。

「わかったよ、古賀ちゃん。全部教えるよ」

全部。まあ、全部と言っても私がちょっと予知できるくらいの事だけなんだけど。

あとは……そうだな。

「名瀬ちゃんも、ちょっといいかな？」

「ん？ なんだよ」

「ちょっと不安事項があつてね。あらかじめ言っておきたいんだ」

「……わかった。都城先輩が洗脳する間は暇だからな。まとめて聞いてやるよ」

名瀬ちゃんの了解も得て、黒神めだか洗脳のための準備を進める。それが終わればしばらく別室に移って古賀ちゃん名瀬ちゃんと一緒に説明会だ。

まずは古賀ちゃんへ私の予知の事。

そして、最近段々と大きくなっている不安、『未来予知に生じるノイズ』について。

教えておかなければならないだろう。

最も、私にも何が原因でそうなっているかはわからないが……
本当に、何事も無ければいいんだけど。

第肆拾?記憶目(後書き)

あとがき

やっとオリジナルっぽくなってきました。
頑張るぞう！

第肆拾捌記憶目（前書き）

難産すぎる。だが私はめげない！
名瀬ちゃんをデレさせる前にめげるわけにはいかない……！

第肆拾捌記憶目

私が二人を前に会話を終えると、名瀬ちゃんはいつも通りの顔で、古賀ちゃんは少し驚いた顔で私を見ていた。

古賀ちゃんは私の異常を知ったから驚くのも仕方ないが、名瀬ちゃんがいとも通りなのは……

「つまり、熾音くんでもこの先どうなるかわからないってわけだな？」

「……そう、なるね」

「落ち込むなよ。俺が結果を先に聞いたことなんて無いだろ。いつも通りだ」

つまりは、そういうことなのだ。

元から失敗も成功も気にせずに、とりあえずやってみる名瀬ちゃんだもの。

不安？ 結構、そんなものは気にせず進もうじゃないか。

「気にしないでいいよ熾音くん！ あたしとのコンビは最強でしょ！」

「……今まで一度もそんな話は出てないね」

「そこはノってよ！」

とりあえず古賀ちゃんがプンス力怒る様子を眺め、都城王土が黒神めだかの洗脳を終えるのを待つことにする。

黒神めだかの洗脳……さすがに一筋縄ではいかないだろうが、私の知る都城王土ならそれくらいはなんとかしてみせるはずだ。

なにせ、自分の事を王だと言って憚らない人間だ。それくらいで諦めたりはしないだろう。

さあ、生徒会の面々は『裏の六人』を突破して無事に黒神めだかまでたどり着く事ができるのか？

私は名瀬ちゃんではないが……少しだけ、楽しみだ。

それからしばらく。

生徒会の連中は『裏の六人』を突破して、すぐその階にまで迫っていた。

いや、正確には突破したのではなく更に別の足止め要因が来てしまったとも言えるでしょうが。

「にしても『十三組の十三人』、思ったよりも弱い繋がりだったんだね。私たちとは大違いだよ」

「もー。三人もあっち側につくなんて腹立つちゃうよ！」

「まあいいだろ二人とも。どうせもう黒神の洗脳前には間に合わないよ」

私と古賀ちゃんが裏切った奴らに対する感想を言えば、名瀬ちゃんはどうでもよさそうな声でそう言った。そりゃどうでもいい事には違いないだろうけど。

しかし『十三組の十三人』である三人が生徒会側に付いたというのは、古賀ちゃんにとっては普通に怒る理由にはなったつばいのだ。一応、仲間のようなものではあったわけなのだし。

まあどっちにしても名瀬ちゃんの言うとおり、生徒会の面々は間に合わないだろう。

私が出れば更に確実なのだろうけれど、あの行橋未造という男も中々に曲者だ。都城王土が洗脳を終えるための時間くらいは楽に稼いで見せるだろう。

そんな時。古賀ちゃんが栄養剤を飲んで、名瀬ちゃんが黒神についての考えをまとめ、私が佳境に入りつつある行橋未造と喜界島もがなな戦いを見物していた時。

唐突に私たちがいた部屋に入ってきた誰かが声を発した。

「今、黒神の洗脳を終えたぞ」

都城王土だ。どうやら黒神めだかの洗脳を終えたらしい。気になる事があつたらしい名瀬ちゃんが、都城へと話しかける。

「おいおい、まだ三十分も経ってないぜ？ それくらいかかるって言ってたじゃねえか」

「ふん、この俺がそれだけかかると言って実際にかけるはずもないだろう。常に限界を越え続けるからこそその王だ」

そんな事を言った都城王土は、私たちに背を向けて歩き出した。黒神めだかの洗脳を終え、一体どこに行こうというのか。

「少し行橋の様子を見てこよう。あいつは惚れっばい上に移り気だからな。お前たちは黒神の様子を見ておくといい。失敗などという事はありませんがな」

そういい残して、都城王土は十二階へ登るための階段がある方へと歩いていった。

確かに行橋未造と喜界島もがなの戦いは終わりを迎えかけている。それも行橋の敗北という形で。まあ、それに加勢しにいったのなら問題は特にないだろう。

さて、洗脳を終えた黒神めだかの経過観察を行おう。名瀬ちゃんをしっかりと手伝わないと。

「都城先輩に限ってできなかったって事はねーだろうけど、一応検査はいるからな」

「どういった検査をするんだい名瀬ちゃん？」

「んー？ とりあえずは黒神が目を覚ますのを待とうぜ。その後でどんな性格でどんな感じが調べればいいだろ」

「なるほど、了解」

別に脳波チェックとかはする必要は無い、か。少しは知リたかった気がするけど、今は必要ではないね。

名瀬ちゃんの言うとおり、黒神が目を覚ましてからきちんと洗脳できているかを確認めればいい。

……思いのほか、私たちがやることは少ないな。楽ができていいけれど。

まあいいか。早いところ黒神めだかが目を覚ましてくれればいいのだが。

私たちは三人で少し話をしながら洗脳を終えた黒神めだかが目を覚ますのを待っていた。

そうして幾分もしないうちに、黒神めだかは目を覚ました。

「ああ、目が覚めたようだよ」

「ホントだ。黒神が目を覚ましたよ名瀬ちゃん」

私たちが見ている前で、黒神めだかの目がゆっくりと開いていく。

なるほど、確かに洗脳は成功したようだ。

あの鬱陶しいほどの目の光が今は無い。

「お、気付いたかよ黒神　つと、まだ立ち上がるんじゃないよ危ねーぞ。頭の中身ぐっちゃぐつちやにかき混ぜられてんだ。大事を取ってもうしばらく安静にしときな」

「……………」

名瀬ちゃんが体を起こそうとする黒神めだかに手を伸ばす。

大事な実験材料でもあるわけだし、大切にはしなければならいかな。

しかし、黒神は言った。前までとは若干声色が違う。雰囲気の違いか。

「いえ、私はあの人のところへ行かねばなりません」

おやおや。

都城王土は随分と面白い洗脳を施したらしい。

この黒神めだかを見た生徒会はどう思うのだろうか。全く、心が痛むよ。ねえ名瀬ちゃん？

「しかし、どうだろう名瀬ちゃん」

「何がだ？」

「この状況、黒神めだかを除く生徒会の面々が揃っているにもかかわらず、都城王土たった一人に敗北寸前。そして更に黒神めだかが現れた」

「ハハハ、まさに絶望ってヤツだよな。心が痛むぜ」

こんな光景を見て心を痛める優しい名瀬ちゃんと二人、生徒会連中の顔を見ながら小さい声で話し合う。

黒神めだかは いや、黒神めだか（改）と名乗る女は、まさしく生まれ変わったといっているだろう。

独善的で自己中心的。

十二階へとやってきて、私たち全員に対してフラスコ計画に参加することを告げた黒神めだかは、邪魔だと判断した生徒会の面々には解任通告をしてのけたのだ。

それにしても『自分の役に立たない人間は必要ない』とはね。必要ないと言われた生徒会の面々には悪いが、こっちの方がずっとわかりやすく話しやすい性格だと私は思うよ。

「もー二人ともー。思惑通りにいったからってはいしゃぎ過ぎだよ！」

「悪い悪い古賀ちゃん。でもまー、ああもはつきり三行半を突きつけられちゃ生徒会の連中にもう戦意なんかあるわけねーか」

「……あー、そうでもないみたいだね」

熱血してるねあいつら。ギラギラした目で睨みつけてさ。
どうやらよっぽど今の状況が気に食わないみたいだ。

黒神めだか（改）に突き放されて、絶望するよりも憤りの方が上回ったようだ。

「悪いな。俺達は何があっても生徒会はやめないって、昔お前と約束したんだよ」

「確かに変わってほしいと思ったことはなくはないですが、俺達はあなたに変わり果ててほしかったわけじゃありません」

「自分のことしか考えない黒神さんなんて、悲しくって見てられないよ」

生徒会の三人は黒神めだか（改）を見つめながらそんな事を言った。そうしてすぐに、3人は黒神めだか（改）に戦いを挑むべく突進した。

『黒神めだかに代わって生徒会を執行する』とか言って、まっすぐに走った。

そんな生徒会の面々に向かって、黒神めだか（改）はただ一言。

「跪きなさい」

それだけで、生徒会の面々は床へと釘付けにされた。
どうやら都城王土の『言葉の重み』の異常を得たらしい。都城本人が言っているのだからそうなのだろう。

いや、本来なら異常を盗むだの得るだのといった事は不可能なはずなのだが……その部分はまだわからないな。

「おい熾音くん」

「なんだい？」

「言わなくてもわかってるだろうけど、しっかり記憶しとけよ。黒神の異常性、だんだんと見えてきたみたいだぜ」

「了解」

私にはまるで理解できないが、名瀬ちゃんには薄々わかってきたらしい。さすが名瀬ちゃんだ。

私はそんな事を思い、言われたとおりにしっかりとその場すべてを見渡すように気をつける。

そんな事をしていると、地面に平伏す生徒会の面々を前に黒神めだか（改）が口を開いた。

「ふむ、やはりしつくりきますね。やはりあのような人格^{わたし}など、あのような心^{わたし}など異常性には余計だったのですね。重い荷物を降ろしたような、全裸になったような清々しい気分ですよ」

「それはどうかな。めだかちゃん」

「……めだかちゃんではありません。めだかちゃん（改）です。その声はお兄様ですね。どこに隠れておいですか？」

そんな黒神めだか（改）に、どこかに隠れている黒神真黒が話しかけた。

まあ隠れているとはいっても、私が予知をうまく使えば楽に探し出せるだろうが。

別にする必要性も感じないので、それはやめておくことにする。
姿を見せない黒神真黒の声は話を続ける。

「どこだっついていいだろう？ そんなことよりめだかちゃん、お前は荷物を降ろせてなんかいないよ」

「……？ 何を言っているのですお兄様。私の中に既に心は欠片も残っていません。私は心なき人です」

「そうかい。だったらどうしてお前は、泣いているのかな？」

「え」

……都城の洗脳は完璧だった、と記憶している。

あの男は些細なミスをするような人間ではないし、私たちも黒神が目覚ました後で一度確認をした。

しかし黒神真黒の言葉通り、黒神めだかは（改）涙を流している。

「これは……何？ 涙……ですか？」

「心ある人はその涙のことを、優しく心と呼ぶんだよ。くじらちゃんにも言ったけど。人格をリセットすることなんて出来ないのさ。記憶を消しても心を消しても、どこかに欠片は残るんだ。安心しなさいめだかちゃん。十三年前の思い出は、お前の中から決してなくなったりはしない」

「私の、思い出」

黒神真黒の話を聞いて、黒神めだか（改）が何か考える素振りを見せる。

しかし黒神めだか（改）がゆっくりと考える前に、『言葉の重み』を振り払った人吉善吉が動き、黒神めだか（改）の頭に蹴りを入れた。

若干の不意打ち気味となった攻撃だ。宗像との戦いを見てほしいは予想していたが、人吉善吉はなかなか強い。不意を撃たれた状態で攻撃されれば、さすがに黒神めだか（改）でも避けられなかったか。

そのまま黒神めだか（改）に啖呵を切る人吉善吉。幼い頃から命令され続けていたから言葉に重みを感じない、というのも中々面白い話だと思う。ある意味、貴重なデータか。

「俺は異常性^{おまへ}を倒して、無印の黒神めだかを取り戻す！」

「……くだらない。涙など、視界にゴミが入っただけです」

そんなやり取りをした二人は、どちらからともなく戦いを始めた。黒神めだか（改）は両腕を拘束している服を着ているため足のみを使い、人吉善吉は元より足を使うサバツスタイル。要するに蹴り合いだ。

そんな光景を眺めながら都城が口を開いた。

「ふん、すさまじい蹴りあいだな 偉大なる俺をして圧巻と言わしめるよ。どうだ古賀？ 『十三人』内で最強の女を自負するお前だ。ひとつあそこに交じって遊んでくれば」

「……やだなあ、意地悪言わないでくださいよ王土さん。あの二人の間に割って入れる奴なんて銀河系に一人もいませんって」

さすがの古賀ちゃんも、あの戦いに飛び込もうという気にはならならしい。

なんでもでいる化け物と、その化け物にずっとくっついてきた男の戦いだ。

……さすがの私も人吉善吉だけならともかく、反射神経を身に付けた黒神めだか（改）は相手に出来ない。予知を使ってカウンターをしても、そのカウンターに反射神経でカウンターしてくるだろう。他にもやり方は色々あるだろうが……今度名瀬ちゃんに相談しよう。一応、対策は必要だろうからな。

「……っあれは!？」

「俺の注射器! いつの間に……しかも今のは宗像先輩の暗器!」

戦っている最中、黒神めだか（改）はどこからともなく取り出した無数の注射器を人吉善吉に向かって投げ放った。

名瀬ちゃんの言うとおり、あれは宗像の使う『暗器』だろう。しかし、『言葉の重み』だけでなく反射神経や暗器まで使えるようになるとは

一体全体どんな異常を持っているというんだ？

「……いい加減にしろよてめえ! ふざけてんのか! さっきからなんで俺の蹴りを避けねえ!？」

戦況は進んでいた。

黒神めだか（改）の動きはだんだんと悪くなっていき、人吉善吉の蹴りを何発も受け続ける。

……いや、動きが悪くなったと言うよりは人吉善吉の言うとおりにわざと避けなかったと見るべきか。

人吉善吉が攻めることを止め、黒神めだか（改）も攻撃に移らない。そしてそのまま、人吉善吉の言葉に答えた。

「……あなたから。あなたから攻撃を受ける理由がありません。ゆえに、避ける理由がありません」

そんな事を言った黒神めだか（改）は笑顔で涙を流した。そして何を思ったのか、自分の身を拘束する服を無理矢理引きちぎって腕を自由にした。

「私は私を完成させるために生まれてきました。人吉くん、十三年前あなたが私に与えてくれた意味などもう必要ありません」

蹴りではなく、拳による黒神めだか（改）の攻撃で人吉善吉は倒れ伏した。

文句なしのジャストミート、骨もいくらか折れただろう。ついに決着か。

やはり制限なしの黒神めだか（改）には、普通の人間では敵わないというわけか。

「ふはっ、まあ当然の帰結だな。何を思い出したか知らんが、所詮記憶など脳の一機能に過ぎん。サンタを信じていた子供時代を思い出したところで今更サンタは信じられまいよ」

……まあ、忘れる機能がない私には理解できない事だな。

それに続けて都城が真黒をフラスコ計画に戻ってこないかと誘うが、読みが外れて若干自棄になっている黒神真黒はそれもいいかもしれないと言う。

しかし、これで終幕か？ 黒神めだか（改）が人吉善吉の上に馬乗りになり、首に手をかけた時点で私はそう思った。

の、だが。

やはり予知を使わない私の未来予想は当たらないものらしい。
無理はするものじゃあないという教訓だな。

元から洗脳が解けかけていたのかは知らないが、人吉善吉の掛けた言葉一つで変化が起きた。

黒神めだか（改）が自分の頭を両手で掴んだ途端、その頭から眩い光が迸った。

「な……なんだあれ……？　電火……！？」
スパーク

「否！　ボクにはわかるんだからね　あれは電磁波！　つまりまさかあいつ！　信じられない！　あのバケモン女、自分で自分を洗脳し直すつもりだ！　王土にされたように！　電磁波を脳に直接放射して！」

私たちには正確に理解できないことでも、『受信』できる行橋には理解できたようだ。

名瀬ちゃんに解説を求めずとも、それを聞いて私も無茶だと思った。洗脳とは脳を直接弄って行うものだ。それも『言葉の重み』を用いると言うのなら、過度の電磁波によって脳に障害が残る可能性は零ではない。

だからおそらく、その痛みに耐えかねて黒神めだか（改）はうめき声をあげているのだろう。

「やめろ。見るに耐えないとか言って悪かった。そこまでして元に戻ってほしくねーよ」

「人吉くん、でも」

「まったく お前は洗脳されてもそういうところ全然変わらねーな。みんなを幸せにするために、お前が傷ついたり、痛い思いした李、泣いたりすることはねーんだよ」

それを止めるために人吉善吉は黒髪めだか（改）の手を掴んで、頭から手を離させた。

おおよそ我々には理解できないが 言葉をいくつか呟いて黒神めだか（改）を抱きしめた。
そして

「厄介なことになったね。どうするんだい都城先輩？」

「ふん、なかなか面白い座興だったというだけの事だ。貴様程度に心配されるほどの事でもない」

「……別に心配はしていませんが」

黒神めだかは復活した。洗脳された自分を洗脳した と、そう表現すればいいのだろうか。

名瀬ちゃんに聞く限りでは、いつのまにか行橋の異常をも身に付けた黒神めだかが人吉善吉から『黒神めだかのイメージ』をいうものを受け取って、それによって洗脳を解いてしまったらしい。

それより解説した名瀬ちゃんを馬鹿にしたような発言をした黒神真黒は死ねばいいと思う。

復活して何をするためにここに来たかを思い出した黒神めだかを前に、都城王土が最後の実験を告げて十三階へと招き入れる。

いくらずきが不安定とはいえ、ここまで迫った事なら予知すること

くらいできるだろう。

しかし、私は予知を使わない。できないのではなく、しない。そんな余計な事をして、名瀬ちゃんの邪魔はしたくないからだ。

さあ、地下に行こう。

そんな、生徒会を含めた私たち全員が動き始めようとした時だ。都城王土が私へと話しかけた。

第肆拾捌記憶目（後書き）

あとがき

この部分、カットしたかったけどカットしたら不自然になるのよね。
だから本来書く気がない部分を書いて不自然になったかも知れぬ。

あのフラグは？という方、次回までお待ちください。

IF いたみシルキー（前書き）

深夜バイト明けに一気に書きました。

IF いたみシルキー

「ねえ、熾音くん」

「なんだい？」

「私の事見てて楽しいの？」

「もちろん。古賀ちゃんは可能性に満ちている。見ていて飽きることはないよ」

「そ、そうなんだ……」

二人が出会ったのはとある小学校の頃。

初めて顔を合わせたその日から、天宮熾音はずっと古賀いたみの一番の友達でいる。

いつも話を聞いてくれて、いつも相談に乗ってくれる。そして答えではなくヒントを示し、自分で努力するように促すのだ。

熾音の言い分ではただどんな道を進むのが気になるだけであるそうだが、古賀いたみにとっては違う。

いつだって相手になってくれる、優しくて頼もしい友人だ。

だから古賀いたみが中学三年生になって女子校に転校してしまった後も、彼らは携帯で連絡を取り合ったり休日一緒に出かけたりしていた。

傍から見ればまるで恋人同士の彼らだが、本人たちは言う。

天宮熾音は言った。

「恋人？ 違いますよ。そんなものではありません。私は彼女を見ているだけで満足ですよ。私が関わって可能性が潰えてしまうのなら、私がそこにいる意味はないのです」

古賀いたみは言った。

「恋人？ あはは。違う違う。そんなんじゃないよ。だって、熾音くんはもつと違うところを見てるもん。恋人って感じにはまだ早いかな。あ、まだってというのはそういう意味じゃないんだからね！」

そんな事を言う二人は、やはり互いに思いあっている事は変わらなかった。

そのせいで古賀いたみは、後にできる友人に何度もからかわれる事になったとか。

「ラブラブだなー古賀ちゃん」

「そ、そんなんじゃないよ名瀬ちゃん！ あはははは」

古賀いたみが名瀬天歌と出会い、改造人間になった後も。天宮熾音はそれをこそ待ち望んでいたかのように祝福した。

しばらくは離ればなれの中学生生活を過ごした彼らだが、箱庭学園へ入学した事で再会する事になる。

「こんにちは。フラスコ計画の記録係兼バンクを務める天宮熾音です。何か聞きたい事があったらいつでも聞いてください」

「よろしくな。あんたが古賀ちゃんのいい人だろ？」

「違うよ！ もう、名瀬ちゃんったらー！」

名瀬天歌と古賀いたみがフラスコ計画へと参加することになった時、彼は既に学園長からの要請を受けて、フラスコ計画へと参加していた。

古賀いたみからしてみれば、昔から少し変わったところのある天宮熾音が参加していたところで、『ああ、やつぱりそうだったんだ』くらいの事と、あとは喜びの感情を表す言葉しか浮かばなかったが。

名瀬天歌と古賀いたみがフラスコ計画に参加してしばらく。彼らは高校二年生になった。

一年生のうちに箱庭学園に存在する本の全てを読み終えた天宮熾音は、図書委員長の役職を後の人間に任せて地下に入り浸るようになった。そして同時期、黒神めだかが生徒会長に就任する。

熾音もそれには興味を示すが、すぐにそれを失った。

彼曰く、『何をやっても完成する人間を見ても仕方ない』とのこと。ならば天宮熾音が古賀いたみに興味を示す理由は？

それは古賀いたみが元々は普通の少女であり、無限の可能性をもっているから。それは他の普通な人間にも言えることだが、天宮熾音が初めて出会った『変わりたい欲求』を持つ人間が古賀いたみだった。

ただ、それだけのちっぽけな理由である。

本来ならそういった考えを持つ事も無かっただろうが、古賀いたみという普通の少女と関わった事による良い意味での変化と言えるだろう。

雲仙冥利が黒神めだかに戦いを挑み、そして敗れたという情報はすぐに彼らの耳にも入ってきた。

そして、黒神めだかがフラスコ計画を潰そうとしている事も。

異常を夢見て改造されて、そして異常の仲間入りをした古賀いたみにとって。

そんな古賀いたみがフラスコ計画によって更に可能性を広げるかもしれないと考える天宮熾音にとって。

フラスコ計画を潰すなどという事は容認できるものではない。

「だから私の前に立ちはだかるのか、天宮二年生」

「そうだとも。いつ来るかの想像はついていた。可能性ある未来を潰させたりはしない。フラスコ計画の先にあるモノこそが私の求めるものだ」

「……そうか。その目を見るに、よほど重要な事らしいな」

天宮熾音は黒神めだかの前に立ちはだかった。

普段通りの『記録係』の天宮熾音として。

周りに知られている、『記憶能力を持っているからこそフラスコ計画に加担している』という印象をもたれる天宮熾音として。

故に彼は敗れる。予知能力の一切を使わずに黒神めだかと戦って勝てるはずもなし。

しかし、記憶する事はできたのだ。

彼にはまだ目論見があった。彼の大切なものを守るための。

「私がこのエレベーターを動かせる事、何人が知っているんでしょかね……」

彼は平然とパスワードを入力して地下十三階への直通エレベーターへと乗り込んだ。

それを見ている者がいれば驚いただろうが、ここには彼しかいない。門番である対馬兄弟は黒神めだか率いる生徒会と一緒に、地下へと潜っていつてしまったから。

地下十三階へと着いた熾音は、怪我と疲れを癒すために一室に籠る

事にした。

そして……

「え！？　なんで熾音くんここにいるの！？　っていうかその怪我どうしたの！？」

「おいおい、落ち着けよ古賀ちゃん」

「で、でも……」

「起こして事情を聞けば早いつて。だろ？」

そうして事情を聞いた二人は先走った熾音に怒った。

主に怒っていたのは古賀いたみだが……怒った後では黒神めだかに対する怒りに燃えていた。

負けた事に加えてこれを知り、よっぽど腹に据えかねたらしい。

気を失って洗脳されるのを待つ黒神めだかを前に、彼女はぶんすかと怒っていた。

黒神めだかの洗脳が解かれた後、彼らは地下へと戻ってきた。

今度は、生徒会の面々も引き連れて。

道中、都城王土が天宮熾音に問いかけた。

「そういえば貴様、ただの記録係ではなかったのだな？　あのエレベーターを動かせるとは聞いていないぞ」

「……言わなかったただだよ。気にするようなことじゃあない」

「ふん。まあ、お前がなんだろうと王の知った事ではないな」

しかし王土は後に、ここで追及しなかった事を後悔する。

いや、追及していたところで変わらなかっただろう。彼がそれを言うはずがないのだから。

だからこそ、都城王土の目論見は潰えることになる。

「ぐつ、貴様！ 偉大なる俺の邪魔を……！」

「邪魔？ 違うね。邪魔なのはそっちだよ。古賀いたみという奇跡のような可能性を潰そうだなんてありえない。考えられない。だから未然に防がせてもらう」

古賀いたみを背後から襲い、異常を奪おうとした都城王土の腕を天宮熾音が掴んだ。

熾音はガツチリと腕に跡が残るほどの強い力で王土の腕を握りしめる。

熾音はそれを表情に表わさないが、熾音に守られた古賀いたみの目には、熾音がとても怒っているように見えた。

日頃からよく熾音と関わっている古賀いたみだからこそ……というか、熾音と仲のいい唯一の人物だからこそわかったと言えるだろう。

「『理不尽な重税』だかなんだか知らないが、古賀ちゃんのを努力を奪わせるわけにはいかないな。これは異常を欲しがった普通の女の子が、異常な改造に耐えきって得た異常なんだから」

「貴様、なぜ理事長しか知らないはずの俺の裏技を……！？」

「さあね。それを知らせる義務は私にはないから勝手に想像してくれ」

「王土！ そいつ王土を」

行橋未造が王土に注意を呼び掛ける間もなく、王土は天宮熾音の手によって気絶することとなった。同時に、鳩尾や首などに同時攻撃されて気を失った王土が気絶する前に感じた痛みを受信した行橋未造もダウンした。

王土からしてみればその攻撃は、彼でも十分に反応できるだけのスピードだったはずだ。しかし、防ぐタイミングもどう守ろうとするかも全てを知られていたかのように動かれてしまえば、元々戦闘に向いているわけではない王土では攻撃を防ぐ事は出来なかった。

しかし、戦闘タイプで無いのは天宮熾音も同じはずだったのに何故？そんな疑問が天宮熾音を知る者の頭に浮かんだ。

「熾音くん。その、ありがとう」

「どういたしまして」

「あつぶねー。もしも古賀ちゃんになんかあったらどうしようかと思っただけ」

「私と同じですね。そんな未来はゴメンですから」

生徒会の面々が見ている前で、彼らはそんな会話を交わす。

見ている面々は困惑の表情を浮かべ、わけのわからない状況に声も出せないでいた。

それも当然だろう。

ラスボスだと思っていた都城王土を、一番初めに倒した天宮熾音が気絶させてしまったのだから。

「どうするんだめだかちゃん。俺には何がなんだかさっぱりわからないぜ？」

「ふむ。私にもいかんせん把握しがたいが、天宮二年生がまだやる気に満ちている事はわかるぞ」

人吉善吉に問われた黒神めだかの目は、まっすぐに彼女を見ている天宮熾音へと向いている。

熾音が放つの視線には、未だ敵意が満ちていた。

都城王土に対しての怒りもあるがそれ以前に、天宮熾音は黒神めだかがフラスコ計画を否定した言葉に怒っていた。

完全な人間など作れっこない？ なぜだ。そこで可能性を諦めたならそれこそ完全な人間など作れないだろう。可能性という貴重で何物にも得難いそれをこそ、天宮熾音は追い求めているのだから。

「ここが『分岐点』。ここが『交差路』だ。黒神めだか、お前を倒して未来を踏破する」

全てを投げうつた天宮熾音が黒神めだかに対して身構える。

まだ熾音の持つ全ての異常は明らかになっていない。勝率はある。

しかしその異常は、黒神めだかと戦っても勝率などありはしない事を告げる。

だが諦めない。

たとえ未来予知で知った根本的な結果を変えられないとしても、それすら凌駕しなければ可能性を認めた事にはならないのだから。

「最後の^{たにかい}実験ということだな、天宮二年生。よかろう、貴様の全てを受け止めてやる！」

「お前の異常がどんなにどんなでも負ける気がしない ゆくぞ」

フラスコ計画、最終実験。

『完全☆ジ・エンド☆』と『知識の匣☆パンドラ☆』
未来の行方は誰にも知れず。

IF いたみシルキー（後書き）

あとがき

途中から古賀ちゃん関係ない？ 細けえ事はいいんだよ！

えゝ、ごほん。

原作で同じ役職のおねーさんが出ました。はい。

10組って事は異常であつたりはしないだろうけど、役職がかぶり
ましたね。

矢文さん、正直言つてあーいうキャラ大好物で新作のヒロインに無
理やりしたいくらいなんです。そうじゃなくて。

一応、対応は考えてあります。はい。ご安心を。

いつかはこんな時が来ると思ってたんだよ……図書委員長……

もしかしたらな記憶 その陸（前書き）

徹夜明けシリーズ（続かない）

もしかしたらな記憶 その陸

「あーあ。やつぱこうなっちゃったか。校舎が腐り落ちるなんておつそろしーや。二人ともお疲れ様」

「『なんだよ』『熾音ちゃんもいたのなら手伝って上げなよ』『怒江ちゃんが可哀想じゃないか』」

「ってかどうでもいいからその顔をなんとかしたまえよ。その匂いはそこまで好きじゃないんだよ。いや、怒江ちゃんがどうかじゃなくてお肉の匂いがそこまで好きじゃないからってだけなんだけど」

「『あはは』『ごめんごめん』『すぐに戻しちゃうから待っててくれよ』『今は怒江ちゃんの怪我も消さないかね』」

「『すいません球磨川さん……（天宮さんも予知できるなら空気読んてくれたらいいのに）』」

もしかしたらな記憶 その陸

マイナス十三組の設立、そして江迎怒江による襲撃。

その間、全てを知りうる天宮熾音は何をしていたのだろうか。

当然、失敗することが決まりきった襲撃になど参加しない。球磨川の散歩にも付き合わなかった。

彼女は……寝ていた。

面倒だと、退屈だと、つまらなさと、熟睡していた。

夢の中で彼女は、無限とも言える知識の海を遊歩する。

そうして奥へ奥へと歩いていくと、彼女は必ず一人の人物に出会うのだ。

記憶の中で、記憶どおりではない、一つの生命として鎮座する人物。

「やあ。また会ったねえ」

「……会いたくないというのに。私は貴様が大嫌いだからな」

「そんな事言ってもだめだよ。だって僕は」

「言つなよ貴様。わかりきった事を教えられる謂れは無い」

記憶を鑑賞し、奥の奥までたどり着いた先。

扉を開けたその向こう、記憶の中の教室に佇んでいたのは、彼女の嫌いな安心院なじみだった。

笑顔で彼女に語りかける安心院を、熾音は憎しみを込めて睨みつける。

「それよりも、君は全て知っていてこんな事をするのかい？」

「……………」

「全く、君は無駄なことだと知っているはずなのにね」

「……………」

「だんまりかい？ いいさ。君はいつもそうだからね」

睨みつけたまま、何も語らない熾音。

それでも安心院は語り続けた。

「君はいつまでそうやってるんだい？ 球磨川くんが持つてるスキルは元々は僕のもので、そんなに万能じゃあないって知ってるはずだよ。それに、君の知る未来を大きく変える程の力は無いはずだ」

「……うるさいな。私の勝手だろう。上手く分岐点であのスキルを使えば、未来は変わるはずだ」

「そうかい。上手くいけばいいね」

くすくす笑って熾音の前へと歩み寄る安心院。

熾音はそれを見つめながら、微動だにしないで佇んでいる。

「最後に一つ」

「……………」

「どちらかと言えば、君は僕に似ているよ」

「つぶざけるな！ 誰が貴様なんか！」

「否定したければいいさ。そのうち、君も気付く」

「言っな」

「だってそうじゃないか。知りたがりの君は全てを知ってしまっている。人の記憶を覗く力もある。未来に現実を沿わせる事だって」

「黙れ！」

そうして安心院が熾音の目の前まで迫った所で、熾音は唐突に目を覚ました。

忘れることを知らない熾音の頭には、今の夢の中での出来事がしっかりと頭に残っているが……しかし。

彼女としては、安心院に関する事だけは記憶しておきたくないと思ってしまうのだ。

「……忌々しい」

顔を歪めて一言呟き、熾音は机から体を起こして扉へと向かって歩き始めた。

きっと今頃外を歩いているだろう球磨川の元に行くために。

|| || ||

「『それじゃー作戦会議といこうかな』 『準備よろしくね熾音ちゃん』」

「はいはい。任しておきなよ楔くん」

球磨川禊と天宮熾音は、二人で一緒に大量の携帯電話を机の上にセツトした。

彼らは二年の十三組の教室を、しばらくはマイナス十三組の教室として利用する事にしたのだ。

そして今日はマイナス十三組の合同ホームルームを開こうとしていた。

といっても、彼ら以外のほとんどはまだ転校手続きが済んでいないから携帯電話での参加なのだが。

「『えー』 それではこれより』 マイナス十三組の合同ホームルームを開始しまーす』 議長は暫定的にこの僕』 球磨川禊が勤めますね』」

「私、天宮熾音は書記……記録係を勤めさせていただきます」

全ての携帯電話は、どこかにいる過負荷の生徒へと繋がっている。

そんなわけでそんなふうに、ここにマイナス十三組のホームルームが開かれた。

「……すみません球磨川さん。私が旧校舎の奪取に失敗したばかりに新しい教室を用意できなくて」

始めに発言をしたのは江迎怒江。

教室奪還に一人で赴き、そして失敗したことを悔いる発言だった。

「『だから気にしないでいいんだって怒江ちゃん』 マイナス十三組全員が揃うまではこの二年十三組で十分事足りそうだしね』 十三組生のほとんどが登校していないというのは後々の事ことを思うと大変そうだけど』 『こうしてたまり場を作る分には都合がよかつたかな』 ナイスアイディアだったよ』 『不知火ちゃん』」

「……いやあ、思いついたこと言っただけですよあたしは。あひゃひゃー!」

「『……で』『現在登校している十三組生は二人ってことで間違いないのかい?』」

「えーそうですその通り。雲仙先輩が入院中の今、授業に出ているのは現生徒会長の黒神めだかと、前生徒会長の日之影空洞だけです」

「『前生徒会長』『ねえ』」

「はい　まあご安心ください。心配しなくとも、その二人が手を組む可能性は皆無ですから」

前生徒会長である日之影空洞の事を、不知火は黒神めだかと組むこととはないだろうと言った。

両者共に生徒会長になるほどの人物であるのに、敵である球磨川を前にして手を組まないのは何故なのか。

それを球磨川はすぐに知ることになる。

もちろん隣で立っていた天宮熾音も『それ』を知ってはいたのだが、球磨川に教えることはしなかった。

当然、教える必要を感じなかったからである。

「危ないですね」

「『熾音ちゃん?』『ちよつとひどくない?』」

「そうですか?　そうでもないと思いますよ?」

「『うーん』 確かにそうだね」

突然に現れた日之影によって叩きつけられた球磨川は、なんでもない顔で立ちあがって熾音に言った。

そんな球磨川の頭を巨大な手によって掴んで黒板に叩きつけた日之影は、横に立っている熾音を忘れているかのように無視して球磨川に攻撃を続けていく。

その攻撃によって黒板ごと壁を突き破り、隣の教室まで球磨川が吹き飛ばされた時。

天宮熾音はあくびをしながらその教室から出て行った。

「おや、どうしたんですか天宮さん。中にいると思ったんですが」

「それにあの大将はどこだよ。なんか後ろですごい音がするぜ？」

熾音は廊下に出てすぐに、蝶ヶ崎蛾々丸と志布志飛沫の二人と出会う。

熾音が出てきた教室からは、何かを殴るような轟音が廊下にまで聞こえてきている。

気になって熾音に聞いた二人だったが、すぐに中で何が起きているのかを察したようだ。

「……球磨川先輩はもう一悶着起こしているんですか？ そうなるとは思っていましたが」

「あの人、あたしとの約束忘れてるんじゃないだろうな。つつーか天宮さんは止めないのかよ？」

「私は非力だからね。とてもじゃないけど止められないかな。二人

に任せるよ」

そんな事を言つて、天宮熾音はその場を後にした。
放つておいても球磨川の事を思つた二人が勝手にその場を収めるだらう。

だからほんの少しだけ、用を済ませるためにその場を後にすることにした。

「やあ」

「あ。天宮先輩わざわざ来たの？ あひゃひゃ ごくろーさん」

「そう思うなら始めから参加してくれよ。ま、無駄だろうけどね」

「わかつてるじゃん。それじゃあっちも一段落してるだろうし」

「

「さつさと合流しようか。何をされても知りませんよ」

二年十三組の教室へと向かつていた不知火半袖と、無駄なく鉢合わせしてそんな話をする熾音。

予め、いつ頃にどの廊下を通つて来るかわかつていたからこそできる事だ。

そんな彼女の頭の中では、すでにあの二人に攻撃される不知火の姿も浮かんでいる。

やれやれと肩をすくめ、二人揃つて二年十三組へと向かう。

そこではホームルームに引き続き、マイナス十三組の幹部会が開かれていた。

「で、案の定これかい。せつかく連れてきたんだからつてのもそう

「ただ、一応机も大切にしまえよ」

「『あはは』『熾音ちゃんは細かいなあ』『机くらい気にしないでいいじゃないか』」

熾音も球磨川も、攻撃された不知火の心配はいくらもしない。

マイナス十三組というのはそういうものだ。

更に言うのなら、怪我ひとつない姿で平然と菓子を食っている不知火を心配するはずもない。

「『僕としては』『熾音ちゃんに聞くのはズルだと思っからね』『先に不知火ちゃんの話聞こうか』」

「正解ですよ楔くん。私に頼ろうとしたなら速攻で見限るところです」

「『わかってるよ』『それで』『不知火ちゃん』『いい手って』『どんな手?』」

「十三組生と生徒会執行部、その両方をまとめて片付けるウルトラCですよ。まあ聞くだけ聞いてください。この箱庭学園の事は、あたしが一番知ってますから」

不知火が笑って生徒手帳を出し、その『いい手』をみんなに説明していく。

誰もが考え付かなかった一網打尽のその手段。

それは不知火がマイナス十三組にふさわしいと志布志や蝶ヶ崎にも納得させるほどのものだった。

さていよいよ。

彼や彼女が待ちに待った戦いの火蓋が切って落とされる。

もしかしたらな記憶　その陸（後書き）

あとがき

疲れたよパトラッシュ……

原作の謎解き、やっててすごく楽しいんだけど5分は無理です本当に……

第肆拾玖記憶目（前書き）

すごく難産だった。

第肆拾玖記憶目

「は？ 理事長に連絡を？」

唐突に王土が言った言葉に、熾音は首をかしげた。

確かに理事長の存在はフラスコ計画において大きいものだが、現在の状況でそこまで重視するべきだろうか。

「そうだ。どうせあの理事長だ、既に俺たちの事は見限っているだろうからな。急いで理事長の所まで行ってこい」

「しかし、連絡手段なら他に……」

「あの理事長、それも読んでいたようだな。地下からは連絡ができないのだ。ついでに一階で戦っているだろう『裏の六人』のデータでも収集してくればどうだ？」

つまり地下から理事長への連絡はとり難く、おまけに『裏の六人』の戦闘を見るチャンスであると。

都城は皆が聞いている中で、そう熾音に言った。

『裏の六人』は確かに異常の塊であり、なかなか協力的な姿勢ではないメンバーだった。

それが『負け犬軍団』という、十三組も数人含むチームと戦っているのなら、データを取る絶好の機会ではないか？

つまりはそういう事を王土は言ったのだ。

「確かに言われてみれば、『裏の六人』が表に出てくること自

体が少ないですからね。しかし、黒神めだかの観察は……」

「何、俺が黒神を捕まえてしまえば済む事だ。いつでも好きなだけ、計画に参加した黒神を観察すればいい」

余程の自信があるのか。始めから自信に満ちた王土だけに、不安な
ど欠片も持たないのか。

本来ならば解決策にすらならない事も、王土が言えば無駄に説得力
があった。

だからというわけでもないはずだろうが、熾音も普通に頷いた。
そして小声で名瀬天歌と古賀いたみに相談する。

「どうかな名瀬ちゃん、行っけてもいいかな？」

「うーん、まあ問題ないとは思っぜ？ ああなった黒神に俺らが出
来そうな事なんて無いしな」

「熾音君の予知使えば勝てたりとか……」

「おいおい古賀ちゃん、今の黒神には反射に加えて言葉の重みまで
あるんだぜ？ 予知がどうかそういう問題じゃねーって」

「あ、そっか。そうだね」

うんうんと、古賀は名瀬の説明に頷いた。

彼女も一応は自分が異常無しの黒神に拳を止められた事を覚えてい
るのだ。

更なる異常を加えて強くなった黒神めだかには、いくら信頼する自
分の親友でも太刀打ちできるかと不安になった。

いかんせん彼女には未来予知がどういったものなのかは理解できて

いないが、それでもなんとなく黒神めだかはヤバいという事は理解できていたのだ。

「まあ、熾音くんが行きたがるなんて事も珍しいしな。行ってこいよ」

「ありがとう名瀬ちゃん！ さすがわかってるね！」

「いいから行けよ」

シッシツと払うような素振りを名瀬にされて、熾音は大人しく上へと昇っていくことにした。

エレベーターではなく階段を使うのはフェイクだ。

ここまできて隠す意味もないというものだが、それでも一応隠す必要はある。なにせ表向きには、熾音はエレベーターを動かすほどの異常を持っていない事になっているのだ。前に使った時は特例として動かしてもらったということになっている。

だから、ここで余計な争いを起こすわけにもいかないのだ。

「それじゃあ行ってくるよ名瀬ちゃん」

「ああ。気をつけてな」

簡単なあいさつを交わして、熾音は上へと登って行った。

それを見送った後、他の全員は階段を使って地下十三階へと下って行った。

地下十三階へと向かう階段を下りる中、黒神めだかが名瀬天歌へと

問いかけた。

「ところでお姉さま」

「あ？　なんだよ黒神」

「天宮二年生の事ですが……」

黒神めだかが聞いたのは天宮熾音の事についてだった。

初めは予知に感づくような事でもあったかと思っただ名瀬だったが、それはないと考え直した。

解析を持つ黒神真黒ですら未だに気付けないそれを、予知を使うのを直接見たわけでもない彼女が気付く事はないと思っただのだ。

そしてそれは確かだったが、放たれた言葉は予想の斜め上な物だった。

「随分と仲がよかったようですが、あの男はお姉さまの恋人か何かですか？」

瞬間、空気が凍った。

まさか黒神めだかがそのような言葉を発しようとは、誰一人として思わなかったからだ。

愕然とした雰囲気が漂う中で、一つだけ思い当たることがあった阿久根高貴がめだかに話しかけた。

「あの、めだかさん？」

「む、なんだ阿久根書記」

「いえ、何でいきなりそんな質問を……？」

当然の質問だった。

状況が状況なだけに、余計に不思議だった。

「先程、天宮二年生がお姉さまへと言い放った言葉を思い出してな。お姉さまあの男に気を許していたし、そうではないかと思っただけのことだ」

「……そういえば、あの後すぐに来てましたねめだかさん。聞こえてたんですか」

「うむ。それで、どうなのですかお姉さま」

天宮熾音が古賀と阿久根が戦っていた場へと現れた時、声高らかに放ったその台詞を聴いていたらしい。

そしてフラスコ計画参加者の天宮熾音ではなく、ただの図書委員長である天宮熾音と関わった時にも、熾音はたびたび「恋する人」「愛する人」の事を話していた。

現在になって話を繋げて考えてみれば、それは自分の姉であることがわかったので確認したくなったのだろう。

「あのな、なんで俺がそんなこと答えなきゃなんねーんだよ。だいたい今の状況わかってんのか？」

「そうだぜめだかちゃん。いくら何でも今そんな質問しても」

「だいたい俺と熾音くんがそんな関係なわけねーだろ。今の所、一番長い付き合いなのは確かだがよあ」

「って答えるのかよ!」

さらりと聴かれたことを答えた名瀬に善吉がツツコミを入れた。黒神からの質問なのに、名瀬が壁の方を向いて答えたのはご愛嬌。何か思うところがあつたとかそんな感じだろう。

「お前たち、無駄な会話はそれくらいにしておけ」

いい加減にそんな空気にも嫌気がさしたのか、それともちょうど到着したからか。都城王土が口を開いた。

王土の声を聴き、その場の面々は階段を下りきつた先に目を向ける。そこには、巨大な空間に大量のコンピューターが置かれた部屋があった。

「さあ、ここが地下十三階、フラスコ計画最深部だ」

|| || ||

地下十二階で皆と別れた天宮熾音は、時計塔の一階へと戻るために階段を上っていた。

その足取りは重い。

それは彼の愛する名瀬天歌と離ればなれになっているからだ。

元々、フラスコ計画解体のために生徒会が来た時点では別れる気など毛頭無かったのだが、都城王土の提案した「裏の六人の観測」という誘惑には逆らえなかった。

理性ではなく、本能である知識欲の方が優先されたのである。

「ふむ、まあ、名瀬ちゃんにも行ってこいと言われたし。大丈夫だろう」

あの生徒会の事だから、名瀬ちゃんたちに危害を加えることはないだろう。

そう結論づけて、熾音は階段をどんどん上っていく。いつのまにか、もうすぐ一階に到着しそうだった。

「……嫌な予感がするな」

地下一階から地上へと続く階段を上り始めたとき、熾音は呟いた。現在彼が使える予知は、自らの10秒先までを知るものだけだ。思いの外、ノイズが彼に与える影響は大きい。

しかしこの異常だけでも十分すぎるほどに強力だ。現に熾音は、しばらく前に人吉善吉を一蹴している。

ほとんどの人間は知らないが、まともな奴が相手ならばどんな相手でも排除できるレベルの、名瀬や古賀からも信頼を寄せられる強さを持っていた。

もともと「まともな奴」が相手ならば、だが。

「……妙だな。やけに静かだ」

階段を上った先では戦いが行われているはずだった。静かなはずがない。

十三組同士の戦いであり、十三組の十三人同士の戦いでもあるのだ。そう簡単に戦いが終わるはずがなかった。

だというのに、熾音の耳には戦いの物音は聞こえてこない。あきらかに異常事態だった。

そして、階段を上りきる直前に熾音は知った。自分が10秒後までに見る光景を。

「馬鹿な!？」

熾音が階段を駆け上がった一階のエレベーター前に飛び込むと、そこには信じられない光景が広がっていた。

まさに死屍累々。ここで戦っていたはずの者達『全員』が、螺子に貫かれて全滅していた。

『裏の六人』も『負け犬軍団』も、どちらともが。

少なくとも熾音の記憶には、全滅している面々の中に螺子を武器とするメンバーは記憶されていない。『裏の六人』にはまだ知らない部分も多いとはいえ、螺子を武器にするような奴はいなかったはずだった。

理解不能の事態に思考が止まる。

しかし、そんな悠長なことをしている暇などなかった。

呆然としながらその殺戮現場の中央へと近寄り、状況を把握しようとしていた熾音の背に、得体の知れない雰囲気纏わりついていた。

「『おや』『まだ仲間がいたのかい?』」

「ッ!？」

同時にかけられた声を聞き、熾音は勢いよく振り返った。

一秒たりとも背中を見せるなどという事はしていたくないと、心の底から感じさせる声だった。

熾音が振り返ったその先には、両手に巨大な螺子を持った血まみれの男が立っていた。

箱庭学園の制服ではない事にも気付いたが、重要なのはそんなことではない。

「これをやったのは、お前なんだろうな……」

「『いやいや』『違うかもしれないよ』『決め付けるなんてひどいなあ』」

「そうか。しかし、なんにしろ見逃すわけにはいかないな」

負、そのものであるかのような存在を睨みつける。

何が理由で目の前の男がこのような行為を働いたのか、それは熾音にも理解できない。もちろん理解する気もないが。

しかし、ここで倒さなければならぬ事ははっきりしていた。

今、天宮熾音の根幹を揺るがすような、理解不能の事態が起きていた。

「ノイズの原因は……お前か」

「『？』」

「いや、いい。どうせわからんだろう」

「『まあいいや』『こつちも用があるし』『君は邪魔なんだよね』」

天宮熾音は気付いた。目の前の男を含めた予知、それが出鱈目に狂っている事に。

多少は予知もできる。しかし、その予知が罅割れたガラスのように分散しすぎている。どれが真実の情報で、正しい予知の流れなのが見えてこない。

その要因が何なのかはわからないが、目の前の男は邪魔だ。

同時に、確信に近い予知のような感覚が走った。目の前の男は、確

実に熾音の大好きなあの少女の害悪となる。
見逃せるはずなどなかった。そんな選択肢などなかった。

両手に螺子を構える負の凶人へと、女一人に狂う男が立ち向かった。

|| || ||

「ふむ。あの男の邪魔が入らんせいで楽に手に入ったな。やはり古賀アブノーマルの改造性は偉大な俺にこそ相応しい。元がノーマルの古賀じゃあどう改造したところで限界があるからな」

地下十三階。ここでも異変が起こっていた。

仲間割れ。『十三人』の繋がりが弱いという言葉は既に敗北した連中だけでなく、何かを企んでいた都城王土によっても現実となった。古賀いたみの保有する異常性である『異常駆動』と『回復力』、それらを狙った都城王土が背後から古賀に攻撃を仕掛けた。

都城王土の仕掛けた攻撃である『理不尽な重税』は、対象の心臓に直接電磁波を送り込んで相互干渉することで対象者からアブノーマルの周波数を強制的に取り立てるという裏技だ。

戦闘タイプでない都城が黒神めだかに対抗するためには、古賀の異常を奪い取る必要があったのだ。

しかし、心臓を貫かれ、異常を失った古賀いたみは瀕死の状態に陥っていた。

「……古賀ちゃん、嘘、やだ。目をさまして」

その傍らに跪き、親友の重傷に名瀬天歌は涙を流す。掛ける言葉も見つからない、そんな悲壮な雰囲気を漂わせている。

しかし今、こんな状況でも必ず彼女に声を掛けるだろう男は、どうかして慰めようとする男はこの場にいないのだ。

……だからこそおかしいという事に名瀬は気付いた。悲しみにくれる中で気付いてしまった。

天宮熾音がここにいないという事が異常なのだ。そもそも彼がいたのなら、名瀬を慰める以前にこんな事が起こるのを未然に防ぐことができたはずなのだ。

そして予知ができる熾音ならば、いくらノイズが走っているとはいえ絶対に古賀や名瀬の危険には気付くだろう。

そもそもあの予知は制御できるものではなく、無理に抑え込んで深層心理に予知の結果を閉じ込めているにすぎないと、名瀬は熾音から聞いていた。

だからこそ、深層心理では予知できているはずの情報に、彼に危険を知らせる第六感となっているのだと。

それに、熾音の態度もおかしかった。

本来なら、彼は絶対に名瀬の傍から離れないだろう。それこそが天宮熾音のアイデンティティと言ってもいい。

都城王土の言葉を聞いて、提案に乗ることもおかしいのだ。

仲が良いはずもなく、むしろ名瀬や古賀を含む他者を見下す彼を熾音は嫌っていたはずだった。

なのに何故？ 『裏の六人』をダシにしていたために気づかなかつた事が、都城王土の言葉によって表面へと浮かび出た。

「まさか、熾音くんにも」

「やっと気づいたか？ あの手は常時お前といるからな。正直言つて邪魔だったのだ」

呆然としている名瀬へと、王土が言葉を投げかける。いかにして天宮熾音をこの場から排除したか。

「まあ、何日も前から洗脳すれば気づくだろっからな。そこまではしなかった。安心しろ」

「……………」

「ただ、深層心理にいくつかのルールを覚えこませただけだ。俺の言葉に逆らうな、などだな。あれの記憶力の影響かは知らんが、異常に覚えが早くてな。こちらとしても助かったよ」

洗脳というよりは催眠・暗示に近いだろうか。王土が熾音へと仕込んだものはそういうものだった。

王土にそれをされた事が表面に出て気づかれることもなく、熾音自身が洗脳をされたことに自覚する事もなく。

だからこそ言われるまでは誰も気づけなかった。

あくまで自然に、熾音が王土の言う事を聞くように思考誘導をする洗脳。そんなものに気付けるはずがなかった。

「そんな……………」

「なんだ？ 友達が死んで悲しいか？ 頼りの仲間が来なくて絶望か？ 所詮お前も黒神の姉か？」

それだけの事をしておいて、王土はむしろ呆れた表情を見せる。彼は己の臣下とする行橋未造に顔を向けるが、行橋は床へと倒れて

いた。

他人の痛みを受信する事ができる行橋は、古賀が心臓を貫かれた時の痛みを受信してしまったのだ。

「ああ……離れていると言つのを忘れていたな。これは迂闊だったな」

やれやれと首を振った王土は行橋に目を向けたが、それだけだった。

「まあ、いいか」

王土はたったそれだけで目はずし、自身が古賀の能力を奪ってすぐに蹴り飛ばした黒神めだかに目を向けた。

もはや他の者など目に映っていない。

彼の敵となる相手は既に黒神めだかしかおらず、興味のある相手もまた然り。

「さあ黒神めだか。立ち上がって戦って負けて殺されて死ね。なんならお前の財産も徴収して、偉大なる俺は完全なる俺へと進化しよう」

支配者然とした王土が、黒神めだかへと手を伸ばす。

そんな王土へと、吹き飛ばされて破砕されたコンピューターに埋もれた黒神めだかが言った。

「……あまりこういうことを聞きたくはないのだが、貴様、それでも人間か？」

「もちろん。俺が人間だ」

「……そうか」

小さく呟いた黒神が、一瞬で王土へと近づいて肘による攻撃を行った。

王土の体がくの字に折れ曲がる途方もない威力の攻撃。

普段の黒神めだかを遥かに凌駕する強さ。

「だったら私は、化け物でいいよ」

発動した、いつもと少し違う乱神モードを纏った黒神めだかが言った。

確かにその姿は、人を遥かに凌駕した存在を示していた。

第肆拾玖記憶目（後書き）

あとがき

王土って、支配力を支配できていたら第二の黒神めだかになってた可能性があるんだよね。

元々は自分以外の誰も犠牲にすることなしに、自分を人のために役立てようと思ってたらしいし。

人って変われば変わるもんだわさ。

そしてやっとこさいろいろと進んできました。

第伍拾記憶目

わからない。

歯が立たない。

つかみ所が無い。

かわりたくない。

今すぐ逃げ出したい。

「ぐ……っあ」

ノイズだらけの頭を抑え、満身創痍の予知で迫る螺子を回避する。
未来が無いのか。
違う。

本質が根本的に異なっている。
無限の道筋を持つ未来が、それを知る予知が分断される。
肺を拳で押し潰した。目に指を突き入れた。心臓にペンを突き刺した。全ての予知を実行した。
予知の結末は死。それでもヤツは

「『痛いなあ』『不公平だから』『君も避けないでよ』」

「何故だ……っ！」

予知は覆る。易々と次々と延々と覆られていく。
それこそがノイズの原因だと気付いてもどうにもできない。何が起きているのかなど理解できない。

だがそれでも、倒れるわけにはいかない。

たとえ肩に、足に、腹に螺子が突き刺さっていても、決して目の前のおぞましい存在は放っておけない。

「『ふーん』『なんだか』『君の事がわかってきたよ』」

「……知らない。私はお前のことなど知らない」

「『そうかもね』『でも』『君が怖いものはわかったよ』」

そんなもの、私には無いな。

お前も立ち向かいたくないだけで怖くは無い。

「づうつ!？」

予知のできない状態を突かれ、残った足に螺子が刺さった。

両肘にも螺子が突き刺さり、私は床へと礫にされた。

なんとか上を向いて奴を見れば、私の傍らへと膝をついた奴がこちらに手を伸ばしていた。

「『見るに耐えないね』『君を救ってあげるよ』」

「お前の助けなどいらナイ……!」

「『遠慮するなよ』『もう君は』『自分に悩まなくていいんだぜ?』」

「

その言葉を最後に、私は消えた。

|| || || || ||

フラスコ計画凍結をめぐる戦いは終わった。

都城王土が、黒神めだかに敗北した事で。

都城王土は黒神めだかの異常、『完成』ジ・エンドを徴税しようとしたが、できなかったのだ。黒神めだかの持つそれは、都城王土が持つにはとても耐えられないものだった。

だから彼は負けを認め、謝罪し、頭を下げた。
ごめんなさい、と。

「お前は許す気が無いかもしれんが謝っておく。すまなかったな、名瀬」

「……うつせーよ。そんな事より、熾音くんにかけたっていう洗脳も解いてもらうからな」

「わかつている。上に戻ればすぐに解除するさ」

許してもらった都城は名瀬に向かって頭を下げた。

名瀬も心では怒ってはいるが、黒神が許して今になって蒸し返しても仕方が無い。天宮熾音の洗脳をすぐに解除するという約束をさせて、それで満足することにした。

そんな時だっただろうか。

黒神めだかの操作していたパソコンが勝手に動き始めた。

当然、疑われるのはそれらを操作する異常を持っている都城王土だ。

「王土くん、君が何かやってるのかい？」

「いや、安心しろ。普通なる俺は何もしていないぞ？」

黒神真黒に問われた都城も不思議な顔をしている。

そうこうしているうちに、パソコンのモニターにあるものが現れた。

「これは……」

「メッセージ、だな。このタイミングで出てきたって事は熾音君に決まってる。おそらく……」

予知でこうなるという結果を知っていたのだろう。そう、名瀬は心の中で呟いた。

問題は、どうしてそんな事をする必要があったのかどうかだ。

その場にいた全員が、そのメッセージとやらを見ようと思ってパソコンに近づいた。

ただその前に、行橋末造が一度目を瞑った後に口を開いた。

「このメッセージ、フラスコ計画を凍結しようとする目的で、データに何か手を加えると表示されるようになってたみたいだね。彼は、こうなる事を見越してたってことなのかな？」

「……………」

古賀の傍に立つ名瀬を、情報を読み取ったらしい行橋がじっと見つめた。

名瀬は答えない。

それを答えるということは、熾音の予知についても情報を与えるこ

となる。

半ば気づかれていることだとしても、彼女は一応最後までそれを隠すべき義務があると認識していた。

ただ、それもメッセージを見るまでだったのだが。

「……どうやら、彼は本当にこうなる事がわかってたみたいだね。もしくは、可能性が高いと思ってたのかな」

「なるほど。天宮二年生が記憶しているフラスコ計画のデータは封印すると書いてありますね。……同時に、お姉さまと古賀二年生の安全などを任せたと書いてありますが。古賀二年生については謝らなければなりません」

その言葉を聴いて、名瀬が身体をピクリと震わせる。

彼女の脳裏には自分の知る熾音が何を目的としてそんなメッセージを残すかという思考が巡る。

そして、ようやくと言つべきか。

黒神真黒が名瀬天歌へと、ほぼ確信事項である事を問いかけた。

「くじらちゃん、改めて聞くよ」

「……………」

「天宮くんはおそらくだけど、予知をして、未来を見ることができるとじゃないかな？」

その言葉を聴いて、周りの者は驚いた。

しかし同時に、納得をした者も数人いた。

常に得続ける多量の情報によって妨害を受け、熾音から情報を読み

とれなかった行橋未造。

記憶能力しかないはずの天宮熾音に攻撃を仕掛け、動きを知られていたかのようにカウンターを喰らい、それをよけられずに昏倒した人吉善吉。

自身の持つ勘と、姉の反応によってすべてを察した黒神めだか。

「そうだよ。確かにあんたの言うとおりさ」

「……そうかい。それで、天宮くんの考えはわかるかな？ 彼との付き合いが一番長いのはくじらちゃんだ。そしてたぶん、認めたくはないけど、くじらちゃんの考えを一番わかるのも彼だろう。くじらちゃんなら、天宮くんがこうしてフラスコ計画が凍結された時のためにくじらちゃんたちの立場に保険をかけていた理由がわかるかな？」

「んなこと、言われなくてもわかってる！」

まくし立てられた言葉に、名瀬が大声を上げた。

どうしても何も、ありはしない。彼が望むのは恋人と親友との関係、絆、その安全。その他全ては、自己を含めてそれらの下でしかない。自分が他人にどう思われても、自分がどれだけ傷つこうとも、自分の思いが届く日が予知できなくても、自分の求めたい未来がそこになくとも。天宮熾音が望む全ては、天宮熾音が読みとった『名瀬天歌が望むであろう世界』でしかない。

ただ惜しむらくは、彼は名瀬天歌の世界にいる自分を夢見ても、未来のためにそれを切り捨ててしまうのだ。だからおそらく、天宮熾音の読みとった『名瀬天歌が望むであろう世界』に彼自身は含まれていない。

名瀬天歌にはそれがわかっている。

彼女が地獄に堕ちるなら、彼も共に墜ちるだろう。

彼女が不幸を追い求めるなら、彼は追随するだろう。

彼女が望む不幸を手に入れば、彼は祝福するだろう。

それらは全て名瀬天歌が望んだことで、天宮熾音が望んだことだ。

彼が自分を犠牲にして彼女の世界を守るのは、当然彼自身が望んだことで、それを止める気なんて無い。

全てが不平等になり立つ、圧倒的に一方的なバランスでも、それが二人にとっての日常だったから。

そこに古賀いたみが加わって、名瀬天歌とも天宮熾音ともイーブンな関係を築いても、彼ら二人は変わらなかった。変わるはずもなかった。

それが初めて会った時から今まで変わったことのない、二人の異常な関係だから。

思い悩む名瀬天歌へと、黒神真黒が問いかける。

「僕にもめだかちゃんにも、他のみんなにも、このメッセージからはその言葉以上の事は読みとれない。くじらちゃんならわかるはずだ。彼が今までずっと隠してきた『予知』なんてものを、今こうして簡単にわかってしまうほどに情報を晒している理由が」

それに続き、黒神めだかも口を開く。

「お姉さま。教えてください。お姉さまにとって彼が大切な人だということとはわかっています。また彼にとってお姉さまが大切な存在だということも！ だから今は、お姉さまが不安に思うことを打ち明けてください！ 生徒会長として、姉妹として、いくらでも協力いたします！」

完全に決めつけ口調であったが、実能的を得た言葉だった。内容が

ほとんど間違っていないのは、さすが生徒会長の黒神めだかといったところか。

その後ろで並ぶ人吉善吉、阿久根高貴、喜界島もがなといった生徒会の全員も名瀬へと顔を向けている。

もちろん敵ではなく、生徒会の一員として。頼もしげな雰囲気身を纏いながら。

そうして、色々と図星を突かれたからか、それとも何か感じるところがあったのか。

名瀬天歌が、仕方なさそうに口を開いた。

「……うつせーな。言われなくても言うつつーの！ 俺の考えてる通りなら、お人好しの妹に手を貸してもらった方がいいからな！」あくまで憎まれ口で決して正直にならないその様子に、黒神めだかと黒神真黒が顔を綻ばせる。

決定的なものはまだずっと先になるだろうが、少しは家族の絆を取り戻せたかもしれない。

しかし、それよりも急いで取り組むべき事があった。

「とりあえずエレベーターだ。上に戻りながら話す」

名瀬にそう言われ、黒神めだかがパスワードを開けた後に全員で一階まで直通のエレベーターに乗り込んだ。

そこには都城王土や行橋未造の姿もある。

王土に対する恨みもあるだろうが、そんなことより目の前の問題の方が大切なようだ。

「熾音くんが、他人に俺たちを任せようなんて、まずあり得ない。それが第一だ」

「……確かに、あの人って四六時中名瀬先輩の事を話してましたよ

ね」

「そーだよ善吉。熾音くんは俺たち以外信用してない。絶対に自分が俺たちを守らなきゃと思ってる。いくら予知でわかっていても、俺を守るのに古賀ちゃん以外に対して『任せた』なんて言葉を使うはずがない」

そんな馬鹿な、と否定はできない。

異常は他者との絆が出来にくい。だから一度出来た絆をこそ大切に
する。

たとえ天宮熾音がその絆に異常なほど過敏であつても、それを馬鹿
にすることなど出来ないのだ。

「名瀬さんも愛されてるね。そこまで自信ありげに自分を守る男の
事を語るなんてさ」

「うーん。でも、ほら。黒神さんのアレを聞いた後だからやっぱ姉
妹なんだねって思えるかな」

阿久根と喜界島がそんな会話を交わす。

実は地下二階での宗像形と人吉善吉の戦闘の折、黒神めだかは人吉
善吉ラブ宣言をしていたのだ。

それを間近で聞いていたのは生徒会メンバーと黒神真黒のみで、人
吉善吉本人は知らないのだが。

「とにかく。予知があるだけでも熾音くんは異常に強いんだ。そこ
らへんの十三組の生徒なら片手で捻れるくらいにな」

「……だからあの時、攻撃が避けられなかったのか。カツ！ そり
ゃ強いはずだぜ」

名瀬の言葉を聞いて、人吉善吉がぼそりと愚痴をこぼす。

地下三階の落とし穴からオチた四階の一室で戦った人吉善吉と天宮熾音。

その戦いは予知を発動した天宮熾音が、相手の攻撃に合わせてカウンターを行つたために一瞬で終了していた。

予知なんてものを知らない善吉には気の毒だったが、異常相手に不用意に牽制の蹴りを放つた方も悪いのである。

「その異常に強い熾音くんが、俺たちを自分で守れずに人に任せるほどに逼迫した状況になると予知していたんだとしたら……」

予知能力者で、いくら満身創痍でも人吉善吉を一瞬で下した天宮熾音。

それが苦戦する状況などありうるのか。どうか。他の者には一向に想像がつかなかった。

「相当ヤバいぜ。早まらないでくれよ、熾音くん……」

「とにかく、彼が向かったという理事長室へ行きましょう。都城三年生も、付き合ってもらいますよ」

「ああ、普通なる俺も協力しよう。元々は俺の責任だからな」

黒神めだかの指示の下。

天宮熾音を探すため、生徒会その他の面々は、王土が熾音へと行くように命令していた理事長室へと向かう。

しかし彼らはエレベーターを降りた直後に直面する。全てが手遅れ。全てが台無し。

彼らが行動をする前に、そんな無惨な結果に終わってしまったこと

を。

第伍拾記憶目（後書き）

あとがき

バトル開始と思わせておいていきなり決着がつくのが球磨川クオリティ（嘘）。

未来に無いことは予知できないよ。当たり前だけどね。

そう。問題は、名瀬ちゃんの裸エプロンを妄想した作者が死にかけたという事だ。

メイドがあんだだけ似合うなら絶対似合うって！ 絶対！

第伍拾巻記憶目

「『あれ』『ずいぶんと早かったね』」

「球磨、川っ!？」

フラスコ計画を凍結し、時計塔の地下から直通エレベーターで戻ってきた生徒会一行と『十三組の十三人』サティーンパーティ数人。

時計塔の一階、エレベーターの前では、『裏の六人』ブラスシックスと呼ばれる『十三人』のうちの六人と、生徒会一行に敗北してきた六人である『負け犬軍団』が、六対六の熾烈な戦いを繰り広げているはずだった。

はずだった。

しかし、そこに広がっていた光景は予想とはまったく違うものだった。

エレベータ前の通路には『裏の六人』と『負け犬軍団』の生徒達が、体の各部位を螺子で貫かれて壁や床に磔にされている。

そして、彼らに向かってゆっくりと歩き始めている球磨川襖の足元には、螺子が体中に刺さって倒れている天宮熾音の姿があった。

球磨川によって作り出されたであろうその惨状の被害者達は、一人の例外もなく全員がピクリとも動かない。

「『久しぶりだねめだかちゃん』『かつこ悪いところを見られちゃ

「つたかな？」

血塗れの球磨川楔は、そう言いながらハンカチで身体を拭きつつめだか達へと近づいていく。

近づいてくる球磨川に、めだか達は何をすることもできない。ただ呆然と、愕然と、彼を眺めているだけだ。

ただいつもと違っていているのは、あの黒神めだかが目に見えて敵意を放っているということ。そして同時に、黒神めだかと共に立ち向かうはずの人吉善吉が明らかに恐怖しているということ。

しかし今、それ以上に精神に異常をきたしているのは誰か。

「そんな、そんな、熾音くん……？」

精神の支えでありかけがえない友達二名。

古賀いたみが重傷を負った時にも傷ついた名瀬天歌の心。古賀は幸いにも必死の治療によって持ち直したが……目の前に倒れている天宮熾音はどうだ？

全身を巨大な螺子で貫かれ、両手両足どころか腹や胸まで貫かれていた天宮熾音はどうなのだ？

その姿は明らかに、死んでいるようにしか見えない有様で

「くじらちゃん落ち着いて！」

「だつて……こんな……」

「言い方は悪いかもしれないけど、球磨川くんはそう簡単に終わらせる子じゃないんだ！ だからどんな傷を負っていたとしても、死ぬなんてことは無い……」

取り乱す名瀬を押さえる黒神真黒も自信は無いのだろう。徐々に言

葉が尻すばみになっていく。

当たり前だ。いくら中学生の頃に同じ生徒会にいたとはいえ、球磨川の心の中なんて理解ができるはずも無いのだから。だから真黒が言ったことは、自分の妹を少しでも悲しませたくないという思いが口から出てきたというだけに過ぎない。

正直に言えば、彼の『解析』でも十中八九死んでしまっているのではないかと思っていた。しかしそれは、口に出してはいけないことだ。もしもそれを口に出してしまえば、彼の愛する妹を更に悲しませることになる。そんな事はしたくないのだ。

そして真黒は、涙を流して悲しむ名瀬を自分の後ろへと引っ張って移動させた。球磨川なら、彼の愛する妹が悲しんでいようが容赦なくその心をえぐろうとするだろうから。

（今は、何もできない。少なくとも球磨川くんがここからいなくなるまでは……）

すまない、と思いながら真黒は熾音に視線を向けた。いくら妹の大切な友達でもそこまでする義理は彼には無いのだ。

幸い、今の球磨川は名瀬には何の興味もしめしていない。名瀬が怒りよりも悲しみに囚われたのが幸いだったか。

球磨川にとつてのメインは黒神めだかであり、昔の知り合いであり、彼らが率いる生徒会なのだろう。

そして、黒神真黒も球磨川の知り合いに該当する。

「『かつこいいねえ真黒ちゃん』『昔はそんな姿に憧れてたよ』」

「……そうかい。それで、君はどうして」

「『そんなことより！』『君もなんだか怪我をしてるね？』」

たやすく皆の内側に入り込んだ球磨川が、今度は真黒の前に立っていた。

すぐさまガバツと服を捲り上げられて、真黒の身体にある傷跡が露になる。

「『随分と古い傷だねえ』『一年位前のものかな?』『なんならこれ僕が戻してあげようか?』」

「……遠慮しておくよ球磨川くん。これは僕が己の過ちに対して支払った代償であり、僕が己の罪に対して受けた罰なんだから」

妹を背に、まっすぐに球磨川を見て真黒は答える。

その傷跡は、彼がフラスコ計画に加担していた証であり、代償を払ってでもそれを抜けたという証だ。

真黒の身体に傷跡が残り続ける限り、記憶以外の明確な罪の証となるだろう。

しかし、球磨川にとってはそんなどうでもいい事は知ったことではない。

そんなものを理解して尊重するような男ではないのだ。

真黒の言葉を聴いて捲っていた服から手を離し、簡単に背を向けた球磨川はさらりと言った。

「『なーんだそうだったんだ』『でもごめん』『もう戻しちゃったよ』」

「っ!?!」

球磨川の言葉に、驚愕しながら真黒は服をはだけける。

そこにあったはずの傷跡はもう無かった。

様々な内臓を摘出し、手術跡だらけだった真黒の身体は、傷一つ無

きれいな身体へと変わっていた。

「『思い入れとかー』『心がけとか誓いとかー』『ごめーん』『僕
そついうのよくわからないんだー』」

愕然とする真黒の前に、球磨川はなんでもない笑顔でそう言った。
いいも悪いもいっしょくたにかき混ぜて、すべてを一瞬で台無しに
する感じ。昔は球磨川の部下だった阿久根がそう評価するのも無理
は無い。

初対面の人間にも楽々と嫌悪感を抱かせる男であり、誰よりもマイ
ナスな男であり、マイナスであるとはこういうことなのだとわから
せる男でもある。

初対面である喜界島や都城たちも、おそらくは同じようなことを思
っただろう。

「……おい、それで私には何も無いのか？ 球磨川。折角の再会で
折角の機会だ。私にも言うておきたいことがあるなら言うておけよ」

ただ一人、知り合いであるにもかかわらず何も言われなかったためだ
かが言った。

黒神めだかは中学生の頃に球磨川楔を倒した張本人だ。そんなめだ
かを球磨川が何も思っていないなどと言う事があるだろうか？

……いや、たとえあったとしても決して他の者には理解できないだ
ろう。

「『んー？』『僕が』『めだかちゃんに』『言いたいこと』『ねえ

』」

出口に向かって身体を向けたまま、球磨川が考えるふりをする。
そして、顔だけをめだか達に向けて言った。

「『別に無いけど。』」

それを聞いて黙ったためだか達には、球磨川は畳み掛けるように言葉を放つ。

「『あー！』『ひょつとして勘違いしてる？』『僕がきみ達に会いに来たとか！』『ここで待ち伏せしてたとか！』『さー！』」

無邪気な笑顔で球磨川楔は毒を吐く。
誰もが顔を歪めなくなるような毒を。
どうでもよいような腹の立つ罵声も。

「『うわ恥づかしいー』『自意識過剰ー』『どんだけ自己中な考え方してんのきみ達！』『自分のことをそーんな重要人物だと思いながら日々を生きてるんだおもしろーい』」

そんな事を言った球磨川は、めだかの問いにもそのまま答えた。
この学校に転校してきて、理事長室に向かっていたが、道に迷って時計塔にやってきた。

よく考えれば時計塔にそんなものが無いくらいわかるだろう。
全くの考えなしで、ただ高い建物に向かって歩いてきただけなのか
もしれないが。

しかし問題はそんな胡散臭い返答ではなく、転校してきたという部分のみに絞られる。

人吉善吉が球磨川の転校に驚愕している様子が、その危険性を物語っている。

その後は球磨川の独壇場だった。

仲間を傷つけられた怒りを都城王土が見せるなど、先ほどの彼を知っているなら大層な成長だったのだが……球磨川はそれを聞いて、自分の頭を螺子で貫くなどという行動を見せた。

自分でやっていないと言いながら、平気でそんな行動を見せてくる。逆に胸糞悪くなったのは、怒るつもり of 都城の方だった。

そうして、螺子で頭を貫いたままに去ろうとする球磨川はめだかに言った。

「『あ』『そういえばめだかちゃん』『今生徒会長やってるんだって?』『昔の僕みたいに』」

「ああ、昔の貴様を反面教師にな」

「『ふーん』『ま』『応援してるよ』『がんばってね』」

応援してるなどと、どの口が言うのか。がんばってなどと、どの口が言うのか。

「『じゃあ』『また明日とか!』」

球磨川は、そんな事を言って手を振りながら去っていった。なんと形容し難い嫌な感じを残して。

「ふー。やっと行ったかあの学ランくん」

「っ!!」

突然に背後で上がった声に、めだかはもの凄く驚いた。
それと同時に喜界島と阿久根も声を上げる。

「な……鍋島先輩!？」

「大丈夫なんですか!？」

「アホ! 大丈夫もへつたくれもあるかいな。あんな凶人の相手してられへんから早々に死んだふり決めただけに決まっとるやん!」
鍋島猫美が、球磨川がいなくなるなりムクリと起き上がったのだ。
もちろん彼女にも螺子は突き刺さっているが、それに対して激痛を感じているような様子も無い。どころか微妙に元気な様子も感じられる。

そしてこの人物、卑怯にも死んだふりをしていたようだ。さすがに反則王と呼ばれるだけの事はある。

「他のみんなかてそうやって、なあ!」

「……どうやらそんな卑怯者は、あなただけだったみたいですから……」

ただ、やっぱりというかなんとか。

周りに呼びかけても答えるものはおらず、卑怯者は彼女だけだったようである。

まあ、そのおかげで何があったのかを把握できるわけだが……

いくらずぶとい鍋島猫美でも、さすがに自分の身体に起きた不可思議すぎる現象にはさっぱり理解が及ばないようだ。

球磨川の螺子によって貫かれた傷が、綺麗さっぱりなくなっているのだから当然か。痛みもあつたし、突き刺された感触もあつたはずなのに、傷だけが綺麗さっぱりなくなっていた。オカルトすぎてわけがわからない、それが鍋島猫美の抱いた感想だろう。

ただ、そんな理解不能な現象に喜ぶ少女もいた。

「よかった……」

「よかったねくじらちゃん。彼が無事で」

血塗れな上に螺子で全身を串刺しにされていた天宮熾音だったが、螺子をどけてみればそこには何の傷も無かった。

それに気付いた名瀬は、涙を流して熾音へと抱きついていった。

後ろでは黒神真黒が複雑な顔で名瀬に言葉を投げかけているのだが、名瀬はそれに気付いたのか顔を引き締めて熾音を勢いよく抱き起こした。

「……おい熾音くん！ さつさと起きろ！」

「無理せずに離れてくれていいんだよ？」

「……よかった。本当に怪我は無いみたいだな」

真黒の言葉は完全に無視し、名瀬は熾音の様子を調べていた。どうやら本当に怪我は何も無いようだ。ほっと安堵の息をついている。そのまま腕の中に抱き締めたもんだから、真黒はこめかみに青

筋を浮かべている。それでも手を出さないのは兄だからなのか、それとも少しは認めているからなのか。

「その図書委員長が来たんはウチらがやられた後でな。一人だけでウチらの倍くらいはもってたんよ」

「そんなにか……さすがに予知能力者といったところかな」

「やたらと誰かの名前を叫んどってなあ。やー、愛されとるねえ、名瀬ちゃん？」

にひひと笑う鍋島の言葉に、視線が一つのところに集まった。未だに胸の内にその図書委員長をかき抱く名瀬天歌は、集まった視線に対して沈黙で答えた。

「……………」

ただ、彼女が何を考え何を思っているかは、よく観察すればわかっただろう。

熾音を抱く手は自分のものを手放さないように力強く、向けられた視線にはそっぽを向いて対応する。

明らかな脅威が迫っているにもかかわらず、誰もが心穏やかになっ
てしまふ光景だった。

少なくとも今だけは、そう思っていることができたのだ。

未来を知ることが無い人間は、例えどれだけの苦難が未来に待っているても、今に笑うことができるのだ。

第伍拾巻記憶目（後書き）

あとがき

初めのところがすごく悩んだ。

いや、意識を失ったらやりたかったネタとかあったんよ。

「こ、こいつは！ 熾音君の機械^{マシン}モード！？」

「なんだそれは！」

「早い話、意識を失って今までの記憶と予知だけで動いてるんだ！

ああなつた熾音君はやばいぜ……」

みたいな。

まあ書き続ける自信が無かつたんですけどね。

安心院さんの目的がわからないなあ。

フラスコ計画の立案理由もさっぱりじゃ。

人類総人外化計画みたいな感じで、区別をなくしまえば安心院という人外もその仲間入りできるとか言うお花畑な理由だったら楽なのに……

第伍拾貳記憶目

七月十五日。

フラスコ計画一時凍結。

それが知れ渡ると同時に、『十三組の十三人』の空枠を求めている十三組の生徒達は学校へと姿を見せなくなった。

同時点をもって、『十三組の十三人』は解散。

生徒会は本来の目的を遂げ、その執行は完遂された。

そして現在。

ダウンした二人、特に古賀いたみは異常を失って重症だったため、名瀬天歌と黒神真黒が全力を出して治療する必要があった。

それ故に、名瀬天歌と古賀いたみ、そして天宮熾音は、黒神真黒が管理人を務める旧校舎『ゴーストバベル軍艦塔』に滞在することになった。

天宮熾音も、全身の傷は消えてはいたもののダメージが残り、しばらくは同じようにダウンしていたのだが……

「最高だ。メイド服っていいね黒神さん」

「そうだろう天宮くん、君がくじらちゃんと仲が良くなかったら親友になれたかもしれないね」

（ああ……代わりに熾音くんに殴ってもらおうと思ってたのにっ！）

後ろでギリギリと歯軋りする古賀いたみだが、名瀬天歌のメイド服を前にした二人には全く見えていないようだった。

そう、メイド服である。

そんなもの着させようとすれば普通は麻酔の静脈注射に直行なのだろうが、黒神真黒に何でもすると云った言質があつた。

「つたく、こんな服着るくらいで嬉しいのかよ。理解不能だぜ」

「それでも構いはしない。名瀬天歌がメイド服を着る、それを見ている私にこそ意味があるのだ！」

「……さっぱりだぜ」

やれやれと首を振る名瀬天歌も、いつにも増して口を回らせる天宮に呆れているようだ。

仲が悪いはずの黒神真黒とも一緒に喜びを表している時点でおかしいが、両者とも相性は悪くとも名瀬天歌を愛しているという事は確かなのだ。そういう点で一致したのなら、そういう事もあるのかもしれない。

にしてもガツシリ握手なんかしていると、本当に親友同士なんじゃないかとすら思えてくるから不思議である。

……今でこそこうして元気になっている天宮だが、目を覚ますまでには結構な時間がかかっていた。

軍艦塔へと運び込んで名瀬天歌と黒神真黒が急ぎ検査したが何の話題もなく、どうして起きないのかとパニックを起こしかけた名瀬天歌がいつもの癖で殴ったら目を覚ました。

それからはこうして、黒神真黒と一緒に名瀬のメイド服にはしゃいでいる。

「ああ、最高だ。最高すぎる。やっぱり名瀬ちゃんは神だぜ」

「おいおい、なんの宗教だよ」

「そつだよ熾音くん！ あんなに心配かけさせといてさ！」

「いや、それは古賀ちゃんもだからな。俺は心臓が止まるかと思っただぜ」

自分の前に跪く天宮に蹴りを入れながら、メイド服の名瀬は古賀にもツツコミを入れる。

心配かけたのは古賀いたみだつて天宮熾音だつて変わらないのだ。むしろ、目の前で心臓を貫かれていた古賀の方がよっぽど心配をかけていたと言えるだろう。

なにせ自分のキャラを崩壊させて泣きながら、ムカつく黒神真黒に何でもするとまで言うくらいだ。

もしかしたら彼女の目の前で倒れたのが天宮熾音であつたとしても同じ事をするかもしれないが、それは定かではない。

「つーか熾音くんよ」

「なんだい名瀬ちゃん？」

「あんだだけ心配かけさせといて、本当に何もないのか？ 他の奴等は、死んだ振りをしてた奴一人を除いてかなりのダメージが残ってるんだぜ？」

あくまで平常時と同じように、しかし心配していることが彼にはわかる程度に、名瀬は天宮に問いかけた。

『負け犬軍団』として助太刀に来たメンバーと、『裏の六人』として迎撃に当たったメンバーは、鍋島猫美を除いてかなり重症だった

のだ。

もちろん実際に怪我があったわけではなく、怪我が消えても残る精神的なダメージが要因なのだが。

あの時に球磨川に倒されていた者たちの中でも、特にダメージの大きかった天宮熾音に何も無かったなどとはとても思うことが出来ないのだ。

「私は大丈夫だぜ名瀬ちゃん。だからこうして、名瀬ちゃんにかっこつけられるんだからさ」

そんなダメージなど残っていないと、そう示すようにポーズまで取る天宮。

正直言つてそんな姿など似合わないが、なるほど。目の前の名瀬が、肩から力を抜く程度には頼もしく見える姿だったようだ。

「ならいいのさ。でもな、今度からあんな無茶はやめてくれよ」

「無茶つて言つてもね。私はあの都城に操られていたそうじゃないか。予知ができていたとしてもあの男の前に行くことは避けられなかったんじゃないかな」

「つつてもなあ……だいたい、熾音くんもそう簡単に洗脳なんかされるんじゃないよ」

名瀬はつつけんどんにそう言うが、あくまで照れ隠しであるという事に古賀いたみと天宮熾音は気づくことが出来る。

自分が心配して涙まで流してしまったのに、こうして目の前で元気にいつも通りにはしゃがれているから、名瀬も結構むしろしゃしているのだろう。

元はといえば熾音が洗脳されず、ずっと名瀬たちと一緒に行動して

いれば古賀は王土から攻撃されても防ぐことが出来たし、名瀬の知らないところで勝手に敗北しているなんてことも無かっただろう。だから熾音が全部悪いんだぞと断言してしまい、あくまで自分がキヤラを崩壊させてしまったのは自分のせいじゃないと言いたいのだ。

（まあ。熾音くんならそこで名瀬ちゃんをからかった上で喜ぶんだろうけどねー）

ベッドの上で二人を見ながらそんな事を思う古賀いたみ。

重ねて言うが、彼女は名瀬の胸中が当然のようにわかっていた。平常時の名瀬であればそれくらい隠し通せたかもしれないが、現在の名瀬のそれ方面のガードはかなり緩くなっていたからだ。

ちなみにメイド服だから緩んだのではなく、精神的にガタがきまわった影響というか、早い話がデレてしまった後遺症みたいなものが残っているのである。

だから古賀の予想はだいたい当たるかと思えたのだが、そうでもなかった。

「ははは。まあ、私にもできないことは色々とあるのだよ」

そんな風に苦笑いしながら天宮は答えた。

確かに、彼の言葉はその通りだ。

遙か昔に制御可能になった予知は自動的なものではなく、たし、予知しても全てを知ってしまうことは出来ない。

知りたがりな天宮熾音にとってはそれが正解だが、かといって誰かを守る事に適しているわけではないのだ。

しかし、名瀬天歌と古賀いたみならこう言うはずだ。いくら自分たちを守るためとはいえ、天宮熾音にとっての大切なものを失うのでは意味がないと。

「……無視されてるなあ。ふ、まあ少しくらいはいいさ。付き合うとかは絶対許さないけどね」

妹とその友人に無視され、黒神真黒はそんな事をブツブツ漏らす。いくら妹自身が心を許していても、彼としてはそうやすやすと認めたくは無いようだ。

そんな時だろうか。

ハシャギまくっていた天宮が、突然にそれをやめて部屋の入り口を睨み付けた。

「どうしたんだい？」

「……おい熾音くん、まさか」

「そのまさかのようにだよ、名瀬ちゃん」

黒神真黒の言葉は無視し、名瀬の言葉に天宮は答えた。

天宮は敵意を持って入り口を睨みつける。それが指し示すのは、彼らにとつての敵が来たという事に他ならない。

そんな時、全員が注意を向けている中で入り口の扉が開かれる。

そこから現れたのは、別の学校の制服を着た不気味な雰囲気少女だった。

「失礼しまあーす。旧校舎管理人の黒神真黒さんはこちらにおられますかあー？」

「黒神真黒は僕だけど……？」

「あー！ いたいたよかったあー！ えーつと私、昨日付けでこの

学園に転校してきた者なんですけどぉー。何せ新設のクラスだから新しく教室を用意しなきゃダメらしいんですよー。だから、この軍艦塔を問答無用で明け渡してもらえますうー？」

両手に刃物を持ったその少女は、半ば脅迫にも近い台詞で、というか8割方脅迫確定な台詞を吐いた。その姿からも、発する空気からも、あの球磨川とどこか似た気配が感じられる。

「マイナス十三組は新設クラスだから新しく教室を用意しなきゃならないんですよー。だから管理人さん、この旧校舎 軍艦塔を問答無用で速やかに明け渡してもらえますうー？」

「……マイナス十三組？ へえー、そんなクラスが新設されるんだ。しらなかったなあー」

間違いなく球磨川関係のそれだと想像しながらも、真黒はそれにはしない。

もしも同じようなそれであるなら、悪戯に刺激するのはあまりよくない。

……まあかといって、敵意を向けられて黙っているような奴がいるはずもないのだが。

「ふ、これでようやくかつこつけられるという事だね」

「おいおい、熾音くんは病み上がりだろ？」

天宮が、意気揚々と一歩前に踏み出した。

しかしそれを名瀬が止める。

怪我は治っているし戦うのにも支障は無いのかもしれないが、相手

があの球磨川と同じマイナスのようなものが感じられる事が不安要素なのだ。

しかし、男を止めるそんな姿を見て、兄が黙って見ているはずがない。

「待ちなさい。まったく、僕も甘く見られたものだよ。せつかく邪魔な天宮くんを大切な妹が止めてくれるのに、女の子達を守る機会を僕が見逃すはず無いだろう?」

そう言つて、名瀬に止められている天宮が踏み出した一步よりも大きく、とてもかっこよく踏み出した。

そして更にかっこよくポーズを決めて、高らかに名乗りを上げたのだ。

「僕の名前は黒神真黒! 軍艦塔管理人にしてフラスコ計画元統括
チエックメイトマジシャン
! かつては『理詰め魔法使い』と呼ばれた男だ!」

「……………」

「……………」

一瞬の沈黙の後、名瀬が口を開いた。

「いや、兄ちゃん。さすがにそれはないわ」

「え!?!」

名瀬天歌的にはそういうのは『無い』ようだ。

もちろん古賀いたみも沈黙して冷たい視線を浴びせているが、天宮は別に冷たい視線を浴びせることも無く、ただ黙りこんでいるだけ

だ。

そして目の前のマイナスの少女といえば、それに乗っかって名乗りを上げた。

最近流行りなのかもしれない。もしくは球磨川の影響なのかもしれない。

「『チェックメイトマジシャン理詰め魔法使い』ですか　いいですね！　でも如何でしょう、『レインボーローズ虹色の薔薇』ことこの江迎怒江にだからといって勝てますかねえ？」

「これはこれは、問答無用といいながら丁寧な自己紹介をどうも」

変な流れについていけない、むしろ着いていきたくない名瀬と古賀が背後でツツコミを入れている。

そして天宮はといえば、全く逆の反応を見せ始めていた。その真髄は、真黒が呼びかけたことで現れる。

「さあ3人とも！　きみ達も高らかに名乗ってあげなさい！」

「……………」

「い……嫌だ！　この空気の中でだけは絶対に名乗りたくない！」

女子二人は当然のように拒否。名瀬は無言、古賀は否定の言葉でそれを表した。

しかし、天宮は？

名瀬や古賀が止めるより早く、ビッシツとポーズを決めて名乗りを上げた。

「ならば私はあえて名乗ろう！　我が名は『バンドラ知識の匣』、知識と愛

情が詰まった男であると！」

「……なあ、やっぱ熾音くんにそのノリは向いてねーよ」

「うん。私もそう思う」

「そんなっ！？」

無駄にジヨジヨ立ちして決めたポーズのまま、ショックで天宮が崩れ落ちた。

しかしすぐに立ち上がって江迎の前に立ちはだかった。

「クスクス　なるほど、あなたがあのお方の言っていた変態さんですかあ。無様にやられてたって聞きましたけど、随分タフなんですねぇ」

「ふ。確かにあれは人生の汚点さ。しかしだからといってもう一度立ち上がらない理由にはならない」

そして、似合わないからといってかつこつけない理由にはならない。そんな事を高らかに謳い上げて、天宮熾音は江迎怒江に牙をむく。全速ダッシュで江迎に接近する天宮。その速度は古賀いたみの全速力よりはずつと遅いが、それでも常人の域は超えている。しかし江迎はギリギリで刃物を投げつけた。

「甘いっ！」

スタアンと地を蹴って宙返りをしながら、刃物ごと飛び越えた天宮が江迎の背後を取った。

やたらと華麗に見えたらしいが、名瀬にはバカに見えたとか。

そうして江迎の後ろに回りこんだ天宮は、その手に触れることなく腕を押さえつけた。

「くっ……」

「何もできないだろう?。」

「どうして……」

周りを置いてきぼりにして、江迎の問いの意味がわかっている天宮は言う。

未来が読めるからこそだ、と。

未来が読めるから、江迎怒江の持つ過負荷である『マイナスラフレシア腐花』の対策を取ることができたのだと。

思えば、球磨川が異常すぎるだけだったのだ。

普通にやりあっているだけで天宮に勝てるものなどそうはいない。相手の行動を先読みできるというのは、それだけで大きなアドバンテージなのだから。

「さて、ここは女の子を虐めるのもなんだから後は真黒さんにまかせよう。普通にやればそう危なくはないですよ、手に触らなければ良いだけですから」

「ああ。しかし触ったものを腐らせる、か……」

解析という異常を持つ真黒からしても理解不能なスキル。それが過負荷というものなのだろう。

とはいえ、天宮の持つそれも理解不能であることには変わりはないのだが。

「卑怯ですよ、女の子を押さえつけるなんて」

「生憎だが、私にとっての『女の子』は限定的なのでね」

そういつて天宮が見るのは最後まで見ていた名瀬と古賀。

過負荷で、おまけに大好きな人を傷つけようとする奴なんて女の子として扱うのも嫌だというのが本音だろう。

だから男と同じに扱ってぶん殴ってもおかしくなかった。

今回はきつと何かの気まぐれか、他の何かの理由でそうしなかっただけなのだろう。名瀬の前で分類上女とされる生物を殴って、少しでもイメージダウンするのを避けたかったのかもしれない。

とはいえそれが幸いしたのか、それとも災いしたのか。

天宮の予知は意図した時にしか発動できず、おまけに完全に気を抜いていた事もあり、黒神めだかがやってきた時にいきなり逃げに入った江迎怒江を逃がしてしまうことになってしまう。

昔のようにさつさと気絶させておけばよかったのだが、未来を知ることができても過去は変えられないのだから仕方ない。

こうして球磨川率いるマイナス十三組の存在が明らかとなり、天宮たちはその過負荷との戦いに身を投じることとなる。

一体何が待っているのかは、予知能力を持っている天宮にも決してわからない。

ただ一つわかるのは

第伍拾貳記憶目（後書き）

あとがき

若干変態性が低いと思った貴方。

それは重要なことなので覚えておいてね。

地の文とかに変な点があっても、誤字以外は狙ってるかもなので気にしないでね。

あ、別に球磨川さんが『変態』を消したとかそういうわけじゃないからね。

このSSの一番の名台詞は何だろう。

ヘンテコなセリフしかないように思えるから全然な気もするけどね。

過去にやった酷い事なんてさっさと忘れて未来に生きる方が良いと思う私。

失敗を成功の糧にするのは間違っちゃいないが、だからってずっと抱え込んで重荷にするのは間違いだ。

熾音くんは三日前の飯の内容も覚えてない私と違って記憶力がいいので、キャラ作りが凄く難しい。作者よりも優れたキャラなんか作れるわけねーだろとか言われると、なんともはや言い返す術がない。

第伍拾参記憶目

「日之影三年生を呼ぼう」

黒神めだかがそんな事を言い出したのは、江迎怒江によって特別教室ばっかりの校舎が腐り落ちた後だったか。

その名前にほとんどのものが首を傾げたが、天宮はもちろんその名を記憶していた。

『ミスターアンノウン 知られざる英雄』を持ち、誰の記憶からも姿を消している日之影空洞。

黒神めだかの前、一年前に生徒会長を務めていた男だ、

「熾音くん、知ってるか？」

「もちろん知っている。一度だけだが、会話した記憶もある」

「なるほど。天宮2年生は彼を記憶しておくことが出来るのか」

「ああ。しっかりと覚えてるさ」

黒神めだかは日之影を今の今まで忘れていたが、危急だからと思い出したのだろう。

もちろん生徒会の面々は善吉を除いて彼を忘れていたが、それは仕方ない。善吉だって日之影を知っていたことがあったから、めだかの言葉で偶然思い出したと言うだけの事だ。

そもそも黒神めだかですら忘れていた事を、そう簡単に思い出すという方が難しい。

天宮熾音のように記憶能力でもない限り、日之影空洞を覚え続けておくことは難しいだろう。

そんなわけでマイナス十三組に対して先手を打つがため、生徒会執行部は日之影空洞を訪ねることになった。

……の、だが。

何故だかそのメンバーは黒神めだかと名瀬天歌、そして天宮熾音だった。

選抜理由が何なのかと天宮や名瀬が黒神に問うた所、こんな答えが返ってきた。

「お姉さまに同行していただいたのは単に貴方なら日之影前会長を波長が合いそうだったから、天宮二年生は日之影前会長を知っているし彼を見つけるのに適しているからだ」

シャイであるとかいう日之影空洞、同じくシャイな名瀬天歌なら見つけられると黒神めだかは言う。

面識がある天宮は日之影がシャイなわけないと思っていたが、大好きな名瀬ちゃんと一緒に行動できるからそれでよしとした。

天宮が日之影を見つけるのに適しているというのは、既に知られることとなった予知の事だろう。

もつとも、黒神めだかが本当にそれだけを目当てで彼を同行させたという事も無いだろうが。

「……うん、まあ無人だな」

「見たところはそうだね。実際にどうなのかはさっぱりだけど」

前から三列目、右から三列目、教室のど真ん中に日之影空洞の席はある。

天宮と名瀬が話している間も黒神はその席をじっと見つめていた。話しかけても跳ね除けるようで、凄い迫力でそこを見つめ続けるのをやめようとはしない。

だから名瀬も天宮も、黒神に習ってその席を見つめることにした。

「!？」

「っ！ いきなりだね」

「その場の一人に見えれば全員に見えますからね。さすがお姉さま」

どうやら名瀬が比較的早く日之影を見つけたことにより、他の者にも見えるようになったらしい。

しかし、自分と名瀬は驚いているようだ。

天宮は見るのは二度目だからそうでもないが、あの巨体でありながらつい先ほどまで見えなかったのは全く持って異常である。

というかあんな巨体の日之影が中心にいたら後ろの生徒は前が見えるのだろうか。まあ、それ以前に登校すらない十三組生徒にはそんな心配は要らないだろうが。

天宮たちがそうやって彼を発見してすぐに、巨大な体躯で椅子に座っていた日之影は彼らに気づいた。

「お　！　なんだなんだ黒神じゃねーか！　びっくりするなーおいこの野郎！」

かなり気さくに話しかけてきた日之影に気が抜ける名瀬。

どうしてか自分の事を知られていたり、自分の方が先代の生徒会長である日之影を知らなかったりと予想外の事が多くて戸惑った。

地味な生徒会長だったと自分を評する日之影空洞だが、はたして本当にそうなのだろうか。

いくつかの疑問を置いてきぼりに、黒神めだかが日之影空洞へと頭を下げた。

「第九十七代生徒会長日之影空洞、『知られざる英雄』、生徒会を執行するため、どうか私に力を貸していただきたい」

「断る」

にべもなく黒神の頼みを断る日之影。

続けて彼は言う。

「黒神イ、お前なんか誤解してんじゃねえのか？ 生徒会長は生徒の代表つてだけで別に英雄じゃないんだぜ？ 球磨川？ 過負荷？ なんで生徒会がそんな奴の相手しなきゃなんねーんだよ。どう考えても業務外だろ。危ない奴がいるなら警察を呼べばいいし、怖い奴がいるなら自衛隊を呼べばいい。つーかまず先生方に相談しろよ。なんでもかんでも自分の力で解決しようってのは傲慢でしかねーぞ？ まあそんなに目立ちてーなら好きにすれば？ 今の生徒会長はお前なんだから。引退した爺はさっさと避難して、人知れず地味に塾にでも通うわ」

言うなり、日之影空洞は姿を消した。

何の前触れも無く唐突に。

全てを記憶している天宮が自分の記憶を刹那の単位で見直しても前兆が見当たらないのだから、速度とかそういうものでもないのだろう。

「馬鹿な！ 消え ！？」

「探しても無駄ですよ姉さま。日之影前会長が本気になれば、その姿を視認することは誰にも不可能です。視覚に限った話ではありません。この教室から出る頃には私達はあの人を存在後と忘れてしまっているでしょう」

「……私は例外ですけどね。もっとも、記憶の中でも誇りを被ってるくらいに薄っぺらい記憶なんですが」

やれやれと天宮も軽くため息をつく。

元々、日之影には一度襲われている事もあって仲がいいとは言いがたい。

むしろあんな記憶しにくい男とは仲良くなりたくないというのが本音だろう。別に大嫌いと言うわけではないのだが、そこは相性というものである。

「しかし思いのほかつまんねー男だったな。気さうそうにお前を迎えておきながら、てめーに火の粉が降りかかりそうになると手のひら返してとんずらとは。認識云々はともかく、お前やっぱ人を見る目とかねーんじゃないの？」

「さすがに私も否定できないね、一見するとその通りなワケだからさ。まあ、一度襲われてる私としたらあの人がそれでタダ逃げ出すとも思えない」

「……………ええ。天宮二年生の言うとおり、日之影前会長はそこで引くような人ではない。むしろ予想しておくべきだったのです。彼に話せば、こうなる事くらいはわかりそうなものだったのに」

深刻そうな表情で、黒神めだかは二人に言った。

天宮はなんとなく把握してはいてもそこまで日之影を知っているわけではないために黙り、名瀬はその言葉に対して困惑を頭に浮かべ、そして黒神に問いかける。

「……あ？　どういうことだよ？」

「だからですから、あなたと通じるところがあるんですよあの人はシャイで、照れ屋で、ひねくれ者で、嘘つきで、似合いもしないのに悪ぶって　なんでも一人で背負い込む」

少しだけ天宮が身をよじったが、黒神の言葉に反応しただけなので問題ない。

一応、何に反応したのかは伏せることにする。

ちよつとだけ額をヒクヒクさせる天宮をよそに、黒神は言葉を続けた。

「おそらく日之影前会長は今頃　」

とかなんとか黒神が日之影の心配をしているうちに、彼は教室へと戻ってきた。どうやら黒神が想像していた通りに、球磨川の率いるマイナス十三組に突撃してきたようだ。随分と憔悴した様子で、いつ帰ってきたのかわからないうちに帰ってきている。

生まれて初めて戦いを途中で投げ出した事に、かなりショックを受けているようだ。いくら日之影とはいえマイナスの連中は耐えられなかったらしく、敵対したくもないくらいに気分の悪い人間がいるとは想像すらしていなかったようだ。

かなり弱気になってるらしい日之影だが、そのまま黒神めだかに向

かって問いかけた。お前は大丈夫なのか、と。あんな過負荷と向き合ってお前は正気を保っているのか、と。

「……………見栄を張るつもりはありませんよ。ひとりではとても無理でしょう。私は英雄ではありません。ひとりで戦うことなどできません。だけどみんながいるから、私は英雄あなたより強くなれる」

黒神めだかは、そう日之影に言ってみせた。

一人で孤独に一年間、その強さによって学園を守り続けた英雄である日之影空洞は、その言葉に何を思ったのか。

こうして仲間がいると、仲間がいるから戦える。強くなれると言いきった黒神めだかに、英雄は何を思ったのか。

「……………そうか。だが、強いだけじゃ駄目なこともわかってんだろ？」

強いだけでは失敗する。日之影空洞がそうであったように。

だから過負荷と戦うためには、強さ以上に必要なモノがある。

それが無ければ、過負荷に対してまともに向き合うことすらできない。

「黒神、そのみんなとやらに俺を会わせろ。そいつら次第だが、今回に限り俺は裏方に徹してやらんでもない」

生徒会メンバーのところに戻ると、彼らはこんなことを言った。

「日之影空洞？ 誰それ」

どうやら黒神たちが日之影のところに行っている間に忘れてしまったようだ。

あれだけカタっていた善吉すらも忘れてしまっているのだから、名瀬が驚いてしまうのも仕方ないだろう。

「まあとにかくその日之影空洞って人に会えばいいんだろ？ わかったよ。で、どこにいるんだその先輩は？」

「もう来てる」

『！？』

突然に善吉ともがなの間に日之影が現われ、全員が驚愕した。

そこまで近づかれているというのに気づかなかったようだ。あれだけの巨体だからありえないとか、そういう事は完全に無視らしい。

その姿を見て、やっと皆が彼についてさっきまで話していたことを思い出した。

部屋の中の全員を睥睨した日之影は、一人一人に評価を下して言った。

黒神真黒、合格。

人吉善吉、不合格。

人吉瞳、合格。

阿久根高貴、不合格。

喜界島もがな、不合格。

古賀いたみ、ギリ合格

天宮熾音、合格。

ただし故障中。

「……参ったな。別にそこまで高望みしてたつもりはなかったんが、こりゃあ予想以上に惨憺たる有様だ」

ぼりぼりと頭をかいて、日之影は容赦なくそう告げた。

ただ、彼もかなり落胆した様子ではある。黒神から言われた仲間に期待をしていたのだろうか。

日之影が言った合格不合格その判断基準は、戦いに弱い黒神真黒が選ばれているあたり単純な腕っ節の強さではないのだろう。

黒神めだかと行動を共にしてきた生徒会メンバーの3人が不合格になったのは、心が未熟だという事か。

おそらく、真黒が合格なのはフラスコ計画の元統括者であつたり、中学の頃に球磨川を知っていてなおかつ球磨川に対してトラウマに似通った感情を持っていないからだろう。

人吉瞳も、医者として過負荷とも多く接触してきただろうし、何よりもこんな体躯でありながらしつかりとした大人なのだ。

古賀いたみは『裏の六人』^{フラスシックス}という過負荷のような存在を知っているし、天宮熾音も同じく『裏の六人』^{フラスシックス}を知っていて、たとえ気持ち悪

かろうが相手取ることではできるだろう。それが大切な友人のためならなおさらである。

「断言するぜ黒神。このメンバーでマイナス十三組に挑むのは格安自殺ツアーを組むようなもんだ」

このままでは戦う以前の問題で、過負荷を相手取るには不足している。

確かに生徒会メンバーの強さは優れていることは明らかで、フラスコ計画を凍結させたことからそれは明らかである。

だが無意味だ。

過負荷を相手にする上で大切なのは強さではなく、心の強さとも言うべきものなのだから。

……だが、だからといって逃げ出すなんてのはありえない。
立ち向かえないからこそ、立ち向かえるようにしなければなら
ないのだ。

「凶化合宿、やってみるか？ お前達」

だからこそ、日之影空洞はそれを提案した。
どの程度の効果があるのかもしれない、やってみなければわ
からない。

そして、生徒会メンバーはその申し出を受けた。
彼らも同じく過負荷を相手取るために何かをしたいと思っ
ていて、それに対する不安は確かにあったのだから。

「さて、どうする名瀬ちゃん。面倒なことになりそうだ」

小さな声で、天宮は名瀬に話しかけた。

確かに生徒会側が勝ったほうがいいが、だからといって何日も努力
するのも嫌なものだ。

彼は名瀬に判断を仰ぐことにした。

「凶化合宿ってのは、過酷過ぎて廃止された鍛錬法なんだろう？ な
ら、少しくらいはその苛酷さってのを体験するのもいいかもしれ
ない。別に熾音くんはやらなくてもいいけどよ」

「そんな事無いさ。名瀬ちゃんがやるなら私もやるよ。……まあ、
皆で旅行に行くのが反故になりさえしなければそれでいい。古賀
ちゃんだって行く予定だったし、このまま治ればなんとか間に合っ
たろうし」

「そうだな。ま、ほどほどで十分だろうぜ。俺達が直接やるわけじ

「やねーし」

「大丈夫だよ、いざとなったら私がまた身体を張るから」

「……それが余計何だけどなー。つか、前に言った事が全くわかってねー」

予知によって若干ながらわかっている未来をおくびにも出さず、天宮はそう言って名瀬に呆れられていた。

気分としては生徒会を利用してマイナスぶっ潰したいくらいのモノなのだろうが、名瀬が多少なりとも仲直りをしているという時点でそんな答えは無くなった。彼としては名瀬に嫌われる行動はしたくない。

それなら、もう生徒会と協力してマイナス十三組を叩く以外に道は無い。

その翌日。

天宮が予知していた未来は現実となり、球磨川に先手を取られて生徒会解散の危機に陥った生徒会メンバーは、黒神めだかの機転によってそれを免れる。

しかし、その代わりに戦いの幕が早々と上がってしまう事になった。

生徒会戦拳編の開幕である。

第伍拾参記憶目（後書き）

あとがき

指が……動かない。

薄々感づいてる人もいるかもしれませんが、少し球磨川の旦那に頑張らせすぎてしまったかもしれない。

考えるのが面倒くさくなったら、読者に想像させるような終わり方でブツツってのは結構あると思う。

別にフラグとかじゃあねえですよ。ええ。

そして熾音くんが合格なのはちよつと悩みました。まあ、頑張ったのを評価して合格扱いで。

ところで、地の文がデレたらダメだと思ってやってないけど。

地の文がキャラクターにデレるってのはどうなんだろう。

新しくないか？ 神様視点の地の文がデレてて、その神様が幼女とかだったら皆萌えるんじゃない？

……俺はアホか。

第伍拾肆記憶目

「黒箱塾時代の塾則に基づく生徒会選挙ね。あーあ、やつちまったな黒神」

ボリボリと頭を掻きながら、日之影が重苦しい雰囲気を纏ったまま言った。

その前には、生徒会メンバーを始めとして、日之影に協力を要請した面々が揃っている。

「今でこそ文武両道で通ってる箱庭学園だが、黒箱塾時代は冗談みたいな武芸重視の学派だったんだ。よりにもよってそんな時代のルールでマイナス十三組と自殺とやり合おうなんて、自殺行為を超えてもはや殺人的だぞ」

箱庭学園の一学期の終業式にて、マイナス十三組は行動を起こしていた。

球磨川楔は現生徒会に対し、生徒会則の違反事項である『副会長の不在』を訴え、生徒会長である黒神めだかに解任請求を宣言した。

それも、全校生徒の過半数以上の署名が必要というルールを、3学年分の水増ししたマイナス十三組の署名で解決して。

一時は完全に球磨川のペースとなり、彼の招集したマイナス十三組生で構成した新生徒会を引き連れ、理不尽かつ理解不能なマニフェストを発表し、彼の目的である『通常は登校義務のない十三組生を、生徒総会による強制招集権によって集めて一網打尽にする』という未来は既に不可避であるかと思われた。

「生徒会長としてあるまじき判断だ。お前のせいで箱庭学園はもうおしまいに近いよ」

「そつ……そんな言い方はやめてよ日之影先輩！あの状況では他に方法なんてなかったんだから！黒神さんがいなかったら、近いどころかもうおしまいだつた！！」

しかし黒神めだかが機転を働かせ、箱庭学園の前身である黒箱塾の塾則を持ち出したことにより、最悪の未来は回避された。

その塾則、特にリコールに置けるルールは、塾頭側　つまり生徒会長側と、解任請求を行なった側の決闘をもつて次期塾頭を選出するという内容だ。その時代の決闘では防具をつけずに互いに日本刀を持つて5つの役職を奪い合っていたが、現代においてはそれに準ずる形での果し合いとなるだろう。

日之影空洞が悩むのは、たとえ最悪の事態は免れることができていても、マイナス十三組との直接対決があまりにも早く訪れてしまつたからだ。

それでも、戦いの機会を得ることができただけ良し。そう思うのは当然だが、生徒会長はそれでも『うまくやった』なんて思つてはいけない。

日之影も内心では黒神めだかを褒めたいが、しかしそれではいけないのだ。

未だ、危機的状况であるということとは変わっていないのだから。

「よいのだ喜界島会計。確かに、日之影前会長の言うとおりだよ。あの場ではああするしかなかったとはいえ、他に方法がなかったとも思わん。結局球磨川に先手を打たれてしまった　これはどう考えても私のミスだ」

「黒神さん……だつて……」

「……で、その生徒会戦拳ってどういうルールで行われるのかな？」

自分を責める黒神と、その黒神を案じる喜界島をよそに、古賀が戦拳について質問した。

それには黒神真黒が答える。

形式自体は五対五の一般的な団体戦。五戦やって三勝した方の勝ちバトルの形式及び舞台は役職ごとに違うが、基本的には強度を競う真剣勝負であると。

「ちなみに、この行事はそれぞれの舞台設定に時間を要するので週一のペースで、即ち五週間かけて行われるんだ。だからうん、夏休みをまるまる使う形になるね」

「ハ……おいおい勘弁してくれよ。俺は夏休みには仙台へ旅行に行く予定になってんだよ。ほら、俺歴女だからよー」

「そうだよ全く、その日のために観光案内の地図もしっかり記憶して色々と下準備してたのにバカみたいじゃないか」

「心配しなくとも戦うことになるのは生徒会役員だけだ。生徒会役員以外はしたくたって手出しできねーよ。仙台でも盛岡でも好きなところに行けばいいさ」

日之影は二人の言葉に答えるようにそう言った。

生徒会戦拳はそもそも新しい生徒会のメンバーを決めるものなのだから、当然といえば当然だろう。

もつとも、代理を立てることはできるが、素直に代理に任せるようなメンバーでもないのだ。

しかし日之影が、球磨川に先手を取られた原因でもある副会長の不

在をどうにかしなければならいと言つと、すぐになぜが口を開いた。

「ケツ！　しょーがねーな、俺が副会長になってやるよ！」

「！？」

（まだ頼んでもいないのに！）

（この子やっぱ基本いい子じゃね？）

（っていうか熾音くん驚きすぎ！）

そんな事を言つた名瀬に、超速度で反応して驚愕したのは天宮である。

どうしてそんな事を、という困惑が表情の中に満ちていた。

名瀬に対してびっくりしている者は他にもいるが、それとは一線を画す驚きようだ。

「ふむ。まあそれはまたおいおい考えるとして」

（そしてやんわりと断つた！）

（だからなんで熾音くんはそんな顔なの！？）

阿久根と喜界島は黒神が名瀬の言葉をスルーしたことに反応したが、名瀬はいえば天宮の方を向いていた。

どういうわけだか知らないが、とんでもなく複雑な顔で黒神を睨んでいたからだ。

名瀬が副会長として生徒会に入るのは気に入らない、黒神がそれを

断ったから名瀬は生徒会に入らない、しかし名瀬がせっかくなつてやると言ったのにすんなり流すとか腹が立つ。
たぶんそんな所だろう。良い判断だとも言いたい、同時に怒鳴りつけもしたいらしい。

「さしあたって我々に必要なのはマイナス十三組に対抗するための下地作りでしょう。例の凶化合宿、準備を急いでもらえますか日之影前会長」

「……確かにそうなんだがな。しかし、元々合宿には夏休みをフルで使うつもりだったからなあ。どんな急造のハイペースでやったとしても過程終了まで二週間はかかる。つまり、どうしたって最初の庶務戦には間に合わない」

「間に合わない、じゃあすまないかもね。『不慮の事故』^{エンカウンター}の蝶ヶ崎蛾々丸と『致死武器』^{スカイデッド}の志布志飛沫。まさかあのふたりが既に転校してきていたなんてのは、私も予想外だったわ」

マイナス十三組との戦いにおいて必要だった凶化合宿が庶務戦に間に合わないことを憂う日之影に、人吉瞳が追い打ちをかけるような情報を口にする。

新生徒会として球磨川が引き連れていた見慣れない二人。

片眼鏡をかけた細身の男、蝶ヶ崎蛾々丸。一昔前のスケバンみたいな格好の女、志布志飛沫。

人吉瞳が言うにはその二人のマイナスのどちらともが脅威であり、マイナス十三組が揃う前に球磨川が行動を起こしたのは、戦力としての二人の存在が大きいと言う。

詳細を聞くと、人吉瞳が医者辞めた後で彼女、勤めていた異常な子供が集まっていた病院は蝶ヶ崎と志布志によって跡形もなく潰されたのだという。

「元心療外科医のあたしに言わせれば、めだかちゃん。正直、球磨川くんと蝶ヶ崎くんと志布志さんが向こうにいる時点で、既にこちらの三敗は確定しているようなものよ」

多くの異常や過負荷に接してきたからこそその人吉瞳の意見。
アブノーマル マイナス

それは無視できるものではない。蝶ヶ崎と志布志を相手取るにはよりいっそうの注意が必要だろう。

その後、その場にはいない人吉善吉の事について話した後で、日之影が天宮の方を向いた。

「聞いたぜ天宮」

「何を」

「未来予知ができるんだろ？」

「……そうですね。やろうと思えばできますよ」

全員の視線が一つに集まった中で天宮は言う。

確かに、予知で得られる情報は大きいものだろう。マイナス十三組との対決において役に立つはずだ。

しかしだからと言って、それをするべきであるかと問われればどうなのか。

自分を見ている皆に向かって、天宮は自分の考えを述べた。

「でもたぶん、そんなテストでカンニングするみたいな真似は会長が納得しないんじゃないですか？ それに私は名瀬ちゃんのと古賀ちゃんのため以外にはこれを使いたくありませんし」

「……ほぼ全部後半が理由だね、熾音くん」

「わかってるなら聞かないでよ古賀ちゃん」

全くいつも通りに、天宮は笑って話している。

動く理由は一つで十分だし、動かない理由も一つで十分だというのが、彼がこの件に出した結論である。

そしてやっぱりというか、天宮の持つ黒神めだかに対する認識も間違っていないかった。

「元々、天宮二年生が力を発揮するとしたらお姉さまのためでしょう。それにカンニングというのも少し引つかかるし、天宮二年生がやりたくない事を無理にやらせる気はありません」

「……へえ」

名瀬はめだかの言った事に少しだけ感心した。

天宮がカンニングなんて言葉を使ったのは、彼自身が予知をあまり使用したくはないからだ。

使うべき時にはいくらでも使うだろうが、どうせならずっと使わなくて済んだ方がいいくらいに彼は思っている。もちろん名瀬を守る際には予知がある事に感謝するだろうが、それとこれとは話が別だ。知リたがりの彼から知る事を奪ってしまう予知を、だからこそ彼は制御しなければならなかったのだ。結果として彼は予知を制御し、常に予知を行い続ける状態からは脱することが出来た。

名瀬はそれを熾音から直接聞いたからこそ知っているが、黒神がそれを知らなくても天宮の事を気遣ったのに感心した。知リたがりなんて事も言っていないので、たぶん到天宮をよく観察した結果だろう。伊達に生徒会長をやっている黒神めだかではないのだ。

「まあ、それが正解でしょう。納得してない顔をしてる人もいますが、私もできればやりたくない。そもそも名瀬ちゃんがいるからこそ私もここにいるのだということをぎゃあ!？」

「さつきから俺の事はつか言っくんじゃねえよ」

しかしまあさすがにうるさかったのか、名瀬が天宮の頭をぶん殴った。

正確には、少し前まで掛けていたパイプ椅子を畳んで振り下ろした。

「パイプ椅子!？」

「いつもの事だから気にしないでいいよ」

「いつもなの!？」

崩れ落ちる天宮と殴った名瀬を見て阿久根と喜界島が驚いたが、普通に見慣れている古賀は動じなかった。

むしろ崩れ落ちる天宮の顔を見て、またかと思っていたくらいだ。それもそのはず、後頭部を殴られて倒れる天宮の顔には、紛れもない愉悦の表情が浮かんでいたのだ。

大方、地に伏した今でも名瀬の事を愛しく思っているのだろう。そんな風に古賀は予想した。

(ふっ、全く。照れ屋な名瀬ちゃん、至極グッドだ……)

その予想は大当たりしているのだが、まあそれはどうでもいいだろう。

天宮がぶっ倒れ、そしてあっさり復活する間も話し合いは続き、生徒会が取る対策は決まったようだ。

直近の庶務戦は捨て、凶化合宿は書記戦以降の役員に集中して行うと。

人吉善吉を副会長にクラスアップさせ、空席の庶務戦を不戦敗で終わらせる、と。

「……戦略としては上々だと思いますが、めださんもそれで問題ありませんか？」

阿久根がめだかへと、その予定で進めていいかを問いかけた。それに対する黒神めだかは、珍しいことに即答せず沈黙していた。

「問題ねーわけねーよな、めだかちゃん。如何な内容でも、如何な条件でも、如何な困難でも、如何な理不尽でも享受する。それが箱庭学園生徒会執行部なんだから！」

「善吉……」

そこへ、どこかの誰かと会っていた人吉善吉が戻ってきた。その手に、大量の投書が詰まった目安箱を持って。

「戦いを捨てるとか不戦敗とか、手柄を立ててもねー俺を副会長にクラスアップさせるとか、そんな狡い戦略がめだかちゃん率いる生徒会執行部にあるわけねーよな」

善吉がどさりと置いた目安箱。

中身を確認すれば、そこには彼らを支持し信じてくれる生徒達からの応援の声が詰まっていた。終業式で彼らが球磨川に立ち向かつてから、まだそれほど経っていないにも関わらずだ。

生徒会執行部が生徒達にとって、それだけ感謝すべき、そして頑張っ
て欲しい存在であるという事だろう。

「……ふん、珍しく熱いな善吉。よかるう。ならば貴様が見事初戦を飾ってみせよ」

善吉の言葉と投書の激励を受けて背中を押されたのか。

めだかは善吉へと歩み寄り、庶務戦は捨てることなく、意気高く言い放った彼を庶務戦へ送り込むことを決めた。

そして善吉自身にも、激励の言葉を送る。

「がんばれ。貴様を庶務に選んだ私の目に、狂いがなかったことを証明するがいい」

「がんばる。箱庭学園の庶務は俺しかいねーって、改めてお前に思わせてやるよ」

そんな二人を見て人吉瞳は思う。

自分の子供だから過大評価してるとかじゃなく、普通に考えればマイナス十三組が庶務戦で出してくるのは江迎であり、相性は悪くてもまともな戦いなら善吉にも分があると。

しかしそれはあくまで普通な考え方であり、マイナス思考ではない。

その結果として、彼らにとって最悪の展開が一週間後に待ち受けているのだが

未来を知る術のない彼らには、未だに知りえない事だった。

第伍拾肆記憶目（後書き）

あとがき

活動報告ではヒッシャーしましたが、裸エプロンもいいものだね。抱き枕とか出ないのかしら。

こーいう小説において一番難しいのは地の文だと思う。

漫画だから例となるものはないし、かといってチープな文章では面白くない。

それでオリジナリティを出そうとしても自爆するだけかもしれない。奇をてらった文章でも意味が伝わらなければ意味がない。

どうにかこうにか頑張っていきたいです。

めだかが却本作り受けても大丈夫だったのと同じ理由で、安心院さんは封印されても夢の中に出てこれたのかな？ 考えが深まりますね。

第伍拾伍記憶目（前書き）

難産にもほどがあるべ。

第伍拾伍記憶目

七月二十五日、庶務戦当日。

開始時刻である午後一時になる少し前。

生徒会室には、黒神めだか、人吉瞳、名瀬天歌、古賀いたみの女子生徒4人が着替えを行っていた。

どうやら生徒会戦拳に参加する前に、『戦拳用の制服』に着替えているらしい。

「ケツ、公示ねー。学園が破滅するか否かの瀬戸際だつてのにあくまでも学園行事の体を崩さない、理事会は随分と厚い面の皮をお持ちだぜ」

公示内容が書かれた紙を持ち、名瀬天歌はそんな事を言った。胸を隠すこともなく仁王立ちした状態で。

彼女は基本的にブラジャーなど着けないし、この場には女しかないが、それでも仁王立ちとはすごいものである。

もつとも彼女の性格からいって、恥じらいを感じて隠すなんてのは更にありえないことではあるのだが。

「で、どーなのよ黒神。そろそろ時間だけでも、お前の頼れる仲間はどうしてんの？」

「阿久根書記と喜界島会計は、日之影前会長と兄貴に師事して修行中ですよ。例の強化合宿という奴です。わかっている事を聞かないでくださいお姉さま」

今日の庶務戦で戦うのは人吉善吉ただ一人。

それに関わらない阿久根高貴と喜界島もがなは、早くても2週間かかる凶化合宿に今も取り組んでいるのだ。
来週以降も続く生徒会戦拳に備えて。

「ハハ！ こいつは失礼。でもお前は抜けてきちゃってーのかよ。お前だって会長戦に向けての凶化合宿の最中には違いねーんだろ？」

「……そのふたりから自分達の方まで応援してきてほしいと焚きつけられましたね。まあ確かに善吉をひとりきりで戦わせておくわけにもいきませんまい」

勝つための修行も大切だが、かといって仲間の声を疎かにして善吉を見ないわけにもいかない。

生徒会長としても黒神めだかとしても、それが当然の判断だろう。

「なるほどなるほど。で、その肝心の人吉善吉はどうしてこない？
一週間じゃ凶化合宿は効果がないと知ってあいつ、だったら独自に別の訓練をするって息巻いちやいたけど、今日ここにいないところを見ると怖気づいちゃったかなー？」

「……怖気づいたんなら怖気づいたでいいと思うよ。私は。正直、真黒くん達の言ってた庶務戦は不戦敗にするっていうのが最善のアイディアだって今でも思うしね」

危険を回避する為になら、間違いなく取るべきであろう選択肢。今も人吉瞳はそっちのほうが良かったと考えている。

大人だからこそなのか、そうやって勝率の事もしっかり考えられている。

ただ今回は、黒神めだかの率いる生徒会が戦う以上はそんな真似はできないというケースなのだから仕方ない。

人吉善吉は己が言ったとおりに、気合を入れて、頑張っ、て、庶務戦へと臨むだろう。

そんな会話を交えつつ着替えをしている彼女達だったが、ふとコンコンと生徒会室のドアがノックされ、その向こう側から人吉善吉の声がした。

「あー、悪いなお母さん。今回ばかりは怖気づかなかったみたいだぜ」

「どうした？ ノックなんてやけに行儀がいいな」

ドアの向こうから聞こえた声に、めだかは怪訝な顔をした。

というのもやけに勢いのない声であり、微妙な違和感を感じたからだ。

その原因を善吉が伝えた。

「いや、なんか天宮先輩が隣で『ノックしろ』ってよ」

「それは言わなくていいんだ！」

ドア越しに天宮の声が続いてきたという事は、彼もドアの向こうにいるらしい。

彼がノックをしろと言って善吉を引きとめたという事は、つまりは彼にはこの後にどうなるかがわかっていたという事だろう。

だから名瀬と古賀はすぐにそれらの意味を把握した。

「……なるほど、だいたい把握したぜ」

「私もだいたいわかった。熾音くんならしかたないね」

「ああ、なるほど。予知できる子とは知ってるけど、そういうことね」

ほんの少しだけ遅れて人吉瞳が、天宮の行動を理解した。

さすがは元心療外科医。好きな女の子の裸を他の男に見られたくない、そんな事を思っている予知能力を持った男が行動する理由くらいは簡単にお見通しであるらしい。

黒神めだかなぞ、今さらポンと手を打って気づいた感じた。

……まあ、普段から露出しまくってる黒神にそれで気づけというのも無理な話だが。

「とりあえず名瀬ちゃんだけでも着替えてくれ。でないと入れない」

「なんでめだかちゃんにも言わないんだ。まあめだかちゃんが普通に着ると思えないけど」

「お前に名瀬ちゃんの裸見られたくないからに決まってるだろ善吉！　あと俺は名瀬ちゃん以外は割りとうどうでもいい！」

「古賀先輩は！？」

「古賀ちゃんはこう言い始めてる時点で既に着替えてるから問題ない！」

ぎゃーぎゃー言い合う二人の声がドア越しに生徒会室に響く。

このままでは埒が明かないので、仕方なく名瀬たちは着替えることにした。

「とりあえず、天宮二年生が暴走しなくて一安心だな」

「うん。あのまま人吉が扉開けてたかと思うとゾツとするよ」

話を聞いて笑うめだかに、冷や汗を流す古賀。

この場合はどっちかといえば古賀の反応が正しいが、それは今は関係ない。

問題は天宮よりも、しっかりと臆することなくやってきた善吉の方だ。とんでもなくダサイＴシャツを着て現われた善吉は、これから庶務戦でマイナス十三組相手に戦う善吉は、果たして本当に過負荷^{マイナス}相手に戦うことが出来るのか。

「ふん、時間もＴシャツもぎりぎりだな。……それで、どうなのだ善吉、凶化合宿はおるか兄貴のトレーニングを断ってまで行った秘密の特訓とやらの成果も、まさかぎりぎりということはなかるうな？」

「カツ！ まさかお前から愚問を聞くとはな。この一週間、俺はある意味で真黒さんをも凌駕する師匠から教えを受けてきたんだ。今お前がしなきゃならないのは心配じゃなくて手配だぜ。俺の勝利を祝う祝勝会のな！」

めだかの言葉にやたらとテンションの高い善吉が答えた。
自信に満ち溢れた顔で、態度も少々でかく感じる。

「兄貴を越えるトレーナー？ そんな奴がこの学校にいたか？ その漲る自信を見る限りハッターってわけじゃなさそうだが……」

「生憎と私の記憶にも思い当たらないね。トレーナーとして超一流な黒神真黒を越える奴だなんて、ちつとも思い当たらない」

「そうか、ノリはウザいがならばよかるう、安心した。それではそろそろ受付会場に向かうとしよう。新生徒会の連中に教えてやろう」

黒神真黒を越えるトレーナーという言葉聞いて首をかしげる二人をよそに、黒神めだかは善吉の自信満々な態度を受け入れた。

そして自分たちが何者であるかという声をあげ、皆を率いて歩き出す。

「生徒会は私達だ！」

黒神めだか率いる彼らは、制服を戦拳戦モデルへと着替え、受付会場へと向かうのだった。

めだか達が受付会場にいくと、そこには球磨川しかいなかった。他の新生徒会の連中の姿はどこにもない。

球磨川曰く、他の過負荷マイナスはみんな海水浴とかで夏休みを満喫中であるらしい。

そんな言葉は甚だ怪しいものであるが、とにかく他に誰もいないという事は

「ちょっと待て球磨川。ひとりということはひよつとして、貴様が庶務戦に出馬するつもりか？」

「『ひよつとしなくてもそのつもりだよめだかちゃん』『僕は昔から庶務になるのが夢だったのさ!』『だから今日はよろしくね善吉

ちゃん』『正々堂々フェアに戦おう』」

そんな事を笑顔で言う球磨川。

初めから真つ当なフォーメーションで戦う事なんてないとは想像していたが、まさか球磨川がいきなり庶務戦で出てくるだなんてのは、誰も想像の上を……いや、下をいつていた。

そして球磨川が庶務戦に出る理由なんて、庶務についている善吉に何かをするために他ならない。

「貴様という奴は……どうしてそうなのだ。球磨川！」

「『?』」『なんで怒ってるのめだかちゃん?』」『僕と直接戦えなくなつたから?』」『それとも善吉ちゃんがピンチだから?』」

「それも含めてだが……今回のことすべてだ! 貴様のすべてが腹立たしい! 私には貴様の考えていることがさっぱりわからん! 十三組の抹殺!? エリートの皆殺し!? どうして貴様はそんな事を企む! そんな事ことで本当に世界が平和になると思ってるわけではなからう!？」

怒つためだかに胸倉を掴まれても、あくまでとぼけた顔での球磨川。そんな球磨川に、さすがのめだかも堪忍袋が破裂でもしたのか。完全に取り乱していた。

「エリートと呼ばれようとアブノーマルと呼ばれようと彼らは私達となんら変わらぬ人間だぞ!? 喜んだり悲しんだりする人間だ! おいそれと傷つけていいものではない! どうしてそんなことがわからんのだ!？」

「『わからないくせにわかってもらおうとするなよ』」『めだかちゃ

ん」

「ぐっ……」

人の事がわからないのはめだかも同じだ。球磨川のいう事もある意味では正しい。上から目線性善説も、ある意味では「わからないからこそ」の考え方ともいえる。

最も、わがろうとするのとわがろうともしないのでは大違いだ。

「でもどうして僕がこうなのか」『ふうむ』『言われてみれば不思議だ』『考えたこともなかったなあ』

そう言って首をかしげる球磨川だが、本当に悩んでいるのだろうか。放つ言葉は全てが嘘で、中身の無いものではないのだろうか。

それは本人以外にはわからない。

「うーんそうだねえ」『たとえばの話だけさあ』『人生はプラスマイナスゼロだ』『って言う奴いるじゃん？』『エリートでも喜んだり悲しんだりするとか』『幸福な人間もそれ相応の大変な苦勞を積み重ねているとか』『まあおよそそんな意味で』『だから人間はみんな平等だって言いたいんだと思うけど』『でも』『人生はプラスマイナスゼロだ』『って言う奴は』『決まってプラスの奴なんだ』

そんな球磨川の言葉も、ある意味では真理だ。だからこそ、彼は嫌われるし慕われる。

球磨川に共感を覚える人間ならどこまでも彼にカリスマを感じるだろうし、共感を覚えない人間はどこまでも彼に嫌悪感を抱くだろう。完璧すぎる黒神めだかに憧れるか、嫉妬するかというのも似たようなものだ。

「『幸せな奴だからそんな悟ったみたいな常套句を言えるんだよ』
『少なくとも過^{ほくたち}負荷は』『プラスがあ^{いいこと}ったからってマイナスが帳消^{やなこと}しだなんて思えたことはない』『なんのことはない』『僕は幸せでプラスなみんなに』『マイナスの気持ちをわかつてほしいだけなのかもしれないね』」

「『……どうせそれも嘘なのであろう！　すがりつきたくなるような嘘だ！』」

「『……うん』『きつとそうだね』」

いくらめだかが激昂しても、球磨川自身が考えを変えない限り言葉は届かない。

そしてそれは生半可な事ではありえない。もしくは永遠にありえない。

球磨川相手にまともな精神論が通じるはずもない以上、それを予測することなんて不可能だ。

唯一つ確実なのは、球磨川は紛れもなく敵であつて、揺るぐことなく過負荷だという事だ。

「『とにかく僕はめだかちゃんとは戦わない』『僕はきみが嫌いだからね』『会長戦は他の過^{マイナス}負荷が務めるよ』『だからめだかちゃんは僕が善吉ちゃんを嫌と言つほど螺子伏せる場面を』『間近でじっくり見ればいい』」

「『……球磨川！　だから貴様は』」

言葉が全く通じない球磨川にもう一度めだかが近づこうとした、その時。

二人の間に互いを止めるようにして誰かが現われた。
めだかはその人物と、生徒会長総選挙を行った四月に顔を合わせている。

「わたくしは僭越ながら今回の生徒会選挙を管理させていただく選挙管理委員会副委員長、二年十三組の長者原融通と申す者にございます。ほんのひと夏の間ではございますが、どちら様もよろしく願います」

頭部には視界を遮るかのように黒い布を巻き、全体的に白黒な印象を受ける風体の男。

公平で平等な審判を心がける選挙管理委員会の副委員長である長者原融通は、公平という異常性を持っている。

彼は定められたルールに従うだろうし、どんな脅しにも絶対に屈することなく、戦拳の審判を務めるだろう。

これで、球磨川たちと繋がっているだろう理事会が、この戦拳にもなんらかの手回しをする可能性はなくなった。

実際に現場で過負荷が何かをするという可能性もあるが、おそらくは大丈夫だろう。

不満はあるかと聞いた長者原に対して球磨川が行った不意打ちにも彼は螺子による攻撃をたった2本の指で挟んで止めてみせた。

そんな長者原なら、過負荷が不正行為をしたとしても迅速に止めてくれることだろう。

「……しかしそれは裏を返せば、我々が負けた場合、もうリカバリはきかんということでもある。公約通りに十三組が抹殺されようと学園が破滅しようと マイナス十三組が勝てば、長者原二年生は躊躇なく連中を生徒会役員に選出するであろうな」

「大丈夫だよめだかちゃん。つまり勝てばいいってことだろ」

負けたらやり直しがきかない以上、絶対に負けられない。

球磨川相手にそんな取り返しがつかないような戦いをする事を苦悩するめだかに、善吉は元気付けるように大きな態度と声で言った。

「敵が球磨川の方が俺は勝ちやすい。不知火や江迎を相手にするよりよっぽど気が楽だぜ。だから、めだかちゃんはいつもみたいに無駄に偉そうに、どっしり悠然と構えていてくれ」

「善吉……」

「熾音くんと名瀬ちゃんはどう思う？」

善吉が啖呵を切っている時、古賀は名瀬に話しかけていた。

古賀は後から聞いた話でだが、善吉が時計塔で球磨川に相對した時に、震えるほどにビビっていたことを知っている。

それを完全に克服するなんて事が出来るのか、と思ったのだ。

「さあな。だが、善吉はここで嘘を言う奴じゃないだろ。それだけ修行に自信があるって事だろうな。な、熾音くん？」

「そうだね。強がりの台詞は言うかもしれないけど、少なくとも私には善吉が『本気』の自信に満ち溢れているように見えるよ」

古賀の言葉に、二人はそんな風に答えた。

少なくとも、二人は修行によって善吉がこうなったのは確実に考えているようだ。

確かにそれはそうなのだが、古賀は微妙に違和感を感じた。

庶務戦に球磨川が来たって事は緒戦が厳しくなったって事なのに、全然最悪だなんて思ってない。むしろ臨むところって感じがしていた。

「まあ古賀ちゃん。善吉がやれるって言うんだからいいことだよ」

「そうそう。あれだけ言ったんだ。勝てるからこそその啖呵だろうぜ」

「うーん、やっぱり？ でも、誰が修行つけたんだろ……」

古賀にはそれがさっぱりわからなかったが、どうせそれはすぐに判明してしまう。

真黒でなかった消去法と、あとは善吉が球磨川と戦う際の戦闘法でも見れば、だいたい8割方はハッキリするはずだ。

ただ、それはもうちょっと先の話になるだろうが。

今はそれよりも、善吉と球磨川がどんな内容の戦いをするのかという事だ。たとえば自分には直接手を貸すことが出来なくても、そこで戦う善吉を応援することだ。マイナスと戦う善吉の心に、少しでも支えを作ってやることだ。

見守る者たちにとっては、もうそれしかないのだ。

「さて、それではただいまより生徒会戦拳第一回戦、庶務戦を始めさせていただきます」

そう宣言した長者原により、戦拳のルールが説明された。

黒箱塾の規則に基づく戦拳は、江戸時代の真剣を扱うようなものであるため、それを現代風にアレンジしたものが用いられる。

更に、選挙中の負傷及び死亡は全て事故として扱われる。

元々が命を掛けて戦うものであるため、現代風にアレンジされたそれもおそらくは危険なものだろう。

そしてこの生徒会選挙において、選挙管理委員会は十三の決闘法を用意した。

その決闘法の全てが、黒箱塾時代のそれを現代風にアレンジした苛酷なものだ。

決闘法は、挑戦者側が毎回行くくじ引きによって13枚のカードの中から選ばれるため、今回は球磨川がカードを選ぶことになった。

そのカードは、十二支のカードが十二枚と人と書かれたカードが一枚の十三枚。

球磨川は、『巳』のカードを選んだ。

そして『巳』のカードを捲った長者原により、庶務戦の決闘法が宣言された。

「庶務戦の形式は『毒蛇の巣窟』に決定致しました。これは我々の用意した十三の決闘法の中で、もっとも残虐なルールで行われる選挙でございます」

第伍拾伍記憶目（後書き）

あとがき

善吉、お前は絶対に許さない。

そう思ってたけど、ちょっと可哀相に見えてきたので許してやろう。
好きな人に冷たくされるのってキツツイよねー。

安心院さん的には善吉を引き込んでフラスコ計画をするつもりなのかしら。すでに普通という個性がめだかの周りに溢れてる以上は善吉くんは珍しくない、もうめだかに興味を抱かれるためには同じ完全になるしかないんだよみたいな誑かしくらいしか思いつかぬ。

まあ、他にも誑かし方くらいいくらでもあるけど、『5人』いる善吉の味方つてのが……ムーン。

ところで最近気になったんだけど、めだかが壁を殴ったりして凹んだ修繕費用とかってどうなってるんだろね。

いやまあめだかちゃんならお金持ちだからどうとでもなるだろうけどさ。

ネタ案

『モブヒストリー
平凡人生』

平凡で安らかなる人生を過ごすことができる。しかし山も谷もない。
ジヨジヨの吉良さんみたいな人にオススメ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9907m/>

異常たる者の未来模様

2011年10月2日01時57分発行